

特集／女と教育

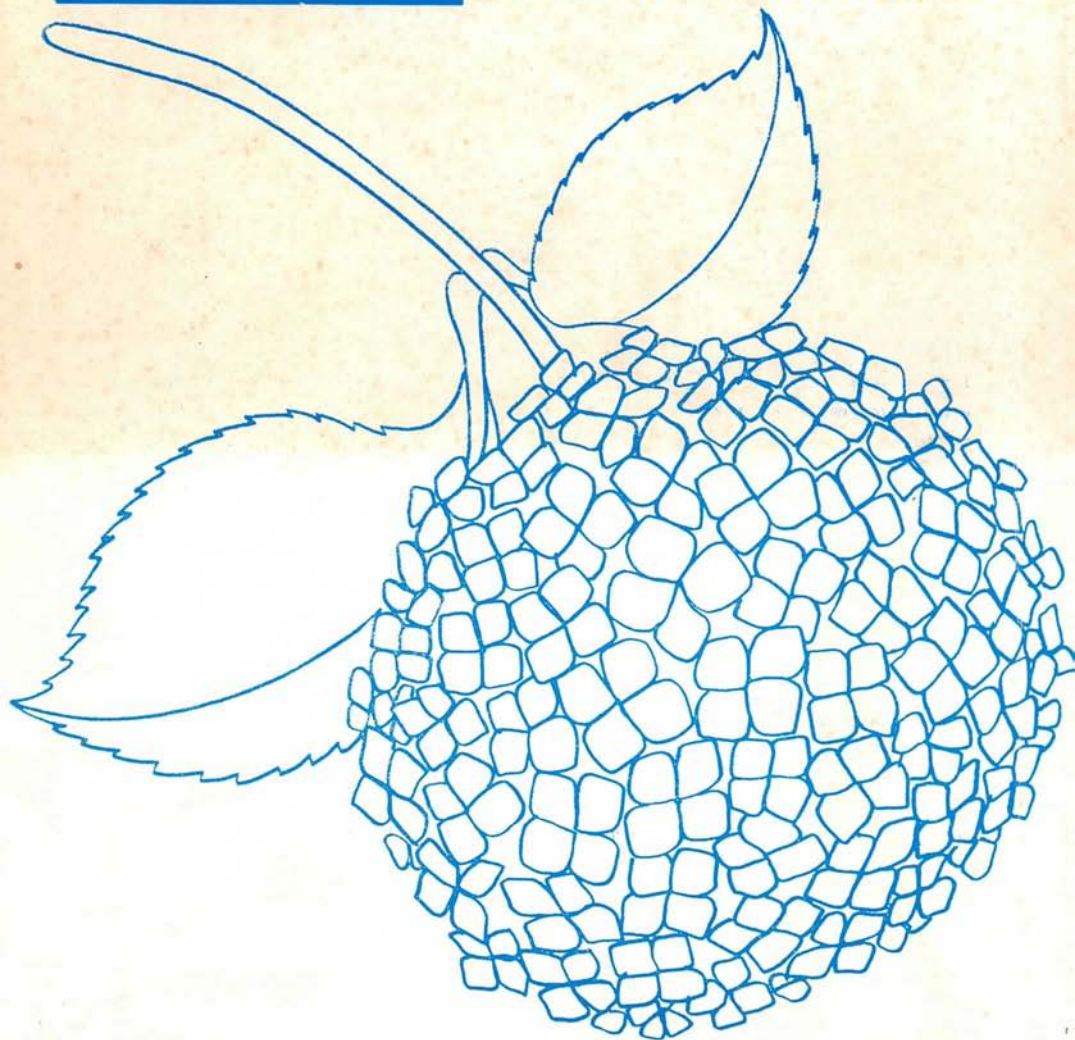
資料検討1 ● 小中校の教科書を読んで

資料検討2 ● 文集にあらわれた理想像

資料検討3 ● 高校教育と女

論文 ● 主婦が学ぶということ／伊藤雅子

意見 ● 女の子はこう育てたい



〈あごら〉は、女性解放——人間解放をめざすグループです。

雑誌〈あごら〉は、その方法のための情報、——中でも女に関する情報を集め、お届けすることを目的に、1972年誕生しました。

特定の、管理された情報はあふれていますが、私たちがほしい情報、とくに女が求めている情報の入手は困難です。

皆さまの生きた情報、あふれる知恵を、どしどしお寄せください。分断されている仲間たちと、考え、行動する、ヒントを送り合いたいと思います。

既 刊

1号〈女が働くこと〉 ￥200 ㊦70

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
 - 資料 働く女は過保護か
 - 面接調査 共働きを調査して
-

2号〈女性と能力〉 ￥200 ㊦85

- 調査 働く女性の地位向上をめぐる
 - ティーチイン 女性と能力
 - 研究 女性はなぜ管理職になれないか
-

3号〈主婦の解放〉 ￥200 ㊦85

- 調査 団地の主婦の解放意識
 - ティーチイン 主婦の解放をめぐる
 - 解説 二分二乗法 伊東すみ子
-

4/5号〈壁を破ろう〉 ￥300 ㊦85

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
 - インタビュー 壁を破った人々
 - 資料 2つの差別裁判を考える
-

6/7号〈運動をすすめよう〉 ￥300 ㊦85

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
 - 資料 各国の母性保護
 - ティーチイン 婦人運動をすすめるために
-

8号〈子殺しを考える〉 ￥300 ㊦85

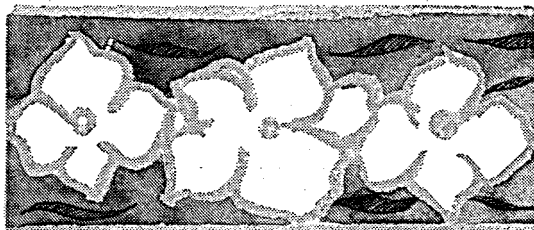
- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
 - 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
 - ティーチイン 性の二重性をめぐって
-

9号〈働く女と主婦の接点〉 ￥430 ㊦85

- 意見 働く女から主婦へ 主婦から働く女へ
 - 調査 相手の立場をどう思っているか
 - ティーチイン 人口抑制と産む性
-

10号〈女と法〉 ￥700 ㊦115

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
 - 資料 法律の中の女性
 - ティーチイン 産む性と法律
-



あごら 11号

特集 女と教育

日本国憲法が保障する国民の権利を尋ねる質問にたいして、選挙権や労働権を挙げる人は多いのに、教育権については知らない人が多いことはよく知られています。

すべての国民が教育権を持つことは、女性差別だけでなく、人種・階級などによる差別を解消するための原点といえましょう。第二次世界大戦の敗戦まで女の教育は、制度・内容ともに男とは別でした。現在では制度は一応男女平等となり、鮮明な差別は姿を消しました。しかしその教育の内容については検討、批判が十分とはいえない現状です。

12号「女と教育」を、女の教育のなかみを考えるきっかけとして、利用していただければ幸いです。

目次

特集・女と教育

インタビュー 教育こそ女性解放の原点……………一番ヶ瀬康子…6

論文 主婦が学ぶということ……………伊藤雅子…12

ティーチン 〈女と教育〉を考える……………桐島洋子 佐田智子…20

貞閑 晴 中嶋里美 中山千夏 吉田 昇

A 教科書をチェックして……………43

1 締め出された女性——小学校の道徳教科書を読んで……………44

浅野美和子 大橋 倫子 野村文枝
山崎美沙子 米永千枝子 日置久子

2 目立つ男性特性論……………浅野美和子…51

——中学校の「道徳教科書」を読んで——

3 人間不在の社会——小学校の社会科教科書を読んで……………56

斎藤菊代 千田靖子 高橋照子 立木脩代 萩原洋子

4 欠落した女性の状況……………

——中学社会科教科書公民的分野を読んで……………佐藤典子…70

5 家庭科教科書批判……………島田道子…72

B 卒業文集にみる小学生の未来像……………82

C 高校教育と女——東京都の場合……………87

誌上録音 女の子は こう育てたい……………99

小林みか 河賀みどり 斎藤 泉 後藤宏子 鈴木早苗
萩原洋子 永松三恵子 片山いく子 岩永桂子
日置久子 若林高子 中川よし子 ひろせゆき

明日を考える女のひろば〈あごら〉

新聞切抜帖……………208	事実が示すキーセン観光……………201	あごらのあごら……………240
国際婦人年によせて……………147	抄録　これからの婦人平等を考える……………147	〈パネラー〉　大羽綾子　桑島カタリナ　樋口恵子 室　俊司　　〈司会〉　久米　愛
国際婦人年によせて……………206	提案　生活保護受給者の言い分……………202	わが子は山で死なせない……………206
年表　歴史にあらわれた女性教育……………179	領(抄)　教育基本法　小学校学習指導要領……………176	中学校学習指導要領(抄)……………174
資料……………182	あごら読書室……………159	パンツ屋所感……………159
グループ紹介……………170	1　主婦の記録を発行し続ける「わいふ」……………170	2　国際婦人年をきっかけに……………172
講演より……………135	東南アジアの女性たち……………135	男が家事をすることの意義……………127
女と教育……………125	榎　玉淑　斎藤千代　平岡ふき子　熊谷順子　井上佑子……………125	堀口健二……………125

教育こそ女性解放の原点

一番ケ 瀬康子氏を訪ねる

(日本女子大学 家政学部社会福祉学科教授)

——教育については最近、いろいろな問い直しが行なわれていますが、女性解放との関連からの追究は比較的少ないようですが……。

残念ながら、従来はその部分が希薄であつたようですね。男女平等、婦人解放の問題を考えると、教育を原点にすえませんか、近視眼的になりやすいですし、婦人自らが問題を追求する力が弱くなり、中味も具體的に出てこないのではないかと思います。

とくに今のような社会で、自分の

持っている力量を存分に發揮し、経済的自立を得、さらに女自身の持っている願いや思いを世の中に生かしていくためには、それが十分にできる力量を身につけることがまずたいせつで、でないと空回りに終わってしまうのではないでしょうか。

——そのためには、具體的にどのような作業が必要でしょうか。一応、女子教育の面で大きな解放はあつたわけですが。

小学校から男女共学となり、戦前、

女子にはほとんど開放されていなかった旧帝大系の国立大学にも入学できようになったなど、門戸が開かれ、形式的な機会均等は獲得したという意味で、一つのステップだったと思います。しかし、その中味やその持つ意味が完成しないまま、高度成長で競争社会が激烈化したため、せっかくの共学や機会均等の中味が空洞化し、あるいは崩されてきました。ここでもう一度、戦後の解放、とくに女子教育の問題を総ざらいして、なぜ女子教育が必要か、そ

の中味をどうするかについて、提案がなされなければならないと思います。

——その具体的な中味は？

女子教育論というと、まず特性論があり、次に男女平等、機会均等論が出てきますが、さらに婦人解放のための女子教育論でなければならないと思います。



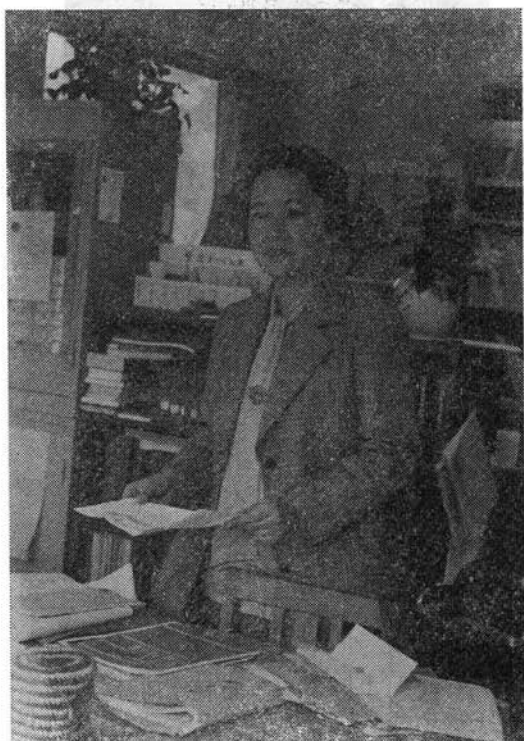
ます。それはまた、女子だけの女子教育であってはだめで、男子をふくめた女子教育が必要です。この意味では女子教育は男子教育であるといえるのではないかと思います。

具体的には、共学の原則が実現していくこと、同時に婦人問題論をしつかりふまえ、それを主力に組込んだ社会科学教育を実施し、進路指導、ホームルーム等の展開論を具体的に積上げることだと思っています。

家庭教育もまた重要です。今は、三十代、四十代の、戦後民主主義の中で育ったお母さんの時代になっており、だんだん変わってくるとは思いますが、相変わらず「女の子は女の子らしく……」という傾向もあります。人間として生きていく意味とか条件について伝えあえる家庭教育でないといけないと思うのです……。

——共学の原則に立つ方として、女子大の意味をどうお考えになりますか。

形の上では共学であっても、男女併学であっては意味がありません。ほんとうの共学ではない現状の中では、前向きにひらいて行く場としての女子大学は、過渡的に意味があると思います。女子大では、婦人問題について集中的に研究・教育することが可能です。制度としての完全な男女共学を目指しながらも、その過渡期として、前向きな女子大の果たす役割はあります。私どもの女子大では、婦人問題、婦人労働の講座があり、夏季セミナーの中で婦人問題を取りあげる先生がふえています。またクラブ活動、サークル活動は男子学生にも開放されており、可能な限り男子学生との討論の機会を持つようになっています。場所から、早大・



日本女子大学研究室の一番ヶ瀬氏

——そのような女子教育を行なっても、いざ卒業・就職となると、女子学生には壁が厚いようですが……。

全く大きな壁がありますね。女子学生には就職のチャンスが少なく、あってもほとんど補助的な仕事です。比較的恵まれているのは地方公務員なので、その志願者が多いようです。

このように女子の就職のチャンスが少ないのは、女子が短期間でやめることに起因しています。これを教育するには婦人問題の現実そのものを示すのが、いちばん効果があるようです。

地域調査などで、老人問題などの実物教育をすると、老人問題イコール婦人問題だということが身に沁みるようです。一人暮らしの老人の八割は女で、その生活はおおむねみじめです。貯金と子どもがありさえすれば……と思っていた人たちが、貯金

東教大などの男子学生の参加が、かなりあり、ひらかれた女子教育、イコール男子教育の場となっているようです。

また女子大の特色として、女教師が多いこともあげられると思います。日本では女教師がふえたといっても、多いのは小学校までで、中学

になると減り、高校では二割程度しかいません。さらに大学になると、助手はいても、教授はおろか助教授さえほとんどいない現状です。女子大で、女子学生が、女の先輩としての女教師の生きざまを身近に見ることは、意味があるのではないかと考えます。

の価値はなくなり、子どもには見捨てられて孤立している実情をみるこ
とが、女の自立の問題を考える、何
よりの刺激になるようです。

——しかし現実には、女子の学卒者
を迎えた職場で、女の甘えや、ヤル
気のなさが指摘されることが多いよ
うですが。

今の教育自体に問題があることは
認めます。機械的な受験本位の学習
の中で、独創性が失われ、ヤル気を
教育が引出し得ないシラケ・ムード
がありますね。

また、女である母親や女の教師自
身がかなり特性論にわずらわされて
いる。母親が「かわいらしい子」を
望み、女の先生が「女の子でしょ」
と言うような、女自身の中の偏見が
除かれない限り、事態は改善されな
いでしょう。

よく、男は推理、女は記憶にすぐ

れているなどといわれますが、それ
は平均値であって、一人一人、個性
があります。平均を一人一人に押し
つけてはならないでしょう。

また、男女の役割の固定化を変え
ていく作業も必要です。文化人類学
では、違った役割を持った社会があ
ることを指摘しています。

さらに、女の人の地位を歴史的に
考察することが必要でしょう。現在
の女の位置は、歴史の中に作られた
面が大きいのですから……。

——ところが、そうした問題に、学
生の間は、ほとんど気がつかない。
その鈍感さがやり切れないという意
見が、この号のティーチンでも出
ています。

学生時代という部分だけを切取っ
たら、たしかに失望しますね。差別
というのは、教育ではなかなか教え
にくいものだと思います。職場で苦

労して、はじめて真剣に考える。そ
のとき末長く女の問題を伝えあえる
学生と教師でありたいと思います。

大学紛争のときなどでも、私自身
も身に沁みて感じました。同じこと
を男の教授が話すとニヤニヤしてう
なずき、女の教授が言うくと歯牙にも
かけないのです。その点を私が指摘
したところ、リーダーが、「だって
本能ですよ」と言ったのには、全く
カッしました。「本能なんていい
加減なもので動くな」と、思わずど
なったのですが……。

最近は何の家庭でも子どもの数が
少なく、一人っ子や、異性の兄弟を
持たない子どもが多いうえに、友達
とも遊ばない、だから差別に気づか
ないのですね。その結果男の先生を
プリンスかまたはバイキンのように
感じている……(笑)。

——そしてそのプリンスに目がくら

むか、バイキンに侵食されるかして、たやすく結婚し、たやすく職場を捨てて。結婚生活の中で目が覚めて再就職したいと思ったときには職場がないということです。

時間単位の最低賃金制がなく、職業訓練の場が貧弱な日本では、よほどの力量がないと生きた再就職はできません。ただ、私の専門の社会福祉では、若い人よりもむしろ日常生活の問題を、さまざま経験した人のほうが貴重だという気がします。私のゼミには、社会生活を重ねたのうち、研究生として再入学してくる方がいますが、いい成績をあげており、職場にも恵まれています。これは、社会福祉という学科の特性とも関係していると思います……。

——先生ご自身は、社会の中での差別をお感じになりましたか。

痛烈に感じました。社会科学は共

同研究が多いのですが、地域調査などでも、女を一人連れていくと、部屋を一室別にとらなければならぬし、男同士のほうが勝手ができ、肩がはらないというので、男子が優先されました。

また研究をまとめても、男の編集者は売行きを危険視して刊行してくれませんでした。私を世に送り出して下さったのは、女の編集者の方々です。

——最後に、ご自身が受けた教育で良かった点、悪かった点を。

軍国主義の女学校で、当時の中学生からラブレターが送られると、お前にスキがあるからだ、"戌申詔書"を毛筆で百枚も書かされました。しかし反面、体育重視で、徹底的に体を鍛えることができた点はよかったと思います。

女子大時代には、女に甘いえせフ

ェミニスト男のの先生か、視野の狭い女の先生が多く失望しましたが、その中で、ある魅力的な女の先生Ⅱ先駆者に会えたことは、人生の大きな力になりました。

女子大を出て五年間、繊維関係の女子工員の職場などで働き、底辺層に近い人々と生活をともにし、そうした生活と男女差別の問題を考え直したいと思って法政の夜学に入ったのですが、「どうせここはたいした学生が来ないところだから」と力を抜く先生がいらしてがっかりしました。しかし、ここで河上肇先生の身近にいらした弟子の一人であった長谷川博先生の教えを受けることができ、その識見・人格に打たれました。教師としても研究者としても夢を与えて下さった方です。

こうして考えてみると、私の場合、教育は、学校というより教師に負うところが多かったように思いま

す。

また、学校の教育にもまして、大きな教育になったのは馬術です。乗馬は全身の総合能力を要求しますし、障害飛越などは目測しながら瞬間的な判断が必要です。馬との情緒的なつながりもあります。そういう

中で得たものは、最も大きかったような気がします。

*

小学生時代に全台湾馬術大会で優勝し、天才少女の名をほしいままにした一番ヶ瀬氏は、戦後、引揚げにより、経済的に馬術を続けることが

できなくなったという。しかし、氏の気迫も情熱も、幼い日の馬術を通じて全身教育に負うところが大きいのではあるまいか。解放の原点としての女子教育のヒントは、このような面にも隠されているのではないだろうかと思った。

国際婦人年記念

募集！ 女の記録

「あごら」の国際婦人年記念行事の一つとして、女の記録を募集します。

女の生き方、女の行動、——個人の記録でも、グループの記録でも、かまいません。あなた自身の暮らし、おかあさんやおばあさんの生活、あるいは行動の記録……。どんなことでも結構ですが、「事実」に限りませう。

・締切 一九七五年九月三〇日（火）

・枚数 四百字詰め二十枚程度（別に概要一枚）

・宛先 ㊤160 東京都新宿区新宿一九一六「あごら編集部」（住所・氏名・職業を明記のこと）

・発表 「あごら13号」（七五年十二月発行）誌上

・入選 賞金三万円と「あごら」講読券三年分

主婦が学ぶということ

伊藤 雅子

時間もあって、自由で、主婦ほど自分のしたい勉強を思いのままにできるひとたちはない、というようなことがよく言われています。それは、主婦自身の口からもしばしば聞かされるし、男のひとたちもよくそんなふうに言っています。あちこちの教育委員会や公民館が開設

する「婦人学級」や「市民大学講座」などの事業のおおかたは、いわゆる「婦人教育」つまり主婦を対象に想定されているものが圧倒的多数でし、マスコミだとかさまざまな運動体・事業体が行なうこれらの講座をみても「婦人のための」ものがとても多く、主婦が出やすい日中の時間帯が選ばれていたり、託児施設を設けていたり、主婦のための配慮がいろいろに工夫されているようです。たしかにそれらの事業は、どこでも一定の主婦を集めており、それぞれそれなりの評価を得ているし、加えて「新幹線を通っている」とか「早朝からならんで申込んだ」とかきくと、主婦の学習意欲がいかに盛んであることか、またそれに応える主婦のための学習機会がいかに

さまざまに整えられていることか、認めないではいられないような気持ちにさせられます。

けれども、私は、公民館職員という仕事をおして毎日たくさんの主婦であるひとたちに接しながら、いつも、ほんとうにそうだろうか、主婦はそんなに学びやすい立場にあるだろうか、いま女の学習、女にとっての自己教育活動というものがそんなに尊重されているといえるだろうか、という疑問のつぶやきが胸の中から去りません。小さな町の、貧弱な公民館の片隅にいて、せまい視野でとらえているにすぎないわけですから、限られた範囲での体験にこだわって勝手に思いこみ、偏見も強いのでしょうけれど、「偏見なき思想は香りなき葡萄酒である」といううれしいことばがあるそうですから、機会を与えていただいたのいいことに、もう少し大きな声でつぶやいてみようと思います。もっとも、おまえさんは「思想なき偏見」の類じゃないの、という声がきこえそうですけど……。

さて、主婦は、ほんとうにそれほど学びやすい状態にあるのでしょうか。端的に言って、私にはとてもそうは思えません。

なぜなら、それは、私に言わせれば女だから、主婦だからの一語につきるのですけれど、ここで言う主婦を少し具体的に定義づけておくなら、おおかたの主婦のイメージのとおり、都市のサラリーマンの無業の妻、二人か三人の子どもの母、そして核家庭の主婦というふうに考えてくださって結構です。とするなら、つまり、女で、おとなで、結婚していて、母親で、家事をとりしきっていて、たいいていは家庭かその周辺ですごしていて、自分では稼いでいないか、稼いでいたとしても夫の被扶養者であることにかわりはなくて——といった側面が容易に浮かびます。このような側面で幾重にも重なっているところに主婦のおかれている状況というものがあがえると思うのですが、その、主婦がおかれている状況・現実をみるとき、主婦には、学ぶための時間がほんとうにあるのか、場があるのか、経済的な支えがあるのか、ほんとうに選んでいるのか、自分の方向を見失わずに持続発展させているのか、いずれについても私は肯定できないでいます。

たとえば、主婦の生活時間を考えてみても時間があふ、ヒマだと言われるけれど、それは、一生の中でも、一日の中でもこまぎれの時間であったり、あるいはなにかして空白を埋める時間であることが多いといえないで

しょうか。子どもが小さい間はだめ、おとしよりをみるとる間はだめ、週末は家族がいるからだめ、夜はだめ、夫がいる時間はだめ、子どもが帰るまで、夕食の仕度をすることまでと制約され、きょうはゴミ当番だから、きょうは親戚が来るから、きょうは子どもが風邪をひいたからと足をとめられ、自分のものときめたはずの時間をいつもゆずりわたさざるを得ない。セールスマンが来た、電話が鳴る、子どもが泣いて帰る、ご近所のオクサンがお茶のみにきたらそれも断りにくい、雨が降ってきたから干しものをとりこまねば、そうこうしているうちにもう夕食の仕度。婦人雑誌のグラビアでは優雅なはずの「主婦の午後」も、たいいていはとりとめもなく流れてしまいがち。小さな核家庭の中では精いっぱい働いた手ごたえには遠く、なんだかもの足りなく、うしろめたさがつきまとう。周りのせいもあるけど自分の心がけ次第でもっとどうにかできるのかもしれない、明日こそは、と何度か決心するものの、家族優先、家事優先が主婦のつとめの原則であってみれば、いくら「おかあさんの勉強」が家族の心理的な了解を得ていたとしても「きょうは私は読書会に出かけますからあなた会社を休んで大工さんにお茶出しといて下さい」とはなかなかいかないのだし、子どもがいつもより早く昼寝から起きてまっわりついてくれば計画の「時間中」であつたって本やペンをほうり出さざるを得ない。待ったなしの家事・育児にくらべれば自分の勉強は、明日からでも来週からでも、あるいは三

年後でもいいような気にさせられるのが主婦の毎日でしょう。子どもの健康や夫のごきげんを安定させながら自分の時間を確保するのは、主婦ひとりのがんばりや心がけではとてもたいへんで、長続きしにくいのではないのでしょうか。

仲間を得て何人か集まってやるとして、無料で、近くで、快適で、いつでも使えてという場所があればいいのですが、たいていの公共施設は、有料だったり、遠かったり、混んでいたり、手続きが面倒だったり、子連れではムリだったり、設備がおそまつだったり、なかなか思うようにいかなくて、主婦の場合はつい個人の私宅になる。そうすると互いに気がねやら負担やら、どうかして夫が早く帰ってきたりすると他に部屋がないわけではなくとも大急ぎで解散することになったり、しよせんは飯の場で不都合も多く、また、家庭が舞台ではお茶のみ話にはよくても「主婦」から「自分の時間」へのきりかえにはならないという声もよく聞きます。場といえば、自分の家庭の中ですら自分の場が定まらない。それは住宅事情のせいばかりではなくて、たとえば3DKでも子ども部屋や夜しかない夫の書斎はムリにでも確保するのに、主婦には専用の机一つない。ダイニングキッチンのものおおかたでしょう。昼間は家中主婦のものだからとごまかされるけど、それではやはり家事をする人間の居場所はあっても自分の場などあるようでない、自分の時

間も人格も家中にちらばり、家事のあいだにまぎれこんで、自分が散漫になっていくのがわかる、と言っていた主婦がいました。

お金のことだって例外ではありません。近頃の公民館で講演をきくくらいなら無料だし、その限りでは問題にもならないでしょうが、少し系統だっと思えば資料や材料費、月謝のようなもの、交通・連絡費、さまざまな経費がかさんでくるはずですよ。金額の高の問題だけでなく、子どもの教育費とちがって主婦の教育・教養費をキチンと家計に計上でき、使えている家庭がどれほどあるでしょう。ある主婦がこんなことを言っていました。

「毎月三千円を自分の教養費ということにしているのだけど、月給日前になるとたいてい副食費とか臨時出費の補いになってしまいうから、月給が入るとすぐ全額本を買ってしまうの。ちょっと決心が要るんだけど……」。また、主婦の学習やさまざまな社会的活動について話し合うときいつも話題にのぼるのは、主婦の「自分のお金」についてですが、「自分のらちもない絵のためにえのぐ代を使いすぎて、今夜はもやしいためよ、なんていうのはやはり気がとがめるわ」という人。またある人は、家計に支障をきたすわけではなく「夫は自由に使えるというけど、なんだか純然たる生活費じゃないからワルイ気がして、自分のおけいこごとの費用だけはアルバイトで稼ぐようにしたい」と言っていましたし、「はじめは感じなかったけど、勉強会で自立とはなんて言ってて、わ

ずかとはいえ夫の給料からその経費を出し、レモンティーをのみながらやっていると気がなりだした」とか「市民運動に首をつっこんでみて、自分は税金を払っていないんだってことにひっかかりはじめたの」とか、経費がかさんで困るということだけでなく、自分の生き方・考え方や心理的な面でもこのお金の問題は、主婦の学習活動の上にいるいろいろな意味で制約を加えていると思うのです。

それから、主婦の学習の問題を考えると、もう一つ大きな意味をもつのは、子どもや学生やあるいは職業上の必要でする場合とちがって、学ぶことが義務づけられていない点です。当人の意志だけ、自発性によってのみ支えられ、持続され、自分で価値をみつけるという非常に輝やかしい積極面を持っているわけですが、一面、外的拘束がないというのは本人にとってはそれだけたいへんで、なみなみならぬ意志力、努力、ちえが求められるにちがいありません。人生のいつの時期にあっても学ぶことは人間に欠かせないものであり、いまの自分にとってはこうすることが大切なのだということを自分で確かめ、夫や子どもをはじめ周囲にそれを認められ、支持されるようになるのは容易なことではないでしょう。おかあさんのお道楽、ヒマつぶしができて、ヒスもおこさず、夫や子どもにあたりちらさなくなったのはもっつけの幸い、という程度ですんでいるうちは波もたたないのでしょうが、出ることが多くなりすぎたり、家事サービ

スが低下したり、夫の考え方に疑問をもつようになったり、とかく夫の許容区域を少しでも逸脱することになったり無事ではすみません。「何をしてもいいけど家のことをキチンとしてから」という常套句で釘をさされたり、「このごろ子どもたちがどうも不安定だ。キミが歩きすぎるからではないのかな」と急所を突かれます。こういうことでは女同士とはいえ近所のオクサンも夫に呼応するかのようにな「オクサン、おえらいわね、私なんかとても」と、やられます。女が迷ったり、疲れたりするのは、学習そのもののためであるより、実にこんなところからであることがとても多いのです。「主婦が家庭の他にもなにかうちこめるものを持つことは大事だ」などとわかったふうに言ってくれる夫は多いけれど、けっして本気でうちこんではならず、いつだって夫や子どもの求めのままに自在に中断できるものでなければならぬというわけです。

そういう中で多くの主婦は、もう少し子どもが大きくなったら、自分の時間をもっととれるようになったらと自分をなだめ、いつか、なにかしたいという漠然とした願望をもつことで現状を肯定させられています。そうこうしているうちにたしかに子どもは大きくなるのですが、子どもに手をとられてすぐす時期のすぐあとにおとしよりの世話をする時期が続いていることを計算に入れている人は意外に少ないのです。自分の老化を計算に入れている人はもっと少なく、中年を過ぎたそのときにも

若いころと同じような知的好奇心や集中力、気力や体力や感覚が持続しているものと思ひこんでいるのでしょうか、その日にそなえての具体的な手だてをこうじている例はまれです。だから、子どもも大きくなり、夫も子どもも何でも好きなことをするように言ってくれる、お金も出してくれるし、家事の心配もしないというのに、何をしたいか自分でもわからない、多少無理をしてもがらばってみようとする気持が動かない、^足人中にでることすらいつまでたってもふんぎれない……という声をしばしば耳にします。また、きつかけを得てもいざとなると、長い間家庭だけですごしてきた私がついていけないだろうか、続けられるだろうか、あるいは夫や子どもにしろわよせがいくようでは意味があるのかしらと迷いが続いて、おおかたの場合それらの迷いは動きださない自分の現状を正当化することにはなってもマイナスの条件をプラスに転じていこうとする原動力にはなかなかつがらないようです。

それに、主婦の余暇活動が奨励されているとはいっても、それは、余暇ができた主婦を社会が待ちうけていて、さあ、レギュラーメンバーとしてどうぞ、と迎え入れようとしているのではなく、ヒマな時間をもてあまして夫や子どもに嫌われたり、おヨメさんに迷惑をかけるようなことのないように、その時間を自分で埋められるよう、適当にそっちの方でやってなさい、と言わんばかりの現状ではないでしょうか。また、たとえば主婦がな

にかちょっと作文のようなものをあつめて出しても、中学生でもできそうな調査をしても、「主婦らの研究の成果」とか「マ、マさん、勉強強」とかキモチのわるい上っ調子なおだてられ方をします。女にしてはよくやった、主婦にしてはマシというわけで、もともと一人前にはみえない証拠、蔑みも露味ではないかと腹立たしく思うのは私のひがみというものでしょうか。こういう無責任なおだて、甘やかしはけつして女が学ぶことを真に励まそうとしているものではないと思うのに、どうかすると私たち女自身もそういう安逸さの上ののっけしてしまうようなところがないとはいえません。これも女が学ぶ上での大きなワナの一つだと思ひます。

—まだまだ挙げ出せばきりもありませんが、こういう事実をみてみると、主婦が自分もひとりの人間としていっそう伸び続けていきたいと身動きしようとするとき、障害になっっているのは、子どもであったり、おとしよりの世話であったり、家事であったり、夫の無理解やご近所の目であったり、あるいはおとなのための学習機関の質量の貧しさ、奨学金制度や保育制度などの社会的な保障の乏しさのためばかりでなく、同時にこれまでの社会通念に支配され、からまり合っている女自身の意識そのものの中にも大きな要因が巣くっているように思われます。女だから、主婦なのにといい、知らぬ間の自己規制、またそういう枠の中の安全地帯に自分を安んじさせるにこと欠かないたくさんの口実、あるいは体を家の外

にはこび、気忙しくすごすことで流され、まぎれていくもの、そのへんの主婦とはちょっとちがうと思いたい優越感と、周囲の目が気になったり、だめなのは自分だけかと思ひ迷う不安・劣等感の間をこきざみにゆれつづける心もとなさ等々、あそこにもここにも、なにより自分の中に思ひあたることばかりではないでしょうか。

女の周りをみても、ひるがえって女の内面をのぞいてみても、女が人間としていっそう成長し続けていくための学習・自己教育活動を芯からみらせるような土壌が耕やされているとは、私にはとても思えません。そういう意味で、私は、いま、主婦が学びやすい立場・条件にあると認めることはできないのです。

とするなら、このように外的な条件でも、内面にかかわる問題としても障害の多い主婦の学習活動に対して、社会教育行政は、その条件整備のためにいっそう力を注がねばならないだろうと思います。そして、ひとりの公民館職員として自戒をこめてその現実をかえりみると、公教育としての社会教育の場で女の学習の問題がどれほどの覚悟をもって行なわれているか、深く反省しないではいられません。

まず、非常に無難作に女が集められているという印象を否認しません。「婦人のための○○講座」とか「婦人セミナー」と銘打っているものがたくさんありますが、なぜ、この主題や学習内容がとりわけ女だけを対象にする

意味があるのだろうか、どこが、どうして、どのように「婦人のため」なのだろうかと疑問に思うものが少なくないし、「婦人の……」とした途端に次元を露わに下げているものも珍しくありません。それに、必ずといっていいほど従来の妻・母・主婦といった役割の中に女の生き方を限定したところから発想されています。たとえば、政治や法律は、必ず「やさしい」「身近な」という修飾語がつき、経済問題は家計簿サイズ・台所次元で終始しがち。教育問題はというと、母としてという大事なわが子の幅にせまられるというふうです。同じお茶やお花でも男がするときは芸術であり、プロフェッショナルに通ずる道であるけれど、主婦のためとなると婦徳教育であり、せいぜい趣味と実益におちついてしまおう。なぜ家事・育児は女の仕事を問わずに主婦の生き方が説かれるといったありさまで、相手が「主婦だから家庭教育か生きがいかな適当に話してくれるセンセイを」とか「国際婦人年にちなんで誰か女の講師を四、五人」などという乱暴というかのんきな企画もべつに珍しいことではありません。いまひろく普及しはじめている主婦の学習のための託児・保育のあり方にしても、たんに人あつめのためのアイディアとして無頓着にすすめられている気配がないではありません。

それらは、いわゆる「市民の要求」によっているのかもしれないし、職員の善意や熱意によって行なわれているのかもしれない。それに、それなりに一定の支持を

得てもいるのだらうと思います。けれども、どんなに善意によるものであらうとも、それを受け入れる人たちがいようと、なおのことこういう形で「婦人教育」は、結果として女一般を従来の女の生き方の枠の中にとじこめ、啓蒙の対象としてのみとらえていることにほかならないし、無自覚のまま行なわれているにせよ、いまだある性差別に結局は加担し、増幅する役割をはたしてしまふことにつながるのではないでしようか。

私は、以前、こんなふうに書いたことがあります。

「女が学ぶことの上でいま最も欠けているのは、女が女であるがためにうけている抑圧や差別の事実を、女自身が直視することではないだらうか。教育委員会や公民館などで行なわれる従来の婦人教育の常識は、妻・母・主婦といった役割の中に女の『生』を限定し、その役割にいかに適応させるか、その中で女の自身の違和感や焦躁をいかになだめるか、不満や疑問からいかに気をそらせるかにあつたように思えてならない。たとえば、よき母としての心がまえを説いたり、家庭円満の秘訣を授けたり、教養の世界を浮遊させたり……。けれども、私は、それら女自身のときれとぎれの、しかもちつともはつきりしない違和感や不満、疑問にこそ注目すべきであり、そこからこそ女自身の学習がはじまるのだと思う。」

『主婦とおんな』未来社刊

そして、とりわけ主婦の学習・自己教育活動を重視したいのは、「私は、主婦の問題は、女の問題を考える一つ

の基点であると考えている。現在主婦である女だけでなく、まだ主婦ではない女も、主婦にはならない女も、主婦になれない女も、主婦であつた女も、主婦であることが女のあるべき姿・幸せの像であるとされている間は、良くも悪くも主婦であることから自由ではない。少なくとも多くの女は、主婦であることとの距離で自分を測っている都市の中間層の主婦自身が抱えている問題に目を向けようとするのは『底辺』の女や働く女の問題とは別個に主婦の問題を考えているからではない。主婦であることが女の生き方の正統であるとされている限り、主婦が負わされている歪みや痛みは、他の多くの女のそれと同心円を形づくっているのではないか、すべての女に投影しているものではないか、と思うから」(同)です。

私は、女の学習あるいは女と学習の問題を考えると、き、なによりも欠いてはならないのは女の問題を性差別の問題として直視し、女の人間解放のための実践的な課題につなげてとらえる視点であると考えています。少なくとも、性差別に対する人間的な怒りと、いつ自分も無意識のうちに差別する側の目でひとや自分を見てしまふかしないのだという原罪意識のようなおそれがなくては、女が学ぶことの底深さを少しも見ることができないだらうと思います。

そして、女の学習活動の具体的な展開の上でまず必要なのは、やはり、私たち女がおかれている状況について

の的確な把握であり、復権のための外的内的条件を自らつくり出していこうとする努力と気概だと思います。たとえば、従来の女の生き方を変えないで、いつかヒマが

できたらする学習というような発想ではいつまでたっても女がとらわれているたくさん障書を越えていくエネルギーは生まれなし、チャンスがチャンスにならないだろうと思います。時間ができたら、障書がなくなったらやってみる学習ではなく、はじめからそのことを生活時間の中にくみこんだ生活、そのために時間や力を生み出そうとする生き方でなければ、まず自分の中の障書は

的に自分の中に支持条件を生んでいく、そして、そのことに互いに手を貸し合う関係や共通の場を育てていくことではないかと思っています。

女の解放のイメージは、私などにはなかなか定かにみえないあいまいな遠景でしかありませんが、少なくとも、いまの男なみになることではないし、男の上に立つことでもありません。だとするのなら、そこへの道すじはお手本などないのがあたりまえで、自分でつくりながら歩いていくほかはないのでしょうか。歩いたあとが道になるだけなのかもしれません。それに、女がなにかしようとするとき、それはいつも早すぎるか遅すぎるのです。女にとつてのグッドタイミングは動き出してしまったときだけだとはいえないのでしょうか。

子どもたちの教科書を読んで

みませんか。隠れた問題が、意外に深く根を張っているようです。

「あごろ」では、国際婦人年の行動の一つとして、教科書を読み直しています。

教科書を読み直そう！

気になる点、問題になる点

を洗い出し、教科書会社を追求するとともに、「どう改めればよいか」を考えてみたいと思います。参加ご希望の方は

東京都新宿区新宿1-9-6「あごろ事務局」にご連絡を。

女性解放の原点を

手弁当でも考え合おう！

「あごら・ティーチン・シリーズ」は

毎回、深更まで熱気あふれる討論を重ねています。

今回は、「女と教育」をめぐり、左記の六氏にご登場

いただきました。ご多忙な各氏のご協力に心から感謝します。

〈女と教育〉を考える

ティーチン・シリーズ 7

お茶の水女子大学 文教育学部 教育学科 教授 吉田 昇

朝日新聞社 社会部記者「いま学校で」担当 佐田 智子

東京都立中央図書館 館長 貞閑 晴

埼玉県立所沢高校 教諭 中嶋 里美

タレント 中山 千夏

評論家 桐島 洋子

—— 教育の荒廃は言われて久しく、教育に問題が山積していることは周知の事実ですが、きょうは教育一般の問題ではなく「女と教育」ということでお話し合いたいだと思います。「女の教育」ではなく、「女と教育」、つまり、家庭、学校、社会を問わず、女がつくられる教育、その女に対して男がつくられる教育など、女の問題としての「教育」を考えてみたいと思っています。まず、それぞれ問題提起をしていただきたいのですが。

疑問をもつ 教育を

中嶋 私は埼玉県の所沢高校に勤めて十二年になる教師です。高校を出てすぐ丸の内で経理のOLをしていたのですが、いくら経理ができて、女だということでは賃金や昇格で差別され、このままではいけないと、ずいぶん組合運動をしました。しかし組合でも、男にとって女は同僚というより一段低い存在でしかない。そこで夜学に入って教職に転じました。こういう経過で、教師になりたいとい

うより、むしろ人間として差別されたくないという気持ちで教師になったものから、学校でも、女がどういうふうに扱われているかということが気になってしまふんです。OL時代、私はお茶くみとか書類まわしなどの雑用しか与えられなかった。これは学校で女だけが家庭科をやっていることとすんなり結びつくのだと高校時代気がつかなかったことにはじめて気がついたものですから、教師になると、職員会議のたびに、女だけが家庭科をやるのはおかしいと、何回も発言しました。最初は、少し変わったやつが何か言っているという感じで取り上げられなかったのですが、四十八年度から、女子は家庭科が四単位必修、男子は剣道と柔道を四単位ということになったのを契機に「家庭科の男女共修をすすめる会」をつくり、集会を開いたり、教育審議会に、ぜひ家庭科を男女でやるよう、働きかけをしています。

男女を問わず、人間が一人の個性として生きていけるようにするのが教育だと私は思います。そのためには、家庭科の男女共修はもとより、あらゆる学科で、

人間として生きるためにはどうすればよいかを考えていかなければならないと思う。社会科や保健の教師とも、どういうふうに労働や性の問題を扱うか話し合っているのですが、男子もいるし、進学の問題もあるし、ふれられない状況がある。女性解放のための教育がもっとあっていいと思います。

女教師自身も、もっと女がのびのびと生きられる状況でありたい。でなければ、状況はますますひどくなる。高校生などの座談会では、子どもが生まれたら家庭に入るといふ女生徒が多い。また母親が家庭にいなければ不幸だといふ固定観念があつて、何の疑いもたないんです。もっと疑いをもつような教育をしなきゃいけないと考えています。

私が教えているのは家庭科ではなく英語ですが、自分の教科の中でも、男と女の関係というようなものをテーマとしてできるだけ取りあげています。

花嫁志向教育 が問題



桐島 洋子氏

桐島 十何年前に、女子大生亡国論っていうのが一時はやりましたね。最近、女子大生をインタビューして歩いたんですけど、今やほんとうに花嫁学校になったという感じですよ。

だいたい、大学へ入るのは当然だと思ってる。私のころから前までは、大学に入るのには選ばれた人、意気込みのある人でした。大学へ行ったらには何かを身につけて職業人になろうという気があったのに、今は、中高卒じゃみっともないという感じで進学する。目標はよい嫁になることで、就職しても、結婚したり子どもができるほとんど家庭に入ってしまう。何のために四年間、あれだけの時間を浪費して進学するのか、しかも四

年間だけじゃない、そのために中学・高校は受験に塗りつぶされているわけでしょう。ほんとにがく然としちゃいます。

中山 私なんかテレビやってて、若い人に会う機会が多いでしょう。そこで感じるの、わかしは女が結婚に追いやられるのは、花嫁衣装がいいとか、わりとムード的な感じだったのに、このごろは、もっと追いつめられてるってことをヒシヒシと感じるの。ムードというよりも、すごく現実的なのね。

今の世の中は男女平等の機会が与えられてるんだから、女だってきちんと学校を出て、社会できちんとそれなりのことをやれば自然とまわりも重要視するし、ちゃんとやっていける。それなのに結婚して家庭に入るというのは、女の自然の性質だという説があるでしょう。でも、私は自分の体験からいって、絶対、性質ではなくて教育の結果だと思うんです。それも学校の教育だけじゃないの、私みたいな仕事をしていた、わりといい加減に育てられたものでも、近所の人とか社会全体のふん囲気とかで教育されて、結婚という方向へ行かなくちゃいけないと

いう気になっちゃうんです。

佐田 学校教育が女の職業や自由と結びついてないことも見落してはいけなと思いますね。近ごろでは東大でも早稲田でも慶応でも女子学生が増えていて、早稲田の文学部なんていうと女ばかりが歩いているのに、男と同じ資格を得ながら四年間花嫁になることばかり考えている女子学生がいっぱいいる。東大にもそんなのがゴロゴロいて、取材に行くと、卒業してからどうするか考えてないとか、いいのがいたら結婚するわみたいな感じなんです。相手が自分より頭が悪くちゃ困るから東大に入って探してるみたいなんです(笑)。

まず自立こそ 解放の道

佐田 なぜ彼女たちがそうなるか、一つには就職しようと思っても、いい仕事がないのはないのです。たとえばマスコミの中で先進的と思われる新聞社ですら求人男子のみのところが多い。現在、朝日新聞三千人の記者の中で女は八人だ

けです。そんな状況の中で、自立して働いてちゃんと生きていこうとしても先が見えているというどうしようもない現実があるわけです。だからアナキーになっちゃう。

貞閑 敗戦後参政権を得たことに、当時の女性はブライドをかけた。あのころ学校を出た女性たちは、前例がないんだ、とにかく自分たちがやらなければという意気込みがずいぶんあった。そして困難を解決した人もたくさんいますが、大多数は夢と努力の割には報いられなかったのです。現実の男中心の社会の中でもみくちやにされ、あきらめて引込んでしまった。今の若い女性の中に、多分それが引き継がれてるんじゃないかと思うんです。どうせ一所懸命やっても同じだということで家庭中心になってしまった。パイオニアたちが努力して切り開こうとしたのに、そのあとがあまり続かなかったというのが、まことにくやしいですよね。

中山 でも、今の若い人たちがいけないって思うこともあるんです。参政権を得るというのは、驚天動地の大変なことだ

ったと思うんです。一人ひとりの女が職業につけるようになったというのも大変なことだったと思う。それを、さっき、「やりがいのある仕事がない」という話が出ましたが、今の若い女は考えが甘いというか、いい仕事でなければ働こうとしないんですね。まず自立するってことを考えたなら、とりあえず何か職業を身につけることが大事なわけでしょう。その中でだんだん開拓していくのが順序だと思うんです。自立することが解放の始まりなのに、こんな仕事じゃカッコウが悪いとか、ルポライターみたいなことをしてみたいとか、そんな特殊なことを考えていたら、絶対、一生、いい仕事になんかつけないと思うんです。やりたくないことでも何とかやって切り開いていけばやりがいのあることにつながるかもしれないでしょう。やってみてやっぱり壁を破れなかったというのならともかく、学校にいる間からひとりぎめして、ジタバタしてもだめだから家庭に入ってしまうというのはどうかと思いますね。

吉田 女の人が職業につくという場合、適職につきたいとか、能力を生かしたい

とか言いますね。同じように大学を出ても、男はそんなことはいわずに、ともかくどこかへ就職して、そこで能力を伸ばそうと考える。ところが女は、自分が英語をやったら英語の能力を生かしたい。それには教師しかない。教師はやりたくないからほん訳をやるとか家庭教師をやるということになる。男は英文科を出たといっても、何でもやりますよね。

その違いは、一つは社会情勢の問題で、女は、大学まで出て身につけたことを何とか財産にして生きていかなければということもあるのかもしれない。しかし一つには甘えみたいなものでしょう。自分には専門があるんだと、あの若さで思い込むなんて(笑)。

佐田 一つには、今の両親の状況がよくなりすぎてることがあるんじゃないですか。私などは明治生まれの徹底した男尊女卑の父と母の關係を見て育ち、絶対母親みたいにはなりたくない、いざというときに自分で食っていけるだけの力と土性骨と気がまえを持ちたいと、小さいときからたたきこまれたんです。

今の若い人は大正生まれの両親で、女



佐田 智子氏

学校もやはり大事ですねえ。

貞閑 私は個人的には学校では全くの良妻賢母教育、はだかで社会にほうり出されたみたいない人間ですが、何とか生き抜いてきたのは、新しく与えられた人間としての権利の選挙権に責任感を持ったからでしょうか。

の子を大学に出すのにも抵抗がない。だからかえって女の子自身が甘える。結局女のことを考えていく中で、一番大きいのは家庭じゃないかという気がつくづくするんです。

貞閑 私の時代の人間は、明治生まれの親に育てられて、コン畜生という根性のある人だけが津田などの上級学校に行った。だから学校を出た人は卒業後も頑張ったということがあると思うんです。

吉田 家庭教育が大事だということはわかるけれども、むかしの津田や女高師はやっぱりあれだけ職業教育を叩きこんだわけでしょう。お嫁さんになりたいと思っている人を、とにかくやっぱり仕事をしなきゃというふうにさせたんだから、

中山 その責任感っていうの、すごくよいことばだと思うんです。私たちは、それを受け継がなくてはいけないんですね。せっかく明治の人たちが、ものすごい困難を重ねて選挙権を持ち得るところまで行ったわけでしょう。それに対して一人ひとりのあり方で、オーバーにいえ

ば全女性がどのくらい損失を受けるかという責任感みたいなものが、今の人たちにはないような気がしますね。

桐島 さっき話に出た、女は勤めようと思ってもよい職業がないというのも、かなり女の責任なのね。せっかく職を得ても、すぐ結婚した、子どもができた、やめてしまおうということで、雇うほうも雇わなくなってしまう。ほんとうにトリが先か卵が先かってことですね。

高校教育で「現代社会」を

吉田先生は、きょうは五対一でムシラれるんじゃないかと、始まる前からビビってらしたのが、どうやらほこ先が女性のほうに向いて、にんまり笑っておいでです(笑)。先生は女子教育者を教育するという最先端の場に長年いらしたわけですが、そういうご経験を通してお考えになったことをお話しください。

吉田 一番痛感するのは、女が、なぜ差別に早く気がつかないのかということですね。大学を卒業する頃になってはじめて差別があることに気がつく。どうしてあんなに鈍感なんでしょうね。男はいろいろ雑学をするわけでしょう。ところが女の人は学校のことしか考えてない。だから学校の中で男と同じことをやって成績がよければ、それで自分のほうが上だと思ひ込む。それが就職する直前になって男子のみに限るといのが出てきて、はじめてがく然とするわけですね。

そのためには、今の家庭科の中味が変

わらなければどうにもならないという気がします。女は、これから先、やはり自立しなければいけないわけですね。ところがその問題が出てこない。家庭科の先生方は共働きでいろいろ苦労してきているのに、そういう角度の話は一かからもなくて、卵の焼き方だとか、ミシンの修理の仕方だとか、アップリケをどうつけるかとか、そんなことだけやってる。家庭科の中でもっとなまなましく、家族が生きていくためにはどんな苦労をするのかといった話をすれば違うと思うんですがどうしてそれをしないんでしょうか。

中嶋 気がつくのが遅すぎるという話ですが、差別の問題は、直面しなければわからないということもありますね。私も高校時代は気がつかなかったのです。私が教師になったのは、社会のしくみを全然教わらなかつたくやしさがあつたので「今度は私が教えます」という気持ちでした。やはり教師のほうに相当問題があると思いますね。

吉田 教師にもあるし、カリキュラムにもあると思うんです。私のはうの付属高校では、これから「現代社会」を置き、

その中で婦人問題をやらなきゃいけないと思つています。とりあえずは選択で、将来は必修にしたいと思つてます。現代社会のところは大学入試にはあまり出ないので、ふつうはやりませんね。しかし女子の学校だからこそきちんとやって、婦人問題も考えさせなくちゃいけないんです。まず女子を変えて、それから男を変える。女子がぼんやりしてて男に考えろつていつたつて、それはむりでしょう。婦人問題のバイオニアは、やはり女子でなければいけませんね。

中山 だいたい学校つていうのは、いま現在のことってほんとうにやらないですね。私たちの一番知りたいことをやらない。性教育なんかも家庭科で習うけど、まづ科学的な原理から始まって、いきなり出産育児になっちゃうわけ(笑)。明日結婚するわけでもないのにミルクの飲ませ方なんか習つてもしょうがないのに。十六、七の高校生とききながら、一番たいせつな年頃でしょう。それなのに生徒に一番興味があることや疑問に思うことはすつ飛ばしてしまふわけ。〇×式ではないかないことはすつ飛ばしちゃうって、もう

悩むことのない古い時代の話だとか、未来はこうなるだろうという話は簡単だから教える。実際必要なのは、その抜けちゃった部分なのね。

桐島 それをエマニエル夫人から学ばうとする……(笑)。

中山 そうなんです。だからおかしくなっちゃう。

桐島 学校でやるのは性教育ではなくて性器教育だつていうんですよね。メカニズムだけは教えるけれども愛情の問題は抜きにしちゃった生殖教育(笑)。

中山 そしてそれが即結婚つていうことになっちゃう。

桐島 国語だつて、恋愛や労働の問題を抜きにした教材が多いわけでしょう。そこらへんから変えていかなきゃ、家庭科だけ必修させたつてだめなんですよ。

中嶋 ええ、ええ、そうです。ですから今あるものを全部総点検して、どの教科に入れるか、教師間でやらなければならぬにもかかわらず、それをやらないでさぼつてることです。私、有吉さんの『複合汚染』なんか読むと、自分が学校へ出るのがとてもいやになっちゃう。ホ

ームルームで、公害のことなんか何で教わるのって聞いても、家庭科でも理科でも地理でもやってない。栃木かどこかの先生が、環境科というのを作って、いろいろな問題を総合して教えたならと提案しますが、そんなふうにして教育の中味をどんどん変えていかなないと、百年前みたいなのをやっているような気がする。京都ではすでに家庭科を男女共修にして内容もすごくよくして、家族の歴史とか性の問題、老人問題、婦人労働問題、保育、公害など、あらゆることを網羅して男女一緒にやっているんです。

女子校は必要か

吉田 そこで別学の問題がありますね。世の中で一番損をするのは女なんだから、別学になっていけば、学校教育で何を教えるかという問題を少し開き直って、父母にも呼びかけ、生徒にも討論させて、カリキュラムをいろいろ変えていくとか、やり方で変えていくとか、いろんな手はあり得るわけですね。

中嶋 だいたい女子校は、かつてはともかく、今後存続する意義があるのか……。中山 私は女子高出身ですけど、まわりの女子高生見ると、男が珍しくて仕方ない。異様なふん囲気で男優のうわさをしたりしています。テレビに出てる歌手みたいなのが男の代表になっちゃって、コロッとだまされる。



女子高育ち……

吉田 その女子校に勤めている張本人ですが(笑)、別学の存続意義があるとしたら、歴史の中や、社会の中に、差別の伝

統がどのようにあるかを明らかにし、その上で、それを超えていこうという気持を起こさせることだと思う。でなければ意味がないと考えています。

佐田 私はむしろ男子校が問題だと思っています。女子校だったら、女はこんなに大変だとか、こんなに差別されているというのを、差別される側の立場からやっていくことが可能だけれども、男子校ではそういうものを取上げる可能性は皆無に等しいから、問題ですね。

女子と関係なく中学から六年間、あるいは大学まで通して十年間、女のことなんか歯牙にもかけず育つ男の子がいるということを考えると、男子校の存在は絶対にあってはならない、という気がします。教育の機会均等をうたう憲法に違反しているといって、「麻布や開成に女を入れろ」という運動を起こさないかと思ってるんです。それと同時に、お茶の水に入るといふ男の子が出てこないかと……(笑)。

もう一つは、家庭科の中味を変えても入試の体制が変わらなければどうにもならないということ。現実には休み時間な

んですよ。いくらい内容になってもフンと聞いて、英数国のことはっかり考えてるのじゃ……。

吉田 がんじがらめになつて英数国といたものではないところに教育の本質はあり得るのに、それが生かしてないところが問題ですねえ。

差別は

どこで除かれるか

佐田 教育というのは、体質的に保守的というか、それほど先進的なことができない場ではないと思うんですよ。是非かどっちかでやるんじゃないかって、いろいろバランスをとりながら、辛うじていいバランスの上を歩くのが教育だと思ふんですよ。そうなるが一番差別されている者の問題を教育の場で解決するのはかなりむずかしいんじゃないか、もう一つステップ置いて社会の動きを変える中でそれを教育にはね返すという形でやる以外ないんじゃないかという気が近ごろつくづくしているんです。具体的には、大学を出た女性がいかに就職の場で差別されて

いるか、そういう形で社会に出ている女の人たちが一人ひとり動く中で、それを教育にはね返していくのが重要じゃないかという気がするけれども。

中山 私は、家庭っていうのはあまり期待できない気がする。進歩的な人でも、女の子はお嫁に行っちゃうから安心だ、男の子は社会に出て行くから大事だなんて考えちゃう。女自身も、結婚して母親になると、女という立場を忘れて、女がどんなにひどい目にあつてきたか、女がどんなに大事かということも忘れて、男社会の考え方、夫の言い分にすんなりついていっちゃう。家庭というのは子どもを変えていく場としてほんとうは一番大事なことなんだけど、望み薄だと思ふのね。

それにはまず親を教育しなきゃいけない。親を教育する機関というのはマスコミぐらいのわけだけど、考えようと思う人は放つておいても考えるし、考えようとしないうちの大半の人は、いくらい番組を流しても積極的に取り入れないわけでしょう。

桐島 私は親としては割に意識のいい親

だと思つてゐるんですけどね。家の中では徹底的に男も女も何の差別もなくやつていても、学校へ行き出すともうだめですね。女だとか男だとかすぐ意識するようになつちゃう。学校というのは女の先生が増えて、そのほとんどは働いている母親でしょう。だからそんなに偏見はないはずだと思うのに、あれは先生よりも、まわりの子どもたちの影響かしら。

教科書と

マスコミの総点検を

中嶋 一つには教科書の問題もありますね。今みんな教科書チェックをしていて、小学校の国語をやつと仕上げたところなんです、いろんな問題があるので。たとえばソ連の宇宙飛行士のテレシコワさんが記者会見のとき、女らしく花をつけてきたなんて書いてある。おまけに後の方に、「テレシコワさんの女らしさが現われているのはどこか考えてみましょう」なんてあるんです(笑)。

教科書の中に登場する子どもでも、冒険好きとか、いろんな型破りのことをす

るのはみんな男の子、女の子は型にはまってるし、お母さんは料理・洗たくが仕事ときまってる。教科書を書くのはほとんど男性なんですよね。

中山 マスコミでもそうなのね、つくるのは男性でしよう。コマーシャルで洗たくしてるのも料理してるのも全部女。洗たく機なんて無器用な男が「僕でもできます」とやった方が、うんと性能がいいってことになると思うんだけど(笑)、まづ一つもないのね。芝生があつて、犬がいて、子どもがいて、若いお母さんがしゃれたなりして洗たくや料理をする。あれはすごい教育になっちゃうと思うの。

佐田 今の小中学生が一番影響を受けてるのはテレビだと思ふんですよ。視覚的でバツと入ってくる。学校の教科なんかではとてもできない強い教育です。コマーシャルだけではなくて、ドラマ、特にホームドラマなんて、男の望む主婦・母親が出てくる。小さい時からどっぷりそれに浸ってるんじゃ、大変ですよ。

新聞の記事のなかでも、へっちゃらで女性差別の見出しをつけたりする。とにかく男が書くからです。そういうのはけ

じからん、女の記者で総点検しようというので、今、自分のところの新聞を洗いざらい読んでるんですけれども、そういうことをそれぞれの職場の女の人たちがやり出したら、かなり違ってくるんじゃないかなって気がします。

桐島 この間アメリカのマグロウヒルで女性差別用語を列記したけど、ことばの問題なんて歴史的なものだし、ことばぐらいて気をするけど、アメリカの女があえてあそこまでやってるというのは、今の日本のいらだたしさを考えると、ちょっとわかるわね。

中山 ことばだけでなく、男の人たちが作つてると、物事の受取り方が、すごく男中心になっちゃうのね。

この間「驚異の世界」というドキュメンタリーで、ヤリイカの話があったの。ヤリイカっていうのは、ある時期に海にわーっと出て来て乱交をするのね。ところがそれについていたコメントが、「ヤリイカの世界は一夫一婦制ではありません、一夫多妻です」(笑)。一夫多妻じゃなくて乱交なのに……。

これは、男の人を責めたらかわいそう

なくらいに意識なくやってるのね(笑)。そういうことが私の職場だけじゃなくていろんなところであるわけでしょう。男が気づかないで論理的なまちがいをして、いることはいっぱいあると思うの。

桐島 そんなとき、こたわったりしちゃ大人げないなんて、物わかりがいいと思っちゃうけど、そういうときは、しつこくこたわったほうがいいかもしれないわね。

中山 悪気はないと思うの。でも悪気はなくてもまちがってることだから言っただけであげたほうがいいんじゃないかって気がするのね。

貞閑 テストで、「お使いに行くのはだれですか」というのに、共働き家庭の子が「お父さん」と書いたらバツになったなんて話によく聞きますね。女の先生が増えているのに、そういう問題に気がつかないのかしら。

中嶋 担任の先生にどんどん電話すればいいのです。小学校の先生は忙しいから市販テストを中味も見ずに配っちゃって解答で〇×つける。忙しさのゆえにバツと通過してるってことがあるんです。

学校教育・社会教育の 場にもっと女性を

——
それでも教員は女が増えていますが、マスコミは非常に少ないですね。

中山 少ない上に、おしやれ番組とか料理番組に回されちゃう。一人でも女のディレクターがいるとずいぶん違うのに。

中嶋 私たち、新聞社や雑誌社の編集長に女性差別の問題で会いに行ったことがあるんです。ある新聞社で聞いた話ですが、入社試験の成績で上位を占めるのはほとんど女なんですって。ところが、夜殺人があったら行けますか、なんて言っ



中嶋里美氏

佐田 女でもやれますよ。私なんか福島でサツ回りにして、東京へ来て社会部でやってるんですよ。

中嶋 だから労基法で女の深夜労働は禁止されてるなんというのをタテにとるらしいんです。看護婦さんなんか夜勤やってるわけですから、女でも十分深夜労働できるのに、口実にされるんですよ。

中山 縫物でも料理でも、職業としてやらせたら上手なのは男じゃないかっていわれるけど、男と女と、同じ条件で働いてるかってことです。女にも奥さんがいて家事を全部やってもらってたら違うはずですよ。同じ条件で試したことはないのに、一方的に決めちゃう。男って、ほんとうに論理的じゃないと思う。

吉田 論理的でないと何か何とかじゃなくて、女の人は使いものになったところに子どもが生まれてやめるとか、そういうことが非常に困るものだから、採算性の面で男を採用するんじゃないですか。

佐田 そこで辞めないことにしようと、こここのところうちの社で、女の記者が五人たて続けに子どもを産んだだけでも頑張ってるんです。ただ新聞社というのは勤

務時間が不規則で夜の十一時、十二時になる。だから産休の延長と、育児休暇制をつくれということをやってるんですが、

その中で第一の障害になっているのが男の組合員です。それを説得するだけで疲れてしまう。彼らの感じでは、それほどまでして女が働かなければならないのはなぜかわからない、気の毒でたまらないって感じなんです(笑)。

中山 育児休暇は夫の方にも必要ですよ。子どもは夫婦で育てるものだし。

佐田 現に、男手だけで子どもを育てなければならぬというケースも出てきています。赤ちゃんが生まれた段階で離婚して子どもは父親が引取った、さあ、その人は路頭に迷っちゃって……。そういう場合にだって、男女ともに育児休暇という緊急避難の道があると助かるのに。

中嶋 一月に日教組の全国教研に出たのですが、そこですら「共働きせざるを得ない賃金」なんていうんですよ。それぞ

とまちがいだと思うんですけどもねえ。

まず女が変わって

男を変えよう

吉田 趣旨としては大賛成なんですが、

男のほうがある意味ではみじめで、会社のことを一番先に考えざるを得ないという生存競争に追い込まれてるわけですよ。

だから、結婚は男女するのだし、仕事も両方が持つのだし、文化的ないろんな仕事も育児も両方するんだという習慣がはつきりしてこないと先へ進めないわけですね。それがはつきりすれば、PTAだって何だって、男が年休をとって出て来られる。男はごうまんて昔からの伝統がそう考えさせるっていわれるけれども、実際には男は必死になって、課長にならなきゃいけないとか、部長にならなきゃなんて考えると休めない。選択の幅が非常に狭いんですね。

中山 それはとても気の毒だと思えます。その気の毒なのはどこを変えればよくなるかっていうと、はつきりして、女性が解放されて独立すれば男のみじめ

さは減るんです。

吉田 男は、部長にならないほうがみじめだと思っていて、生活にゆとりがあっていろいろ考えるほうが豊かだとはなかなか考えられないほど、多年の習慣によって毒されてるんですね。

中山 男のほうがかわいそうだと思うことも多いですね。レールの上に乗っけられて。働きたくない人もいると思うのに。

中嶋 カップルごとにもっと多様性が出るといい。男がパートみたいなことをして家事育児をするという夫婦が出てきてもいいし、同じくらい家事を分担しあう夫婦ができていい。男と女の関係が変わるカップルが目あたりにどんどん出てこないことには……。

吉田 それは女の人が変えない限り変わらないでしょうね。ところが女の人は選択の可能性がありそうにみえて実際はそうもいかないですね。つまり仕事をとるか家庭をとるか、趣味をとるか、選択の自由がありそうにみえて実際にはむずかしい。結局、能力はあるんだけど、不満を持ちながらパートとか何かの片手間の

仕事に落着く人が多い。

中山 女が共働きをして仕事も一所懸命やった上でおいしい食事をつくると、「まあよくやってるな」ってところ。けれども共働きの夫が妻が病氣したので夫が看病して仕事も一応のことをやると「えらいねえ」ってことになる。

共働きしてる女っていうのは、相手を愛してれば愛してるほど、とてもうれしくめたいですね。この人は普通の女の人と結婚してればもっと楽ができたのにみたいに、うしろめたい気持でウロウロしなければいけない。

男にも 家事能力を

吉田 結局、男の人の多くが、全然家事能力なく育ってきてるでしょ。あれが問題でね。男の子が生まれるとうれしいとかいって、大きくなると今度は勉強、塾、ってことで来てるから、結婚して女の人からいろんな人間解放の理念などを教わっても能力がないんですね。だから、家庭教育・学校教育・社会教育の中で、徹

底して男も自分のことは自分でできなくてはいけなくと教えることをしないと、女はいつまでも損な状況におかれます。

中山 それはすごく必要ですね。結婚してから、何も一日交替でしなくてもいい。好きなほうですればいい。ただそのときの感謝の気持ちというのは、その面倒くささとか大変さを知ってるか知らないかで全然違うと思うの。よくごはんがまずいといっておぜんをひっくり返す男なんかいるけど、そういうことが平気でまかり通ってるというのは、男が家事をやたらに神聖視して、昔の巫女みたいに、女にしかできないんだといって神聖視するか、反対にとっても馬鹿にしちゃって、女がやればいいと思うからでしょう。だから小さいうちに、家事の大切さも簡単さも、うんと教えたらいいいと思うの。

桐島 近ごろは女の子も家事ができなくなってるんじゃないの。だから花嫁学校に行かなければならなくなってる……。

中山 でも女はまだね、結婚すると必死になつてやるのよ。私なんかいい例だけど……。

桐島 それは結婚ってことをすごく大げ

さに考えるからじゃない。結婚すると突然家事が発生するのね。

中山 そうなの、気が狂いそうになっちゃうの、死ぬかと思っちゃった(笑)。でもしなくちゃいけないって気があるから私みたいに仕事ばかりしてて家事をやったことのない人間でもできるようにするでしょう。男はそれができないのね。それが一番不幸な形であられるのは、テレビの人探しに出て来る妻に逃げられた男ね。帰って来てくれて泣いてる人があるでしょ。あれは愛してるから泣いてるんじゃないのね、育児ができないわけですよ。育児に困って毎日店屋もの食べて、子どもがかわいそうだから帰ってくれないというのね。そんなバカな人間関係ってないと思うわ。

桐島 私なんかその点とても育ち方がよかったと思うの。家が没落して大苦勞で、母親も働かなくちゃいけないというわけ、小学校のころから何も彼もやらされたわけですよ。ごはん欲しいときなんか山へ行ってたきぎをとってきてパタパタあおいで火を起こして……。だから今の家事なんてほんとうにチョロくて、仕事

をしながらまたたくまにできちゃう。男もこんなように育てておけば何のことないですよ。



なわばりあらそい……

中嶋 その簡単なことを母親がみんなやってしまうからいけないんです。母親がしっかりしたものを持ってないから、家事をやらなないとやることなくなるからやらせない。自分の仕事を奪われるのがこわいんです。

中山 それがまた嫁・姑の対立の一番の原因でもあるしね。家事の取り合い、育

児の取り合い……。

中嶋 男だって何も徹夜で働かなくても男女で働いて労働時間を短くすればいいんですよ。

吉田 一般の労働時間がそういうふううんと短縮されれば、いろんなことがぐっと変わりますね。

中嶋 男の人は女に仕事を奪われるという恐怖感があるらしいんですね。それを協力して楽しんでやるといふふうに変えていかなくちや。

生涯教育の問題点

佐田 いま一番深刻な問題は、子どもが小学校に上ったお母さんたちじゃないかと思うんです。取材してみるとこの人たちの欲求不満はものすごい。家事労働は減って時間が余り、大学を出てある程度の能力はあるのにやることがない。それで子どもの教育しか生きがいがなくなっている……。

——ところが、そういう女の人に対する社会教育というのが、実にお粗末なん

ですね。自治体の税金で運営されている婦人学級は数多いのに、いったい何をしているのかという声も編集部に届いています。

貞閑 成人女子への社会教育を婦人学級という名前で行くことに、私はまことに抵抗を感じています。私が昭和三十年ごろから手がけた婦人学級は、それまでの、講師の話を聞いて「結構なお話でございました」というのじゃ全然身につかないし、自己向上できないので極端に言えば中味は何でもいいということでした。スタートしたのです。やっている中で勉強する方法を身につけようってことだったんです。ですからまず問題点を話し合う。人前でものを言わない人に話をさせる。話をするってことは自分の考えをまとめなきゃならない。考えたことを今度は書いてみる、調べてみる、それから人の話に耳を傾けようということ。話す。聞く・書く・調べるに重点を置いたのです。

「聞く」中には、仲間の話を聞くことも専門家の話を聞くことも、本を読むこともみんな組合わせて、自分たちで手や足、

口や頭、みんな使って、なるほどこういうふうにするれば自分の考えは自分なりにわかってくるんだな、ということを体得するようにしたいと思ったのです。社会科学のグループワークなんかをやっているのの成人版みたいな形で。最初は若いお母さんに焦点をあてましたから、子どもの問題が多かったのですが、それが女性史の研究グループになったり、郷土史グループになったり、公害、物価の問題にまで発展しています。

私が婦人学級を試みた昭和三十年ごろのお母さんは、PTAに非常に不満を持ってる方が多かった。行って意見を言えって言われても言えないし、言ったところでボスにぐしゃっとやられてしまう。ものすごく疑問を感じていたお母さん方が婦人学級に出てきて、なるほどこういうふうにするれば何か方向づけができるんじゃないかと発見して、またPTAに戻っていったという例も少なくなかったです。それがだんだん形骸化して、最初に映画をみせて、討論して……というパターンだけが残っちゃったところに問題があるのじゃないかという気がするの

すが。

佐田 主婦の余剰エネルギーのはけ口で比較的うまくいっているのは、消費者運動とか公害反対運動なんかじゃないかと思いますが、そういうのはまだ限られていて、あれだけ悶々としているのに、組織化されていないですね。

—— そういうものを組織化して、社会にとって有効なエネルギーに変えたいという。ことで、私も十几年来やっているわけなんです、思うはやすく、行なうは実にむずかしいことです。一つには、育児期に家庭のみに閉じこもっている間に、女が変質してしまうということ。大げさにいえば、地球の外の惑星にでも住んでるかのよう、価値観が変わっちゃうということ。家庭の中にはいかに女の情報が届いていないかということを感じます。

国立（くにたち）公民館などで実施しているという保育所つきの婦人学級というの、そういう意味で重大な意義があると思います。育児の手が離れたから、さて体制を建て直そうでは、ロスが大きすぎる気がするのです。家庭とは何か、

社会とは何か、家庭と社会の中で自分はどうのように生きるかをきちんと問い直さないで、やみくもに社会に出て行っても、むなしく挫折することが多いんじゃないかという気がするのですが。

集まることさえ

むずかしい女たち

吉田 婦人学級について言えば、初期はみんな問題話を話合って、それが実ったところもあればだめなところもあったという状況ですが、最近、一番深刻な問題をかかえている人たちが、内職やったりパートに出たりで、なかなか集まらないんですよ。そうすると問題のない人

ばかり集まるから、教養、趣味的なものになっていくわけです。趣味的なものには出やすいのですが、ほんとうに地域の問題をやるとすれば、夜集まらなきゃだめなんです。夜集まれば働く人たちが出て来て問題は深まるんだけど、夜は集まりにくい。これをもう一度考え直してPTAなんかでも夜開くということを考えなくては。

中嶋 日曜日に子育てシンポジウムというのに出たことがあるんですが、みんな子連れで来る。日曜日って、夫がうちにいるはずでしょう。夜だってそうですよ、家事育児をちゃんとやってから出て行けってことで、いつもしがらみをくっつけてる。

中山 妻が住民運動なんかするのはみっともないという考えが夫にある……。

佐田 妻が働いていることだって、みっともない（笑）。

中嶋 うちの近所は高級住宅地なんです、内職なんかもらいに行くのは、夜とか、できるだけ人目につかないように隠れてやるんですって。女が働くのはみっともないという考え方が堂々としてあるって



吉田 昇氏

ことを、まず認識しておかないと……。

貞閑 うちの娘なんか生協のことを一所懸命やってるんですが、あそこ奥さん、あん得にもならないことをやって共產黨員かしら(笑)なんてね、まだそのくらの認識しかないんですよ。

—— 女は、とにかくまず集まるのが大事だと、この前、山川菊栄先生にうかがいましたが、集まって話し合っているうちに、少しずつ自分が変わってくる、それが大事じゃないか、という気がします。そのためには、いきなり夜集まろうと思ってもむりなので、まず昼間集まる、そして少しずつ時間を延長していくことじゃないかという気がしています。

女の甘やかし教育が問題

貞閑 なぜ女は伸びないのか考えてみると、主婦の甘えもさることながら、働く女の人にも甘えがあるような気がしますね。私どもの所でも、職員の研修をしたあとなど、男の人からは「今まで以上に職務の重要さがわかった」といった発言

が出るのですが、女の人からは「組織が悪い」、「管理職が悪い」といった、他人を責める発言が出る人が多いのです。私のところは男女平等で、むしろ女が優遇されているために、甘えがあるのかなと思ったりするのです。いろんな壁にぶつかってのりえこてきた中堅クラスの女子職員はとても優秀ですね。

中山 そういう批判は、ごく普通の会社などでもよく聞くことですが、どこに原因があるのかなって、いつも思うのです。

貞閑 女だ女だと言われて女が育つことに問題があるような気がしますね。自身もそう思いこんだり、訓練される機会が少ないためにほんとうの能力が出せないでいるのがほとんどじゃないかと思



貞閑 晴氏

うのですが。

吉田 育ち方のところから関係がありそうですよね。男はいろいろむだなこともするし、雑学をする。女は勉強だとか習ったことはきちんとやるけど、失敗が大変いやなので、失敗がないように失敗がないようにとする。それで自分のやっていることについては、自分は責任はないのだ、問題があれば外に原因があるのだと言いたくなるような傾向があるんじゃないですか。

中山 それは素質ですか。

吉田 素質じゃないでしょう。素質じゃないけど……。

中嶋 非常に二面性があるんですね。一面では女に期待していない価値観がありますね。小さい時は親がしてくれる、学校では先生、職場では上司が面倒をみてくれる、判断の矢おもてに立たされることがないという歴史があるんじゃないですか。いつも庇護者がいて、その庇護者から別の庇護者である夫の手へ渡されるというようにして、女を一人前の人間として扱わなかったということがあると思います。

しかもその反面では、男が徹底的に女を利用してゐる。適当に甘やかして、適当に利用しておいて、やれ判断がないなんて言ったら、許せないことだと思ふんです。

吉田 その点はその通りですが、ぼくからみると、たとえば女の人の趣味が映画だとすると、フランス映画ばかり見てほかは何も見ないですね。男はやくざものであれ何であれ見る、そのへんがあとになって違ってくるんじゃないですか。何か自分のところだけはきちんとします、という生活態度へつながつてくるという気がしますがね。

佐田 自分のところだけきちんとしてるといふのは、やはり期待されないからでしょう。学校でもよくそういう話を聞かれます。女の先生が六、七割を超えてるようなところで教頭や校長になる女の先生がいけないのはなぜだろうと。女の先生は自分のクラスの授業はソツなくやるけど、それ以上のことは進んでやらないと、そこらじゅうで聞かれます。一つには家事をしわよせされているという極端なハンディがあるわけですが、もう

一つは職場のふんいきとして女の先生には期待しないってことが伝統的にあるわけです。期待されてないんだからそれ以上の上のことはやらない、というぬるま湯になって女の人自身が動かない。それを女はぬくぬくとつかっていると責めるけれども、実は最も屈辱的な状態であつて、ぬるま湯の中に突っ込まれて、それを何とも思わないほどにされてるっていう感じじゃないかって気がするのです。管理職になるのが望ましいことかどうかは別の問題ですが、男なら当然期待されることを期待されないというのは、裏を返せば大きな差別じゃないですか。

男性的、女性的でなく、 「人間的」に生きよう

中山 さっきのフランス映画の話を考えてたんですけど、女の子って、ちょっと変わったことをするとおかしいと思われちゃうわけですよ。読むものから見るものまで規制される。男の子は自由にいろんなものを見てくるほうがいいということがあるけど、女はやくざ映画や西部劇

がおもしろいなんて言つてるとモテない。そうするなるべく男の好みに合わせちゃうところがいやらしくもあつてね、自然と女らしいものに走つていくということがあると思ふんです。

それと別に、男と女の資質の違いってあると思ふんですね。個人差はあるけど男の人のほうが権力志向が激しいですよ。年中けんかをして、人を押さえつけて自分が上に出て行こうとする。女はものを作つてそれを育てるということがある。自分の体内で子どもを育て、産んでまた育てて行く、そのへんからちよつと違うんじゃないかと思ふんです。ただ資質が違うから、家事は……っていうふうに短絡されちゃうとすごく困るんだけど、資質の違い部分を悪いとされてきたわけでしょう、今までは。女々しいとか、女は感情的だとか。じゃあ男の論理で作つてきた世の中がどんな状態かっていうと、このさまですよね。だから女が男のまねをしていくんじゃないくて、女の考え方が再評価されるべきだと思ふんです。

吉田 ああ……、何か一応説得力がありそうな気がするんだけど(笑)。要するに

女性の考え方ではなくて人間らしい考え方っていうのがあって、それに女性のほうが近いのか男性のほうが近いのかっていうことが問題になってくると思うんです。女性の場合、近そうに見えて実はなかなかそうでないところが、婦人問題の一番むずかしいところじゃないかっていう気がしてるわけです。

非常に具体的にいえば、今までの男が築きあげてきた社会というのは生産一本やりの社会だったのに、女の人は、仕事もしたいし家庭も持ちたい、余暇も楽しみたいって考えてきた。ただその三つを兼ね備えたスーパーウーマンみたいなことはなかなかできない。仕事についてもやっぱり結婚して子どもが生まれるまでだと思ってるし、自分より強い男が現われて強引に自分を奪いとってくれればそのほうが幸福だなんて思ってる。だから、甘さと人間性の近さみたいなものがこんとんとしてるんですよね。もろさと強さと両方持つてる、というふうに、私なんかは考えている。

中山 ただ、今までは、ことごとく男社会のモノサシで測られていたわけでしょ

う。男社会に向かないものは、女性的な考え方であるといって排斥されてきたわけですよ。それを排斥したのは間違ってたんじゃないかって、私は思うわけです。

中嶋 女性的、男性的っていうことばは従来の女性観・男性観から生まれてきてますね。何が女性的なのか、そのことは自体から検討してみてもいいんじゃないですか。

桐島 男性的ってことは、たくましいとか責任感があるとか勇敢だという意味で使われますね。それは女にとっても魅力的で、美徳ですよ。また女性的ということとは、やさしいとか素直だとか、これは男にとっても美徳でしょう。男だから男性的なのがいい、女だから女性的なのがいいというのは、ほんとうにおかしいことですよ。

—— その男性的っていうイメージづくりのために、男もずいぶん苦しんできたんじゃないかという気がしますね。男だって、本来やさしくて素直な人はたくさんいるのに、それは女々しいことであると、自分をねじ曲げようとしたり……。

中嶋 中国には男性的とか女性的とかっていうことばはない、あるのは人間的っていうことばだけだということですから、やがてはそんなふうになってくるんじゃないですか。

女だからこそ きたえよう

吉田 男の目から見ても、女が伸び悩む原因の一つに、仲間づくりが下手だってことがあるですね。学歴が違ったり仲間がでないとか。

中山 それは迷信じゃないですか。仲間をつくりにくい一番の原因は結婚なんですよ。男性の場合だと結婚しても学校友達や職場友達をうちへ連れて来て飲ませたりなんかするでしょう。ところが女性の場合だと、結婚しちゃうと家に連れてくるのはもちろん、夜一人で出て行くのもむずかしいなんて、つまらないことが原因で仲間がでにくくなっちゃうんです。リブの人たちなんかは、学歴も階層も超えて一緒に住んだりしてますね。一部の女にできることがほかの女に不可能

だってことはないと思うの、よく、「あなたなんか特別な女だから」って言われるけど、私だって何の変哲もない普通の女で、ただ仕事を持って生き続けなければならぬからいろいろな仲間をつくるだけのことですよ。女の人も男と同じように職場でやっていかなければならないという状況ができれば、絶対、仲間はできると思うんです。

中嶋 私たち、職員会議が週一度あって、いろいろもめるんです。するとそのあと男の人は一杯飲みに行きますよね。私なんかはまあついて行きますけど、ほかの先生方はバースと帰るでしょう。週一日の違いといっても、積重なれば相当大きいんですよ。今日の議論はどうだったとか、あいつこんなことを言ったとか、そんなことから視野も広がるし、仲間ができるってこともあるんです。だからまず週一回ぐらいは女でもつきあうっていうふうにやっていけばいいと思うんですけど。

中山 もう一つ、男の人は大体みんな状況が同じだっていうことがありますよね。勤めて、家に帰れば女房がいて子

どもがいる……。ところが女の場合には、働いている人と、卒業してすぐ主婦になった人としては、芸能人とサラリーマンぐらい違っちゃって違和感がある。だんだんつきあわなくなっていくことがあるんですね。

佐田 本質的な違いじゃなくて、物理的な条件ですよ。

—— そういう悪条件が重なっているからこそ、女の肉体的な創造力を育てるのは必要なんじゃないかという気がするのです。教育の本質というのは、エデュケイト、つまり内なるものを引き出すことだと思いますが、そういう基本的な力を、女には、女の子だからこそ、しっかりつけてなくてはと思うのですが。

吉田 現代社会を資本の論理から理解するだけじゃなくて生活の場から理解することも必要だとか、いろんなことが大切なわけですが、そういう幅のある姿勢が弱いんですね。戦後は、男女同権だ、頑張らなくちゃということをやったんだけど、今はどっちがトクか見定めて、まあ、あまり抵抗のないほうへ行こうっていう姿勢になってるでしょう。だから女の教

育は、男以上に、何かそういうエネルギーを与えないといけない。きれいに格好よく受験はうまくいくということだけではないものをやらなきゃいけないんじゃないですか。



女の幻影におびえて……

—— 桐島さんのように、小さいときから何でもやらされたからヘッチャラだというふうだね。

中山 つまらないことで泣くな、なんて女の子にこそ言わなくちゃ。

桐島 恵まれすぎるのはかえって不幸じ

やないかということ、最近いい体験をしたのです。というのは、私、お手伝いさんを置くのは好きじゃないんで女書生さんを募集したら、わーっと百何十通も集まった。ところが九九％は甘ったれなんです。親のもとから大学に行ってると門限がうるさいから先生のところに着かせてくださいとか。そんな中で、中学を出てから看護婦をして働いてきたなんという人は実にしつかりしてるんです。恵まれた世の中になったということが、はたして子どものためになったかということを書いてしまいました。

親の姿勢 が問題

中山 むかしの女は結婚して主婦になってもプロの主婦だったわけでしょう。今は、結婚でもしょうか、就職よりは楽だからなんて、気の毒なことに旦那様選ばれて、またその旦那様がとっても女を大事にするのね。リブばやりの世の中にうちにいてくれるのはありがたいってわけ。外で働いて帰ってきて、またお皿

洗ったりしている。これも男尊女卑と同じくらいくだらないと思うの。

桐島 もし私が専業主婦で、主婦業をプロフェッショナルに選んだとしたら、自分の子どもだけでなく、外で働く母親の子どもを数人あずかって育てたり、二三軒分の食事ぐらいうけおったりしてもいいわ。主婦業をプロフェッショナルにやっていたら、アルバイトに家政婦なんかもやればいい。ところが実際には、ちょっと家政婦さんを頼もうと、横浜じゅう電話をかけても一人もない状況でしょう。ほんとうに不景気でお金がなく、またほんとうにプロフェッショナルに主婦業をしてるのなら、家政婦のなり手ももっと多いはずなのに……。

中山 かといって主婦業に満足しているわけではなく、不満たらたらだし。

佐田 そこで親の姿勢が大事だという気がしますね。父親が男尊女卑でも、それを信念としてやっていたら、反面教師として子どもは育つ。ところが今は父親像があいまいでグラグラしてる。何でもいい、わからないとあいまいにしている。そういう中で、ちゃんとした自分の考え

を持った子どもが育つはずがない。

中山 夫が妻に対する態度も実にあいまいでね、こうありたいってことがない。それが子どもにも伝染するんじゃないですか。

吉田 お母さんのほうもどうしていいかわからないんですよ。どういう娘に育てたいかと聞くと、要するに娘の思いどおりに自分のやりたいことをやらせたいという答しか返ってこないです。世の中がどういうふうになるのか、仕事はどうするのか、家庭はどういう位置になるのか、といったことは考えていない。

中山 そういう母親に限って、子どもが何かすると半狂乱になるんですよ。

佐田 価値観の喪失みたいなものがあるんです。

男を 変えるには

—— きょうのテーマは「女と教育」ということで「女の教育」ではないのですが、話がどうも「女の教育」に偏ってきただけです。さっきから女にはこ先が向

けられがちですが、そういう女をつくり、女と共存している男の教育について考えてみませんか。

中山 わあ、大問題(笑)。

貞閑 いま小学校では六〇%が女の先生ですね、そのへんで何とかならないかしら。

中嶋 しかしある時期に女の先生が偏在してるんですね。幼稚園・保育園は全部女、小学校では半数以上女、中学・高校と進むにつれて減って、大学にはほとんど女の先生がいらない……。

貞閑 しかしともかく小学校では圧倒的に女の先生が多いんでしょう。そのへんから男の子を変えていけないかしら。

桐島 女の教師というのはほんとうにいいと思うんですよ。産休なんて問題にする人がいるけど、いいことじゃない？働く人間が結婚もし、お産もするってことは子どもに対する大きな教育でしょう。

佐田 おなかの音を聞いてごらん、赤ちゃんが生まれてくるのは大変なのよ、生命っていうのは大変なのよって、現場の教育の中でやっていたら、こんなにすばらしいことは女親にとってもないわけ

です。

中山 ところが産休女教師なんて突きあげるのはだいたい母親なんでしょう。

佐田 女の先生を働きにくくしている条件こそ悪いのであって、女の先生が悪いわけじゃないのに、そのへんを公私混同してチャンチャンバラバラやってる。やってるというか、要するにやらされてるんですね。だからそのやらされているあたりを見定めて、女の先生と女親が手をつなぎ、なんでこういう目にあわなきゃならないのかってことを働きかけないのかって思いますね。お母さん方に、いまあれだけの余剰エネルギーがあるのに。中山 働く女と主婦っていうのは、これが団結したら歴史がひっくり返るんだけど。

吉田 そうそう。

中山 主婦の生活というのは、毎日毎日作ったものをこわし、こわしたものをまた作っていく作業でしょう。男の人たちに、お給料全部あげるから主婦のくらしと代わってくれるかと聞くと、みんなやだっていますね。その割の悪いことをして、男の人には、男だから外に

出るのも仕方がないという一歩ゆずったところがありますね。でも他の女が表に出るってことはすぐ反感があるんです。女のクセに、と言う。そのうえ自分たちと同じに出産までやられたのでは、ずるいっていうか、しゃくだというか……。だからどうも手をつなぐのはむずかしいんです。

吉田 人間っていうのは、子どもも産むし、家庭もつくるし、趣味も持つし、仕事もする、そういう三次元みたいな世界が理想のはずなのに、明治以来の教育ってのは、そういうことをやってこなかったわけですね。女はうちにいるもんだと、一方的に押さえつけてきた。一方、男のほうも最近はいまホーム社員も出てきたけど、いまホーム社員が猛烈社員かのどちらかで、もう一つの社会的な場がない。そこができない限り、男の人が女の人と協同していろんなことを考えたり、主婦と女の先生が協力するってことはできない。それをやるための一番必要な条件は、労働時間の軽減でしょうね。一週五日制なんていう形じゃなくて、六日出てもいいからフレックスタイムを使ったり、時

間帯をずらしたりして、いろんな形でみんなが出会えるようにして、PTAでも何でも男も女も参加するという形にしなければいけない。画一的な五日制なんていうのは産業の方の都合だけを考えているだけの話だと思いますよ。そのへんを組合の婦人部なんかも考えてもらいたい。今のように残業ばかりやっているのは、男にとっても決していい生活じゃないんですから。

男を

引き込むためには

貞閑 生活の場を共有してりっぱな女性をたくさん見近に見るっていうのは、とてもたいせつなことです。女の人の生き方を理解してる男の人は、必ずといっていいくらい、お母さんとかおばあさんとか奥さんとかがりっぱな方ですね。女のくせにとか、女だてらになんていう男性は、りっぱな女性に身近にめぐりあったことがない人たちだと、はっきり言えるように思います。だからそういう社会的な母性を確立することが、男を変える

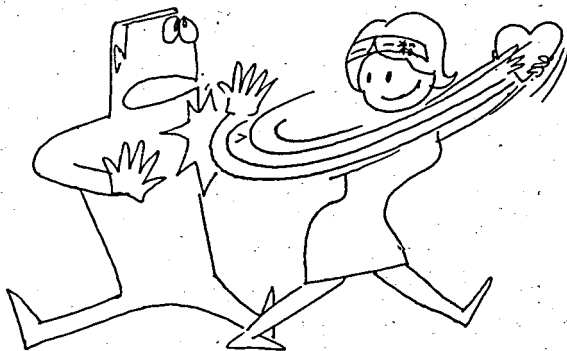
一番の近道じゃないかと思うんです。中山 従来いわれていた意味の母性じゃなくて、そういう意味の社会的な母性を確立することは本当にたいせつですね。話のわかる男性っていうのは、お母さんがすごく一所懸命働いていた人が多い。

吉田 女のほうから提言しなくては男は変わりませんよ。企業の中で働くことに精いっぱい、老後の問題さえも男は考えてませんよ。平均寿命が七十何歳なのに、定年になって何をするのかも考えていない。余暇のための時間があるのがしあわせかどうか……。

いま教育の問題で一番しゃくにさわるのは、女の人は就職するときにはじめて差別に気がつき、男は定年になってはじめて違う生活があることに気がつくことですよ(笑)。遅すぎるんですよ。世の中とか人生について、どう考えるか、最初から考えていかないと、教育にはならないんじゃないかって気がしますね。

—— 男と女の共通の問題について、夫とか子どもとか、一人一殺で身近な人からまず話し合うことが、結局女性解放の一番の近道であり、それは男女を問わぬ

人間解放への道だとも思うのですが……。貞閑 そこに求めたほうがどうも早いような気がしてしょうがないんです。いま中年の男性でそういうふうに着っちゃった人はもう……。



必殺ハートづかみ!

吉田 もう変わりませんからね(笑)。貞閑 進歩的なことをおっしゃる方が、ひょっとしたはずみに、ああやっぱり……



中山千夏氏

というようなことをおっしゃるし(笑)。

中山 家庭では全然違ってたりするんだなあ。だから男性の中のほんとうの協力者を見わかるのはむずかしい……。

桐島 男女半々といっても、女の中にも敵が多いんだから、やっぱり男の中に味方をつくらないとどうしようもないですね。

——「あごろ」で今、おもしろい提案があるんです。ペア会員を増やして、男の人も引き込もうと。それは割引料金でね(笑)。

中山 ただ男性は、体質的に女が集まると恐ろしがるのね。妖怪が集まってるみたいに……(笑)。

貞閑 ウーマンリブの肩怒らしてっ

うのはどうでしょう、敵にしちゃうんじゃないくて、ほんとうの意味でベタベタしない女らしさを武器にするのも大事じゃないかという気がするんです。

—— 桐島さんの持論ですね。

桐島 だけど私はこのごろ少し過激になりつつあるんですけどね(笑)。あんまり男にやさしくすると、男はつけあがっちゃう(笑)。

中山 そのへんが解放運動のむずかしいところですよ。男全部が敵であるはずはないんで、男が被害者っていう場合は多々あるわけでしょう。そのへんを何とかわかっていただきたい、という感じかな。

桐島 あんまりキヤァキヤァいわないで何とか自然にわかって頂きたいと思ってるんだけど、けなげにやったら、きっと男の人もわかってくれるだろうと思ってるんだけど、だめね、ほんとうに(笑)。

中山 わかっていると男との会話で、「だいたい奴は女々しいんだよ」なんてことが突然出てきたりすると、「女々しいって、ちょっと、どういうことなの

よッ」ってやりたくなっちゃう。そのへんがむずかしいんですよ。

イデオロギーを 現実化して

貞閑 もっとびっくりすることもあるんですよ。婦人問題の資料を集めたいので指導してほしいと相談を受けて、話し合ったとき、四十すぎのまじめな男の方なんです、婦人問題って料理や育児の問題だと思ってたんですね(笑)。

—— 国際婦人年というのは、そういう意味ではPRのいいチャンスですね。ただ、頭で理解したとしても、踏まれている者の痛みがわからないってところはありますね。

中山 同和問題と一緒にしたら怒られるかもしれないけど、似てる場所があるんですね。黒人問題だったら、自分が黒人だということで一括できるけど、同和問題っていうのは同じ日本人のわけでしょう。アメリカがだめなら黒人の王国をつくるというのと違って、同じ日本人なんだから、日本がだめになったら自分

もだめになっちゃう。婦人問題というのも男と入り組んでるところがいっぱいあるでしょう。

佐田 私は常に、いろんな方を取材していて感じるんですが、イデオロギー的先兵は果敢なまでに尖鋭でいいと思うんです。その第二軍として、そういう問題を政治化し、組織化し、現実化していく勢力が、女の中にちゃんと組織化されなけ

ればいけないと思うんですが、それが非常に弱いという気がして、ものすごく残念なんです。女は勝手なことをパッパと言うことは上手だし、ワァワァ騒ぎ立てることも上手なんですけど、それを現実化して具体的に押さえていく作業を、それだけの職場で、また社会全体で、これからやっていかなければいけないんじゃないかな、っていう気がしますね。

「お詫び」

あごろ10号 ティーチイン「産む性と法」にご出席の神品友子氏を、大学講師とご紹介いたしました。が、「拓殖大学 教授」と訂正し、深くお詫びいたします。

私たちが見た

国際婦人年世界会議

とキューバ

いま、「あごろ」の旅の仲間十八名は、メキシコの国際婦人年民間世界会議（トリビュン）に参加中。

会議で活躍することは不可能だと思いますが、できるだけ多くのものを見、たくさんの人と会い、学んだことを「あごろ」の仲間に伝えたいと願っています。次号「あごろ」12号は、その報告特集にする予定です。マスコミとはちがったミクロの視点になるとは考えられますが、それぞれの目の高さから見たこと聞いたことをまとめてみるつもりです。

なお持帰りの資料やスライドをもとに、下記の報告会も行ないます。

「あごろ」

国際婦人年の旅報告会

・八月二日（土）午後二時—六時（五時以降は質疑応答と懇談）

・場所 東京・四谷公会堂集会室（バス新宿一丁目下車スグ。地下鉄「新宿御苑前」下車、四谷方面に向かって徒歩約四分。電話34112991）

・参加費 会員は無料、非会員は三百円

・資料コピー受注受付 資料のコピーをご希望の方には実費でお頒ちします。

教科書を

チェックして



国際婦人年を契機に、世界各国で教科書チェックがすすめられようとしている。

社会に出、あるいは家庭に入った女たちが、はじめて性差別に気がつき、その壁を取払おうとしても、容易なことでは改善されない。基本的な学校の教育が問題ではないか。とくに、幼ない子どもの頭に、「外で働くおとうさんは大黒柱、おかあさんは洗たく・料理に専念する人」というイメージを、日々植えつけている教科書を考え直してみることがだいじではないか、というねらいである。

「あごら」では、国際婦人年に、自分たちの足もとを見つめる作業を重ねたいと考えており、その一貫として、母親たちの手になる教科書チェックを行なってみた。「あごら東海」のメンバーが主体となり、「あごら東京」からも、一部が参加した。なお、家庭科の教科書に関しては「家庭科の男女共修を考える会」でチェックがすすめられているので、その発起人の島田道子さんに原稿をお願いした。

1 締め出された女性

—— 小学校の道徳教科書を読んで ——

〔あこら東海〕

浅野 美和子

大橋 倫子

野村 文枝

山崎 美沙子

米永 千枝子

〔あこら東京〕

日置 久子

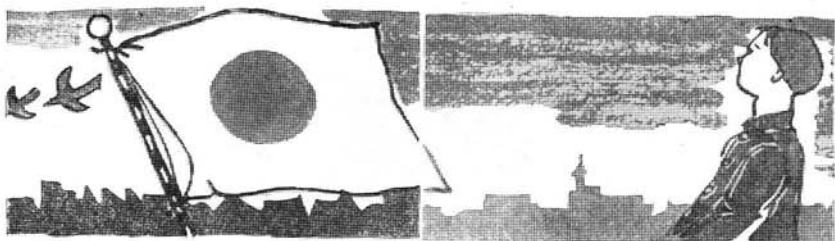
作業に先立って、私たちは、まず、どの教科書に問題があるか、全部の教科書にざっと目を通してみた。中では、道徳、社会、家庭に多くの問題がありそうで、その中でも道徳がいちばんではないかという結論になった。

他県の人々に聞いてみると、道徳の教科書を使っていないところも多いようだ、愛知県では「愛知県教育振興会」が編さんした教科書を使っている。ただしこの場合、正式には「教科書」とはいわないのだそうである。「教科書」は文部省の検定が必要だから参考

書として使っているというのがたてまえらしい。しかし子どもたちは、もちろん「教科書」だと思っており、忘れると、忘れものの罰点を与えられている。

さて、この「教科書」の表題は、二年から六年まで、終始一貫して「明るい心」(二年のみ「あかるいこころ」とひらがなで表記)となっており、「明るさ」が、いわばこの教科書の思想、コンティニュイティであろう。ここで求めようとしている「明るい心」とは何なのだろうか。まずそれを追いながら読み

「日のまはるは
ぼくのやくめ」
3年 P.10・11



すすんで行った。

道徳教育とは

そもそも「道徳」とか「道徳教育」ということは、何を意味するのであろう。一言で言えば、人格の形成ということになるだろう。

もう少し具体的に言えば、日々の生活の中での望ましい生き方、心のあり方を考えていくことではないかと私たちは思う。とすれば、一週一時間の「教育」を通して教えられるものだろう。

昭和二十年代に、小学校・中学校の教育を受けた私たちは、いわゆる「道徳」の教育は受けなかった。私たちが小学生の頃は、わが国は新生日本をめざし、誰も彼も、「自由だ!」「民主主義だ!」「封建主義打破!」と叫んでいた。校庭にあった二宮尊徳の像が、いつのまにか取りこわされていたことも覚えていいる。私たちは文部省の道徳教育の空白時代に義務教育を終えたわけだが、この世代に犯罪者が多発しているという話も聞いたことがない。むしろ自由に、自分たちなりに道徳を受けとめたことをよかったと思うとともに誇りにも思っている。

このように不可欠とは思えない道徳教育で

あるにもかかわらず、なぜか昭和三十三年に文部省通達により再開された。この理由はまたあとで問うことにして、さっそく問題の教科書をながめてみよう。

道徳教科書にあらわれた男と女

家庭科学習が個性を無視し、男女の役割をはっきり分け、女に家庭責任を押しつける教育を意識的に行なっていることは明白だが、これに対して道徳の教育は、暗示的に男女の役割を感じさせ、しらすしらすのうちに男女の生き方を規定するおそれを持っているように思われる。

前述、「明るい心」にあらわれる主人公の数を男女比別にあらわすと、

	男	女
2年	14	3
3年	16	5
4年	18	3
5年	17	3
6年	16	2
計	81	16

となり、男女の登場率は五対一となる。

男中心の社会の状況を反映したものといえ、それまでだが、これでは男が主で女が従である世の中を教え込んでしまうことになり、



5年
P 26
「母の心」

男女平等の社会の実現はほど遠いものと思われる。これらを学ぶ男女生徒の数は、ほぼ同数なのだから、登場者の数の上でも、もう少し配慮ができないものだろうか。

しかもその内容を比べると、男性は、努力向上の人（小野道風—二年、汽車の父スチブンスン—四年、はたを織る佐吉—五年、リンカーン—六年）、正義・公正心（アンパイアの心—五年、ガリレオ、ソクラテス—六年）、国際親善の心（赤十字の父デュナン—六年）等として登場するが、女性も、子どもを愛する母（さいだん橋—三年、母の心—五年）、平和を願う清い心の持主（つるの飛ぶ日—四年）として、ほんのわずかな顔を出す程度である。六年間、これらの本で、りっぱな男性の代表者のことを教えられれば、「やっぱり男の人はえらいんだわ」と、幼い心に植えつけてしまおう。

二年から六年までの五冊の本の中で、女性がいわゆる偉人として登場するのは津田梅子だけ（五年、P 48）にすぎないのは、なんとも心細い。しかもその津田梅子は、わずか八歳で渡米して、けなげに勉学にはげむ少女として手本にされているのであって、その後の活躍については、

「日本の女の人の学問を、うんと進めなければいけない。日本人の生活を高めるためには、女の人の教育が第一である。」

新しい希望にもえた梅子は、古いしきたりにとじこめられている日本の女の人たちを、一日も早くめざめさせたいと思い、女だけの高等専門学校建設をむねの中にえがくのでした。

という五行（教科書の行数で）の記述にとどまっている。

しかもこの五行を手がかりにして、へ古いしきたりにとじこめられている日本の女の人たちへが考えられるわけではなく、末尾の指導目標は、

○アメリカへ留学した梅子の考え方や勉強ぶりについて、どう思いますか。

○よいと思うことを、どのようにして実行したらよいか、考えましょう。

の二点のみになっている。

道徳教科書にあらわれた女性像

この「明るい心」の初版は昭和三十三年だから、道徳の時間特設の文部省通達が出されてすぐつくられたものである。その後二、三年おきに七回の改訂が行なわれているが、カ



4年 P 8
「さらさらの手」

どのほえそうな古くさい話が、次から次へと続くのには驚く。その中に、ほんのぼちちり顔を出す女性たちが、これまた古めかしいのも当然だろう。さし絵にまで、着物を着て、かっぱう着をつけた母親が随所にえがかれてゐるのには、驚きを通り越して失笑を禁じ得ない。

要するに、登場する女性は、ほとんどが男性の目を通してえがかれた女性像なのだ。

さらさらの手

「どう、熱はひいた？」

と、おかあさんがそばへ来て、

手でひたいにさわった。

「おかあさんの手、さらさらだね。」

とぼくが言うと、

おかあさんは手をこすりながら、

「こわい手になっちゃったわね。」

と言って、小さくわらった。

ぼくは手をのばして、

おかあさんの

手にさわった。

(四年、p 8)

着物姿のおかあさんが、同じく和服で病床

に横たわる男の子に手をさしのべている、なんとおなじみの母性像！

○おかあさんにお世話になったときのことを話し合いましょう。

○「おかあさん」の作文や詩を書きましよう。

○おかあさんに手紙を書きましよう。

最後の指導要領も、なんと現実肯定的なことで。これでは、おかあさんの手は、さらさらで当たりまえ。母の手をさらさらにした痛みは、どこにも感じられない。詩を書き、作文を書き、手紙を書いたところで、おかあさんの手はすべすべになるだろうか。おかあさんの手をさらさらにしたものは何だろうか。なぜおとうさんの手でなく、おかあさんの手がさらさらになるのだろうか……

問題追求の糸口は、無数にあると思われるが、これを教材として生かし得る教師は、はたしてどれほどいるだろうか。

さらに問題なのは、暗夜行路の一節をぬき出した「母の心」(五年p 24～27)であらう。

秋の夕、屋根に登った謙作に、母が必死で呼びかける例の一節は、暗夜行路の中でも、もっとも印象的な部分であるが、これは文学作品として謙作の母を描写し、謙作の出生にまつわる秘密を語る端緒にしているものであっ



て、謙作は母と祖父の不倫の関係を出発点として妻の不倫に悩むわけであるのに、道徳の教科書に引用されたのでは、地下の志賀氏も苦笑を禁じ得ないであろう。

生きた女性を登場させた

これらの教科書を通読して、私たちがたった一篇だけ感動した作品があった。それは、原爆症でこの世を去る清らかな少女の心を通して世界の平和を願う「つるの飛ぶ日」(四年P 26)である。この作者は、きっと女性であろうと直感したが、案のじょう、大野允子作「ヒロシマの童話」と記されていた。

この中には、生き生きとした血の通った女性が登場して共感を呼ぶ。男性から眺めたあこがれの女性ないし理想の女性ではなく、女性が女性の心をはっきりとえがき出しているところが、他の作品と全く違う。

教科書に登場する人物の中で、女性の絶対数が極端に少ないことも問題であるのは言うまでもないが、その数少ない登場女性のほとんどが、考え、行動し、失敗し、反省する、主体的に生きる人間でないことも、問題である。女性はアクセサリのように配置された人形でしかないのだ。

そして、学校生活を扱った例の中に登場する先生は、ほとんど男性であることにも問題を感じる。小学校の教師の過半は女教師であるのに――。子どもの身近に生活し、社会に参加している生きた女性、女教師を登場させることこそ、「道徳」になるのではないだろうか。私たちの子どもの実例だが、担任の先生が結婚し、出産をした、その過程は、女の生き方や赤ちゃん誕生の喜びを、本で読むのとは比較にならない重さで子どもたちの心に印象づけたようである。

締め出されている女

以上、登場する人物、採用された挿話は、子どもたちのあるべき方向性を示そうとしたものと思われるが、その集約としての、「大きく変わったら」(四年P 70)は、編者がどんな意図で載せたのか疑いたくなるほど、お粗末なものである。「おまえたち、大きく変わったら、何になる」という父の問いに、「大臣になろうかな」という兄、「横綱になる」という弟。「ゆうしょうして、ハイヤー買って、おとうちゃんを乗っけてやるよ」と弟が言えば、兄も「ぼくだっていい家を作るし、ハイヤーぐらい買って乗せてやるよ」と競争す



「大きくなったら」
4年 P 73

る。この、むかしながらの立身出世・親孝行に、両親は批判もせず、「なんだか雲をつかむみたい」と母親が大笑いするところで終わる。背筋が寒くなっても、笑う気にはなれない情景である。

しかも、もう一つ重要なことは、人類の半数を占める女性、クラスの半数を占める女子の「大きくなったら」は、何一つ語られていないことだ。大臣や横綱になる夢も持てるわけがないと、頭から無視されたのであろうか。大臣や横綱になろうとしない女性にこそ、「明るい心」は宿っていると思うのだが、ここには、「大臣や横綱になれないような奴はつまらない奴」という前提があり、それがそのまま女性蔑視に直結しているように思われる。

この教科書の表題である「明るい心」は、いったい誰に宿らせたいのだろう。もちろん人間に宿らせたいはずである。だとすれば、人間の半分は女であることを、まず認識させなければなるまい。そして、その女に「明るい心」が宿り得る基盤が築かれなければ、残り半分の男にも「明るい心」が宿るべくもないことを考えさせなければなるまい。「明るい心」とは、だれが、どんな明るさを得ようとするのか、明るい心を得る反面で、だれか

が暗い心を得るおそれはないのか……。そうした人間の原点ともいえるべき問題に返ってこそ、「道徳」となるのではあるまいか。

なぜ道徳教育が変質したか

道徳は社会とともにあるもの。だから、社会を教えると同時に、社会に適した生き方、すなわち道徳を教えていこう——と、敗戦後社会科の中に組み込まれるようになった修身（道徳教科）は、昭和二十五年、天野貞佑文相により道徳の必要性が表明されたのを契機に、次第に独立した科目に変化して行った。

昭和二十九年、地理・歴史・道徳教育を重視した「改訂社会科の大綱」が発表され、昭和三十年、安藤文相は、「天皇」「国民祝日」を強調した「小・中学校学習指導要領」を発表した。このように道徳教育は、教育理論や教育現場からの要望ではなく、政治的圧力によって国家主義的色彩を濃くしていったのである。

昭和三十三年、文部省は「小学校・中学校における『道徳教育』の実施要領」について通達を出した。それは、「道徳」は毎学年毎週一時間とし、小学校においては「教科以外の活動」、中学校においては「特別教育活動」



の時間のうちに特設すること、「道徳」の時間の指導は学級担任の教師がすること、「道徳」の教材の使用は慎重にすること、のべ、小学校「道徳」実施要綱、中学校「道徳」実施要綱を示し、改訂教育課程の全面的実施に先立ち、昭和三十三年度から実施することにした。この実施要綱は徳目を表面に押し出したものであった。

文部省によるこのような特設「道徳」の強行実施に対して、日教組、学者グループなどをはじめとし、各界から大きな反対運動がおり、道徳教育などの講習会の受講の拒否・妨害事件が続発したが、文部省はこれに対し、受講拒否は職務命令違反である旨の通達によって対処したのである。

昭和四十三年、小学校学習指導要領の改訂が発表され、四十六年から実施され、現在に及んでいる（P 183資料参照のこと）。

道徳の時間の目標として、「計画的、発展的指導を通して、道徳的判断力、心情、態度、実践」を指導することを明記して、道徳の時間の強化をねらっている。これまでは各現場の教師の判断に任せられていた道徳の時間の指導方法にも文部省の意向を明確に打出してきたわけである。

このようにゆがめられた道徳教育は、公選制の教育委員会の廃止、教科書検定の強化、学習指導要領の教師に対する法的拘束力の付与、勤務評定の強行、教育課程の大改訂、全国一斉学力テストの実施、教育正常化運動などの教育行政の路線から生まれたものであると同時に、このような国家による教育行政をバックアップする根底にもなっている。国家権力によって与えられる道徳や道徳教育に対して、私たちは力をもってはねのけて行かなければならない。

国民の政治への不信、企業優先にみられる公害問題、技術革新にともなう人間疎外、受験主義の教育体制、差別の社会体制、社会福祉の貧困、大人の道徳的退廃、反社会的行為など、子どもたちは今、厳しい社会に放置されている。

新しい世代をになう子どもたちにもっともふさわしい道徳教育は、既成の社会にとって都合のよい価値観を植えつけるのではなく、社会の矛盾をきびしくとらえ、自己の生きる道を選ぶ力をもった人間を育てる教育であるようにと願わずにはいられない。そのためには私たちの気がついた疑問を、学校や教育委員会に提出していききたいと思う。

2 目立つ男性特性論

——中学校の「道徳」教科書を読んで——

〔あごら東海〕

浅 野 美和子

(一)義務教育のなかに、女性と職業について考えさせる新しい単元の創設と、女性の職業意識形成上不利になる記述がないか、教科書の総点検を実施する。

(二)高等学校における女子のみの家庭科についても、今後検討する必要がある。

(三)「省略」

以上は、総理府の婦人に関する諸問題調査会議編による「現代日本女性の意識と行動」

第三部職業のなかの提言六「女性の職業教育の充実」の項から抄出したものである。

今回の「あごら東海」による教科書の中の女性の扱い方の点検に当り、この提言の二項はちょうどよいところを与えてくれた。

職業を持つて社会的労働に従うことが、女性の自立・解放の第一歩と考える私どもにとってもってこいの大義名分として、この提言を借用することにしよう。

さて、このような視点から、愛知県教育振興会編の道徳教科書、中学一、二、三年用の「明るい人生」を調べてみることにする。

中一用で最初にひっかったのは、「八、暮らしのくふう」である。

ここには、男子一人と女子二人の例があげられているが、男子のT夫が、計画が三日ばうずに終わることを反省しているのに対し、女子のS子は、「わたしは家へ帰っても、すぐ田や畑に連れて行かれるから、勉強ができな



1年 P 99
(父母とわたしたち)

いで困っています」と述べ、M子は「むだのない時間と勉強時間について考え」ながら「家の順番の時間には、たまにすぎな本を読もうとしますが、ほとんど読めません」と書いている。

男女の生活時間を比較してみると、T夫は起きてすぐ朝食・学校、放課後はクラブ活動、帰宅後勉強二時間であるのに対し、M子は睡眠時間が三十分短かく、起床後朝食そうじ、一時間の家の手伝い、下校後は三時間も家の手つだい(店番)、勉強は二時間である。

まさに「職業意識形成上不利になる記述」であり、「女子のみの家庭科」的発想の教材といえるが、この例について、第一に女子のおかれている現実であるという点ではおそらく正しい。多くの家庭で、このような男女差別はふつうに行なわれているのだから。第二にたまたまこのような例をあげただけで、逆の場合もいくらかもある、という反論もなりたつであろう。

しかし、このような教材でも心配がないということは、これを扱う教師が、男女差別について強い問題意識をもって授業に臨む場合にのみ言えるのであって、多くの教師が、現在の家庭の男女の役割差別を当然のこととし

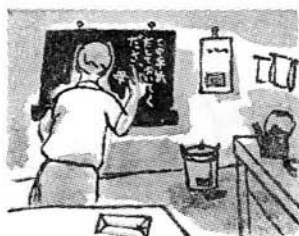
て受け入れているのがふつうであるから、そのような期待はできない。現実であろうと、たまたまのことであろうと、生徒には、このような男女の生活の仕方が、ひとつのモデルとして受け取られても仕方がないだろう。

同じことは「十九、父母とわたしたち」についても言える。朝起きて母に甘えたり、ドタバタけんかをしたりする男兄弟。夜勤のため朝から寝る父が子どもをどなりつけ、母ひとりが忙しく走りまわる。あげくのは遅刻しそうになった子は、「かあちゃんがいいつもおそいでいかんわ」とおこる。

貧しく忙しく気のいい母親の姿が方言の会話でいきいきと描かれているが、教師や生徒はここにどれだけの問題を感じるだろうか。

「おかあさんの苦勞に感謝しましょう」「お手伝いをしましょう」だけではどうにもならない。父の夜勤などはおそらく問題にもならないだろう。

「父は日勤のときでも朝早く出かけ、帰りもおそいので、あまりぼくたちといろいろな話をしません……」つまり家事にはノータッチ、教育の機能も果していないのに対し、母は職業にもつげず、家にとじ込められ、こまごまと家族に使われている。子どもはのびのびし



2年 P 15
(家の黒板)

ているが、自立心がなく、母に甘えている。一見平凡でありながら、現代の家庭問題を複雑にはらんでいいる一家のあり方をほんとうに批判的に読みとれる教師が何人いるだろう。

一年の「明るい人生」は全体として眺めても、女性の登場人物が少なく、登場しても、「お手伝い」か「家庭の仕事」、でなかったら電車の席を独占する、といった悪い例にあげられていることが多い。

中二用「明るい人生」では、まず「二、友だちのへや」をあげよう。自分のへやを母にも手をつけさせず乱雑にしている友に対し、「三郎君のその整とんぶりを許している、あまやかし過ぎのおかあさんの愛情を思った」という筆者のコメントが気になる。中二ともなれば、へやの管理は自分で行なうのが当然なのに「あまやかし過ぎのおかあさんの愛情」とは何ごとか。それにしつけは両親が行なうもので、母親だけが受けものではないはずである。

「三、明るい家庭」では「二十年前の客」を検討する。母の遠来の客に対し、協力しない姉弟のことを母がなげいているのはよいが、男の子はお使い、女の子は夕飯のまわし（支度）と役割をきめていること、「女の子のこと

です、から（傍点・筆者）、言われなくても、『おかあさん、お客さんのお夕飯なんにしよう』と耳うちでもしてくれたらと……と書いているのは気になる。ここまで教師や生徒の批判がとどこくかどうか期待できないからである。

同じ「明るい家庭」の中の「二家の黒板」は、父がいない働く母の家庭で、黒板がコミュニケーションの媒体となる。あとかたづけはたいてい薫ちゃん（姉）がやりますが、ときどきじゃんけんで負けた者がすることになります……薫ちゃんは『男女同権、女がおかってもとをせんならんと決っていません』とすぐ切口上で言います」とある。このあたりをめぐって、クラスではどのような討論がなされるか興味があるが、やはり教師の扱い方ひとつ、という感はずぬがれない。

「五、キュー夫人」は珍しく女性の偉人を扱ってよい。ただこの人は、「理想に向かつて積極的に進んで」いっただけでなく、女であるために、男の何倍かの努力の結果あれだけの業績を残したのだということに注意したい。「女学校で受けたわたしの科学的教育は、非常に不完全なもので、フランスの大学入学資格の要目には、はるかに劣るものだった」という夫人自身のことばをよく味わわせ



3年 P 25
(樋口一葉)

る必要がある。

「八、男子がこんなに親切だったのか」前書きに「男は男としての特性を、女は女としての特性を互にみとめあい、助けあうことが、人生にとってきわめてたいせつなことをよく考えてみよう」とある。文部省お得意の男女特性論である。内容は、男女協力して花壇作業を行なうさい、男子の親切と力が役立った、ということだから、それ自体は悪くない。しかし女性としては、「女子がこんなに親切だったのか」も書いてもらいたいし、男女の特性は、こと肉体的な力に関する限り結構だが、これが、役割にまでエスカレートしてはならない。その危険は多分にあるが、それは、「女性の職業意識形成上不利」であり、「女子のみの家庭科」に通ずる道である。

中三用「明るい人生」は、女性の登場人物が多く、割によい印象をうける。

とくに「六、男女の理解」の記述がよい。「多くの男子はただ男子であるというだけで、女子に対して特権意識を持っており、女子はまた女子で劣等感を持っていて男子に反ばつしていることが多い。こういう考え方がまだ根強く日本人の心の奥底に残っていて、親たちからひとりでに子どもに受け継がれている。

父母との生活が互いに理解と尊敬に基づく正しい家庭生活であれば子どももそれを受け継ぐわけだから、学校ではそのための特別の教育をする必要がなくなるはずだ。しかし現実にはそういうふうにはうまくいっていないのではなからうか」(間宮武)。

そして具体的な注意のひとつとして、男子の女子に対する「乱暴な」「叱ったり命令したりするような調子」のことばづかいをいましていいる。

道徳の教科書が、このような姿勢で一貫していれば文句はない。しかし、男女差別感が「まだ根強く心の奥底に残っている」のは教科書の編纂方針自体であり、まさに「現実はいまうまくいっていない」のである。

「五、樋口一葉」はよい教材である。キュリー夫人と同じく、女性なるがゆえの困難に目を向けさせることができる。読書好きの一葉を、「昔かたぎの母は、そのことを少しも喜ばないばかりか、家計の苦しさを理由に、小学校を中途でやめさせ、家事や針仕事に専念させようとした」という記述の意味をよく考えさせたい。そして、欲をいえば、国語の時間ではなくても、女であるがゆえの悲しみを書いた一葉の世界に触れてもらいたかった。



(さよちゃんをめぐって)

3年 P 127

「十九、カベル女史の人類愛」——ひとりの看護婦を、女としてでなく、人間としての視点で扱っている。この教材はよい。

困りものは、「十二、さよちゃんをめぐって」である。「貧しい農家の長女」さよちゃんがバスの女車掌となって働く話自体はよいが、同僚が休んだので、十一時間もの勤務になっても文句もいわず、ひどく疲れて帰ったさよちゃんに対し、父が、「いまのうちはつらいやろうけど、ようけ働くところからええことあるよってしんぼうせなあかん。どこの会社でもはいったばかりのものはようけ働くんや。若い時の苦労は買うてもせないかん」とお説教する。

たしかにこういう父親は多くいるが、それに対して何の批判もなく、問題をなげかけてもいない。よく働き、仕事で苦労するのは結構だが、苛酷な労働条件に抗議し、改めようとする態度も、働く女性の正しい生き方であって、ただ家でなぐさめたりお説教したりするだけでは、それこそ「職業意識形成上不利」になるのではなからうか。

中学校用「明るい人生」全体にわたって言えることは、「現実」をそのまま放り出して

いるか、「男女特性論」的コメントがついていくかどちらかである。

道徳はたしかに人の心の中の問題であり、教訓のおしつけはけしからぬが、かといって、きわめて保守的な「現実」をかくれみのに、遠慮がちに「男女特性論」をささやく編集態度は、無責任のそしりをまぬがれないだろう。「現実」や「現場の教師」に責任転嫁するのが、教科書編纂者の道徳的な態度といえるだろうか。

「現実」から問題を引き出し、分析し、「明るい人生」をめざす方向づけを、せめて、「男女の理解」の記述程度に行なってもらいたい。それができぬなら、学校で道徳など教えてもらいたくない、というのが、子の親たる私の願いである。



3

人間不在の社会

——小学校の社会科教科書を読んで——

〔あごら東海〕
斎藤 菊代
立木 脩代
千田 靖子
高橋 照子
萩原 洋子
〔あごら東京〕

不教育ママを目指す私たちにとって、はじめて手にとる子どもたちの教科書は、なかなかおもしろく、興味をそそられた。が、読みすすむうちに、次第にスピードが遅くなり、ぼんやり考え込むことが多くなった。正直なことをいうと、男女差別の問題よりも、社会科という教科そのものについて発言したい気持ちが強くなったが、ここでは、婦人問題の視点からのチェックに重点を置いて述べることにする。

*

一年

〔東京書籍〕

カラフルなB5版。折りたたみのワイドの

ページもあり、絵本のようにたのしい。「がっこう」から「うち」「きんじょ」へと、視野がひろがる展開になっている。

「がっこう」では、登場する生徒も先生も、男女ほぼ同数だが、モップで掃除したり（P6）、花びんの花を持っている（P7）のは女の先生、跳び箱の指導をする（P12）のは男の先生、職員会議の中央に坐っているのも男の先生だ。用務員は男、給食室で働くのは全部女。これは現実の反映ではあるが、学校こそ、子どもたちが最初に接する社会であり、そこで明確な役割分担が行なわれていることは、子どもたちに少なからぬ影響を与えるのでは……と思う。

「うち」では、男女の役割は、いっそう明確



同右

P 29



〔東京書籍〕

あたらしいしゃかい

P 28

(父親の協力)

に分かれてしまう。せんたく・そうじ・アイロンかけ・ほしもの・ゴミ捨て・買いもの・料理・子どものせわに追われるおかあさん。そして、「うちのくらしには、おかねがいります。おかねは、どのようにしてうちへはいってくるのでしょうか」と、おとうさんの仕事を紹介される。

それを補なうように、「ともだちのうち」では共働き家庭が紹介される。タイピストのおかあさんをもつまさきさんのうちでは、おかあさんが料理をする間におとうさんは配膳を、また、あとかたづけの間には戸じまりをする。保育園に連れて行くのも、買物をするのもおとうさんだ。「わたしのうちとくらべてみましょう」で、討論する仕組み。

農家であるあきおさんのうちでは、料理・洗たく・ほしもの・縫いものはおかあさん、牛の飼育・自動車の修理・収穫物の積出しはおとうさんが分担。稲刈りは父母の共同作業になっている。

やおやの、のぶこさんのうちでは、いっそうほととの共働きである。トラックから荷をおろすおとうさん、それを助けるおかあさん。トマトの箱をかかえるおとうさんのかたわらで、おかあさんは、なすを皿に盛る。子

どもと添い寝するおかあさんとふすまをへだてて、おとうさんは出納のそろばんをはしく。これらのまとめとして、それぞれのくらしをカード化して、共通する部分とちがう部分を考える仕上げは、子どもたちの活発な発言をよびそうだ。

家族の役割研究が終わると、「くらしのくふう」で、農家や八百屋では休みの日がサラリーマンとちがうこと、夏冬など季節の変化に、家族が協同して備えようとする姿がえがかれ、続いて「うちにくるひと」——米屋、牛乳・クリーニング屋、新聞・郵便屋、電気・水道工事店などが紹介され、自然に、「きんじょのくらし」に導入される。ここでは、近所のようなすの変化から、町内の共同作業、地域の市民活動らしいものまでが登場する。

〔教育出版〕

学校、うち、近所への展開は同じだが、この教科書は、きまりや仕組みを教えることに重点が置かれているように思われる。学校では諸施設の紹介、うちでは家庭内の仕事と家庭外の仕事、近所では、何があり、何をしなければならぬかということ強調。家庭内の仕事をしているのは、戸じまり以外は全部おかあさん。定型的な役割を教えられる中

〔教育出版〕
なかよし

1ねん P 33

(母親の仕事)



で、働く母を持つ子どもの胸に不満が芽ばえはしまいか。

本の表題は「なかよし」。何か、社会科というより、「道徳」のような感じが全体にみなぎっている。

〔中教出版〕

教育出版よりも、さらに夢がない。写真でリアルに出している部分が多いせいもあるだろうが、まず学校のきまりを教え、してはいけないことを教えようとする。男女差別の点では問題がないが。

うちのくらしでは、あさ・ひる・よるに分けておかあさんの仕事を紹介、ひるのおかあさんは、手紙を書いたり花を生けているのが目新しい。しかし、共働き家庭はえがかれず、「うちの おかあさんは みんなのせわのほかに、おみせの しごとも するので たいへんです」という文章一篇と、お花に水をやったり、お風呂に子どもを入れて「おかあさんのほかに、おじいさんも みんなの せわをしています」という家庭の紹介があるだけ。そして共働き家庭の子の発言として「おかあさんは、うちに かえってから、うちのひとのせわを するので、たいへんです」と、「おかあさんがたいへんなのは当然」の肯定

のように、さらっと書かれているだけ。

〔日本書籍〕

以上の三種がB5版(週刊誌サイズ)であるのに対し、一八センチ四角の変型サイズ、表題も「たろうとはなこ」とユニークである。表紙から裏表紙まで一貫していわさきちひろの画が埋め、全篇、詩とも、メルヘンともいえる。

「ぼくと きみ」「きみの ぼーる」など、それぞれのタイトルもソフトムードだ。

「きゅうしょく」では、

「ごちそうさま」

「たろうさん、まだ すわっているのよ」

「でも、ぼくのうちでは、じぶんで かたづけるんだ」

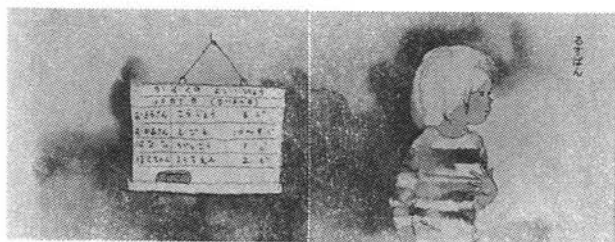
「るすばん」では、いつも四じまではたらくおかあさんのいる家が紹介される。

「おかあさんのびょうき」では、店で働いているおとうさんに、

「ただいま。おかあさんは」と問い、

「おかあさん、ぼく、だいじょうぶ。おてつだいするよ」と語りかける。

「わたくしたちは、教科書という固定観念を破ることから始めました。そして、子どもを信じ、子どもに任せたいときにはじめて生きる



〔日本書籍〕
しょうがくしゅかい

P 28・29

(家族の予定表)

空白をできるだけ豊かに用意する努力を「しました」と、巻末で、編集意図が述べられているが、一貫して、いのちやくらしをあたたくく、子どもとともに学ぼうとする態度は、画期的なものに思われる。しかし、これだけの教科書を、ほんとうに生かされける教師は、はたして何パーセントいるだろうか。

*

以上四冊を読み比べてみると、意欲的なのは日本書籍、カリキュラムに沿ったオーソドックスな三点の中では、東京書籍が抜群。たとえば冬に備える準備では、中教出版は縫物をするおかあさんだけを紹介、教育書籍はこたつの足をはめるおとうさんを一点加えているが、東京書籍では、物置からストープとこたつを出すおとうさん、そのほこりをはたきぼく、庭木にこもを着せるおじいさん、冬ものを出すおばあさんなど、一家総出で冬を迎えようとする。同じテーマでも、扱い方によってこんなにもちがってくるのかと驚いた。

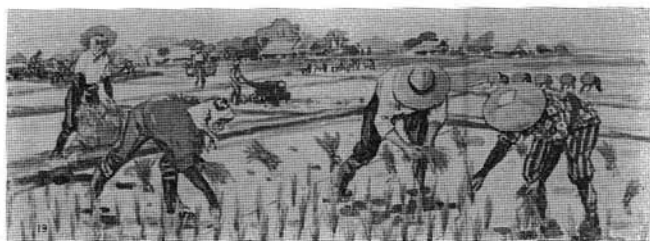
聞けば、一年生の教科書だけは、文部省の検定からはずされているのだという。だから自由でたのしい教科書もあるのだろう。

同じカリキュラムでも、料理の仕方一つでこんなにも変わる。これを教える先生も千差

万別。よい教科書とよい先生にめぐりあえる確率を考えると、はなはだ悲観的になる。

さらに、これらの教科書の中に登場する母親像が、いずれも「夫や子どもや家庭につきすおかあさん」である点が気になる。自立した生き生きとした生活人としてのおかあさんは、ほとんどえがかれていない。また共働き家庭は、どれも「ともだちのうち」として紹介されており、「ぼく」の、「わたし」の、うちではない。働く母を持った立場からの直接的な発言もあっていいし、母子家庭や交通遺児のこと、学童クラブなどにも当然ふれなければならぬのではないだろうか。生きるというのはどういうことか、その生命を育て守る家庭を、入学後の最初の一年で、みっちり考えさせてもらいたいものだと思うずにはいられない。

なお、それぞれの編者は「日本書籍」長坂端午はか男性四名、編集協力いわさきちひろ。「東京書籍」海後宗臣はか男性十八名。「教育出版」細谷俊夫・川崎庸之はか男性九名。「中教出版」坂元彦太郎・豊田武・大野連太郎はか男性七名で、協力ながらも女性も参加しているのは「日本書籍」だけである。



二年

〔教育出版〕

二年のカリキュラムは、労働であるらしく、どの教科書でも、いろいろな職業が紹介されている。この教科書では、「みせ」「のか」「山」「海」「こうば」「のりもの」ではたらく人たちに続いて、「ゆうびんのしごと」をする人たち「おまわりさん」「しょうぼうし」の人たちを紹介、「きんじょのくらし」で結んでいる。

さし絵その他には比較的問題がないが、店では、安売りデー、ポスターなど、売るためのくふうが必要と述べられ、消費者側からのアプローチは少ない。

「のう家」では、自然との関連や協同作業にふれた部分もあるが、さし絵の女性は、すべて手甲きやはんに、すげ笠・モンベ姿で統一されている。

「山」では、おとうさんは遠くへ木をきりだしに行き、おかあさんは家のちかくでやさしいをつくる。山菜とりなどに行くおかあさんはいないし、まして出かせぎ家庭は出てこない。

「海」では、全員、男性だけが登場。

「こうば」でも大部分が男性。女性 は紡績工

場で働くだけ。

「のりもの」では、電車もバスも全員男性。

「ゆうびん」も、すべて男性。

「おまわりさん」では、はじめて婦人警官が一名だけ登場。「しょうぼうし」でも、女性是一名も姿をみせない。そして「はたらく」ということの中に家事労働はもちろんふくまれている。

〔学校図書〕

内容的には前者とほとんど同じだが、まとも方はかなりちがう。「ものをうるしごと」「ものをつくるしごと」「人やゆうびんをはこぶしごと」「みんなのあんぜんをまもるしごと」と、四つに大きく分けている。

「はたらく人たち」というイントロでは、さし絵には、はたらくに出る女性も画かれているのに、文章は「おとうさん」となりのおじさんも「はたらくに 出かけます」とあって、おねえさんやおばさんにはふれてない。

売る仕事では、前者のように、安売り、宣伝など、売るくふうはあまりなく、「おきゃくが かいやすいようにしている」「くふうや「あんしんしてかえるようにしている」「くふうが紹介されている。さし絵の男女の配置は適当だが、おかあさんが和服でかっぱう着を

〔学校図書〕

小学校しゃかい2年 P 66

(安全を守る仕事
につく男性)



着ているのは、古めかしくふしぎな感じ。

「つくるしごと」では、農・林・水産業のうち女性が登場するのは農業だけ。工業では、パン工場と自動車工場が紹介されているが、全員男性。

「はこぶしごと」では、バスのしゃしょうに女性が一。ゆうびんきょくでも、女性一名。「あんぜんをまもるしごと」には、婦人警官や婦人消防士は一名も姿を見せない。

〔東京書籍〕

仕事の分類は教育出版と同じ羅列式。さし絵は比較的現代ふうだが、売るしごとでは、やはり教育出版と同じく、売るためのくふうが強調されている。

農業では、水田で働くのはほとんど男性、花ややさいをつくるのが女性になっている。林業は全員男性だが、水産業では、この本だけが女性参加の場面をとり入れ、「女の人やとしよりも みなどに出て、さんまを はこに つめたり、いちばに はこんだりするしごとを します」と記述。

工業では、シャツの縫製工場。截断と仕上げ、発送以外は女性だが、自動車工場では全員男性。

輸送、通信も全員男性。「あんぜん」で婦

人警官が一人登場するだけ。

*

以上を概観して感じるのは、労働とか生産が、ステレオタイプで語られているということ。くらしを原点として、くらしのための生産を考えようとしているのではなく、商品があり、その販売や生産・輸送機構が述べられていることに大きな疑問をいだく。人間にとつて「働く」ということは何かを考えさせる貴重な一年間であると思われるのに、労働の意義に対する問いかけもなく、社会の生産的で有用な活動にたずさわるのはほとんど男性というイメージだけを植えつけそうだ。

一年の教科書ではかなり意欲的だった東京書籍も、この学年では暮らす側よりも、つくる側、売る側の発想が強い。監修者は同じなのだが、学年による担当がちがうためだろうか。それとも文部省の検定が行なわれるためだろうか。

三年

三年では、地域社会の状況と、自治体の仕組み、地方政治にふれている。地域社会の中の生産の場と消費の仕組みを観察することもカリキュラムの一つになっているようである。



(「し」と「ら」)

〔日本書籍〕

上巻の(田)しことしらべで、近所や友人の職業を調べている中で、四軒の兼業農家が紹介されているが、四軒とも、母親は全部農業である。母親が働き、おじいさん、おばあさんが農業という家も少なくないはずだ。(この母親たちが、そろって、モンペ・すげ笠スタイルで画かれているのも奇妙)(p43)。また「市のように人と人びとのくらし」のイラスト(p48-49)では、農・工・商・輸送・事務の五種の職業に属する人が、すべて男性になっている。p62の自動車のアクセサリー工場では全員が女性、またp66では、おりのもの工場ではたらく人たちは女が多く、それは「むかしからつづいていること」と記述している。

〔学校図書〕

下巻は全部で九六ページであるが、三ページまではまさおくん、六九ページまではあきらくん、七〇ページ以降はひろ子さんの発表になっており、女の子の発表は三分の一たらずしかないのが気になった。男子二名は地域の概況と職業を研究しており、女子はくらしと交通を担当している。アクセントをつけるために男女を分配したのなら、当然、真中の「しこと」の部分に女にすべきだったろう

と思われる。女の子イコールくらしという発想が、編者のどこかにあるのではないかと疑いたくなる。

〔教育出版〕

上巻二「わたしたちの市の人たちのしこと」で、家の人の職業を調べているが、いわゆる家業としては父親の職業を前提にしており、父の仕事、母の仕事、兄、姉の仕事などを分けて考えていない。

下巻四一「ほいく所をつくる」では、(保育所は)「子どものせわをよくしてくれるので、おかあさんたちは安心してつとめにでかけていけるのだそうです」(p35)、2「ほいく所ができてから」では「ほいく所ができたので、はたらきにでかけるおかあさんたちは、安心していきます。せつびのよくととのったほいく所で、しかもやさしいほばさんのせわがあるからです」(p41)と、保育所ですべてが解決したように書かれている。保育所を望ましいものとしてイメージづけることはたいせつだが、あわせて、現在の保育所の問題点、開園時間や閉園時間の関係で、母親が男性と同じ勤務につきにくいこと、といって長時間保育をすれば、そうでなくても過重な保母の労働がさらに苛酷になること、障害児や病児は保



〔東京書籍〕

新しい社会3上 P 43

（家具の作り方を

勉強する会・全員男性）

育してもらえないことなど、今後の問題が山積していることも、この機会に提示してほしいと思う。

〔東京書籍〕

発表者が「わたしたち」であって、「まさお」とか「ひろ子」とか、男女の別がないのは、すっきりしている。

「しごと」では、かし工場、おりの工場などで働くのは全員女性、テレビのはこの工場では男女半数ずつだが、保育所については、農村の保育所が、「田うえやいねかりのいそがしいときには、きょう力してしごとをすめます。また、寺にはいく所をひらいたり、こうみん館できょうどうすいじをしたりします」と紹介されているだけで、市の施設としての保育所にはふれられていない。

*

以上、この学年では、せっかく地域社会について学ぼうとしながら、自分たちの生きる拠点としての社会でなく、知識としての社会の断片が教えられようとしている点が、どの出版社の教科書についても共通しているのが気になった。

*

四年

自分の住む町を中心に、次第に遠くの地域へ及び、日本全国のいわゆる「地理」を扱い、それと関連した「歴史」も学ぶ。

〔教育出版〕

上巻では、みかんづくりのようす（P 65）や真じゅの玉入れ（P 79）の写真に女性が登場するが、もちろん婦人労働の意味にふれているわけではない。

また、十日町の織物業を説明した一章では、「雪の積もる長い期間を利用して、むかし、この地方に、あさをおるしごとがおこりました。……そして、いまでもはたおりは、女の人家庭のしごととしてひきつづいて行なわれています」と述べているが、問屋制手工業の問題点、その中の女性の状況などにはふれていない。

下巻、「水を手に入れるくふう」（P 13）では、水が手に入りにくかった地方の苦勞が語られているが、このために、いかに婦人の労働が貢献していたかは取りあげていない。

〔日本書籍〕

P 18の「農村に注文とりに出る商店街の人」、P 20の零細な「スプーンみがき工場」

〔日本書籍〕

小学社会4上 P 20

(スプーンをみがく)

女子工員)



で働く人、三陸海岸の海女(P106)、魚市場で魚を仕入れ、山村に売り歩き、畑でやさしいを作る田老町の女(P107)など、働く女性が登場するが、そのいずれも、社会に貢献する人間としてえがかれているわけではない。

〔東京書籍〕

上巻 P134「すなはまのしごと」(白子町)

で、「これまでは、女の人たちで船をはまにひきあげていました」と写真のネームで説明、また漁船をあやつる男、船の出し入れや魚の水あげをしたり、家の近くの田畑をたがやす女の記述があるが、生産に平等にかかわっている女たちを扱ったせっかくの材料も、単に「知識」としての記述で終わっている。

〔中教出版〕

台地の畑で働く(上巻 P47)、保温苗代で働く(同 P88)写真は、それぞれ女性だが、意図的なものではない。

寒くて雪の多い地方のくらしの例として新潟県塩沢町を扱って、「まわりの農村では、女の人たちは、町のおり物工場の仕事を分けてもらって、家ではたおりをします。男の人の中には、冬のあいだ、東京方面や雪のない地方に、出かせぎに行く人もいます」とあるが、それ以上の言及はない。

〔学校図書〕

全体に記述が比較的クールで、わかりやすい。しかし、たとえば「北海道の開拓」では百年前の状況を「この島にわたってきた日本人は、南部の海岸地方に住んでいましたが、その数はわずかで、もともと住んでいたアイヌ人をくわえても、北海道全体で五万人ぐらいいでした」と記し、その後は、日本人開拓者の苦心談を述べ、アイヌ問題には一言もふれていない。このような姿勢の中では、地域の産業・生活を支える女は、全く登場しないのも当然だろう。

五年

「四年までは、人々がそれぞれの地域で、特色のある生産活動を営んでいることを学んだ。五年では、日本ならびに国土という新しい概念を導入して、各地域の個々の生産を、日本の産業として統一することのできる認識を育てようとする」と指導要領にある。この「日本ならびに国土」という「新しい概念」は、どのように展開されているだろうか。

〔日本書籍〕

上巻ではいわゆる第一次産業、下巻では第

〔日本書籍〕

小学社会5上

P 102

(やさいのせり)



二次産業を扱っているが、農業・林業・水産業などを「第一次産業」と規定しているのは、ほかの教科書にみられない特徴である。

しかし、「ねだんの動きと農家のくふう」で、「ねだんがはげしく動くものを出荷する農家は、ねだんができるだけ高くつくように、出荷する市場と出荷する時期とを考えなくてはなりません」というように、「高く売るための商品」として農産物がとられ、資本主義経済下の第一次産業の姿を、まざまざとえがき出している。

女の人が働いている写真は、低学年と同様非常に少ない。上巻「みかん工場」の選別者が女四に対し男一というのが例外的にみられる程度である。

また、母親が働いているという記載は、兼業農家の例（上巻P 35—37）が紹介されているだけ。それも、「田畑の仕事は、ほとんど、おかあさんがします」（しかし）「家の収入の大部分は、おとうさんが会社からもらってくる給料です。農業の収入は、給料では足りない部分をおぎなうていどです」「おとうさんは、日曜日はもちろん、ふつうの日も、会社に出かけるまあと、帰ってきてから、田畑に出て働きます」「農業と会社つとめの両方で

は、苦勞も多いのですが、農業はやめたくないそうです」……と、おとうさんの苦勞は語られても、おかあさんの苦勞は語られていない。農業をほとんど一人で支えているにもかかわらず、経済的な面でも苦勞の面でも、評価されていないのは、まさに日本の母親像の象徴のようである。

下巻「せいの工業の発達」（p 55）では、「政府は、群馬県富岡に機械製糸の工場を建て、全国から女の人を集めて、機械製糸の技術を教えました。……こうして生糸の生産はふえ、その後、ながいあいだ、日本のいちばんたいせつな輸出品となりました」とある。しかしそれが女工たちの長時間勤務、低賃金に支えられていたことにはふれていない。

教師用指導書をみると、この項では、

◎富岡製糸場とは、どんな工場だったろうか。・工場の建物のようす。・働く人たち。・新しい機械。・外国の技術者。・働くようす（どんな仕事、仕事ぶり、労働時間、給料など）

◎富岡製糸場は、日本の工業の発達に、どんな影響を与えたのだろう。等を一時間で教え込むことになっており、繊維工業と女工哀史の関係などには全くふれていない。



「機械の世の中と人間の生活」では、機械化による余暇の問題にふれているが、「電気がまのないころは、ごはんをじょうずにたくことが、女の人のたいせつな仕事でした。ごはんたきのこつがあつて、水かげんや火かげんに苦心したものです。そして、じょうずにたいたごはんは、たいへんおいしかったのです」

「電気がまは機械じかけですから、だれがたいても同じようなできばえになります。ごはんだけでなく、このころはインスタント食品が多くなつて、どこへ行っても同じような味のものがふえました」と、男の懐古趣味をまざまざと示している。

この章は、機械化による労働時間の短縮が職場と家庭——ひいては人間生活に大きな影響を与えることを教える大切な章のはずなのだが、「機械化が進むと、ひまが多くなります。……ひまを楽しくすごすための産業もさかんになってきました。……このような産業が発達すると、ひまのすごし方の種類は、ますます多くなります。また、そのための費用も多くなります」と、第三次産業業者のPRにも似たことばで終わっている。

産業の進歩がもたらす公害などについても短いながらページが割かれてはいるが、基本

的な姿勢は、「新しい技術やしくみと働く人」(P 48—49)に明瞭である。「どの工場でも、少ない人手で、仕事が能率よく進むように努力しています」「一日じゅうかんたんな作業をくりかえしている職場などでは、働く気持ちがおこらないでこまることもあります。また、機械化が進んでくると、技術を身につけていない人は、満足な仕事ができなくなるばかりもあります」……と、まるで、「商工会議所ご謹製」のような教科書になっている。

〔教育出版〕

女性が働く姿は、この教科書でも農家だけである。しかもその記述は、「……わかい働き手が少なくなつた村では、しごとをとしよりのや女手にたより、人手がたりなくてこまっています」となっている。農業に女性が働くことを積極的に支持するのではなく、むしろ、「困ったこと」として表現する。

また「ある開発部のしごとの例」のイラストは、開発をすすめる六人のすべてが男になっている(P 14)。

*

二種類とも基本的な姿勢が問題である。

「はじめに日本ありき」であつて、人間やくらは、日本という国土に従属するものとし



〔日本書籍〕
小学社会6年上 P 32
(基本的人権の尊重)

六年

てしか描かれていない。この発想の中では、女が埋没するのは、当然であろう。

「五年で学んだ産業や地域開発の問題は、いずれも奥深いところで政治と密着しているだけに、追究すればするほど政治問題と化する。……六年の学習の第一のねらいは、政治を身近なものとして引きつけることである。主権者意識は政治の抽象的形式の学習から育つものではない。自己の生活を政治の反映としてみはじめるときに、意識されてくるものである。過去のあらゆる学習がそのために想起される必要とともに、まったく新しい世界の認識が重要となる。これが六年の第二のねらいとなる」と指導書は述べ、「世界各地の政治を学ぶことは、自己の生活を政治としてみつめるまなこを育てる。このような考察には、自己の生活の向上、つまりしあわせを求める方向を伴わなければならない。これが日本国憲法のいう平和主義・国民主義・人権尊重の三本柱である。これを視点として展開されなければならない」と結んでいる。これを読む限りでは、どの学年の教科書よりも期待をもちたくなったのだが……。

〔日本書籍〕

交通事故・公害の問題に端を発して、政治の仕組み、憲法へと話を展開している。

「基本的人権の尊重」で、「日本国憲法では、『すべての人は人間としてだいにされること』という考えがもとになっていて、家がらとか、男女のちがい、考え方のちがいなどによって、不公平なあつかいをされなないことを、はっきり書いています。これこそ、人間ひとりひとりを、かけがえのない人間としてみつめていることのあらわれです」と述べ、若い夫婦の投票風景と老人ホームの写真ののせている（上巻P 32）。基本的人権を説くこの章は、どんなに時間をかけて教えてもたりないほど重要な章のはずだが、配当時間は一時間、ページ数もわずか二ページである。

現代政治の説明に続いて、古代からの歴史となるが、女性ほとんど登場しない。平安時代の女性についても、貴族の女性を「女の人にはなやかな色の着物を重ね着してその美しさをきそっていました」と書いているだけで、「かな文字と源氏物語」の章を設けながら、「漢字から、かなが発明されると、かな文字で書いた物語や日記などの文学がうまれてきました。なかでも紫式部が貴族の生活ぶ



りを書いた『源氏物語』は有名で、今でも多くのの人に読まれています」とのみ記述、かな文学と女流の関係には、全くふれていない。

幕政の確立による身分制については、「身分が定まった世の中では、家がらが重んじられ、家の中では主人が大きな力をもち、家族は主人の命令にしたがっていました。また、女子よりも男子がえらいとされ、同じ身分のなかでも、職人の親方と弟子、商人の主人と奉公人というように、上下の区別がきびしかったのです」と、淡々と書かれているだけで、これが人間の生き方をどんなにゆがめていたかについては、全く述べていない。

「新しい世の中のはじまり」「四民平等の世へ」では、武士の廃刀、姓の自由、職業・居住の自由により身分による差別をなくそうとしたことを述べ、「しかし、華族・士族・平民という区別や、就職や結婚など実際の生活のうえでの差別はなかなかなくなりませんでした」と、簡単に片づけ理由は述べていない(p132)。「議会政治が始まる」では、「衆議院の議員は、二十五さい以上の男子で、国税を十五円以上おさめている者によって選挙されました。女子の選挙権はみとめられず、国民のうち選挙をとおして政治に参加できたの

は、人口のわずか一パーセントの人々だけでした」(p142)と、女子が政治から疎外されていたことを簡単に記している。

六「今の世の中」は、「はじめての婦人代議士」で、「今の世」の開幕を象徴させている。投票にきたおばあさんが、「やれやれ、これでやっとわしらの世の中がきた」とつぶやき、その話と写真が夕刊に出たことなどをくわしく報じ、〇おばあさんはなぜこのようにつぶやいたのでしょうか。〇婦人代議士がうまれたほどの変化が政治のうえでおこったのですが、このような新しい政治をおし進めたのは、どういう考え方が広まったからでしょう、と考察を深めようとしている(p160~161)。

続いて「戦後の改革と新しい日本」では、「二十さい以上の人が男女の別なくすべて選挙権をもつことになり、男女同権が実現して、民主政治のもとがしっかりしました」「国をたてなおすもとは教育にあるとして、みんなが中学校まで九年の教育を受けることになり、六三制とよばれる男女共学の新しい義務教育が始まりました」と、絶好の教材が続く。これを婦人問題に展開させ得るかどうかは、教師の腕次第であろうか。

〔東京書籍〕
新しい社会6年上 P 24
(国民の権利)



〔東京書籍〕

大すじは、日本書籍とは同じである。
口絵には「貴族の女性」「富岡製糸場」が登場するが、説明文は「十一世紀に貴族の生活をかきたてた源氏物語が書かれ、のちに絵もえがかれました」「れんがづくりの工場は、約百年まえ、政府によって建てられ、最新式の工場のひとつでした」と、簡単な説明があるだけ。p 23の「国民の権利と義務」の説明も、男女同権については軽く流している。

*

石器時代から現代までを半年、あとの半年で世界地理を学ぼうというのである。映画のタイトルだけを並べたように、有名人、有名事件、有名国がパツパツとあつたで流れて行くだけなのも、わりもない。教科書というよりも、カリキュラムを考え直さなくてはなるまいと思った。とくに憲法など、重要な教科がふくまれているだけに……。

全学年を読み終わって

ひとことでは、血の通わぬ社会科ということになるのか。描かれている社会は、ガラス戸越しの遠景という感じでしかない。

生きていること、暮らすことを考える糸口になるのが社会科であるはずなのに、これでは知識を血の通わぬ標本として与えられるだけだ。生き生きとした女性像など登場しないのも無理もない。

原因の大きなものとして、単元の配置が考えられる。一つの学年に、あまりにも多くの単元がつめこまれている。これでは駆け足で教えるほかない。こんな教科書を使って、先生方がよくも教えていらつしやるというのが異口同音の感想だった。

もう一つの感想は、婦人問題をとりあげようとすると、新しい教科書を女性の手でつくる必要があるということであった。男性編集陣の既成の知識の集約の中から女性像が浮かび上がるはずがない。

子どもたちは、これらの教科書を使い、駆け足授業を受けている。この現実をどう変えていけばよいのだろうか。

今回のリポートは、全くのしろうとだけでまとめたが、現場の教師をまじえた勉強の機会を持ち、指導要領、指導書についても研究したいと願っている。読者が、気づかれたこともどしどし連絡してほしい。参加希望の方は、編集部までぜひ連絡してほしいと思う。

4 欠落した女性の状況

— 中学社会科教科書・公民的分野を読んで —

〔あこら東海〕

佐藤 典子

(弁護士)

一 この教科書は、第一章「わたしたちの家族生活」、第二章「現代の社会生活」、第三章「わたしたちの生活と経済」、第四章「国民生活と政治」にわかれている。今回は第一章と第二章の一部を検討した。

二 第一章「わたしたちの家族生活」は、その「学習のめあて」を

- (一) わが国の家族制度は、どのような考え方にたち、どんなしくみになっているか
- (二) 家庭生活を明るく豊かにするためにはどうすればよいか

の二点だとしていて、これに添って、

第一節「家族生活とそのしくみ」

第二節「よりよい家庭生活」

とにわかれている。

三 第一節に述べられていることは、おおむね戦前と比較した家庭に関する法制度の仕組みと現在の社会における家族関係の現状であって、権利問題となる点は見当たらなかった。しかしながら、戦前と戦後でなぜそのような劇的な転換がなされたのか、新しい法制度を婦人がどんなに新鮮な感激をもって迎えたかが書かれていれば、もっと現行法制度のもつ意義も理解されるであろうし、また教科書の役割を考えれば、均分相続に関する説明において、「夫の財産の三分の一は妻が相続する」と書くより、「夫または妻が死亡したときそれぞれ残った方は死亡した配偶者の財産の三分の一を相続する」と書き、口絵の戸籍謄本では、筆頭者を妻にしたものをのせるか、説明

清水書院 P 35

(私たちの消費生活)



(家庭では母親が家族の食事のために毎日のように八百屋や魚屋へ買物に出かける……と説明)

文の中でどちらが筆頭者になってもよいことを書く方が、平等の意識を明確にたたき込むという意味でより啓蒙的であったと思う。

そして、この戸籍筆頭者が、戸主とは全く意味を異にしている、法的に何らの意味を持たないこともつけ加えた方がいまだに女が筆頭者になることに強いこだわりを持つ社会の偏見を正すためにもよいのではないだろうか。

このように、今の社会で事実として支配的に行なわれていること(妻が個々の財産を持つことはまれであり、結婚すればほとんどの女性が夫の氏を名乗って筆頭者が夫になる)と法のたてまえとのギャップはちゃんと教えておく必要があると思う。

四 第二部では、現在の家庭のもつような問題と社会とのかわりについて述べている。

先に述べたことと同じだが、ここでも口絵の写真「家事をたすけあう親子」は、母と少女である。なぜ、男の子が手伝いをしている写真を決してのせないのか、いきどおりを感じずにはいられない。

また、「家庭生活の向上と改善」という項目の中で、主婦の家事作業はいっばんに軽減されてきたが、農家の主婦の労働過重が改められておらず、育児の面で問題が発生してい

るとしているが、労働過重なのは、都市の共稼ぎ主婦とて同じであり、核家族化している都市でこそ保育の問題が、常に重要な社会問題であることは完全に無視されている。そして、家事の軽減によって生まれた余暇の生かし方はどうあるべきかというのんびりした話に移ってしまったのは、子どもたちの生活実感とも異なるのではなからうか。

五 第二章「現代の社会生活」の中の第一節は「社会生活と職業」である。

ここでは、女性と職業をめぐる種々な問題、特に就労上の差別についての記述が十分である。

女性も職業に進出する傾向がある旨述べたのに引きつづいて、「しかし女性は、結婚後に育児や家事など家庭と両立させることが、困難なばあいが多い。そのため、保育所や託児所などの社会施設の充実や、するがちな家庭についての対策がさげばれている」としているだけである。

女性と職業との問題で、育児問題は最大の問題として間違っているわけではないけれども、それを抜きにしても、なお存在する厚い差別の問題をとりあげないのは片手落ちであらう。

(大阪書籍、昭和四十六年四月検定版による)

5 家庭科教科書批判

島 田 道 子

(家庭科の男女共修を考える会)

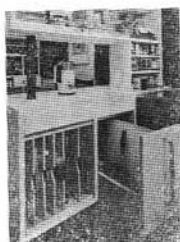
はじめに

人生でもっともナイーヴで感受性の豊かな季節を、他人を蹴落すために、受験戦争を戦かうために、心身をすりへらして知識の詰め込みに必死の子どもたちに、日々の暮らしを生きることの確かさを、働くことの豊かさを教えたい。そして何よりもまず現代の世の中に一人でも生きていける生活自立の習慣を身につけさせたい。実は昭和四十八年度から教育課程が変わって女子だけは将来に備えて家庭科一般を最少限四単位が必修になったのであるが、そんな男女分業路線の教科でなく、すべての子どもが家庭科なり生活科なり呼び名はどちらでもかまわないが生活者の側にた

った授業を学ぶ……というのが私のねがいである。

その理念は、理念としては大かたの賛成は得られるだろうと思うのだが、それでは次に「どんな内容を具体的に」とたたみかけられると、なかなか一つにまとまらない。限られた授業時間の中で最少限だけだけのことを、現在の生活の矛盾や問題点、しかもそれは将来への展がりや変革につながるように、と考えると、思いは乱れて迷うばかりである。

そこで道に迷ったら出発点に引き返せというわけで、現在使われている家庭科教科書を読み返すことによって現在の家庭科が志していること、子どもたちに期待していることを洗いだしていくことを考えてみた。新しい種



学 研 図 書 口 絵
(能率的な設備)

を揃く前に、まずは現状を明らかにしたいというわけである。

一 主婦教育としての位置づけ

現在使用されている教科書は先述のとおり昭和四八年度から採用されているのだが、その経緯は前年の九月、「高等学校教育課程の改善について」として教育課程審議会が行なった答申に次のように述べられているのである。

ア 女子の特性にかんがみ、明るく豊かな家庭生活を営むうえで必要な基礎的能力を養うため、すべての女子に「家庭一般」を履修させるものとする。ただし、専門教育を主とする学科の女子については、女子生徒数がきわめて少数である場合等、特別事情のある場合は、この限りではない。

イ 「家庭一般」においては、家庭生活に必要な食物・被服・住居・保育などの知識と技術を、家庭経営の立場から総合的に習得させるとともに、家庭生活の充実向上を図る実践的態度を養うようにすること。……以下略」
ここで意図しているものは実にはっきりと「主婦になるための準備教育」なのである。

激しく変わる経済・社会・文化状況を遠目にみながら、女子は昔ながらの衣・食・住の熟練者となり、家庭の責任者になる義務があると言っているのと同じではないか。とすれば教科書はそのためのハウ・ツウものというのだろうか。

二 日常の作法

最初に断わっておくが、現在使われている高校の教科書は二種類ある。一冊は教育図書のもの、著者は各分野の先生方二十九名、もう一冊は学研書籍のもので著者は十七名である教育図書の方を開いてみると、まずのつけから「日常生活の作法」などが出てきて、どきもを抜かれてしまう。

「幼い時から、どのような環境で生活習慣が養われたか、周囲の家族たちがどのような態度や心持ちであったか、その家庭環境・家族関係のあり方が、こどもの人格形成や、また家庭生活・社会生活に適應するために必要な、日常の作法に果す役割は大きい」

人格と日常の作法とが同格の重みで強調される。その理由は何なのか、人間関係をうまくやっていくために、人を不愉快にしないた

(書物などの

丁重なすめ方)



同 右

(重い物は両手で低く)



めにと言う。要するに相手に「失礼にならないために」というわけである。早速、実践に入る。

「物の扱い方——大きい物・重い物、たとえば大きい花びんや大形の置時計などを持つには、両手でしっかりと低目に持つのがよい。

小さいもの、軽い物は片手で持ってもよい。しかし丁重にするときは、左の手のひらにのせて右手を右すみに添える。これを客にすずめるときには、いきなり客の前におかず、いったん自分の前においてこれを持ちなおしてから客にすすめると丁重である」

何ともいえない異和感を禁じ得ない。これは少年期のしつけの分野である。こんなことを高校で真先にやる必要があるのか、一歩ゆずって「今の子はしつけも言葉づかいもまったくなくなっている」という一部の人々の要望でつけ加えたことを認めるにしても、頭から一つの「型」を押しつけることに強い抵抗をもつ。「作法、マナーといったものはそのように固定したものなのか?」「なぜ必要なのか?」「相手に失礼だから」「いや、その方が美しいから」みんなで原点から考えさせる批評的精神を許さない。作法が作法として定着してきたのを、ただ対人関係の潤滑油と簡単に総

括してしまふのでなくて、その背景の伝統・習慣や美意識、価値観といった視点への掘りを持たなければ、それは教育内容としての存在価値を問われるのではないか。

三 妻の就業

ところで「家庭一般」の内容は、家族と家庭経営、家族の生活時間と労力、家庭の経済生活、食生活の経営、衣生活の経営、乳幼児の保育の七項目で構成されている。

日常の作法は家族と家庭経営、すなわち家族関係の中で位置づけられている、この部門の第三章には家庭生活の充実向上という項目があり、そこで「妻の就業」という問題が提出されている。

「家庭生活の主体となるのは家族全員であり、家族の理解と協力によって民主的な運営をすることが家庭の諸機能を十分に発揮させることになる。その場合、家族全員の機能を高めるとともに家族それぞれの個性も十分に発揮されることが必要である」

全くそのとおりである。そこで家族の中の主婦が家庭の経営責任者だけでなく、それぞれの個性をいかして社会参加をしたいとした



教育図書 P7
(家計簿の記入)

ら……。

現在働く婦人の52%は既婚婦人という統計もある。

「妻が家庭生活と就業を両立させることはなかなかむずかしいが今日では妻が就業する家庭がかなり増加している。家庭の条件、生活費の負担、貯蓄の計画など考慮し、就業・退職や再就職など計画的に実現させるようにする」

妻たちが社会へ進出していこうとするのは、家を建てるとか、貯蓄をふやしたいとかいう希望からばかりではない。家族の目を通して社会に触れるのでなく、直接自分の目で見、自分で考えたいという精神的な自立、家庭生活の経営責任者などおだてられながら無償労働をつづけ自らの経済価値をなくしていくことからの反省、経済的自立、といった主婦の人間解放の欲求があることを現在の家庭科の教科書は認めようとはしない。

「家庭生活の改善を要する問題——精神的な面」

「物質的に豊かな生活への単純な要求から主婦が就労し、そのための家族の心身の安らぎの場としての家庭の機能がそこなわれ家族間の和や健康が不安定におちいっている例もある。

る。また個人の主張が逆に自己主張となって相互の理解を欠いたり人間関係の不調和もみられる。物質文化の向上が優先し、家庭生活が精神的におびやかされていることは大きな社会問題といえよう」(教育図書P20)

女の人をなぜそんなに家庭に縛りつけておきたいのであろう。日本の経済成長の大きな部分を担う家庭消費財を、ゆっくりと使いこなしてもらうためには専業主婦がやっぱり必要なのである。それに主婦を外に出して夫と二人分の賃金を支払うよりも、家事という名の無償労働をあてがい、夫には「女房・子どものため」とけしかけて働かせ、一人分の給料を払う、これが戦後の経済発展をさえた一つの大きな要因でもある。しかもこの男女分業イデオロギーは封建時代からつづいている家の思想——女はすべからず家において儉約を旨とし(現在は消費を旨とし)夫に仕え、よい母となれという「女のみち」、封建時代からつづく道徳観と手を結び、その本質をカモフラージュしてやってくる。

「現在の女子大生は結婚志向が圧倒的」「女子大生亡国論」「彼女たちの社会的責任は」などと最近女子大生への批判がきびしいが、実はその教育の中で、このように家庭に帰れ、



消費生活の責任者になれと強く要求されているのである。しかもそこで引合いにだされる「現実」説明は、われわれが日夜直面している「ナマの現実」とあまりにも違いすぎるではないか。

四 くり返しの衣・食・住

家庭責任者としての心構えの項が一応終わると、次は毎度のことながら衣・食・住の各論に入る。なぜ、「毎度のことながら」というかといえば、これは小学校・中学校と全く同じ構造で、先生は変われど教育内容は同じだからである。

食生活について言えば、栄養、献立、食品知識、食事マナーといった内容で小学校の五六年でもやってきた。この時は男女共学で、料理実習は小学校時代の楽しかった思い出のベスト・スリーには必ず入っている楽しい時間でもあった。ここで子どもたちは基本的な油いため、ゆで卵、カレー、サラダなどの調理や、栄養の基礎知識を身につける。さて中学生になると技術を重視した家庭科というところで、若い人のための食事、成人・老人・子どもの食事といったものを栄養知識とともに

さらに勉強する。そしてまた、栄養・献立・食品知識……とやってくる。食生活と社会・文化との関係が抜けているのである。たとえば食品の値段、流通機構、食糧事情、公害・安全性の問題などである。

「現在、健康的で文化的な生活を営むには公害問題を通じて通るわけにはいかない。衣食住にかかわる公害については科学的にその害を知り、公害のない生活ができるような能力を養わなければならない」——長野県では現在の家庭科の授業にあきたらないで、先生方自身でつくった自主教材で、しかも男女共学で授業をつづけているところが何校もある。

この文章はその指導資料の一節である。現在の台所では中性洗剤と縁が切れない。その毒性については昭和三十年ごろから指摘され、現在は強い反対運動が各地で起こっているのに、現在の教科書では、その毒性には全然ふれず、ただ濃度など使用法をよく知って使うようにとしか書かれていない。

「中性洗剤で食品を洗浄すれば、その一部が食品中に浸透し、あとで水洗いしても若干量の残留がある(中略)。したがって中性洗剤で食品を洗う場合には、正しい使い方をしなければならぬ」(傍点、筆者)(教育図書 P 85)

教育図書 P 57

(食生活の経営)



こんなおざなりのことを教えて何の意味があるのでしょうか。長野県立梓川高校の家庭科では「中性洗剤の有毒性をメダカで試してみよう」という生徒の発案から小川のメダカをすくってきて実験をはじめたという。

まず水道水を一夜放置し塩素ガスを逃し、そこに中性洗剤を入れる。市販されている中性洗剤の濃度は、間違つて倍の濃さにしても困らないよう、だいたい食品衛生法に決められている使用基準の二分の一程度の濃さになっている。そこで容器に書かれている適正濃度と、食品衛生法による使用基準の濃さのものと、それをだんだん薄めたもの、一ばん薄いのは使用基準の五十分の一にまで薄めたものをつくってメダカをいれた。結果は：メダカはほんの一滴たらした水の中でも死んだ。濃い液のメダカは三〜四日間で皮も骨も溶けてなくなってしまうという。これには生徒たちも青くなつて「野菜や食器は中性洗剤で洗わないことにする」と言つたそうである。

(信濃毎日 50・3・12)

五 消費者問題

家庭科の教科書の中で致命的に遅れている

のが消費者の問題である。現代においては消費者すなわち生活者であり、生活のすべてがそこに含まれるといっても言い過ぎではないだろう。消費者問題は家庭科教育にとって一つの「踏み台」的存在であろうと考えたわけである。ところが部厚い学習指導要領をひもといてみても消費者教育という特別の部門はなく、わずかに購入と消費の合理化の項に数行の記述が見つかるだけだ。いわく「企業の販売活動の激化にたいする家庭の態度について、欲望の調整、商品や商店の選択、購入の方法を消費の面から取扱う。購入と消費の合理化の重要性を考えさせ消費者の権利をまもり責任を果すことができるようにする」。

すすんだ資本主義社会では企業が消費者のために生産をコントロールするなどというのはオトギ話にすぎない。消費生活の全般は企業の巨大な装置の中に組込まれ、消費者は自分の意志というよりも企業によってつくられた「需要者」に転落する。しかも消費者は自分の置かれているその立場をなかなか冷静に認識し得ない。国の全教育費に匹敵する宣伝・広告費が投入されて、テレビを通し、新聞を通し、街頭を通し、買わせるための、戦略と戦術が展開されている。知らない間に消費



者は操作されているのである。彼らをして被害者意識はさらさらなく自分を「王様」と思いつます巧妙さ。しかもちょっと気をつけてみればわかることだが広告の文章は商品に関する論理的な説明はなく増幅に増幅をかさねた幻影だけである。幻影の強迫に消費者は催眠をかけられたように従っていく。

まア、だまされてみるのも「目ざめ」のためにはいいクスリかも知れないと無駄な出費には一歩ゆずるにしても、買わされたその商品の安全について、われわれが一切関知し得ないというのは、これはゆゆしい問題である。近代社会に生活する市民にとって、他人によって生命・健康を害されないということは最も基本的な権利である。この要諦をたき込むのが消費者教育の出発点であって、これは企業側の消費者教育や行政ベースでの社会教育などに委任するべきではなく、学校教育の中で、しっかり確立しておいてもらわねばならない。

ところが教育図書P51では、前述の指導要領をうけて「現在のように商品の多様化がすすんでいる時代では消費者は無知であってはいけないがどちらかといえば消費者は受身の立場に立たされがちである。そこで我が国で

も消費者を保護し消費者教育を推進しなければならぬ」という機運が高まっている」などのんきなことを言っている。

学研の方では「消費者の立場(1)——これまで消費者は商品の価格・品質・種類などについてはほとんど企業のいうなりになっていた。しかし私たちは購入に際しもつと権利を主張し生産者と消費者の間に正しい関係を生み出す責任がある」といい、商品購入にあたっての自主性、商品知識の習得、消費者組織への参加などの自覚をうながしている。それでもなお今日の社会では消費者主権がしばしば侵害されており、これを守るために企業と消費者との間に消費者行政があり、社会教育があるという。なるほど、それはそれで間違いない説明ではある。しかしここには問題意識を持つ人の熱い説得力がない。一応書くには書くが深入りしないようにという周到な不在証明に見えてくる。

たとえばサリドマイド問題にしろ、AF2問題にせよ、それらの経緯は一つの大きな問題提供、ケース・スタディの材料であろうに。教科書は述べている。「消費者の安全をまもるために各種の規制が行われている。食品や薬品などに有害物が含まれていては生活の



学研書籍 P131
(社会生活的機能)

安全は得られないから危険を防止するために食品衛生法や薬事法などによって安全が確保されている」と。疑わしき使用せずという食品衛生法がありながら、あれだけ騒がれたAF2がなぜ使われたか、健康に害があるとかくさんの人から指摘されている中性洗剤が、なぜいつまでも堂々と売られているのか——こうした消費者問題のどれかを、生きた教材として生徒たちが頭と手と足を使って調べあげるといっても一つの方法だと思ふ。現在における家庭生活を根本的に見直し、家庭科教育を変革していく新しい芽がでできそうに思えるのだが、教科書が要求しているのはただおとなしい消費者としての主婦の養成である。この項のまとめとして「私たちは賢明な消費者となるために購入や消費に関する正しい情報を得て健全な家庭生活を営むよう実践を通して改善の実をあげるよう努力しよう」——なんと空虚な文章であろう！

六 保育の問題

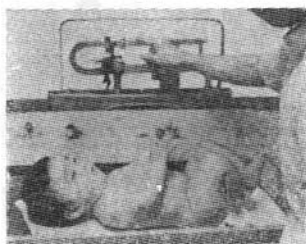
学研書籍、教育図書どちらの教科書も最後は保育の問題である。衣・食・住と各論がつづいたあとに突如、保育がとびこんできて面

くらう。衣・食・住が一応こなせて、そのあと子どもができて、主婦としてはじめて一人前というわけなのだろう。ただしその前の性教育はカットされている。

学研書籍の方は、第一ページから乳児の心身の発育があつて、月齢毎の体重、身長、歯の生え方などの細かい説明があつて、乳幼児の食べ物と被服、たとえば離乳のやり方とか赤ちゃんの被服計画、おもちゃの与え方etc. この時点でこんなことまで学ぶ必要があるのだろうか。しかしこれは育児の責任、ことに保育の全責任は母親にあるという基本見解が基礎にあるからである。

「育児における両親の責任の一部を祖父母やその他の家族、または保育所や乳児院に委託する必要があることがある。母親の病気や仕事、その他のつごうで育児の分担を第三者に依頼せざるを得ない場合がそれである」(教育図書P24)

思わぬ交通事故で父親が天国へ行ってしまった子、母親が外で働いている子、大家族の中で暮らしている子、さまざまなカタチの家族の中で生きている子どもたちはここでは疎外された子どもたちである。標準家族の中の子どもだけが規格にあつた子どもである。



しかもその子どもは「一人の自由な存在としての子ども」でもなく「社会の中の子ども」でもなく何よりもまず「いゝ子」「わが家の後継ぎの子」であるのだ。したがって教育は学校教育・社会教育よりも家庭教育が優位である。集団の中で子どもを育てる集団保育などは救貧対策か母親が外に出るための間に合わせ対策の意味しか持っていない。「家庭教育は両親が子どもを教育するという点でよく教師になぞらえるが両親の役割と教師の役割では大きな差がある。教師にとっては教える教科内容が関心の中心であるのに対して両親の場合は子どもの人格形成そのものにウエイトがおかれる。

世にいう「教育ママ」とは家庭教育を忘れて学校教育——その中でも成績主義にだけ心を奪われている。母親が家庭で教師の役割を果たそうとする愚を排し真の家庭教育に専心すべきであろう」

家庭教育重視も結構であろう。しかしここで注意しなければならないのは、うまくカモフラージュされてはいてもそこに厳然としてある封建時代からの日本の児童観、それは家族思想の流れる「子は家の宝」思想である。子は家のもの、だから親は権利と責任をもつ

てわが家の価値観、規範を教え込んでよい。学校も他人もその人格形成には一歩も二歩も譲るべきだという意気込みは、これまでの日本の家族のエゴイズムをますます助長、拡大再生産させてはいかないだろうか。

このことに関連して思いだすのは二年ほど前の「K子さん事件」の判決である。ある未婚の母親が奪われた我が子を取り戻して自分の手で育てたいという訴えを起こしたとき、裁判所は、未婚の身でしかも外で働かなくてはならない以上、養育に万全を期したい、したがって子どもは渡さなくてもよいという判決があった。しかも実の父親は、その子の戸籍を偽造して第三者の実子として渡してしまったことを何ら問われていない。そこには「父親の家庭」と「養子先の家庭」をまわるという大義(が)が優先したのである。「未婚の身」で母親になったひとにも母親としての基本的な権利と責任があると、私たちは、その裁判の在り方を問題にしたのであったが、実はその淵源は教育の中にもはつきりあらわれている。

「離婚、別居、死別などの崩壊家庭や母子家庭、あるいはひとりっ子や大家族が問題とされるのは、そのような条件のもとでは、以上



教育図書 P7
(家庭の団らん)

述べたような望ましい養育態度がそこなわれやすいからである」(教育図書P282)
しかし今、わたくしはあの母親の立場からでなく一人の子どもの立場からこの教科書にむかって声高に反論したい。

「教科書は間違っている。僕たちは白紙の紙でもシニコ細工でもないのだ、単にヒゴされ与えられるだけの存在ではないのだ、子どもは生まれながらにして一つの自立した存在であって、どんな条件でも状況でも、身にふりかかったそれをひきうけて精一杯いきっていく実存的存在なのだ。どのような人生を選択していくかは僕の自由であって、親も学校も社会もその後押ししかできないのだ」

この教科書における家族という概念は、父Ⅱ外で働いてお金を持つてくる家計責任者・母Ⅱ家事管理責任者・子Ⅱ保育されるだけ、という図式だけにコリ固まって、それと違う役割分担をしている家族は想像の外にあるらしい。一般的な現状肯定だけに終始している。

七 差別教育ではできない「生活

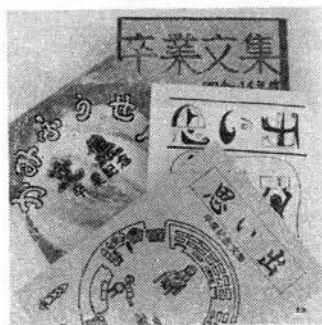
の変革」

以上が現在使用されている家庭科教科書を

睨んだ批判的感想であるが、総括的な感想といえど教科書として使うより反教科書として使用した方が意味があるのではないかということである。この中では現状肯定だけで精一杯であって、生活を新しく捉えなおすという変革の意識はゼロである。人間を生産にだけ奉仕する人間でなく、生活を第一義とする人間として捉えなおす価値転換が、今や、大きいえば全地球的課題になっている。しかるにその生活を扱う家庭科教育が日本では昭和三十年代の生産第一主義の路線のままを踏襲し、女子のみの教育の中に押しとどめられている。「女子のみ」ということは結局は、旧来の差別教育の中に押しとどめることであって、そこから生活変革の芽など生まれて来ようはないのである。

へ豊かな生活へ暮らしをとらえなおすという言葉やスローガンはやさしいが、その実質となると誰もなかなかイメージがわいて来ない。話し合ったり本を読んだり、そして考え込んでしまったり、五里霧中の暗中摸索。ただ一つわかっていることは、現在のような家庭科教育では、その道は遠くなりこそすれ、近づくということは絶対、あり得ないということである。

卒業文集に見る小学生の将来像



最近の小学生男女は自分の未来にどのような夢をいだき将来をどのように方向づけているのだろうか。また、それが過去何年間かの間に変化しているのだろうか。

このような疑問に答える一つの目安として、都内のある小学校の卒業記念文集を昭和三十九年度から四十九年度にわたって、男女別に調査した。そのうち四十五年度から四十八年度までのものは全員の、また四十九年度のもものは一クラス全員の将来の希望が書かれていたが、四十四年度以前のものは、数名の抜粋しかなかったので統計からはずし、参考にとどめた。

職種に見る男女差

まず職種では、十人十色、千差万別であった。しかし男子が六十四種挙げているのに対し、女子は三十八種で、

男女の延べ人数の比二八九対二三〇を考慮に入れてもなお、女子の未来は男子より狭められているといえよう。また法律家、外交官、エンジニア、政治家、実業家などは、実際に活躍している人がいるにもかかわらず、女子の志望者は一人もいなかった。

集計の便宜上、職種は男子二十二種、女子二十種に統合して作表した(第1・2表)。さらに男子は自立職群、資格職群、技術職群を、女子は自立職、資格職A(男女職)、資格職B(女子専門)を設けてグラフ化した(第1・2図)。

●女生徒と職業

五年間だけの調査ではっきりしたことはわからないが、女性が男性の職種にだんだん進出したがっているのではないかという予想は、見事に裏切られた。昔から女性だけの職とされていた資格職Bが、安定して上昇しており、特に保母希望者（幼稚園、保育園の双方）は急激に増加している。その中に、保育園の保母と明記しているものがあり多くなって来ているのは、保育園出身者が増加したためとも思われる。

お嫁さん、お母さんなど専業主婦志望者は一応各年度一、二名いるかいないかだし、減ってはいる。「オペラ歌手、小説家、舞台俳優、ピアノスト、マンガ家、画家などいろいろなものになりたい。でも、なれるわけがない。ユメも希望もない」（46年度）、「私の夢は平凡なおくさまになることだ。いくらよい仕事を見つけても、女の幸せは結婚だけだと思ったからだ」（47年

度）、「……私は、結婚はなるべく二十五歳過ぎてからしたいと思います。なぜかという、自由でいたいとかそういうのではなくて、私はすこしもお金のやりくりとか知らないし……」（49年度）、などと女子が書けば、男子は

男子で、「……社長にはなれなくても、およめさんはやさしい人がいい。だってぼくよりも体力があつて力が強いとけんかしても頭が上がりたくないし、およめさんのいいなりにならなければならぬから」（49年度）、という。このような社会的、家庭的背景は依然として存在していると考えられる。特に母親の影響力は強く、ある先生志望の女生徒は、「……でもよく考えてみれば、小さい時、昔先生をしていた母から『先生っていいものよ』とか聞いていたから、そうなつていったのかも知れない……」（39年度）、と書いている。

芸術職に商業を加えた自立職は、一度減つてはいるが、上昇の傾向を示し、これからの成長株ともいえそうだ。この中で音楽家志望の中の「ピアノの先生」、美術家の中にまとめた「書道の先

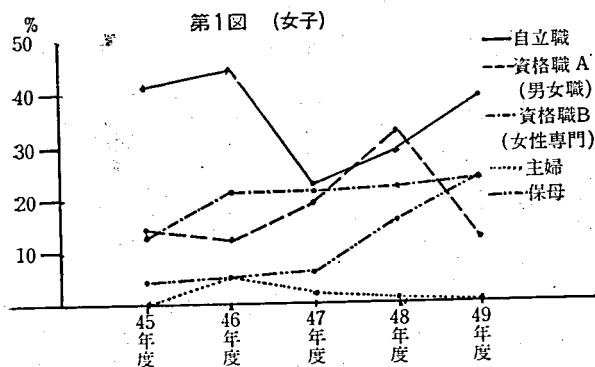
生」などは、主婦業の片手間にもできるといふ思わくが、子どもながらも働いたためではないかと思われる（第1図）。

一方男子では、自立職はどの職種も年度によりまちまちで一定の傾向は見られなかったが、資格職の中で先生志望のものがぼつぼつ現われてきている。その中で、幼稚園の先生、保育園の先生を希望するものがあることが注目される。女子が男女の職種を意識して区別している傾向にあるのに対していわゆる女子の職種とされていたものを、無邪気に志望している男の子が見られるのが、ほほえましい。

●男生徒の職業観

男子の職種の代表格である技術職は大体安定して、二〇%前後の人が志望している。しかし一時花形であったスポーツ選手の志望者は、下降の一途をたどっている（第2図）。

半面、サラリーマン志望が増えて、



大物傾倒者は減ってきている。四十四年度には「日立で平社員、課長、部長、常務、専務、そして社長となり、松下幸之助をやぶり日本一の大資本家になる」などがあつたが、最近は、将来像として「ごくなみのサラリーマン」(48年度)、「みんなに親しまれる人」(「都

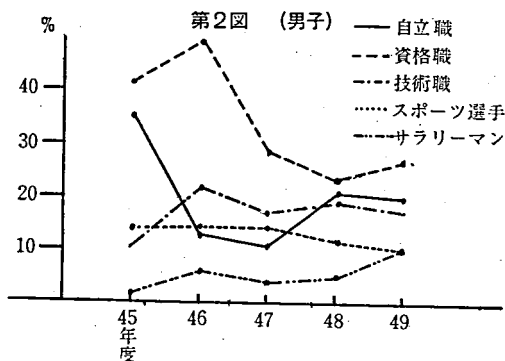
第1表 (女子) 小学校卒業時の将来の希望職種百分率

卒業年度		45 年度	46 年度	47 年度	48 年度	49 年度
自立職	1. 作 家	人 — %	5人 10.6 %	2人 3.8 %	2人 3.6 %	3人 12.0 %
	2. 美 術 家	4 8.0	6 12.9	5 9.6	5 8.9	1 4.0
	3. 音 楽 家	4 8.0	4 8.5	—	4 7.1	4 16.0
	4. タ レ ン ト	—	1 2.1	—	2 3.6	—
	5. デ ザ イ ナ ー	9 18.0	4 8.5	4 7.7	2 3.6	—
	6. 商 店 経 営	4 8.0	1 2.1	1 1.9	1 1.8	2 8.0
	小 計	21 42.0	21 44.7	12 23.0	16 28.6	10 37.0
資格職 A	7. 学 者	2 4.0	—	—	1 1.8	1 4.0
	8. 医師・歯科医	1 2.0	—	—	1 1.8	—
	9. 獣医(動物飼育)	1 2.0	1 2.1	2 3.8	4 7.1	—
	10. 教師(小・中・高)	—	3 6.4	2 3.8	4 7.1	2 8.0
	11. 通 訳	3 6.0	1 2.1	4 7.7	7 12.4	—
	12. 調理士・栄養士	—	1 2.1	2 3.8	1 1.8	—
	小 計	7 14.0	6 12.8	10 19.1	18 32.0	3 12.0
資格職 B	13. 美 容 師	2 4.0	2 4.3	1 1.9	2 3.6	—
	14. 看 護 婦	—	1 2.1	3 5.8	1 1.8	—
	15. 保 母	2 4.0	2 4.3	3 5.8	9 16.1	6 24.0
	16. スチュワーデス	2 4.0	5 10.6	4 7.7	1 1.8	—
	小 計	6 12.0	10 21.3	11 21.2	13 23.3	6 24.0
その他	17. スポーツ選手	4 8.0	2 4.3	1 1.9	1 1.8	3 12.0
	18. その他の職業	8 16.0	5 10.6	3 5.8	4 7.2	—
	19. 主 婦	—	2 4.3	1 1.9	1 1.8	—
	20. 職 業 不 明	4 8.0	1 2.1	14 27.0	3 5.3	3 12.0
合 計 230(延べ人数)		50 100.0	47 100.0	52 100.0	56 100.0	25 100.0

男女生徒の職種を比較してみると、他の職種では相関はみられなかったが

●男女の比較

会のスモッグの中で仕事をするのはいや、緑の中で仕事したい」(47年度)など、ひかえ目な、平凡愛好者が多くなっている。



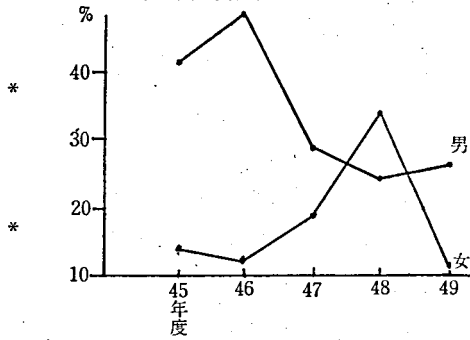
第2表 (男子) 小学校卒業時の将来の希望職種百分率

卒業年度		45年度	46年度	47年度	48年度	49年度
		人 — %	人 — %	人 — %	人 — %	人 — %
自立職	1. 実業家	—	—	—	2人 2.3 %	—
	2. 政治家	5 2.0	—	1 1.8	3 3.4	—
	3. 芸術家	15 10.2	3 4.4	1 1.8	4 4.7	—
	4. 芸人	2 4.1	2 2.9	2 3.6	1 1.1	—
	5. 商店経営	—	2 2.9	1 1.8	7 8.1	3 10.0
	6. 社長	4 8.2	1 1.5	1 1.8	1 1.1	3 10.0
小計		12 24.5	8 11.7	6 10.8	18 20.7	6 20.0
資格職	7. 学者	6 12.3	6 10.3	2 3.6	2 2.3	3 10.0
	8. 医師・歯科医	2 4.1	2 11.8	3 5.5	6 6.9	1 3.3
	9. 外交官	2 4.1	2 —	1 1.8	—	—
	10. 法律家	2 4.1	2 4.4	—	—	—
	11. 獣医(動物飼育)	1 2.0	3 4.4	—	—	2 6.7
	12. 先生(小・幼・保)	—	—	1 1.8	2 2.3	1 3.3
	13. パイロット・運転手・船長	7 14.3	6 8.8	8 14.6	10 11.5	2 6.7
	14. 調理士(コック)	—	2 2.9	1 1.8	—	—
小計		20 40.9	23 42.6	16 29.1	20 23.0	9 30.0
技術職	15. 建築設計技師	1 2.0	5 7.4	2 3.6	7 8.1	1 3.3
	16. その他のエンジニア	4 8.2	11 16.2	7 12.8	10 11.5	4 13.4
小計		5 10.2	16 23.6	9 16.4	17 19.6	5 16.7
その他	17. スポーツ選手	7 14.3	10 14.7	8 14.6	10 11.5	3 10.0
	18. サラリーマン	1 2.0	4 5.9	2 3.6	5 5.7	3 10.0
	19. 農業	—	—	1 1.8	—	1 3.3
	20. その他の職業	3 6.1	1 1.5	4 7.3	5 5.7	2 6.7
	21. 大金持(大物)	—	—	3 5.5	7 8.1	1 3.3
	22. 職業不明	1 2.0	—	6 10.9	5 5.7	—
合計 289 (延べ人数)		49 100.0	68 100.0	55 100.0	87 100.0	30 100.0

資格職で男女のカーブがまったく逆の
関係になっていた。単なる偶然かも知
れないが、母数の少ない四十九年度を
別にすると、男は減る傾向にあるのに
対して、女は増加の傾向にある。この
点は、社会人として生きるのに不利な
女子の、生活のための知恵のようなも
のが感じられて、考えさせられた（第
3図）。

小学校卒業生、特に女子の意識が、

第3図 資格職志向 男女の比較



この十年くらいの間にどの程度高まっ
たかを知りたくて、卒業文集の調査を
してみたわけだが、結局のところ、あ
まり変わっていないと結論せざるを得
ない。

ある小学校の先生から「同窓会で会
ったある教え子（女子）は、小学四年
の時の作文の『二十二歳になったら銀
行員と結婚し、転勤で海外に行く』を
その通り実行していて驚いた」と、聞
いたことがあった。それほど他力本
願でないにしても、女の子が職業を見
分けるものとする自覚は、この文集で見
るかぎり、まだそれほどうかがえなか
った。

ただ、変化らしいものがあつたとす
れば、文集の編集についてである。四
十七年度卒までは全員の将来の夢を載
せるに当って、男女別々に、しかも男
子を先に女子を後にしていた。しかし
四十八年度以降は、男女混ぜこぜにな
っており、男女別に抜き出すのに苦労
するほどになっていた。学校あるいは
教師の意識の変化ともいえるかもしれ
ない。

（氷上喜久子）

視点

女の先生

小学校教員は四〇万四〇〇〇
〇人で昨年より一万一二〇〇
人増。増加人員の八二％は女
教師。小学校教員中の女教師
の比率は全国平均で五四％で
昨年より〇・八％の伸び。

女性教師が多い県は①沖縄
七三・三％②千葉六五・八％
③大阪六五・七％④埼玉六三・
二％⑤福岡六二・九％など。

女性教師が少ないのは①北
海道二五・一％②長野二七・
〇％③鹿児島二九・五％。そ
の他わずかでも男性が多いの
は青森、岐阜、愛知、鳥取、
熊本、大分、宮崎の十県だけ。

中学は男性七〇〇人減、女
性一四〇〇人増、全教員二三
万三〇〇〇人の二八・八％が
女性で昨年より〇・六％増。高
校は一六・八％で十年来不変。

―毎年五月一日現在の―

文部省学校調査より―

高校教育と女

—東京都の場合—

日本の教育は、男女共学が原則であるにもかかわらず、義務教育を終えた段階から、共学の実質的な崩壊が目立つ。とくに受験競争の激化とともに、受験校としての男子校と、良妻賢母養成の女子校の二極分解が進行している。

その実態を調べるため、東京都内の高校が、受験生とその親を対象に出している入学案内・学校要覧の類を集め、男女の募集人員の差、男子校・女子校・共学校の教育目標の差などを洗い出してみた。

〈都立高〉

都立全日制普通高校は一〇五校ある。定員は男女別建てで女子定員の合計は一万七二五七名、男子は一万九八一五名で男女を合計すると、三万七〇七二名になる(九五ページ表参照)。

全寮制男子高の秋川高校以外は男女共学であるが、定員が別建てであるから、入学試験に関しては男女は別々の学校も同然である。一般に女子は内申点で、男子は学力検査で点数をかせぐ傾向がある。その原因として考えられるのは家庭教育の影響だといわれる。女の子の場合あまり成績が悪いのは体裁が悪いが、ある程度以上に勉強する必要もない。しかし男の子は何かに熱中してほしいと考える親が多い。そのため女子は優等生としてまっぴんなく良い点を取り、男子は英・数・国の学力検査で集中的に高い点を取るといふ。

都内公立中学卒業生は男女ほぼ同数であるが、都立校の定員は男子のほうが多い。しかし都立高の門が女子にとって男子より狭いということはないという。男

子の場合は大学受験校、女子の場合は伝統ある名門校といった私立高への進学希望者が増加していること、都立高の入試においては、学力検査よりも内申点の比重が大きいことなどの原因が考えられる。

男子定員が女子よりも特に多い学校は日比谷、九段、小山台、新宿、戸山、西小石川、北園、墨田川、両国、立川。

男子の方が多いが、それほどでもないのは、田園調布、大森、青山、豊多摩、大泉、石神井、上野、江戸川、国立である。いずれもかつて男子校だったところである。しかしまれには江北(男二三七、女一三二)や小松川(男二一四、女一九一)のように女子校だった場合もある。

女子の定員が男子を上回る学校はない。以前の女子校で女子の定員が多かった時期もあったが、女子が多いと男子の入学辞退者がふえるため、男子定員をどんどんふやしてきた。しかし男子校で女子の定員をふやすことは行なわれなかった。

〈私立高〉

都内の私立高で、高校段階で入学者を募集するのは男子校が七〇校、定員合計は一万八三五五人、女子校は一〇一校、二万三六〇九人、共学校二四校、六五五〇人、男女校(クラス編成が別学の学校)七校、三〇一〇人である。校数、定員のいずれについても、圧倒的多数が男女別学である。

都立高の定員総計は三万七〇七二人、私立は四万〇一七四人で、東京都における私立高の比重はきわめて大きい。その私立が実質的にはほとんど別学だから、東京都では、総比率としては別学が支配的といえる。

さて別学を特色の一つとする私立高が別学のメリットあるいはセールス・ポイントとしているのは何であろうか。入学案内、学校要覧の類を点検した結果では一般的に男子校の場合には、大学進学に有利さをうたっている。受験名門校は能力別クラス編成、職業高は普通課程の併設、増大、傾斜の傾向がみられる。

女子私立校の「良妻賢母主義」

女子校の場合はまったく違う。まず名称も〇〇女子高校と「女子」を強調している学校が少なくない。〇〇男子高校という名が見当たらないのと対照的である。学校当局が公的に表明している教育方針や目標も、「女子の」教育である。人間の教育ではない。男子校の場合には男子の教育、男子の育成といったことが見当たらない。女子の場合と逆である。具体的に列挙してみよう。

家庭生活の科学的改善(麹町学園)、主婦として母としての任務を十分にはたすための教育(東京家政学院、女子としての道徳・しつけ教育(小野学園)、家庭に幸福と平和をもたらすよい妻、母(大妻女子大中野)、女性として豊かな情操、あたたかな家庭人としての資質を養う(文化女大杉並)、正直さ、優しさ、淑やかさの徳、気品ある日本女性(東京女子学院)、誠意と努力と忍耐による女性としての本来の美しさ(京華)、女性らしい品位の向上(文京学園)、婦徳涵養(貞静)、女性としての教養を高め将来の

家庭人にふさわしい特性（村田女商）、女子は男子と違う大切な天性がある（東洋女）、女子の高校教育本来の道を歩む（安倍学院）。

このように私立の女子高では、女子の特性を名目とした女性差別の教育理念が建前においてさえも、あるいはむしろセールス・ポイントとして敷衍している。良妻賢母は死語ではなく、客寄せの言葉としての価値を失っていないのである。男子は人間としての教育、女子は女子としての教育、つまり男イコール人間であり、女は女であって人間ではないという日本社会の本音が明白に示されている。

ところでちょっと興味ある事実に気づいた。女子高の中でも、仏教やキリスト教などの宗教的背景のある学校の場合には、それ以外の学校に比べると、女子の特性教育をセールス・ポイントにしている例が少ないのである。たとえば千代田学園、東京立正、淑徳などの仏教系の学校や、高校段階では生徒を募集しないがキリスト教系の学校の多くも、人間としての教育をうたっている。仏教社会やキリスト教社会においても、女性差別の思

想や現実には存在する。しかしなんらかの形で神へのおそれが存在することによって、人間性に注目する視点が生まれるのではないだろうか。そうした思想的背景がないとき、人は社会の風潮を先どりし、それを生徒募集のセールス・ポイントにすることも辞さないのではないだろうか。女性の人間的尊厳をふみにじってまでも、良妻賢母や婦徳をうたうのはその好例のように思える。

男子教育についても問題がないわけではないし、それが女性差別教育と全く無関係なわけではない。しかしここでは一応「女子」教育だけに限定してみた。

入学案内の実例集

〈女子校〉

千代田女学園高（千代田）

淑知、温情、真実、健康、謙虚の教育方針で教養の偏りを少なくし、進学に対処できる幅広い教育を展開。

鶴町学園高（千代田）

科学的産業的教育を重視し、家庭生活を科学的に改善し、社会活動に参与でき

る女性を養成。健康の人生における価値を自覚させ、保健体育を重視。

東京家政学院高（千代田）

生徒はやがて主婦、母となり、進んでいく社会を男性とともに背負うという使命をもつ。その任務を十分果たすことのできる高い知性と技術の基礎と、好ましい徳操とを身に付け、さらに健康な体をつくることを目指す。

神田女学園高（千代田）

「誠・愛・勤・朗」の四徳が校訓。孔子の「恕」の精神を中核とした全人教育。

東京女高（港）

建学の精神（学問をすることのたのしみ、働くことよろこび、ものを大切にする習慣、世のため人のためにつくす奉仕の精神）を基調に、民主教育の理想にそい、心身共に健康で社会に役立つ女子の育成。

小野学園女高（品川）

現代女性にふさわしい人格、身心ともに健全な女性、家庭婦人・社会人として必要な教養、大学進学も可能な能力、就職時に役立つ実務能力を目標に、①女子としての道徳・躰教育、②女子の天分開

発、特性の伸張が特色。

品川高（品川）

高い知性、豊かな情操を涵養、明朗で健全な女子を育成。徳性を重んじ個性を伸ばし円満な社会常識を養成。自主的、積極的実践活動を通じ、責任を重んずる資質を養う。

目黒学園女商高（目黒）

誠実で愛情豊か、実践力に富む女性の育成。

富士見丘高（渋谷）

若いレディー淑女の育成。高卒に恥じない知性と教養を持ち、周囲に暖かさを感じさせ、さらに社会全体にも貢献できる豊かな心のレディーを育てる。

渋谷女高（渋谷）

清楚と謙虚を旨とし、女性としての豊かな識見と情操ある人格の完成。実力向上を第一義に、社会に有用な良識と技能を開発、同時によき家庭人としての資質を陶冶。

校成学園女高（世田谷）

豊かな宗教的雰囲気の中で、謙虚で温かく円満な人格の、人に信頼される人間の育成。

大東学園高（世田谷）

全教科で学力を、英語・数学では少人数教育、一人ひとりを大切に、自主性をいかして、生徒会やクラブ活動を。

学力・経済事情・思想信条・身体的条件などで人間を差別せず、人間尊重と機会均等とを眼目として、憲法・教育基本法が示す方向で、新しい学校づくりに全力を傾注。

目白学園高（新宿）

主（国家・民族・社会・長上）に対して随順、師に対して敬愛、親に対して孝養を尽くすことが校訓。

大妻女子大中野女高（中野）

実社会に役立つ教養豊かな日本女性、新しい時代に適応し、心身ともに健康で知識技能に長じ、家庭に幸福と平和をもたらし「よい妻」「賢い母」の育成。

東京文化高（中野）

女子の人間性の向上と、合理的生活様式の普及を柱とした建学の精神に基づき国際的な視野を持ちつつ日本文化を尊敬し、生活合理化を推進する創造力と実行力豊かな女性の育成。

東京立正女高（杉並）

豊かな情操教育（特色ある宗教行事による心の統一と安定、不屈の精神で慈と愛に満ちた「真人間」を育てる）、確実な基礎学力、自主性と社会性の育成。

文化女子大杉並高（杉並）

質実清楚の伝統的校風のもと、誠実で愛情豊か、実践力に富む女性の育成が目標。女性として豊かな情操、暖かな家庭人としての資質を養うため、音楽・美術・書道等の芸術科目と食物・被服・礼法等は必修正科。

東京女子学院高（練馬）

人間として、女性としての本来の姿であるはずの正直さ、優しさ、さらに淑やかさの徳、清潔整頓の習慣、近來なおざりになりがちなき己忍耐の気性等多面的な指導態勢の下に、もろもろの事象の正確な理解、的確な判断、批判力を養い、幅広い教養と健康で明朗な気品のある日本女性の育成、ひいては世界の日本人となる国際性を修得させ、本校教育の実を挙げるよう、わけても生活指導の徹底を期すること等が全校一体の努力目標。

豊島岡女子学園高（豊島）

道義実践、勤勉努力、一能専念の方針

で、家庭の校風の中で基礎学力の充実に努力し、女性として豊かな人間性の涵養。

巢鴨女高（豊島）

敬虔真摯（両親・兄弟・友人・先輩・先生・社会・国家さらに崇高な神仏を慕う生活態度を身につける。宗教科を正課、五大仏教行事を行なう）

聡明快活（明朗快活な近代女性を育む）
純情奉仕（日本女性にふさわしい心暖まる優しさ、こまやかさを養い、品位ある言葉づかい、服装、態度など礼儀作法の徹底で助けあいの精神・態度を身につける）

京華女高（文京）

きびきびした態度、正しい服装や言葉づかいなどまじめで高校生らしく、また誠意と努力と忍耐をもって女性としての本当の美しさをがモットー。

文京学園女高（文京）

誠実・勤勉・仁愛を校訓とし、女性らしい品位の向上と同時に適性と能力に応じた大学進学指導、実社会で役立つ実践教育、家庭人となるための技能・情操教育など、りっぱな社会人・家庭人の育成。

貞静学園高（文京）

婦徳涵養を主眼に創立以来、一貫して女性の教養向上が重点。日本女性の優れた特性を練磨・發揮するため日常生活の礼儀正しさ、言語の明晰さ、美化の実践などで、清楚な環境を作り、気品を高め独特の行学を通して、美しい心の実現に努める。

村田女商高（文京）

生徒の個性を伸ばし、健康で明朗な女性を育てる。女性としての教養を高め、将来の家庭人にふさわしい特性を養う。

東洋女高（文京）

女子には男子と異なる大切な天職があり、女子はその天性に従ってそれぞれ個性を伸ばし、その天職の才能を發揮することが創立者の遺訓。新時代の女性にふさわしい教養と知性の体得。

創立者は、高僧といわれる人物はみなその母親が優れていたことから、将来よい母となる女子の教育こそ重要と確信して、本校を創立。

淑徳高（板橋）

すべての生徒に人としての誇りと自信を持たせよう努力。……すべての差別

の否定による人々への愛を宣言した仏陀の心を現代にうつし、「生きることと愛と平和の尊さ」の認識の徹底から淑徳の教育は出発しなければならぬ。

桜丘女高（北）

校訓は勤勞（骨惜しみなく、陰ひなたなく働くことを楽しめ）と創造（考えよ、工夫せよ、効果的に進歩的に）。勤勞意欲と創造性に富む女性がモットー。

安部学院高（北）

家庭的な厳格さと暖かみのある雰囲気、社会人として最も大切な挨拶と礼儀の訓練を毎日行ない、服装、みだしなみについても校服その他を定め、パーマネント等の頭髮の加工を一切厳禁する等華美に流れるのをいましめ、女子の高校教育本来の道を真剣に歩み続ける。

武蔵野高（北）

知徳をみがき、応用能力を伸ばし、人格を陶冶し、心身ともに健全な、よき社会人としての女子の育成が使命。

東京成徳高（北）

おおらかな徳操、高い知性、健全な身体、勤勞の精神、実行の勇気を鍛練・涵養。

滝野川女子学園高（北）

高い知性と豊かな個性を養い、心身ともに健康で真に社会に貢献できる有為な近代女性の育成。生活指導に重点を置き、知育に偏よらず、徳育・体育の均衡のとれた人間形成。

潤徳女子高（足立）

教育基本法に則り個人の尊厳を重んじ、真理と平和を愛する豊かな人間の育成。

1 基礎学力の充実をはかり、創造力に富んだ個性を伸ばす。

2 社会性、科学性に満ち、かつ情緒豊かな人間の育成。

3 健康な精神を養い、体力の向上を目指す。

4 自主的精神を養い、個人と社会の利益幸福のために行動実践できる人間の育成。

〈男・女高〉

東亜商高（中野）

広く世界に出て、他人との調和を求め、独立、自尊の意気で事に当る人物の育成。
男子部

商学科（経理、経営、商品広告のコース）

普通科（大学進学）

女子部

商学科（商業、経理の二コース）

秘書科

女子部の特色

従来の実業教育の精神に加えて婦徳育成を根本に、ビジネスライクな職業婦人の養成を目指し、優れた母性を育てるとともに、品性ある明朗な職業人にふさわしい知識・技能と職業に対する健全な思想を身につけさせる。

駿台学園高（北）

人物をつくれが校是。礼儀、勤労、置かれた場所の第一人者たれ。

〈共 学〉

国学院高（渋谷）

教育方針

日本国民として必要な道義の高揚と躰教育に重点を置き、社会人としての完成を目指す。

実践目標

1 誠実で明朗かつ健康で感謝して日々の

生活を楽しむこと。

2 人を敬愛し平和で民主的な社会生活を楽しむこと。

3 自由と責任をわきまえ、自主的な生活を築きむこと。

京華商高（文京）

進学・就職のどちらにも対応できる指導、教養と基礎学力を身につけ、規律を重んじ人格をみがく。

帝京高（板橋）

努力をすべての基とし「正直・礼儀を重んずる」の校訓にのっとり、前途洋々たる男女を心身ともに健全な自由で責任感に富む公民として育成するのが目的。

48年度から男女共学を採用。これからの社会では女性も高度の知識と技術が要求され、……女性のための一貫教育と同時に、男女がそれぞれの特性を生かして自然なたちで互いに理解・尊重・啓発し合いながら幅広い人間形成をはかってゆきたい。

成蹊高（武蔵野）

人格教育、個性と鍛練を重視の教育。

拓殖大一高（小平）

国と郷土と学校を愛する、礼儀を正し

くし規律を守る、学問を尊び心身を鍛える、が校訓。

二松学舎大付高(千代田)

仁愛・正義・弘毅・誠実の徳性と優れた知性に基づく人格陶冶が教育の目的。次代を担う有為の人材の養成。

〈男子校〉

正則高(千代田)

1 平和と民主主義(憲法の定める主権在民の精神を体得し、民主主義を自覚・尊重・実践し、すすんで平和を愛する人間を育てる)

2 民族意識と国際連帯意識(日本民族としての正しい自覚を持ち、世界のすべての人々との連帯意識を身につけた人間を育てる)

3 集団の一員としての正しい生き方

4 健全な体力と科学的創造精神

5 個性と豊かな情操

日体荏原高(大田)

現状に満足せず、向上に努める。身体をきたえ、学習に打ちこむ。耐えぬく心を育て、自主的に歩む。互いに尊重し、協同の精神を体得する。

攻玉社高(品川)

1 知名度と名門度が高く、有名大学への進学率の高い学校

2 中学から高校へ継続進学のできる学校

3 教師が暖かく世話する学校

4 非行化と不良化のおそれのない学校

5 学習意欲を高め、落伍者を出さぬよう心を配る学校

6 ベテラン教師が多く、思想が穩健中正で、偏向性のない学校

7 規律と責任感を身につけさせる学校

8 放縦・無軌道に走らず自主自律の気品のある人格陶冶をする学校。

目黒高(目黒)

明朗・勤勉・礼節を柱に人格練成。普通課程の生徒は、適性や能力に応じた大学への進学に対応できる学力の養成、機械課程の生徒は、中堅技術者養成のための基礎的知識と技能の修得。

保善高(新宿)

人間の尊厳性の自覚、能力の開発とその向上、広い視野と深い洞察力の涵養。

専修大付高(杉並)

円満な知能と充実した体力。積極的に自力で学習し研究し考え、考えを表現で

きる能力。常に広い視野に立って意見をのべ、公正な立場で行動できる能力。社会の恩を感謝し、その恩にむくい、社会の発展と人類の平和に奉仕する精神。これらを身につけさす。

本郷高(豊島)

教育の目標は、強健、厳正、勤勉。

強い意志と強い体力をもち、自らを厳しくみつめ、正しい判断ができ自分の務めに責任をもつ人間を育てることによって、知育・徳育・体育の均衡のとれた人間教育を行ない、生徒一人一人が将来それぞれ個性を生かして、よりよい国家社会に参加できるよう育てる。

日大豊山高(文京)

中道調和を基調とした心身ともに健全な全人教育。

京華高(文京)

大学進学に重点をおき、人間教育・情操教育を重視。

城北高(板橋)

心身ともに健全で自律的な努力に徹し得る人物の育成が建学の精神。将来、国家社会の中堅指導的人物育成のため秀才教育に重点。

大東文化大一高(板橋)

○剛健の氣風と中正の思想と強い意志力の努力型青年を育成

○英語とラグビーと生活指導に重点

○家庭教育を重視、生徒・教師・父兄三位一体の教育方法

○躰教育の徹底(服装・環境・規則)

聖学院高(北)

教育の使命は「神と人」とに献げつくす」人間を育成することにある。社会的地位や財産が目的ではなく、たとえ世の人に知られなくても広く深い人類愛を持ち続ける人、たとえ縁の下で力持ちであろうと黙々と社会に奉仕する人、人生をたくましくたたかい生きる信念と力をもつ人になつてもらいたいのが願ひであり、祈りでもある。そのための基礎的な学力を身につけ、豊かな情操や広い心を養うよう師弟一丸となりまい進している。

成立高(北)

校訓は礼節・勤儉・建設。

人間の尊厳と使命感を自覺させ、互敬の精神を育み協力して民主的な平和国家の建設に貢献しうる国民を育成する方針。

(安江とも子)

視 点

教師、生徒、父母の男女共学観

宮城県教組は県下の全公立中学校の教師全員、中学三年生の三分の一の生徒、各校の三年生一クラスの父母を対象に高校進学についてアンケート調査を実施した。

男女共学制への賛成は、教師六五%、父母四五%、生徒二九%で教師が最高。一方、別学希望は父母が最高で四三%、続いて生徒二三%、教師一七%となっている。

共学と別学の併学を認めようとしているのは教師の一二%。生徒の四五%は、「どちらでもよい」と答え、父母の一〇%は「わからない」と三者三様の姿勢がうかがわれる。

なお高校全入については、父母の七四%が賛成、反対は一六%なのに対し、教師の賛成は六三%、反対二七%。生徒は賛成五五%、少し増設二六%で、積極的反対はほとんどなく、「わからない」が一七%となっている。

教師	共学 65%		別学 17%	併学 12%	4%
			わからない		
			その他 2%		
父母	共学 45%		別学 43%	わからない	10%
			わからない		
			その他 2%		
生徒	共学 29%	別学 23%	どちらでもよい 45%		3%
			わからない		
			その他		

高校の募集人員 1

〔都 立 高〕

学 校 名				学 校 名			
男 女		前身校		男 女		前身校	
11群	九 段	236 124	東京市立1中 都立九段中	豊多摩	225 180	府立13中	
	日比谷	279 126	府立1中	34群 井 草	202 203	府立18女	
	三 田	157 158	府立六女	大 泉	225 180	府立20中 府立大泉中	
12群	赤 坂	22 23	市立赤坂商 都立赤坂女商	石 神 井	225 180	府立14中	
	城 南	180 180	府立22中 都立城南中	92群 赤 城 台	157 158	府立20女	
	八 潮	180 180	府立8女	向 丘	157 158	都立向丘女 統合 都立本郷女高	
13群	大 崎	180 180	府立大崎女	文 京	202 203	東京市立3中 市立豊島中	
	大 南	202 203		41群 小 石 川	261 144	府立5中	
	雪ヶ谷	202 203	雪ヶ谷女	竹 早	135 135	府立2女	
14群	小 山 台	252 108	府立8中	42群 豊 島	180 180	府立10女	
	田園調布	162 108	都立大田高	板 橋	202 203	板橋女	
15群	大 森	200 160	府立23中	北 園	260 100	府立9中	
	羽 田	135 135		43群 大 山	202 203		
21群	新 宿	240 120	府立6中	北 野	180 180	府立12女	
	駒 場	180 180	府立3女	志 村	205 200		
22群	戸 山	270 135	府立4中	44群 北	180 180		
	青 山	210 150	府立15中 東京市立多摩中	城 北	205 200	府立14女	
23群	広 尾	140 130		91群 一 橋	112 113	今川高・神田高	
	都立大付	135 135	旧制都立高専常科	忍 岡	157 158	都立忍岡女	
	目 黒	180 180	都立目黒女	竹 台	135 135	府立4女	
24群	桜 町	202 203	府立11女	51群 京 橋	180 180	都立京橋女商	
	玉 川	140 130		日 本 橋	90 90	都立日本橋中	
	深 沢	180 180		紅 葉 川	90 90	府立紅葉川女	
25群	千 歳	203 202	府立12中	52群 上 野	200 160	東京市立2中 都立上野中	
	松 原	135 135		白 鷗	180 180	府立1女	
26群	千 歳 丘	205 200	都立千歳女	53群 足 立	202 203	都立足立女	
	明 正	205 200		江 北	273 132	府立11中	
31群	鷺 宮	202 203	府立家政 都立鷺宮女	61群 墨 田 川	230 130	府立7中	
	武 蔵 丘	205 200	府立21中 都立武蔵中	両 国	285 120	府立3中	
	練 馬	180 180		小 松 川	214 191	府立7女	
32群	富 士	202 203	府立5女	62群 本 所	135 135	東京市立本所実践女 都立本所女	
	西	261 144	府立10中 府立玉泉中	葛 飾 野	202 203	府立17中	
33群	荻 窪	135 135	都立荻窪女	南 葛 飾	180 180	府立16女	
	杉 並	202 203		63群 深 川	180 180	東京市立一女 都立深川女	
				東	180 180	浅草高	

集 人 員 2

〔私立女子高つづき〕

〔私立男子校〕

地区	学校名	人員	地区	学校名	人員	地区	学校名	人員
世田谷	東京女学館	普 40	文 京	貞静学園	普200	千代田	錦城学園	普150
	実践女子学園	普 80		東洋女子	普250		明大明治	普130
	松蔭	普250		淑徳	普300		正則学園	普150
	佼成学園女子	普350	板 橋	東京家政大付	普360	港	東洋	普200
	成徳学園	普450		日大豊山女子	普150		正則	普300
	東横学園	普400		理数 40			高輪	普300
	鷗友学園女子	普200	北	桜丘女子	普200	大 田	東海大高輪台	普300
	二階堂	普200		武蔵野	普750		日大三	普300
	国本女子	普150		星美学園	普 60		森村学園男子	普 20
	恵泉学園	普100	中 央	東京成徳	普550	品 川	明治学院	普230
	昭和女子大付	普150		滝野川女子	普400		芝浦工大工業	普200
	玉川聖学院	普250		順天	普200		芝	普 50
	調布	普 50	台 東	日本橋女学館	普200	目 黒	麻布	普300
	青葉学園	普 40		上野学園	普100		日体荏原	普450
	大東学園	普 90		荒 川	普114	渋谷	立正	普300
新 宿	駒沢学園女子	普300	足 立	潤徳女子	普400		攻玉社	普250
	聖ドミニコ	普 80		江 東	普250		東京学園	普200
	日黒星美	普 80	葛 飾	中村	普250	世田谷	自由ヶ丘学園	普200
	成女	普200		共栄学園	普250		日黒	普450
	学習院女子	普 50		江戸川	普500	世田谷	東海大付	普300
	目白学園	普300	八王子	愛国	普200		国土館	普150
	堀越(女子)	普120		東京純心	普150		世田谷	普280
	大妻大中野	普500		共立女子第二	普240	新宿	武蔵工大付	普 90
	東京文化	普230	武蔵野	八王子実践	普200		駒場学園	普300
	宝仙学園	普200		吉祥女子	普350		日本学園	普400
杉 並	光塩女子	普 25		藤村女子	普400	中 野	駒沢大付	普500
	文化女子大杉並	普200	立 川	立川女子	普450		海城	普400
	女子美大付	普170		桐朋女子	普 50		成城	普450
	菊華	普200		晃華	普 50		保善	普270
	東京立正	普320	町 田	鶴川	普200		早稲田	普100
練 馬	富士見	普350		国立	普 80	杉 並	早稲田実業	普200
	東京女子学院	普350		小平	普400		明大中野	普220
	豊 島	普380	東村山	白梅学園	普400		東亜商業	普150
文 京	豊島岡女子	普400		日体桜華女子	普400	豊 島	堀越男子部	普225
	巣鴨女子	普150		保 谷	普250		専修大付	普300
	京華女子	普200	清 瀬	東星学園	普 40		国学院久我山	普550
	文京学園女子	普500		田 無	普300	文 京	佼成学園	普350
	淑徳学園	普200		計	101校			
					23609人			

〔都立高つづき〕

高 校 の 募
〔国立大学付属高〕

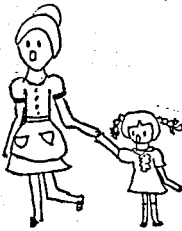
学校名	男	女	前身校	学校名	男	女
64群 江戸川	225	180	府立16中 都立江戸川中	教育大附属駒場(男)	50	
小 岩	202	203		〃 大塚(共)	80	80
71群 富士森	180	180	八王子市立女	学芸大附属(共)		400
南多摩	180	180	府立4女	お茶の水女子大附属(女)		40
日 野	180	180				
72群 国立	245	160	府立19中	〔私立女子校〕		
立 川	252	108	府立2中			
73群 北多摩	180	180	立川市立高	地区	学校名	人員
昭 和	180	180	昭和町立高	千代田	千代田女学園	普200
74群 武 蔵	202	203	府立13女		嘉悦女子	普200
三 鷹	180	180	三鷹市立高		麹町学園女子	普300
75群 府 中	180	180	赤松女高		大妻	普 50
神 代	180	180	府立15女		和洋九段	普150
76群 小 平	180	180			東京家政学院	普250
久留米	180	180			神田女学園	普400
東村山	180	180			共立女子	普 30
葛西南	225	225		港	順心女子学園	普300
高 島	225	225			戸板女子	普300
淵 江	180	180			頤栄女子学院	普250
足立西	90	90			東京女子	普300
町 田	157	158	町田女		連土学園	普 40
五 日 市	45	45			山脇学園	普 30
多 摩	135	135	府立9女		慶応義塾女子	普100
国分寺	180	180		大 田	蒲田女子	普150
東大和	180	180		品 川	立正学園女子	普300
福 生	180	180			中延学園	普150
忠 生	225	225			青蘭学園	普200
片 倉	225	225			小野学園女子	普250
永 山	225	225			町田学園女子	普150
府中東	225	225			日本音楽	普 50
保 谷	225	225			品川	普200
狛 江	225	225		目 黒	洗足学園第一	普200
清 瀬	180	180			日出女子学園	普120
調 布	135	135			トキワ松学園	普350
久留米西	180	180			八雲学園	普250
秋 川	240	(男子全寮制)		渋谷	富士見丘	普500
合 計	19815	17257	(差2558)		関東女子	普400

高 校 の 募 集 人 員 3

〔私立男子校につき〕

〔共 学〕

地区	学校名	人員	地区	学校名	人員	地区	学校名	人員
練馬	武蔵	普 40	千代田	二松学舎大付(共)	普300	町田	桜美林(共)	普280
	早大高等学院	普600					町田学園(共)	普200
豊島	学習院	普 60	大田	東京(共)	普300		和光(共)	普120
	芝浦工大付	普200				小平	拓大付一(共)	普350
	本郷	普400	渋谷	国学院(共)	普600	昭島	啓明学園(共)	普 50
	豊島実業	普100		青山学院(共)	普200	東久留米	自由学園(共)	普男若干 女 30
	巣鴨	普350	世田谷	東京農大一(共)	普男240 女160	高等部は募集しない		
文京	東京電機大付	普250		日大桜丘(男女)	普男500 女200	女 子 校		
	日大豊山	普500		成城学園(共)	普 50	女子学院 (千代田)		
	独協	普100	杉並	中大杉並(男女)	普男150 女150	雙葉 (〃)		
	郁文館	普350		日大鶴丘(共)	普500	白百合 (〃)		
	昭和第一	普200		日大二(男女)	普男250 女200	三輪田 (〃)		
	京北	普300	豊島	城西(共)	普男450 女100	聖心女子学院(港)		
	京華	普400		豊南(男女)	普男400 女100	東洋英和 (〃)		
板橋	城北	普650	文京	駒込(共)	普男300 女200	田園調布雙葉(世田谷)		
	大東文化大一	普350	板橋	帝京(共)	普400	立教女学院(杉並)		
北	聖学院	普650	北	駿台学園(男女)	普男280 女70	女子聖学院(北)		
	成立	普350	葛飾	修徳(男女)	普男350 女100	跡見学園(文京)		
台東	岩倉	普100	八王子	八王子(共)	普500	桜蔭 (〃)		
荒川	開成	普100		帝京大(共)	普100	森村学園(港)		
足立	足立	普350	武蔵野	盈進(共)	普200	立華(大田)		
墨田	日大一	普150		関東(共)	普250	香蘭(品川)		
	安田学園	普250		成蹊(共)	普100	帝京女子(渋谷)		
江戸川	関東第一	普100	三鷹	明星学園(共)	普170	川村(豊島)		
八王子	工学院大付	普200		大成(共)	普300	錦秋(文京)		
	聖パウロ学園	普 60	府中	明星(男女)	普男400 女160	男子校		
武蔵野	法政一	普350				暁星(千代田)		
国立	桐朋	普 50				駒場東邦(世田谷)		
小金井	中央大付	普500				聖橋(荒川)		
小平	錦城	普300				自由学園(東久留米)		
	創価	普100				共 学 校		
東村山	明治学院	普160				高千穂(杉並)		
	明法	普 70						
	計 70校	18355人						



女の子は こう育てたい

女的情況を変えるには、次代の子どもを変えるはかない。では現実には、わが子、わが娘はどう育てたいか。「あごら東京」四月の例会では、それぞれの具体的な意見を出しあった。それをもとに、

- ① 自分が受けた教育
 - ② その体験に立って自分の子をどう育てたいか
 - ③ これからの男を変える方法
 - ④ 次の世代の教育に関する提言
- についてまとめてみた。なお男性の意見として生活研究所堀口健二先生のご意見を加えた。

10代

昭和29年～39年
高度成長と共に物質的
には豊かに育つ世代

あまやかされている女の子

小林 みか

小学校三年（九歳）

わたしのクラスでは、だいたい女の子のほうが、やさしくあまやかされて教育されているようです。算数のときは、男の子のほうがよくできるようです。そうじのときは、男の子のほうがふざけるようです。国語のかん字

なんかは、女の子のほうがきれいにしせいよく書けるかんじです。また図工のときは、男の子のほうが早くよくできます。ここにあげたいろいろなじゅぎょうのとき、ふさげるのは、だいたい男の子のほうです。

男の子を多くあてる先生

河賀^{こうが}みどり

中学校三年（十四歳）

数学の授業のときでした。宿題の答え合わせのとき先生は困りました。だれに答えてもらおうか迷ったのです。

「男子は高校入試のとき女子よりむたいへんだから。同じ七十五点だったら、（男子のほうが学力が低く見られるから）女子のほうを選ぶのですよ。では○君答えて下さい。」

私はそのとき、女子は得だな、もしもう一度生まれ変わるなら女子のほうがいいやと思いました。ところが家に帰って近所のお姉さんに「男の子のほうがよくできるわけ？ 男の子のほうが女の子より勉強ができないと将来困るから、男の子のほうを多くあてるの？」とたずねられました。答えるのに少し考えましたが、「うん。そうかも……」と答えておきました。

四民平等といわれる世の中なのに、たくさん差別があ

ります。社会の時間にもこの問題が出ました。貧民と金持の差。社長と平社員の差。

この二つしか出なかったけれど、男女の差だってあります。男子じたい「男は偉い」と思っているらしい。女子が日直だったとき、いくら注意してもききいれてくれないのに、男子のときは注意をききます。女子を多少ばかりにしているみたいに感じられます。

女子でもこのごろは男子を呼びすてにする人がふえてきました。男子は前から「おい○○ノ」です。「サン」づけにして呼べばいいのにナと思ったこともありましたが、この前、サンづけで呼ばれたら、呼びすてになれたせいか、やっぱり呼びすてのほうがいいやと思ったことは確かです。

私が結婚するときは父のような人とは絶対に結婚しません。なぜなら毎日「女はブタだ」とバカにするからです。もし子どもができたならば、正義感の強い明るい子になってほしいと思います。男女の差別をするようにはなってほしくありません。

かわいくて強い女に

斎藤 泉

高一（十五歳）

もし私が、万が一にも結婚できて、女の子が生まれたら

ら、私は「かわいい女」に育てたい。七十、八十のヘンツクババアになっても、かわいいのある女にしたい。

かわいげとは何だろうか。私のイメージでは、すなおであるということにつながると思う。やさしいとか、おろこうさんであるということでは決して——ない。頭にきたときはどなればよい。悲しいときは泣きわめければよい。じつとがまんの、よい子ちゃんには絶対にしたくないのだ。

がしかし、すなおであればよいというだけのものではない。たとえば大地震が起きたとする。その時に地震と一緒に揺れているような、いくじのない子であつてはいけない。地震に立ち向かっていくぐらいの激しい気性がなくては、とてもこれからの世の中、生きてはいけなと思う。

ところで、人は、いい性格でも何かと誤解されることが多いと思う。それは、その人の態度によるものだと思う。

この間ラジオで「母の態度」という番組をやっていた。子に対しては母は語尾に「ね」をつけ、主人に対しては「か」をつければよいというのである。つまり、子「おかあさん、ぼくががしちゃったよ」

母「またけがしちゃったのね、かわいいそくに」

主人「ママ、きょうの仕事はたいへんだったよ」

妻「まあたいへんだったんですか、ごくろうさまです」
こうやって、「か」と「ね」をつけていけば、「かね」

すなわち金が集まってくるというのである。くだらないと思うが、まあ一理の半分ぐらいはあると思う。ただしこんなのを聞いて、すぐ実行しようなどという主体性のない子なら、もう生まれたときにロッカーの中にでも入れてしまったほうが世間のためかな。

自然の中で堂々と見える人間に

後藤 宏子

高一（十六歳）

私に子どもが生まれたら、男の子なら「らいおん」女の子なら「ひめ」という名前をつけようかなと思っていました。らいおんは明るくたくましい少年で、ひめはやさしくてほんのりあたたかい、かわいい女の子。でも、他の人にこの好みを押しつけてはいけなのだろうと思います。「女の子らしく」「男の子らしく」育てなくたって、愛する人をみつけることができ、愛されるのに十分な人間になればよいのです。リボンをつけようがつけまいが、女の子はやっぱり女だし、玉子焼を焼いたって男は男にちがいないのです。だから親は男の子として、女の子としてでなく一人の人間として子どもを育てればよいのではないかと思っています。生きることの喜びや、美しさを教え、自然の中で少しも小さく見えない、

堂々と生きていける人間に育てたいと思います。

私にとって、自然は少し怖くて、とても大きいものです。もしかしたらすなおで豊かな心をもって、まっすぐに信じたり考えたりできる人間だけが、自然や真実の世界の中に、見おとりしないで存在できるのかもしれない。私の子どもは、山や海や草原の中にとけこんで、そのものの一部になりきれずともであってほしい。遊んだりおしゃべりしたり、何かを感じたり、感じた気持ちを人と分けあうことなどが、私よりずっとすなおにできる、自然ととけこめる子どもだとうれしいと思います。

共働きの母をみて考える

鈴木 早苗

大学一年（十九歳）

私の母は父と同じく職業についています。また母は家庭内でも主婦業という一種の職業を持っています。私は母が職業を持つていることに賛成です。なぜなら経済的な面で自立できるからです。母を社会が一個人として評価しているからです。これからは女性であっても、女性としてよりもむしろ人間としてありたいと思ひ、職業に就く人が多くなると思ひます。職業には主婦業も含めることができますし、理想でもあります。そのときには

女のうける歴史的、文学的教養、女の子をあやすのに使われる歌やおとぎ話はいずれも、男を謳歌するようにできている。あらゆる国家は男がつくったもので。地球を発見し開発する道具を作ったのも男、地球を治め、それを彫刻や絵画や書籍で一杯にしたのも男。子どもの文学はいずれも男の傲慢と欲望が創り出した神話を反映している。

（シモーヌ・ド・ボワオワール）

夫からの主婦に対する正当な評価として、主婦が手当を受け取れるはず。しかし実際問題としては無理だろうと思ひます。

母は、時代から時代への過渡期に存在しているのだと思ひます。二重の職業を、女性であるからという理由で甘んじ、一方では不満を多分に抱いて。私の父と弟は滅多に家事など手伝いません。またそれを当然だと自他ともに認めています。私は不満ですが、それだからといって男女平等をやたらにふりまわそうとは思ひません。それは、男女の生理的な違いを無視しては危険であり、誤りもおこるからです。

しかし家事に関しては、共稼ぎの家庭では男性も女性と同様にお互いに分担できるはずですし、そうすべきです。そのためにも、女性は女性としてより一個の人間として生きて行くべきであり、その面を育てられるべきだ

と思います。男女同権をなしうるには、女であることよりむしろ人間であらねばならないと思います。女性が女性であることに甘んじているうちは、男性のエゴイズムが通用してしまうのです。女性も男性を甘やかす非をみとめなければなりません。

共働きの母であっても、弟が父の真似をして手伝いをせぬことに正当性を感じていることからもわかるように家庭教育が重要性をおびているように思います。それ故まずそれぞれの家庭内から、女性の立場を確立していくべきではないでしょうか。

20代

昭和21年～29年
戦後新しく生まれ変わった日本と共に。だが幼児期には混乱も

働く先輩からの

情報が欲しかった

萩原 洋子

・女子校で差別を知らずに育って

戦後ベビーブームの頂点、昭和二十二年に私は生まれた。「あの子たちが高校へ行くときは入学難は必至」と

いうムードの中で、何の疑問も持たずに中高続いた女子校に入学した。校長、教務主任はもとより教師はほとんど女性で占められ、学校運営の実権はすべて女性にぎっていた。その後女子短大に進学したが、そこは女子大学の老舗で女の先生が数多く活躍していた。そのうえ同じ年ごろの男子生徒と口をきく機会などまったくない状態だったので、世の中に男女の差別があることを知らずに、のほほんと育ってしまった。

短大卒業後、ある大手銀行に勤務した。たった一枚の時候のあいさつ文も、私が書けば男子行員、課長、部長とまわってからでなければ発送できなかった。女子はお茶くみ雑用に不便だから雇っておくものにすぎなかった。男子中心の組合は女子行員の地位の向上には真剣に取り組んではいなかった。こんな職場に長くいる必要はないと思い、職業案内をじっくり読んだ結果、社会福祉の仕事に転職しようと思い、ある大学の夜間部の社会福祉学科に編入学した。人権を守っていこうという新しい分野の仕事ならば、資格さえあれば男女の差別なく働いていけると、世間知らずの私は思い込んでいたのだった。卒業を機会に、四年間勤務した銀行を退職し、ある精神病院に勤務した。しかし、病院も銀行と大同小異の男中心社会だった。

いま、「あごろ」の事務局に働いている。ここはまさに「女性差別知らず」の職場だ。が、ときどき思う——この中に安住することは女子校にいるようなものではない

いか——と。また、私が自己の生活の充実だけを求めて転職をつづけてきたことへのうしろめたさもある。銀行に勤めて男女差別とともっと闘うべきではなかったかと思うこともある。「すぐやめてしまおう。だから女はダメなのだ」と思わせる材料を私も一つ残してきたのだから。

世の中にはどういいう仕事があつて、そこではどういう人たちが、どういう状態で働いている、ということを学校時代に教えられた記憶はない。

高校の「進路指導」は、A大学○○学部なら合格、B大学ならば△△学部でなければむり、という振り分け指導だった。その時点で数年先輩の実際に職場で活躍している人の体験談が聞ければ、私の試行錯誤も一回ぐらいい減っていたかもしれない。

・親の權威を押しつけないで育てたい

「息子がいるのに、娘の嫁ぎ先に親が住むとは何ごとだ」と父はいう。知人に息子たちより娘夫婦と住みたいという老人がいるという話をしたときのことだった。そのくせ父は、ひとりっ子の私に対しては老後の世話を期待して、ひそかに「おとなし向きの養子候補者はいないか」と願っているのである。

親の重さにたえかねて育ったので、自分の子どもには親の權威を押しつけることだけはしたくないと思う。「自分の子」という気持を持たずに、社会の一員として対等な立場で生活していきたい。

先進国においては、教育と経済は密接な関係にあるので女性のための高等教育の一般的なレベルやスタイル、特に今なお存在する多くの女性機関だけのそれは、二十世紀半ばの科学や科学技術の発達した社会の技術というよりも、ルネッサンス人文主義時代のものに似ている。(中略)かつては学問の場であり、少数の知的職業者の訓練される場所であった大学は、今日では技術政治の要員を養成する所でもある。女性に関してはそのような現象はない。女子大学は、普通には学者も、知的職業者も、技術者も養成していない。また男子大学や男子の教育が第一目的の共学大学のように政府や企業によって経済的に援助されることもない。

(ケート・ミレット)

価値観が多様化し、文明が急速に進歩している中で、二十年後の世界など想像もつかない。その世の中に生きていかなければならない子どもに向かって、何をどう望むことができるだろうか。当然のことながら、親は子より数十年は先に死んでしまふ。そういう親の立場を考えれば「——こう育てたい」などとおこがましいことは何一つ言えないと思う。女でも男でも健康に、自分の道をすすんでいってほしいと思う。親も「正しいと思う道を歩いている」のだということだけを教えていきたいと思う。

妻に家事をさせて

平気な男の育ち方

永松 三恵子

昭和二十三年生まれの私は女子差別教育というよりはちやうど今の受験地獄のはしりの時代の教育を受けたのではないかと思う。「女の子は勉強しなくとも……」というよりは、学校側にとって男も女も有名校に入るための頭数の一人という感じで、特に男女差別教育というのは意識しなかったような気がする。

ところが家では反対で、母が私にだけ家事をやらせて兄にはやらせないのを大変不満に思ったりした。大正生まれの母にすれば自立した女などというのはおおよそ未知の概念だったから、要するに売れ口のよい娘にする教育を重んじたに過ぎなかったのだ。一方私は「女は損だ」というよりも、「なぜ私にだけ大きらいな家事をやらせるのか」ということがすこぶる不満で、子ども特有の敏感な不平感を抱いていた。

しかし今思えばこの子ども特有の敏感な不平感……：要するにえこひいきへの鋭敏な反応、おやつの少なさに対する抗議など……は大人になっても失ってはならない大切な感覚ではないだろうか。今の教育というのは、小

学生時代にだれでももっていた「だれそれちゃんと同じ」でありたいと思う気持ちを十数年かけてつみとっていく作業なのではないかと思う。要するにそれが今の差別、選別教育であり、自分と他人が助け合うよりも、個人の違いを見出し、いろんな意味の被差別者であっても差別を不平等と思わない感覚を育て、不平を言わず、それを己れの特性を知ることと名づけたのではないだろうか。不平等に扱われても世の中の諸般の位相の一つと無意識のうちにとらえ、不平等感を根こそぎにすることが今の教育のプロセスの中には含まれていると思われる。大人になっても子ども時代の平均志向を失わず、みんながそれぞれの差別的取扱いにに対し声高に不満の声をあげていたら、もう少し住みよい世の中になると思うのだが。

一方、家事教育を一切受けなかった兄はお茶一つ入れられない男に育った。家でもお茶一つ入れるのが死ぬほど億劫な男は、会社でも自分でお茶を入れようとはしないだろう。彼は共働きの愛妻が疲れた顔をして台所に立っていても、テレビを見ながら平穏な神経でいられるよ



うだ。もしこれが逆だったら——つまり同じように働いてきた共働きの夫が台所に立っていたら——妻の神経はすまなさでビリビリすることだろうに。この神経の差は男女双方に血肉となった分業制に源を発するのはいうまでもない。

ところで私は思うのだが、もし子どもを育てるとしたら（現物がいないのであまりピンとこないが）男でも女でも一人で暮せる人間、つまり稼ぐことも身の回りの用もできる人間に育てることはその方法論はともかく当りまえである。しかしそれ以前に自分の子どもには人間としてもっと根源的なもの、愛情豊かな人間に育ってほしいとか、やさしい子であってほしいとか、人を裏切らない正義感の強い子云々とかどうしても人間性の側面を第一義的に考えたくなる。

それと同時に男の子には家事能力を身につけさせる。どだい家事というのはいくら専門職のようにおだてたって、女中さんでもいて全部やってくれれば極めてらくちんな雑用にすぎない。私に限って言えば料理くらいは別としても、だれかがやってくれればすすんでやろうとはしない種類のイヤな雑用なのである。生活するうえにどうしても必要な雑用であれば利害関係で結びついた人間でない限り、イヤな仕事はみんな分担するのが当然だと思う。ところで家事を全部妻にやらせる夫は、イヤな雑用をよりによって自分の最愛の人にすべてやらせて心が済んでいるのが不思議というものだ。かなりやさしくて

女の子は大きくなるにつれて、男の子たちに対して彼らが男性であるということをうらやましがらる。父母や祖父母が、女の子よりも男の子のほうがほしかったともらす場合がある。あるいは女の子よりも男の子のほうがいっそう愛情をそそぐことがある。男の子に対してはいっそうまじめな、敬意をこめた態度で話しかけ、多くの権利を認めてやる。男の子のほうでもまた、女の子を侮蔑的に扱う。遊び仲間に入れず、女の子を馬鹿にする。

（シモーヌ・ド・ボーヴォワール）

人間性豊かな男性でも平気なようすなのは、ほんとうに解せない気がする。

ところでだから男の子には、幼いころから生活上必要な家事能力は身につけさせる。そうすれば男の子も家事とは女が本能的にやるものではなく、生活上どうしても必要な一種の雑用にしかすぎないことを知ることだろう。自分の最愛の人に自分もイヤだと思ふことをやらせておくと、オチオチとテレビを見ていられない種類の男の子を育てたいものだと思う。しかし、よく女に偏見を持たない男のそばには必ず立派な人があるということを格言のごとく聞くから、私自身の一生懸命生きている姿をみせることがあるいは最良の教育なのかも知れないと思う。

30代

昭和11年～20年
戦中、戦後の混乱の中で成長した世代、戦後の新教育の洗礼も

まず家庭内から各個撃破を

片山 いく子

現在九か月の長男が生まれようとしているころ、確か松田道雄氏の「これからは男の子には優しさを、女の子には主体性を育てる必要」という一文に接し、女の子が生まれたら「女の子だから」とか「女の子らしく」などとは絶対言わずに育てようと思っていました。

それは共働きだった母に「女の子も何か一生を通してできる仕事をもったほうがよい」といわれていたのに、祖母の女一通りのことはできなくてというしつけ、あるいは女の子だからという世間並みの考えに染まって何かしようとするときにまず障害になったのは、自分の内なる女意識にはかならなかったという後悔からでした。

私の場合、女であることをつきつけられたのは、高校（旧制中学）に入ってからでした。女生徒が一割にも満たない状態でしたから、まさに男中心の現代の日本社会の縮図といったところ、肝心かなめのところは全部男が

握り、女はその手助けでしかなかったのです。今思うとなぜあのような肩身の狭い三年間を過したのか、それは男よりもぬきん出なければ認められない状況からさっさと降りてしまったことも一因ですが、さらには「一見」素晴らしく、かつまた面白い男どもに囲まれて、何となく毎日の生活に張りあいがあったことにもよります。

知らず知らずのうちに、自分が何をやりたいかということより、女として、女だからこそやっている仕事をとという方向に傾いて行き、それが誤算であったと気づいたのは社会に出てから。それはまた「男は素晴らしいのだ」という神話の誤りに気づいたことでもあります。

大学卒業後、商社会社の営業アシスタントを振出しに四度目の職場である現在の家庭教育雑誌編集に至るまで比較的工作に恵まれていたとはいえ、レッテルを持たな

男女の階級的相違を女の子はまず家庭内の経験のなかで発見する。父親の権威というのはいつも感じられるものでないしろ、その権力は乱発されないゆえに一層光彩が加わる。たとえ家庭で事実上支配をふるっているのが母親であるにしても、つねづね父親の意志をうまく尊重する技術を心得ている。何か重大な事るとき、母親が命令したり、ほめたり、罰したりするのは必ず父親の名においてであり、父親を通してだ。

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール)

い女が、職業を選択する限界を思い知らされました。現在の私は、取りあえず「女だからできる」という特技を生かし、その中で少しずつ自分の力を貯え、幅を拡げて行く、それが一番手っ取り早い方法だと思ひますが、それに甘んじていることの罪悪感拭いようもありません。「女だから創造性がない」「女だからこまめにする仕事に向いている」など―そこに「女の子だから」と育てられたことが、すっぽり私に手かせ、足かせをはめてしまっていることを再確認せざるを得ないのです。

男と女が違うということ、それ故に女の社会的な進出が最初から制限されることが直結してよいはずはない、まして環境や教育によって女ががんにがらめにされている状況の中で、女は男より劣っているとするのは論外だと思わざるを得ません。私たちが少しでも努力して、その枠を取り払って行くと同時に、女の子が生まれたら、せめて私の二の舞にならぬよう、できるだけ彼女の能力を開発できるように育てたいと思っています。

そのためには、男の偏見をただしていくことも大切だと思ひます。取りあえず我が家の二人の男性軍から各個撃破したい。私たちが結婚した出発は、二人で何らかの形でお互いの生き方を追究しようということでした。当時無職という名の自由業だった夫と、仕事をしているとはいへ十分な報酬をうけていなかった私は、社会の体制の中に組み込まれることを否定し夢を実現しようと決心していました。ですからお互いの共同生活のために、家

事は二人で協力しあうという根本原則があります。

それでも彼は感情的に家事は女の仕事という思いが残るらしく、すぐに「手伝う」という言葉が出てきます。

この手伝うということから主体的に自分も家事をするという状態にするまでには、大変な努力がいいると思ひますが、それでも二年足らずの間にずいぶん好転しました。

夫を見ていると最初は洗濯機を回すにも、一度目はこれ二度目はこれ、といちいち私が指示しなければいけない状態でしたが、この頃では馴れた手つきで処理するのを見るにつけても、息子にはせめて、自分の身のまわりのことはできるようにしつけようと思っています。

将来、彼がどんな女性と結婚するかわかりませんが、身のまわりのことをしてもらうために結婚したり、家事で相手の女性をがんにがらめにするのではないよう、一人の人間と一人の人間の結びつきとして家庭を考えることができるように育てたいと思ひます。

男の子を育てている

おかあさま方に期待

岩 永 桂 子

・私のうけた教育

私は転校が多く、公立、私立、共学、別学と経験しまし

たが特に男女の差別を感じることはありませんでした。就職の経験はなく、すぐに家庭に入り、はじめて女の不利な立場を知ったのです。主人とたった二人の世界に不平等や不自由、不一致がいくつも存在していたのは驚きでした。

・女の子をどう育てるか

現在高校生の娘を今さら育てるというよりは、あととはひとりで育って行ってほしいと思いますが、自分の進路を考えはじめた今の時点こそ、女であることを意識して娘と一緒に考えることが必要だと思うのです。

女性が専門職を持ったとき必ず何かの形で障害があること、その障害を予想して十の力を発揮するため二十の努力をすることも必要だが、その前提条件として二十の健康に恵まれること、二十の努力のために十の健康も失うことがあり、さらに日常の家の仕事や心づかい、それだけで十の力を使っても足りないこと、結局ひとりであれこれ欲張ってもいずれば疲れはて、多くの女性がどちらかをあきらめてきたこと等。今、自分の好きな学科にはげみ、進む道を見つけようと希望を持って努力中の娘に、こういうことを知らせるのは母としてつらい役目です。できればどちらも七ずつでがまんし七プラス七イコール十四の生きがいを持てると解釈してほしいのです。

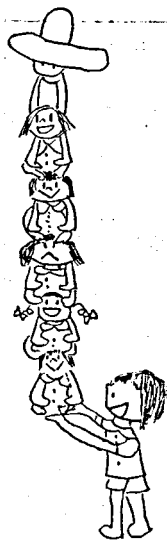
・これからの男を変える法

しかし問題はこの先にあります。七しか働けない女性を受け入れてくれる職場、家事を七で切り上げる妻に満

足する男性がどれだけあるでしょうか。同じ男性が職場では女性に十の仕事を要求し、奥さんが働くときは七どころか五でも三でもいい顔をしない。内外ともに男性の理解と協力なくしては動きがとれないとすれば、今これらの困難を目のあたりに見、聞き、体験している私たち世代で男の子をお持ちのおかあさま方に、子どもものころから男性教育ではなく、人間教育をしていただくよう期待するほかありません。

・次の世代への提言

これからの若い家庭が変わる可能性はあるにせよ、家事、育児をゼロにして女性が専門職につくことは不可能に近く、単に良き妻、母のみのタイプも自他共に許せないとしたらどちらかに重点をおくしかありません。各人の能力や好みにもよるでしょうが、同じ人でもその比重が時によりいろいろ変わるのは当然で、特に出産には女性には全力投球しなくてはなりません。育児をはじめは母親の必要度が高いので、この時期の女性はどうしても家の中のほうに重心が傾きます。この比重が、女ばかりでなく男の人も生身の人間、病氣や事故の際安心して休め



るように自由に変わり得るような社会になれば、教育のはうにあまり問題はないと思います。教育がいづれ社会に出たとき役に立つ人間を作る場であると解釈するなら、目的地はやはり社会です。目的地に達するための路線例えば東京から名古屋へ行くのにも新幹線、東海道線、中央線、東名高速、徒歩、飛行機、ヘリコプターなどがあります。どの道を行っただとしてもそれぞれに教へはあります。ただ、目的地が働き蜂としての男性だけを受け入れ、女人禁制だったとしたら救いはありません。

娘を育てている人よ！

がんばって下さい

日置 久子

・私の受けた教育

男兄弟の中の一人娘として育った私は、家庭では女の子だからと、別扱いされた記憶はない。中学・高校は女子だけのミッショーン・スクールへ通ったが、その学校はアメリカ的で、自由な校風で、各人の個性を伸ばす教育を目ざしていた。その後、共学の大学へ入ったが、女子の数が少ないために別扱いされて居心地が悪かった。社会に出てはじめて、私はひどい女性差別を体験した。母がこれからの女は、男と同じ教育を受ければ、社会で仕事ができるという持論であったので、私もそう思い込んで

今日では、女の子が学問をやり、スポーツに専念するのがだんだん当然のことになりつつある。しかし女の子がそうした専門で成功しなかったとしても男の子の場合のように、やかましくいわれない。世間は女にはこれと別な種類の完成をつよく要求することによって、その種の成功をますます困難にするのだ。少なくとも、彼女がやはり女であること、女らしさを失わぬことを世間はのぞむ。

(シモーヌ・ド・ボワオワール)

いたようである。世の中を甘くみていたわけである。私は他の人より少し語学ができるということだけで大学に入り、職業についた。そして現在は、典型的なサラリーマン家庭のデモ・シカ女房になってしまった。女子にとってきびしい環境であることを熟知した上で、人生設計を立て、それにもとづいて、大学、職業、配偶者を選ばなければならぬのに、この点、私は甘かったと後悔している。最近、ある本で、人間は二十五歳から三十歳ぐらいの間の修業が、その人の人生を左右する鍵になるということを知った。私はその五年間も、うかうかと過してしまった。今、私の友だちで社会にでて、活躍している人は皆、その五年間に努力を重ねた人である。子育てにしか生きがいを見い出せなかった母と同じ道をたどらないように、これから、人生設計を立て直し、再教育を

受け後半の人生を主体的に生きたいと思う。

・女の子をどう育てたいか

これまでの私の生き方の二の舞をしないように育てたいことは言うまでもない。

世の中を変えて行ける女を育てたい。政治家、役人、教育者、あらゆる学問の研究者、芸術家、医者、弁護士、建築家などの半数は女性が占めるように、女の知力、気力、体力を養いたい。しかし私には娘はいない。娘を育てている人よ、がんばって下さい。

・これからの男を変える法

これからの男を変える法はやはり教育が一番重要であろう。しかも、女性解放のための長い歳月をかけた教育によって多くの人々の思想の転換がなされ、それにつれて男を変えることが可能となるであろう。多くの女の意識改革もしていない現状では、男を変える具体的な方法を考え出すことはむずかしい問題であるが、まず、母親自身が子どもを育てるとき、無意識のうちに習慣的に男女差別をしていないかどうか、偏見をもっていないかどうか反省しなければならない。息子には、自分にだけ都合のよい女を求めるな、女性の解放は男の解放につながることを母親の生活を通して教えて行く。女性解放が観念的に理解されるだけでなく、家庭では家事をする、社会では女性に協力できる男を育てよう。そして、男は社会で働き女は家庭を守るというパターンに適応してきた学校教育を変革し、また社会を変革するように大多數の

協力を得て女性解放運動を進めていくほかはあるまい。

・次の世代の教育に関する提言

男中心の社会を打ちこわし、男と女の社会を作るための教育をしなければならない。男だから、女だからという理由で、きまったパターンによる教育では、働き蜂と雌蜂を作り出し、人間らしく生きて行ける人間を育てることができない。今まである社会に適応する人ではなく、変革して行こうとする人を育てるような家庭教育、学校教育をしなければならない。

女の子の教育は父親に

若林高子

・私のうけた教育

戦後の混乱期、六三型のはしりの教育をうけた私は、外地でソ連の掠奪を経験、帰国後はすべてお国のためだったはずが一億総サンゲという価値の大転換、親も教師も自信喪失と混乱の中で小学校から中学校へ進んだ。当時を良き時代だったという人もあるが私は国家の行なう教育に大きな不信感を叩き込まれたように思う。

「明るく男らしく」と迎えられた高校（旧制中学）教育は差別こそされなかったが、歓迎されざる少数派であることを認識させられ、肩身のせまい思いをしたことも

事実。だが今日、男友達を混えたクラス会などで昔を語り合うとき、やはり共学で幅広く、まさかのときに頼れそうな友達が大勢いることを感謝している。

家庭では、四人姉妹で男の子がいなかったせい、父は中学のころからいろいろの書物を与えてくれた。シャーロック・ホームズにはじまって、シェイクスピアやゲーテ、バーナード・ショー、トルストイなどの古典、カントやショーペンハウエルなどコチコチの哲学書……イギリスの子女は嫁入り前にはこれだけは読むそうだし、われ、読みかつ父と対等に議論したが、今から思うと十代のうちにあれだけの古典や思想書を読んだことは、その後の私の人生に大きな影響を与えたように思う。

・男を変える法

こうして大学↓就職↓結婚退職とお定まりのコースを歩き、周囲の圧力というか自分の自信喪失のため、恵まれたチャンスを見失った。その後再就職の破目に追い込まれ、はじめて、自分が最初の就職をいかに安易に考えていたかを感じ知らされた。

再就職は年功序列の日本では男でも不利、まして女は地上を昇る階段を地下から始めるようなものだった。それでも雑用など与えられたもののほか、放置され、見逃されていた仕事をまとめあげ、さらにその仕事については、関連部課長や重役のところまで足を運んで徹底的に自分のものにするにより、周囲の評価は少しは変わった。仕事とは与えられるものでなく「奪う」もの、奪

い方次第で男も多少は変わる。

だが私にとってそれより残念だったのは、時に大流行する同性（四年制大学卒を含む）の結婚退職病だった。寄せては返す波のごとく回転率は一二年。伝統的行事（？）として退職の日には新婚旅行の香水ぶんぶんのニューモードで（振袖もある）、幸せムードを撒き散らす。（そのうちホントに結婚するのは半分とか、あとはジブシーのごとく職場を変える）。そのバイキンは強力な伝染力を持ち、新人OLも最初から退職の日を夢みる目つき。外国女性にはこうした流行病はないそうだが、日本女性にだけ大発生するのはなぜだろう。

男と対等に仕事をしたいというにはあまりに異質な御殿女中のサビビス（売れ残るのはどんなタイプ？ 男に嫌われない何か条……週刊誌参照）は、入社したてのスナオな男性をもたちまちに増長させ、男はむしろ女性蔑視に変わる。一般のごく普通のOLが結婚志願病から解放されぬ限り、男を変えるのは至難のわざだと思ふ。

・女の子をどう育てるか

外国女性にくらべプロ意識に欠けているのは、やはり就職する以前に職業につくためのしつかりした「個」が確立していないからだろう。女子大卒業式の晴着ショーも「ゴージャス・マイ・ウェイ」にはほど遠い。まずこの流行伝染病にからぬ丈夫な精神を培うことが第一だと思ふ。そのためには過去の傑出した女性がどんな教育をうけたか調べて参考にしたいが、少なくとも、キュリ

「夫人、クララ・シューマン、ヴァージニア・ウルフ、幸田文、中村メイコなどが父親の強い影響をうけて育ったことに興味を持つ。父親が社会の荒波の中での経験を通して、娘を一人の人間としてきたえ上げれば、かなり女の自立に役立つように思う。」

少なくともわが家では、流行にまきこまれやすく、発作的な衝動買いなど意志薄弱な私は、自立した女の教育には不適合な気がするので、父親に大いにシゴいてもらうつもりである。私はむしろ自分の生涯教育として地域の自然保護運動に参加しつつ、その中でユニークな教師を見出すことに専念したい。

40代

大正15年から昭和10年
戦前の教育の影響をう
け、敗戦により激変

男の二倍、三倍の実力を

中川 よし子

二男の小学校卒業を前にして、同級生のおかあさん五人ぐらいが私の家に集まったことがあった。当然のこと

ながら、子どもの将来の教育に話が及び「女の子だから勉強ができるより、かわいがられるように育てて、いい人にもらってもらわ」「私のところは女でも共学の学校に入れて、男の子と同じようにやった上で何か職業を持たせたいわ」というようなやりとりになった。「とんでもない。そんな生ぬるいことではだめよ。これからの女は勉強して男の二倍も三倍の実力を身につけていなければ、現在の男中心の社会の中で対等に扱ってもらえないし、男の職場へもどんどん食い込んで行かなければ、男尊女卑の社会は変わらないわ」という言葉が何げなく私の口について出たのだが、考えてみると、今まで私の中で無念、後悔、絶望といった思いとしてもやもやとわだかまっていたものが集約されて出て来たような気がする。以来小学二年の娘には「男の二倍勉強して男でもむずかしいといわれる仕事をするのよ」と子守歌のように言っ

て聞かせている。それならば女の子が本当に自立するような教育を受けるにはどのような学校が適しているのだろうか、となると、はたと行きづまってしまふ。男女共学がよいということとは多くの人が考えており、自然の姿だと私も思うし娘もそれを望んでいる。しかし長男の卒業した公立中学の場合など見ていると、男女共学は二、三人の例外を除き、学力面で男女の間に上下の格差をかえってまねくように思う。ある雑誌に見る〈中学一年悩みのベスト4〉で男子が①将来②成績③こづかい④異性、に対して女子では

①異性②容姿③成績④将来、という結果を見てもわかるように、男女共学はかえって女子の自立を妨げる気がして心配だ。かといって女子校は良妻賢母的イメージが強いのではないかと気になるし、そうでなくても今のところ私や娘の趣味に合わない。

男女共学の中にあつて女子に男子の二倍三倍の実力を身につけさせるためには、やはり家庭教育の中で、娘の成長につれて、繰り返し私自身の経験を話して聞かせなければと思う。同じ大学の同じ学部を卒業しながら、就職に際しては女であるがゆえに試験さえも受けさせてもらえなかったこと、「女は家庭に入り、子どもを育てる中で自分の教養を生かす」という当時の社会通念を、大した抵抗もなく受け入れ出産を機会に退職したこと、自責の念、企業という枠からはずれてみて、大学時代の学問に対する取り組み方の甘さを後悔していることなどを。

だからといって私は彼女を学問一辺倒のりがり亡者にしようとは思わない。今までの男社会で、専門ばかりが社主義が優先したことのツケが、公害、環境破壊などとなって回って来たことを考えると、これからの社会は人間尊重、すなわち思いやりの心の基盤の上に立たなくてはならないと思う。とすれば女を男に近づけるよりむしろ男を女に近づける必要が出てくる。今まで女だけに要求されていた思いやりやさしさを、私は娘ももちろんだが二人の息子たちに十二分に持つてもらいたいと願っている。

私は自分の娘に必ずしも家事にタレントであれとは思わない。でも生きて行くために必要最少限の衣食住のテクニクは、息子にも娘にも積極的に教えておきたいと思う。その方が将来必要となったとき苦にならないで済むし、その実践の中から、家庭が主婦といわれる人だけにゆだねられるべきものでないことを学ばせたいのだ。そして合理化はしてもおいしくあるべきものはおいしく、

私も娘時代から読書の暇がないので苦勞しています。この十二、三年來は子供のふえるのと(注 十三子うち一子出生後没、一子死産、五男六女を育て主として一家の生計を支えた)職業に迫られるのとで書物を読む余裕を持ちません。それと同時に読書欲は内からますます盛んに起り、また社会文化の進歩からは読書の必要がますます迫ってきます。(中略)人間なみの一生を送りたいと考える以上、現代の思想の水準に追隨して、せめてその理解できる程度に、たえず自分を前進させたいと思います。

それで私は只今もかなり無理を続けています。仕事と仕事の間に休息するつもりで書物や新聞雑誌を読みます。毎夜十一時から一時位までを特に読書に費します。原則として仕事の休憩時間の二、三十分と深夜の二〜三時間を読書にあてています。

(与謝野晶子・一九二〇年)

美しくあるべきものは美しく、美しくあるべきものは楽しくをモットーに築いて来た私好みの家庭のイメージは、娘にも息子にも伝承して行ってもらいたい気持ちだ。……とまあ理想はこうなのだが、「宿題を忘れてたり立たされたりしたことない、しっかりした男の子のお嫁さんになるんだ」というのが夢の我が娘が、はたしてどれだけ自立することやら、現実はきびしい。

女性自立のための

寺小屋をつくろう

ひろせ ゆき

国際婦人年の今年には、さまざまなマスコミ媒体を通じて女性の地位向上や、男女差別の撤廃が叫ばれている。そんな最中に男女別学の提案などしたら袋叩きにされそうな気もするが、ムスメの人生を考える場合の、私の願望をどう思われるかなさんの意見を伺ってみたい。

私にはムスコもムスメもあるが、ムスコはともかくとしてムスメのほうには、現在の共学制公立中学や高校に入れるよりも、女の子だけを集めた寺小屋のようなところで徹底的に鍛えあげたいと考えることがある。

最近、中学二年の長男の級で国語教科書にある丸岡秀

子氏の「母の座」という文章を材料に、「母親が職業をもって外に働きに出ることは否」を討論させられたという。日ごろからの母親の圧力が効を奏したのか、ムスコは曲なりにも「働く母親」を評価する発言をしただけだが、反対意見を述べたのが男生徒でなく女生徒の大部分であったことを彼自身憤慨していた。

確かに終戦直後の共学実施には女性解放の息吹があった。しかし現在の公立中・高の教育には、キザな言い方かもしれないが、共学についてのビジョンがない。男女の能力を均等にのばそうとするどころか、小学校低学年から一貫して男女の役割の違いを強調し、規定する差別教育が行なわれ、男女の遊びも区別される。中学に入るころには少数の変わった女の子を除いては、言葉づかいや振舞いだけは男に劣らず乱暴だが、意識の上では「どっちも男にはかなわないし、私たちはいずれはすてきな男性にめぐり逢って結婚し、子どもを育て幸せな家庭をつくるだけ」と考えるようになり、自立して男をあてにせず、自分の人生は自分で築こうと言いきる女の子はめったに見当らなくなる。

それも無理のないことで教師も母親も（特に母親が）「まア女の子だからねエ」「いずれはお嫁に行くんだから」ということを、なんと不用意に繰り返すことか。自分自身が職業をもっている、あるいは高等教育を受けた女性でも、その点については全く古い考え方をしている例をしばしばみる。

両親が、あるいは教育の方向づけをする人々が、国の姿勢が、男と女の能力・資質をどちらも人間として最大限に伸ばしてやろう、それそれを自立した人格として評価しようというのなら、男女共学は実りの多いものになるだろう。むしろ私は、明治以来の良妻賢母教育の流れを汲む女子の別学をよしとするわけではない。よき伴侶を持つ結構、幸福な家庭も営めるに越したことはないが、女が女であることを拒否せず、まさに女として、しかも男に頼ったり服従したりせず自立して生きられるようにするには、単に男と女と一緒にして教育するといふのではなまぬるい。あらゆる方法、手段を講じて女の子の劣等意識を消し去り、自分の能力を再発見させられるような「女の子の特訓のための寺小屋」を作りたい。

婦人年をきっかけに行動を起こした女たちが指導者を引き受けてくれれば最高。「女の子は機械に弱い」「女の子は数に弱い」「女はすぐ泣く、感情の動物だ」「女は方向オンチ」「女は管理職に向かない」……女の能力を否定する迷信は数えきれない。しかも女の一員である私は機械についても数についても、方角についても、男の一員である夫にヒケをとらない。管理職にはしてくれなかったので経験はないが、クラブや職場の組合、PTAなどで五十人や百人の人間をまとめる自信に欠けるものではない。「すぐ涙が出る」のはどうしようもないことだが、涙の海におぼれてものを筋道たてて考えられないわけではない。男のように腕力がなければ道具を使えばよいし、やらせてもみずにはじめからできないといふのは、無力な男たちが少しでも自分より劣等のものを保存しておきたい魂胆にすぎない。

女が自立をしてどうしていけないのか。男も女も人間らしい生活をするためには、自立した女の力がどんなに有効かを、どうして男たちはわかってほしいのだから。

自立した男と女同士の恋愛こそ人生を賭けるにふさわしいと、私はムスメに説き聞かせよう。「主人」「あるじ」などとは絶対に言わせないこと、「嫁に行く」「嫁にやる」「女だてらに」「女のくせに」「女だから」ということは厳しくチェックすること。

女を過去に押し戻そうとする圧力は、女性週刊誌を筆頭とするマスコミによっても一層強大になっている。これに対抗するには、意識的に女の手を女を取りこんで教育する以外にない。アメリカの黒人やインディアンが、教育を自分たちの手に取り戻したように。

今日の高度の科学技術から女性はずっと隔っている。巨大建築、コンピュータの生産、月旅行——もしも知識が力であるとするならば、力はまた知識であって、女性の従属的地位の大きな原因は父長制度が計画的に女性に押しつける無知である。

(ケート・ミレット)

身の上相談

人生相談を通じて考える

榎 まき
玉淑 ぎよくしやう

星空を仰ぎながら祈るような気持ちで山をかけおりていたお下げ髪の私。今から二十五年前のことです。信州の山奥から東京の大学で勉強したくて家出をしたのです。当時中学の校長をしていた父は、女子に大学教育の必要を認めませんでした。ちょうど学制改革で当時の高等女学校は新制高校にかわり、戦後の民主主義も混沌としていて、新旧の思想の対立も厳しく、私は家出という実力行使によらなければ進学の道をひらくことすらできない立場でした。勇気と決断とパイオニア精神が必要だったわけです。

幸い合格の栄冠を手に父母を説得、奨学資金と家庭教師のアルバイト、雑誌への投稿などで共学の大学を卒業しました。そして男女同一労働同一賃金の教職についたまではよかったのですが、結婚生活によって私の夢は一つ一つ打ちこわされ、育児と家事の重労働と職業の両立のたたかいに破れ、八年間の教職を退いて専業主婦にならざるを得なかったわけです。その後夫の事業の失敗、

娘は母親にとって、その分身であり同時にまた他人でもあり、母親は彼女をばげしい勢いでかわいがると同時に彼女に対して敵意をいだく。彼女が子どもに自分自身の運命をおしつけるのは、自分の女らしさを誇らかに承認する一つの方法であり、またそのことにたいして復讐する方法でもある（中略）私たちは、女の子が自分にゆだねられたときには、傲慢と悔恨の入りまじりあった熱烈さで、その女の子をおのれに似た女に変形させることに没頭する。娘の幸福を心からねがう思いやりの深い母親ですら、彼女を「本当の女」に仕立てたほうが安全だと考えるのが普通だ。

（シモーヌ・ド・ボーヴォワール）

借金をかかえての苦勞の中で、長男は家事や弟妹の世話もよくやります。

私の教師の経験からみると、母親が働いている家庭の子どもは男も女も非常にまじめで、ぐれたり不良の仲間に入ったりする例は少なく、かえって父親がボスだったり、母親が有閑マダムで浮気やよろめきにうつつをぬかしている家庭の子どもが不良化する危険があります。

一流有名校に入れようと能力以上の無理を押しつけている教育ママ。子どもにしか生きがいを見出せない専業主婦。大学の入学式にまで母親がついて行くなんてコッケーではありませんか。そんな母親は子どもが恋愛でも

しようものなら眼を三角にして反対反対とわめき散らし、子どもに裏切られたといつては嘆き、新婚旅行にまでついて行きかねない結果となります。特に母親と一人息子の関係が要注意です。

私はコンサルタントとして、運命鑑定、身上相談、人生相談を担当する立場なので、そのような母親の訴えをきくこともしばしばですし、専業主婦の老後の佻しさを思うとやりきれなくなります。女はまず母親として、子どもに何を期待したらよいのか、もう一度頭を冷やして、自らをかえりみる必要があるのではないかと思ひます。一生をかけて手塩にかけて育て上げたはずの子どもに、痛烈な仕返しをされることのないように。親子三代にわたって同じことをくり返している例が非常に多いのですが、このへんで目を覚まさないかと思ひます。次の世代をどう育てるかは母である人々の手にゆだねられているのですから。

最後に娘をもつ母親に一言。男とは女が一生かけるに値する存在か、自分の夫を含め世のすべての男たちをもう一度見直してみる必要があります。結婚という永久就職だけを娘の教育目標にしているとしたら、あなたは大きな落とし穴に母娘ともども落ち込むようなことになるかもしれませんよ。俗にいう夫運の悪い女とか、後家相といわれて片付けられがちな女の生き方の中に、この矛盾だらけの社会の中で真剣に生き抜こうとしている女たちの美しい姿を発見することがあります。何々夫人でこ

ざいますと、乙にすました奥様族のもち得ない美しい眼の輝きを彼女たちが持っているのはなぜでしょうか。夫を交通事故で失ったり、医者に見放された病気の夫をかかえ、あるいは道楽者の夫、女をつくって家にも帰らぬ夫を待つまでもなく、男社会にのり出して生きる真摯な姿がある一方で、母子心中しか選ぶことのできない専業主婦もいるのだという現実の悲しさを、もう一度考え直してみる必要があるのではないのでしょうか。

〈開運コンサルタント〉

わが手で環境を創造する子に

斎藤千代

①この世に女が入れぬ場所があることを初めて知ったのは小学生のときだった。父の出身校に入りたいと、無邪気に口にした私に、父は、その学校は女の入学を許していないこと、父の職業にも女はつけないことを告げ、しかし国立では三つの大学が女の入学を認めており、その上には大学院も開かれている、望むならどこまでも進学してもいい、女だからといって結婚を生涯の目標にするなど言い添えてくれた。

女が大学に入れないことの意味がほんとうにわかった

のは、しかし女学校（女子中学）に入ったときである。渡された教科書は、兄たちの中学（男子中学）の六割程度の厚みしかなく、内容は格段に幼稚だった。女は学ぶことを社会から望まれていないことを知ったショックで、私は教科書もノートも学校のロッカーに置き放しにし、学校の勉強を放棄してしまった。

戦後、父の大学が女子の入学を許したとき、だから無性に入りたかった。しかし敗戦で無一物になった家庭。望むことさえぜいたくで耐えた。それでも出願締切日に願書を出してしまったのは、捨てきれぬ夢だったのだろう。答案を書き終えた日の喜びは、今でも忘れられない。身体検査の当日は発熱。もう放棄してもよいという私を、妹が無理に連れ出して、締切時間によりやく到着、合格。でも、受験の喜びを一〇〇〇とすれば、合格の喜びは一ほどでしかなかった。土俵に上ることをゆるさること、勝つことの差といえは理解してもらえないだろう。土俵までの道は、あまりにもけわしかったのだ。

②まがりなりにもこうして学校教育に恵まれたこと、家庭教育にはさらに恵まれたことは、しかし私をひ弱にした部分も多かったことに気がつく。社会通念という名で与えられる風圧に、私は抵抗するよりも柔順でありすぎた。女は耐えるものと思ひ、耐えることが美德だと思ひ、それを打ちこわそうと努力している今でさえ、皮膚感覚として耐えてしまう。

その痛みに立って、わが娘に言うことはあるとすれ

ば、「理不尽なこと、なっとくできないことは徹底的に追究してほしい」ということぐらいだろうか。それは、我が身を切り刻む作業になるかもしれないが、切り刻む痛みの中から、他人の痛みに敏感な人間に育ってほしいと思う。

③人は学び得るものであっても教えられるものではなく、変わり得るものであっても変えられるものではあるまい。男を変えるという幻想は持つまい。ただ、毎日毎日、おのれを変えようと努力しよう。その中で、もしかしたら、まわりの空気が少しずつ揺れ動くかもしれない。

④不平は退歩のエネルギーだが、疑問は進歩のエネルギーだと思ふ。疑問を不平に転化させず、惜しみなく疑問をぶつけて、わが手で環境を創造するほかあるまい。

父長制度下において女性がつねに押しつけられてきたより低い文化の領域に合わせた今日の女性に対し、人文の研究によって「芸術的」関心を助長しようとするのは、かつて結婚市場に送り込む準備として女性に要求された「稽古事」の延長にすぎない。芸術や人文における業績は、昔も今も男性のためにとてある。象徴的代表、それはスーザン・ソントグであろうと、柴式部であろうと、そういう人が少数いたからといってこの原則が変わるものではない。

（ケート・ミレット）

抑圧されない自由な人生を

平岡 ふき子

・私のうけた教育

軍国主義の申し子であった私は女学校時代、女はどんなに努力しても江田島の夢はかなえられないとくやしい思いをしたものです。まことに他愛のない話ですが、これが社会的な男と女の違いを初めて知ったときでもありました。女は「お国のため」に生きることもできないと。

一方、代々男が世襲の家業の家で、私はたまたま生まれてきた女の子にすぎず、女学校でも出たら行儀見習いにやって嫁にやるという父の考えから、教育というよりはただ女の子としてしつけられただけでした。家と芸の継承が至上である家庭で、兄と私の日常的差別は必要以上に私に反骨精神をうえつけましたが、兄と妹、男子と女子のごく当り前の処遇として考えられる時代でもありました。すべて女のくせにという言葉で押えられ、自分がどんなに女らしくない人間かを思い知らされ、しかも当時の女のあり方にすっぱりとはめられて育ったように思います。

大正デモクラシーの波を多少なり受け、向学心も強かった私の母が、こういう環境の中で充足して生きたはず

教育機関は「男らしい学科」と「女らしい学科」の区別をつけるのに役立つような文化的プログラミングを受け入れ、人文や社会科学の一部分（その低い分野）を女性に割り当て、科学、科学技術、知的職業、実業、工学などは男性に割り当ててゐる。もちろん現在、就職にしても、地位にしても、収入にしても、その大半は男性に占められている。

（ケート・ミレット）

もなく、さりとて家を出るに出られぬ女の不自由さを娘に繰り返させたくなかったのでしょう。「女は何か身に付けておかないと思うように生きられないよ」と言って終戦直後の苦しい生活の中で専門学校への進学を勧めてくれました。その後勉強を続け、一時的には家からも解放され、就職、結婚と自主的な生き方ができたのですが義母の急死というアクシデントで、夫の実家の主婦になることを余儀なくされ職場を退きました。女として社会的自覚を持っていたはずの私が、このとき家に入ってしまったということは、戦後の男女平等の民主主義が未熟だったためでもあったのですが、私の中に幼いとき培われた女のあり方が、意識的に根強くあったことは否定できません。

再び家にしばられて私は初めてなぜ女だけが家庭の事情で経済力を奪われ、生き方さえも変えねばならないか

という矛盾を切実に感じながら時すでに遅く、子育てが半ば終わった今、今度は自分の実家の主婦も兼ねざるを得ない破目におかれました。

・娘をどう育てるか

こういう状態で女の子の育て方を考えると私は反面教師として立たされているような気がします。わが家では娘にも息子たちにも家事を肩代りさせますし、私はあえて家族の世話をしないほうで、基本的には男も家の仕事をするものだと思っているようですが、男たちは無精で手抜きが多く、私と娘がぶつぶつ言いながら尻ぬぐいするのが現状です。

食べさせ、寝かせ、健康管理をして将来自立する用意をととのえて、あとは社会の中で、子どもなりに学んでいくのを見守るのが子育てではあるまいかと考えている私が、娘に言うことがあるとすれば、第一に体を丈夫に育てること、男にはない子産み子育ての肉体労働に耐えられるように。そして息子たちは大学に行かなくても、社会のハンディを克服するために娘は是非進学させたいというくらいのものでした。

しかし大学に学ぶということが、女子にとって有効に社会に参加する準備ではなく、嫁入りの条件になってしまった風潮の中では、望まないなら進学しなくてもよいと思い直しています。女が自主的に生きる、ということは大学を出る、出ないに直接関係がないと考えるに至ったからです。

ともかく男も女も、経済的に自立し、自分で選択した人生を送るのが生きがいであろうということを、小さいときから叩き込むだけで、親は親で自分の人生を懸命に生きるほかはない。そしていかに懸命に生きようと、女性が社会的仕事に参加せず経済力も持ち得なければ、充足して生きられず、女が不十分にしか生きられぬところでは男にもまた充分な生活はないということを、身をもって示していくのが精一杯というところでしょうか。

家庭の中の男女の差はある程度なくしても、それが社会的な意識にならなければ、女子はいつまでも「四角い部屋を丸く掃くようでは嫁に貰い手がないよ」などという学校の先生の言葉に動揺しつづけるでしょう。私の母は暗に女も経済力を持たねば自由に生きられないことを教えてくれました。私は娘に自分が経済力を持つだけでなく、男の意識も変え、社会的に女の地位を広げて行かなければ人間の幸福はないのだということを教えて行きたいと思います。

人は女に生まれない。女になるのだ。人間の雌が社会の中でとっている形態は、どんな生理的、心理的、経済的宿命がこれを定めているのでも決してない。文明の全体が雄と去勢体との中間産物をつくりあげ、それに女性という名をつけているだけである。

(シモーヌ・ド・ボーヴォワール)

信念を貫くこと

熊谷 順子

「これじゃ、キックができないよ」休日一日つぶして縫いあげたスカートに娘は文句をつけた。谷川のせせらぎのような淡い水色。大好きなポケットも大きいのが二つ。濃紺のしゃれたボタンも気が利いていた。私の過去の再生ながら、なかなか可愛いのができたなど、一人ほくそえんだのは母親のアサハカさだった。

娘はヒノエウマ生まれの小学校三年生。ゴム段遊びに熱中した冬がすぎ、ガンバコとよぶボール遊びがはやっていっていると思ったら、今度はキックである。「生意気な男の子をこうやってやつつけるんだよ」と片足をパッと蹴りあげる。足先にこもった気迫の鋭さに驚いたものだが、そのキックにはスカートじゃだめなんだそうなの。「やっぱりズボンか、暑くなったら短パンがいいよ」と彼女は言う。

最近、私の父母の家財整理を手伝う折に、私が女子大に入った頃、父がくれた古い手紙がでてきた。それには初めて親元を離れる娘に対する父の教育方針が書かれていた。成績については、悪い所があつてはじめて他人の

良い所を見出し、尊敬することができると慰め、成績が良くても人間味のない者になってはいけませんとさとしたあとに、「明るい誰からも可愛いがられる、しかも強い信念のある人になって下さい」と結んでいる。

読み返してなるほどと思った。大半はそのまま私が娘に伝えていい言葉なのだが、ただひとつ決定的にいけないことがある。私を中途ハンパにし、苦しい元凶はこれだと思ひあたった。つまり「誰からも可愛いがられる」「強い信念のある」人というのは明らかな矛盾なのだ。

誰からも可愛いがられていたのでは強い信念を貫けないし、強い信念をもてばごく小人数の人からは認められなくても、誰からも可愛いがられることなど、決してない。第一、可愛いがられるという言葉がおかしい。猫や幼児じゃあるまいし男に対してはこんな言葉は侮辱である。可愛いがられるのが幸せという発想は女向きなものだ。

家の中で絶対者としてふるまった父は、高度成長の波にもみくししゃになり、三代続きの印刷屋をつぶしてしまった。妻や娘を可愛いがる対象としてでなく、社会に通用する一人前の大人に育てていれば、こんな破局を迎えることはなかったろう。同じような状況に陥った友人の所では、社長夫人である友人が穴のあきかけた帳簿を毎夜自分で点検し、トラックを運転してトクイ先を廻り、金を調達して危機を脱した。

娘からせつかくのスカートに難くせをつけられた私は苦笑した。やっぱり、私も彼女に可愛い女を期待して

いたのだろうか。男が既得権をうしろだてにして無茶をいうときには、女もキックをかましてやる位の体力と技は必要だ。それは、女自身のためというだけでなく、男にとってもいいことなのだ。そのためには、スカートよりズボンのほうがすぐれている。そういうえば、私もスカートの優雅さや保温性を十分認めながら、ここ数年來、大方はズボンで過してきた。

私には、とてもとてもキックなどできないが、娘が算数や歌が好きのように、キックの技を鍛えるのを、ハラハラしながら見守つていようと思う。

50代

大正5年から大正14年
戦前の教育の影響が大きい

みんなが

「社会的労働」に参加を

井上 佑子

思い出してもゾツとする、ということがあるかと問われたら、私は即座に答えよう。子どもが大きくなるまでの、疲れ果てる日々の記憶だ。今、息子は大学四年生、娘は高校三年生になった。母親が多少おそく帰宅しても

それぞれカギで家をあけて入って、何か適当にたべている。カギで各自が自由に出入りできる状態が最高の理想だと願った当時を思うと、今は天国にいる思いだ。

息子は幼時、保育園にやり、夕方、母親が迎えに行き、暗くなつて帰宅する日も多かった。アクセクと保育園に走り、頭を下げ、親も子も疲れた足どりで家に帰る。當時を思い出すと、夜道の暗さのみ鮮明な印象だ。娘が生まれて、毎日の通勤は不可能になり、高校の非常勤講師になった。出校する日(週三回)のみ、知合いの婦人に来てもらった。責任をもつて、よくやってくれる人だったが、それだけに謝礼を考え、「これでは少ないのではないか?」という不安感が、常に我が心を襲った。自分の収入の三分の二以上を提供したので、他の必要経費を除くと、手もとに残る利益(?)は、マイナスだった。七年くらいそんな状態を続け、やっと、切りぬけた。そのころ、完全に家に入った方が、マイナスにならないだけよいという考え方もあった。しかし、収入の金銭面ではなく、後の日のために、「今のマイナスは必ず生きる」と考え、それこそ雌伏——維持——の時期と思い直し、週に二―三回を勤めてきた。常勤では勤められないので、恩給はもちろんのこと、身分保障の面でも、いわゆる権利は失ってしまったが、たとえ半分でも、技能を生かして社会的労働の末端に連なっているという程度の喜びは取得しえたと思う。

先般、「あごら」が扱った中国に関する記事の中で、

「主婦のない国」というキャッチフレーズを見出して、何か、深く心を打たれた。自分が、苦勞して子どもの養育期を、危険から紙一重の冒険でもするように切り抜けてきたあげく、めぐり会ったこの言葉がなお強く胸を打ち、「そうなんだ」と首肯させる。老若男女、すべての人間が、自分の出来る程度に即した「社会的」労働に参加することは、やはり人間解放というものだと思う。「主婦」という言葉は、くだらない言葉の最たるものだと、いつも思う。無性格な言葉だ。女性も男性も平等だという、上ずったインテリの観念的言辭として、何よりも女性自身から嘲笑される。しかし、女性も働きたいと思ひ、男女は平等だという考え方は、話してみると、誰でも持っている。安心して働くための施設が無く、家をあげ、子どもを置いて出られないから、諦念として、「主婦だから」、「子どもは母親の手だけで」と、自分に言いにかけて来たのだ。言いにかけているうちに、その観念が、逆に巨大な至上命令として、神殿のご神体のような呪縛力を發揮しはじめる。ことは單純明快だ。この日本ですら、弱年労働力の不足から、次第に社会の労働力として、各分野で女性の労働力が要求されるようになるだろう。しかし、行政上の措置として、女性労働のための施設が拡充されることこそ最大の念願で、そこからこそ、すべては始発するのだ。具体的な体験からも、私は、深くそれを希求する。るす番の婦人をたのんでいた頃、良心的にと思つて、待遇条件に神経をすりへらし

た。その時、個人が個人を雇用することは、いかにつらいこと、不便なことを痛切に感じた。社会機関が子どもの養育施設を運営し、その経費の額を法的に定めて徴収してくれたら救われる、と何度思ったことか。気の弱い者はその一つの体験から、切実に、具体的に、社会主義の国ぐにの実情に関心を寄せた。

さて、自分の二人の子どもの現在の感じ方についてひとこと述べよう。息子は、将来の配偶者を選定するに当たつて、そろそろ方針を考へ始めているようだが、純家庭婦人にしておいて、自分は外で、バリバリ活動したいというときもあり、やはり、多少何か仕事をする人がよいと思ふときもあるようだ。父親は、女性も社会的労働をという考え方に徹しているので、やがて息子も、父親の言辭というよりも、実行してきた行動に例を見て、同じ道を歩むかとも思う。娘はハッキリと、一生仕事をもつて社会的労働に連なりたいと言う。幼時、不便を課せられたが、十八才になった今、母親のように、やはり、と言っている。

私は次のように考えています。「日本の男子は優しくなることに勉めなければならず、女子は賢くなることに勉めなければならぬ」と。いい換えれば男子は倫理的・芸術的に深められることが必要であり、女子は学術的・理知的に鍛えられることが必要であると思ふのです。（与謝野晶子・一九一九年）

女と教育

生活文化研究所

堀 口 健 二

・私の受けた家庭教育

少年期を迎えたのは大正八、九年だったが、子どもたちは庭掃除、廊下のぞうきんがけなど、年齢に適した役目を持たされ、それがすまなければ朝食にはありつけず、その上、食事の作法がやかましく、食べた気がしなかった。

お彼岸などの物日には重詰めを持たされ、あいさつのことばと差しだす手順を忘れないように低声で繰り返しながら遠縁の家に使いに行ったり、町役場や郵便局へも用事を作っては月に一回ぐらいは行かされた。

男女のお手伝いさんに用事を頼むときは「……してください」ということ。してくれたら必ずありがとうをいうこと。悪かったと思ったら、すぐあやまること。弱い者いじめは絶対にするなどは厳しく教えられた。

どういうわけか、十歳ぐらいになると男女を問わず、一番下のはだ着は自分で洗うように命ぜられ、一度つい

た習慣は抜きがたくこれは現在に至るまで続いている。

・女の子をどう育てたいか

——ベールをまつまでもなく、一人の人間として自活していける学問・技術を身につけることを第一としたい。結婚も、就職としてのそれではなく、一個の社会人が適当の男性と結ばれたという形でありたい。

しかし、心情的には暖かみがあり、他人の立場が理解でき、その痛みがわかるような人格が望まれる。特に同性に対しては厳しい目を注ぎ、協力よりも脱落に加担する傾向は絶滅したいものである。

そのためには小さいときから、「女のくせに」「女らしくくない」などの表現をタブーとし、女としてでなく、人間としての自覚を持たせる努力を必要とする。現実面では壁につき当ることがあっても、事実、それは多いであろうが、ひるまず試行錯誤を繰り返し、次第に向上していく姿の中にまことの人生価値があると教えていかなく

てはならない。それは結局、男性にとってもプラスになるであろう。

・これからの男を変える法

学校教育の面では中学・高校を完全に男女共学とし、家庭科もちろん男女ともに必修とすること。家庭でも身体的な区別以外に男女間には基本的能力差のない事実を確認し、料理に興味を抱く兄、アプリケをおもしろがる弟などを異端視せず、これを助長するように努力すること。

職場では婦人部の強化をはかり、賃金差別・若年定年制など女性組合員の希望を反映させるようにしむけ、場合によっては婦人部独自で運動を展開する。一方、日常生活の面でも、旅行・忘年会など機会をとらえて男子社員的不作法を一同でたしなめる習慣をつくってゆくこと。

女性自身も粗野な人間を男性的だなどと誤解せず、文明国にあつては彼らは単なる野蛮人だと承知すること。女性をいたわり、平和を愛し、マナーを心得た物静かな男性を「女みたい」などというのがそもそもその誤り。

・次の世代の教育に関する提言

思想、社会、経済、芸術など、あらゆる面で流動性が増し、個人の将来を予測することが全く困難になってきた現在、確実なことは自分は地球の歴史上、唯一無二の存在であり、人生はただ一回だけだという事実である。この自覚に立てば、その自己に忠実に生き抜こうと努力

することが、最も動揺の少ない生き方であり、同時に最も良き生き方となる。

とすれば、教育はこの目的を果すための手段であつても、制度のドレイになることではあるまい。通訳になりたいなら外国語科を選ぶがよく、権力を志すなら政治学科に籍をおくがよい。パン焼きの第一人者になりたければ各種学校を卒業し、不足なら外国に修業に出かけることである。高校・大学の入学から就職まで、ただ「はいれたから入った」という無目的・没個性的な態度は他の国ではまず見られない現象である。ゲーテにならうというならば「始めに自己ありき」である。

おことわり

記事中的かこみ欄は、次の書籍から引用しました。

「第二の性」ボーヴォワール著

生島遼一訳 新潮社

「ウーマン・リブ」ケート・ミレットほか

高野フミほか訳 早川書房

「与謝野晶子・激動の中を行く」

もろさわようこ編集 解説 新泉社

☆ 男 が

家事をすることの

意義 ☆

吉 武 輝 子

家事に対する偏見は

男女ともにある

この前私は、山岸会の「北海道試験農場」に取材に行ってきた。普通女の人が家の中で持っている仕事は、絶えず何かに追っかけられているような、例えば、洗たくしている最中に子どもが泣く、トイレに行かせる、すると電話がかかってくるということで、いつでもどこかで中断されていて、しょっちゅうイライラしている。

ところが、山岸会のシステムは、洗たく係は洗たくだけ、料理係は料理だけ、掃除係は掃除だけ、子どもの教育をする養育係は世話だけ、それが済むとまったく自分の自由な時間として解放されているわけです。これを三か月交代でやっているのですが、そういうものが家事の中に盛り込まれているものだから、ヒステリックな声などは、三日間いたのですが聞けませんでした。

ところが、洗たく係も掃除係も炊事係も全部女なんです。男の人は牧畜をやったり、畑の仕事をやったりなんです。その中に女の人の姿もありますが……。ですから、家事労働をグループ別にして個別にやっていないだけで、やっぱり女が担当しているわけです。

私は山岸会の人に「こんなに平等の作業をやっているも、やっぱり家事労働は女だけで、男はどうして参加し

ないのでしょいか」と言ったら「昔からそうなっていますからネ」と、非常に単純な答が返ってきたわけです。

しばらく前に「婦人公論」の、シュフの手記を読んで笑ってしまったことがあるんです。シュフといっても主夫なんです。奥さんが雑誌の編集者で、旦那さまが家にいて酒屋さんとか、魚屋さんとか、八百屋さんとか、毎日買物に行くわけですが、そうすると店の主人は軽べつの目で扱うし、まわりで買物をしている奥さんなんかも「アラ、イヤラジイ」というような顔をして見るといふわけで、「どうしてこんなに差別するのか」という内容の手記でした。ほんとに家事に対する偏見というのは男女ともにあって、非常にむずかしい問題だなと思っただけです。

共働きエレジーの

現実

実際のことをいろいろ考えてみますと、「男は外、女は内」という男女分業システムの中の家庭づくりというものが、日本の中でごく当たり前に組み込まれていました、戦前までは……。

ところが今は、女は労働力の過半数を占めていて、女二人のうち一人は共働きだというようになってしまっている。その彼女らの嘆きというのは何かというと、二重

労働のあえぎなんです。会社から帰ってくる、自分の家に明りがついてない、そうすると「ホッ」とするといふんです。十人のうち八人までは。

なぜかという、旦那が帰ってきていないということなんです。旦那のはうが早く帰っていいものなら、非常に恐ろしい顔をして待っている。だから窓の明りがついているかどうかによって、その日の疲れが半減もするし、反対にどっと出てくるし、というような共働きエレジー。

これはかなり進歩的な女の人の間でも、絶えず嘆きとして出ているわけです。

特に四十代の共働きというのは問題が多いんですね。うちの宿六も、若いころは非常に理解ある男性として、家事労働を一所懸命やってくれた。しかしこれは理解という、頭の中の意識の操作でやったわけです。若い時というのは、気力、体力ともに充実しておりますから、意識操作、理性操作というのが可能なのです。ところが四十代、五十代にさしかかってくると、まず体力が衰えてくる。また、ある程度の管理職者になってきて、今の価値体系の中で秩序を守る側に立たされてきているわけです。そうなる、と理性操作ができなくなってくる。しんどくなってくるわけです。

私の場合も、言っちゃだと言われるくらいなら、自分が動いちゃったほうが早いと、今やあきらめている部分があるわけですが、若い時のことを考えてみると、当

り前ということでは、どうしても動けないわけなんです
が、私の中にも「家事労働というものは、女がやるもの
である」という考え方を皮膚化しちゃってる。再皮膚化
しているわけです。ですから、うちの宿六が私より遅く
帰ったときには、私が家事をやっておいしーいご飯を作っ
ておく。亭主はそれを当り前だとして食べる。ところが、
私が遅く帰ってきて彼が作った場合には、なぜか「あり
がとう」と言っちゃうし、イントネーションも全然違う
わけです。

権力のために

一夫一婦が必要

では、ほんとうに「家事は女がするものか」。

この問題は、女性解放の立場からだけではなく、命と
いうことから考えていかなければいけないんだという
確信をもっています。

それから「女が家事で男が職業だ」という、いわゆる
分業制度の育てられ方、これはいったいだれがいちばん
得をしているかという、やっぱり権力者です。本来人
間というのは、基本的には、身の回りのことをする能力
と、一つ口を養う能力は持っているはずでし、個人の
性格、才能、能力、可能性は千差万別であるわけですか
ら、そういうものを持った一人の男と、一人の女の組み

合わせ、それによってできる結婚の形というのは、本
来、千差万別であってしかるべきなんです。

ところが、そういう個々のものを認めてしまったら、
いちばん困るのは権力者なんです。

個々のものを認めてしまったら大変まともにくくな
る。ですからパターン化する必要がある。世の中をうま
く政治家が治めていくためには「男はこういうもの、女
はこういうもの」と、ピッとひとつの枠を作ってしまった
ほうが治めやすいわけです。そして家庭づくりにおい
ても、これが決定版というような生き方を示す。こうな
ると、こんなに楽ちんなことはないわけです。治める方
にとって。

企業でも結婚というのは、その人の人格のエネルギー
なり、組合活動での怒りのエネルギーなりを捨ててしま
う、キバを抜いてしまふ、解毒剤的な役割として非常に
長い間秩序を守ることに役立ってきました。ドイッなん
かでは「結婚制度を批判する者は、国家に対する反逆で
ある」という言葉があるくらいです。イギリスのバート
ランド・ラッセル卿は、今までの結婚に対する批判を書
いて、大学教授の座を追われて国外に追放されています。
結婚というのは、あたかも個の問題のように思われて
いるようですが、制度としての結婚は、国家秩序を守る
ためにどうしても必要なものです。だからシステムとし
ての一夫一婦、これはもうわれわれの願いではなくて、
国と秩序を守る側の絶対至上命令なんです。

不完全人間を作って 結婚制度を維持

人の一生は思う通りには生きられないが、しかし、そういう中でも、子どもを産むこと、育てることなどを自分で選んで生きていける社会、こういう社会が女性にとって解放された社会といえます。ところが、今の社会での一夫一婦制度というのは、個人の愛情とは関係のない、国家権力の問題であるということ。これだけは皆さんに知っていただきたいと思うんです。こういう意味で、先ごろの「未婚の母のK子さん事件」は、女性にとって、まったくの見せしめリンチだったわけです。K子さんのように、産むことも育てることも自分で選ぶような女、そういう女を許してしまつたならば、一夫一婦制度が揺らいでしまうということです。

一人の女、一人の男が家事能力もあり、かつ自分自身を養う能力を持っている場合には、便宜的に結婚をする必要はないわけです。そうなるも独身の男も、独身の女もかなり出てくるし、子どもを産まない人も増えてくる。一夫一婦制度の中には、次なる世代を確保するという至上命令があるわけですが、こうなると、それすらも不可能になってきます。

「女の人に一つ口を養う能力を持たせない、男の人に

身の回りの世話をする能力を持たせない」ということは結婚制度を維持していくためにも、どうしても必要なわけなんです。

便宜性で

バーゲンセール

今の日本の女性は、二十四―二十五歳くらいになると、ドドドドドッと、音をたてて結婚生活へなだれこんでいきます。これは断固としてバーゲンセールをやっているんです。よく考えたり、自分の自由の選択、納得して人生を選択する自由というものの得がたさを知らずに、結婚してしまっているわけです。だからそういう女性にとって、身の回りの世話をする能力のない男性が世にあって、いるほうがいいわけです。

身の回りをしてくれる人であればだれでもよい、お母さんでもよいということで、最近では三十になっても結婚できない男が増えてきているそうですが、これは特にイギリスには大変多いんだそうです。肉体関係を持たなくても、フリーセックスだから別段関係ないと。こうなると女の価値は、便宜性になってしまっているわけです。と女の人の人格など関係のない、身の回りをしてくれるという便宜性ですね。では男は何かというと、男は一つ口を養う能力、これもやっぱり便宜性なんです。というこ

とは、結婚というものが便宜上成り立っている、つまり便宜婚というものが相変わず多いということです。だから急いで結婚する。優生保護法の改正案なんかみてもはつきり出てるわけです。女が子どもを産むのにもっともふさわしいのは、二十四歳だと書いてあるんです。法律で決めてるわけです。これはとんでもないことで、女の性というものを、ライフサイクルを、管理しようとしているわけです。

男も「肩たたき結婚」の

管理下に

女は結婚ばかり急いでいるというが、男もそうなんです。たとえば企業なんかの場合は、男が二十七～二十八歳ぐらいになると、係長の辞令といっしょに「君、そろそろ結婚したほうがいいねえ」といわれるんだそうです。つまり、結婚すると悪いことはしないだろうというわけなんです。それからもう一つは、自分で下宿なんかしていた場合、むだな労力があるために職業人として全力投球できないから「君もそろそろ結婚して種々の雑事は女にやらせなさい」と、そしてその分のエネルギーは、すべて企業に全力投球しなさいという指導の仕方。つまり「肩たたき結婚」というわけです。「モシモシ」と言っただけ。

もっとひどい企業なんかは、夫が役職についた場合は、共働きをやめさせるシステムをとっているところが多いんです。女を働かせているというのは、社会的な体面上非常にみっともないというわけです。うちの宿六さんもしょっちゅう肩たたきされているわけです。私は「妻ではなく、共同者だ」と言っただけまかしているわけですけど。

そういうように企業そのものが、まず第一に労働力という意味から人間を考えているわけです。労働力だけで人間の良し悪しを判定している。日本という国はそういう国なんです。労働力として質の悪い順に、社会の脱落者として扱われているわけです。だから子ども、老人、女、身障者は質が悪いというわけです。企業なんかは、結婚というものは、労働に全力投球できるための必要条件というふうに考えて、結婚相談所までかかえ込んでしまっている。とことんまで企業管理下におこうとしている。だから結婚制度を「昔国家、今企業」という言い方をするわけです。男にも女にも一人歩きを許さないシステムというのが、歴然としてあるわけです。

結婚制度の延長としての

若年定年制

この管理システムのうち、最も大きいのは、若年定年

当然なんです。

女の性のプライドを

喪失する教育

制です。憲法では「性によって差別してはならない」と明示してあるのに、二十五歳若年定年制、三十歳、四十歳と定年制が現実にある。今、女の人は七十歳が平均寿命です。男の人は定年退職しても退職金は多いし、再就職する所もたくさんある。しかし女の人が四十歳で退職したら、あとの三十年をどうやって生きるのか。退職金も、利子食いでできるほどはもらえない。いちばん多い人で三百万なんです。

スウェーデンのように、完全に人間としての老後が保障されている国ならいいですよ。ところが、日本の場合は、夫婦共稼ぎをしても老後の生活がむずかしいと言われているほど、福祉国家としてはまったくゼロなんです。二十五歳若年定年制の会社で、フジテレビがそうです。ここでは「二十五歳の誕生日が憎い」ということで八年間闘った。どういう闘争かというと、二十五歳になると人事課から赤いバラの花といっしょに「つきましては、十日後に退職願いをお出しく下さい」と書かれた袋が贈られてくるわけです。ところが八年間闘って変わらないんです。延々として続いているわけです。

あそこは非常に給料が高いんですが、二十五歳で退職して、それと同じくらいの給料を第二の職場で得られるかという、まず半分です。そうなってくると彼女たちはどうすればいいか、やはり結婚せざるを得ない。彼女たちが親になって、自分が育てられたように子どもを育てるわけですから、こういうことの繰り返しになるのは

私の子どもは女の子ですが、子どもを連れて歩いてみると「お宅、お嬢さんでいいわ」なんて肩をたたかれます。「どうしてですか」と言うと「うちはお兄ちゃまでしょ、やっぱり大学へ入れてやんなくちゃいけない、女の子はいいわよ、年ごろになったら片づけちゃえばいいんだから、短大にでもほうり込んでおけばいいでしょ」ということになるんです。片づけちゃうっていうんですね。

また、うちの娘が幼稚園のころ、男の子を持ったお母さんが「女の腐ったみたい」とか「女みたい」とかいつて怒っているのをみて、「わたし、女の子に生まれて損しちゃった」って言うんです。ところがPTAにいても同じことをやってるわけです。子どものいる前で、いかに女の先生がためであるかということを、とうとうとしゃべりまくるわけです。だから男の子は、小さいときから「しょせん女は男より劣っている」ということを学習させられるわけです。「男の子は女の子を大切に、女の子は男の子に安く売っちゃいけない」なんて教えられるわけです。もうこの時点で、女の子は自分の性に

対してプライドを持てなくなっている。ひとりで生きられないように育てられている。ですから非常に苛酷なことを、母親も父親も教師もしているわけです。「お料理なんかやると、男の子は軟弱になる」ということを、小学校の先生が平気で言うわけです。

家事を分担しないと

優しさを失う

こういう形で、ことごとく半チク人間に育てるという作業が続けられているわけです。そして困ったことに、それを推し進めているのが母親なんです。このことをいちばん嘆いているのも彼女たちなんです。今の子どもが、家事ができなくなっちゃったのは、核家族ということも影響していると思います。ほとんどの家庭で、家事をやるのは、母親ひとりなんです。家事労働をひとりで受け持つちゃっててから、主婦というのは病気になるって寝ることができなくなっちゃってて。男というものは不思議なもので、自分の妻が病気をしたときは、空気が何かが看病してくれるものと思ひ込んでいます。核家族になっちゃった今、自分の健康管理すらもできなくなっちゃっててるわけです。

今のお母さんたちは、男の子にぜったい家事はさせないで、勉強だけしていればいように育ててしまってい

るわけです。お母さんが熱を出して寝ていても「ご飯が食べられないから起きろ」と、中学生の息子がマクラーをけとばしたという話もあるんです。家事労働という、身の回りの世話をする能力を育ててやらないと、単に女性解放ということだけではなく、人間としての優しさがわからなくなっていくということです。今の状態では、きらいなことは女がするものと思ひ込む人間になってるわけです。掃除、洗たく、料理だけが家事というところえ方ではなしに、生活、命の営みとも関連させて考えていたできたいのです。命の営みに男が参加しなかったから、今のような社会ができちゃった。命よりも生産優位の社会になっちゃったわけです。

男も女も社会人

そして生活人に

公害社会になっちゃったのもこのためなんです。そして石油タンバクの問題などが起こってきたわけです。公害というのは健康を損ねるものではなくて、命そのものを損ねるんです。なぜそうなるってしまうのか、つまり企業の中で中心になって働いているのは男の人だからです。では男の人は、なぜそういうことができるのか、先ほどいったように、小さい時から職業人としてしか育てられてこなかったためなんです。生活者としての部分を

も持つように育てられてこなかったからなんです。だから、命というものに結びつかなくなっちゃった。生活し命の営みを行なうことが人間だという、ひとつの価値観をビッチととらされていたならば、自分の働く工場の中で、人の命が損なわれるものが作られているとしたときに、職業人としての自分、命の営みを行なう生活者としての自分との間に、矛盾と対決があるわけです。そうして対立する中で、自分の中にある自己矛盾を克服したときには、こんなバカバカしいかせぎ方を許すわけがないんです。水俣病の問題にしても、チソで内部告発をしたのは女性なんです。

命のためにもやらなければいけないことは、男も女も半クな人間であってはいけないということなんです。男も女も、一つ口を養う能力と身の回りの世話をする能力ができた上で、そして同じパートナーとして男と女がいっしょになって、生活者でもあり、職業人でもあるという考えを、男と女が両方を持ったときに、今の社会を変えることができるんです。

この問題は単に女性解放ということではなくて「マン・リップ」として、人間解放として、みんなが真剣に考えていかなければならないわけです。これからはもっと身近な男からオルグしていかなければならないということです。身近な男をオルグできないで、なぜ世界中の男をオルグすることができるのか。

それにはまず男たちが、家事に参加できるように、や

りやすいように、システムを変えていく必要があるし、人目につかない所から手伝わせていく方法もあるでしょう。子どもたちは、もちろん両方できる子どもに育てていかなければならない。家庭科というのは技術を学ぶのではなくて、男と女がどうかかわっていくのか、家庭は何のためにあるのか、家事労働というものは、いったい何を意味しているのか、そのことを話すほうが、はるかにお互いにプラスなんです。家事というものを狭義に考えるのではなくて、命の営みといった意味に広げていくことが必要じゃないかという気がするんです。

(小金井市婦人学級での講演より)

視点

学歴と結婚費用

中堅サラリーマン層は子どもの教育について、男の子に関しては九六％が四年制大学を希望。しかし女の子の場合には四年制大学希望は五六％に下落、短大が三五％、女の子は短大までよしとするものが三分の一強。

子の結婚費用については女の子に甘く、男の子は女の子の三分の二の予算。「男は学歴、女は結婚」の意識が根強い。

(貯蓄増強中央委 第六回「コンビニエータによる生活設計診断」より)

☆ 東南アジアの

女性たち ☆



朝日新聞社会部記者

松井やより

一九七四年の三月、公害反対闘争に取組んでいた若い人たちが「足で体験する東南アジア・セミナー」という旅行を計画した。東南アジアや韓国に公害工場を作りつつある企業を告発するために、各国の草の根の人たちに会おうと、私もそれに加わって、タイ、マレーシア、インドネシア、南ベトナムの四か国を回ってきた。

日本では東南アジアのイメージというと、非常に貧乏で、子どもをたくさん産んで、文盲だということではないかと思う。私自身、東南アジアの女性がこれほど社会的に進出して、重要な役割を果しているとは考えてもいなかった。

社会的に進出している 東南アジアの女性たち

しかし日本にいる時からうすうす気がついていたことがあった。いろいろの国際会議が日本で開かれたときに世界各国からたくさんの方がくるが、東南アジアの国々から正式代表としてくる人たちの中に女の方がたくさんいた。例えば一昨年のアジア人口会議でも、フィリピン国立人口研究所の所長は女性だった。他の会議ではインドの女性が代表であるとか、たくさんの方の女性の代表が政府の代表としても活躍している。

ところがそういう場合、日本の代表団席は女の方がほとんどいない。日本の政府も、一般の男の人、女性の代表を出すなどということは頭にもない。日中国交回復

のとき、日本からたくさんの同行記者団が行ったが女性記者はゼロだった。

タイの女性の活躍の一端をみる

東南アジアの女の人たちの活躍ぶりの一例を紹介すると、大学では若い女性の研究者や講師などがいきいきと活躍している。

その中の一人であるタマサット大学のスタヂップさんという活発な二十五歳の講師の女性は、アメリカに留学している間に公害問題とウーマン・リブに大に関心を持って帰ってきた。そして女子学生に呼びかけて「環境保護クラブ」という公害反対のグループを作った。まず大変汚れている河の水を調べたら、汚染の原因は砂糖工場から出ていることをつきとめ、その工場に公害防止装置をつけないさう言った。ところが東南アジアではどここの国でもそうだが、政府が非常に腐敗していて企業とグループになっている。タイでも砂糖工場の幹部と政府の役人たちが裏で汚職の関係があるものだから、いくら追及してもなかなかちゃんとしたことをやらない。しかしキャンペーンを続けていたので世論がわき、とうとうクビにするかしにまで問題が発展したほどだった。

彼女は私に「本当は女性解放のことをやりたいのだけれども、タイは仏教国でウーマン・リブなんて言葉を使

ただけでも大変な騒ぎになってしまう。だからまず女の人でも実力を発揮できるのだということを事例で知ってもらうために、公害問題と取組んだのです」と言った。最近では女性解放のグループを作って展覧会もやっているし、一九七四年の六月に、東京で「アジア人会議」が開かれたときに彼女も日本に来た。このように若い女性が政治にまで非常に大きな影響を与えている例は心強い。

もう一人タイの女性を紹介すると、タイでは影響力の強い英字新聞「バンコック・ポスト」紙の三十代半ばの女性記者、スマリー夫人。毎日曜日に大きなコラムを書いていて、そこで女性の問題をよく取り上げている。

例えば国会で婦人議員が足を組んでいたら、行儀が悪いと言われた。ところが男性議員は同じように足を組んでいる。そこで「女だけがこうしなければならぬという不公平な道徳をおしつけられているのはおかしい」、また「子供の教育についても、息子たちが女の子をひっかけても何も言わないのに、娘たちには悪い男の子にひっかからないように言う。そういう教育の二重性は問題だ」といった具合。

彼女はまた、七四年の学生革命で誕生した新しい政権が、新憲法制定委員会を作ったとき紅一点で委員になった。その新憲法に「なんびとも法律の前に平等である」という項目があり、それに「性による差別なく」という字句を挿入するように大奮闘したが、結局、他の委員の反対で駄目になった。というのは「いかなる性も平等」

と入れると、タイの婚姻法始め全部男女平等な法律を改正しなければならなくなるので男性委員の思惑がからんで頑固に反対されたからだ。例えば女の人がパスポートをとるときにも夫の承認、同意が必要となっているから、こういうものを変えていかなければならなくなる。しかし彼女は自分の奮闘している経過をコラムに書いて訴えたので、タイの女の人たちに自分たちの状況を考えさせるきっかけを作ったと思う。

タイでは大きなホテル、船会社、バス会社なども女社長は珍しくない。経済的な実力を持っているビジネス・ウーマンが日本よりずっと多いという感じがした。

子どもが多くても社会で活動 マレーシアの女性たち

マレーシアは複合国家といって、マレー系が四割、中国系が四割足らず、インド系が二割近くという人種構成でできている。人口は一千万人くらい。マレーシア人という私たちとは原始的な生活を送っていると思うが、教育を受けた人たちが、中でもインド系とマレー系の女性は活躍が目ざましい。女性の外交官もいるし、国会議員はもちろん、大学教授にも女の人がたくさんいる。

私が会ったのはフアティマ博士という四十歳くらいの女性。マラヤ大学の教育学部の副部長でしかもマレーシア全体の婦人会議の副議長をやりながら子ども二人を育てている。子どもが二人というのは少ない方で、驚いた

ことに社会的に活躍している女性の多くは子どもが七、八人、多い人で十人くらいいる。それで赤十字関係のリーダーをしていたりして、そのフアイトたるやものすごい。

上流の人たちだからお手伝いさんがいるという反論もあるが、しかし日本では明治時代から今に至るまで、上流や金持の夫人は何人もお手伝いをおいても、家庭の中に引っ込むのが当然と考えられており、社会的には何もなかった。お手伝いさんがいるからというのはあまり関係ない。東南アジアでは女だからダメという偏見が少なく、条件さえ許せば、社会的に何かやった方が女の人の評判もいい。何もしないで家でブラブラしているのはあまりよく思われないという伝統があるからだ。

インドネシアの女性は 政治的に活躍

インドネシアがオランダの植民地支配から独立しようとした最初のきっかけを与えたのは、カルティニという女性だった。彼女についてインドネシアの人は「女学校の先生をやっていた人で、十九世紀の半ばに、インドネシア民族がオランダの植民地支配の下にあることに對し、切々とした怒りをもった文章を書いて訴えた。それが人々に読まれるようになり、民族的な自覚を与えるきっかけになった」という。

彼女だけでなくインドネシア独立運動の中で「コワニ

（インドネシア婦人会議）など婦人団体の果たした役割は大きい。その伝統が独立後も残っていてインドネシアでは女性が政治的に非常に活躍している。スカルノ時代には女性大臣が三、四人いた。

スカルノ時代に労働大臣をやっていた女性にお会いしたが、彼女はかなりの齢にもかかわらず今も一民間人として女性の地位の問題に関係のある組織を作って活躍している。

南ベトナムで 女性の果たした役割

最後に行ったのは南ベトナム。ご存じのとおりベトナムには五十万人のアメリカ軍隊がきて、第二次世界大戦中に世界中に落ちた爆弾の二倍の量の爆弾があつた小さな国土に落ちた。直径九、十メートルの爆弾の穴が六千万個もあり、森の六分の一が毒薬、農薬で丸裸にされたという恐るべき破壊の中で女性の果たした役割は大きい。

ここにフアン・ティ・マイという三十歳の女性の詩がある。この人は一九六七年、北爆でベトナム戦争が全土に広がったとき「戦争を早くやめて」との願いをこめてガソリンをかぶって焼身自殺を遂げた女性である。自殺の前日に、自分の家族、友人、ニクソン大統領、チャーリー・チューン大統領などにあてた遺書として残した詩を読んでみたい。

私は手をあわせてひざまずきます。
最高の苦痛を私の身に引き受けます。

私の心からの言葉を言っておきたいのです。

手を引いて下さい。皆さん。

手を引いて下さい。皆さん。

もう二十年以上が過ぎました。

たくさんの血が流されました。

どうか、私の民族を皆殺しにしないで。

どうか、私の民族を皆殺しにしないで。

手をあわせてひざまずいて祈ります。

さらに遺書の中には――

「たとえ生きていようと、思っていることを言えしませぬ。死んではじめて言葉になるのです。この暗い夜の中で私は燃えて小さく輝きたいまっつになりたいたいです。この暗い夜の中で」

生きていても、言論弾圧とあらゆる困難のなかで、戦争反対を叫ぶことさえできない。叫べば殺されてしまうので、ガソリンをかぶってたいまつになり、抗議の意思を表明した。こういう女性の意思というものがいまなおベトナムの中で受けつがれている。

チャーリー政権下では三十万人の人が政治犯として投獄され、その何割かは女性なのである。政治犯といつてもサイゴン大学の女子学生がちよっとビラをまいたとか、あるいは忠誠を誓わなかったとかで逮捕されてしまう。逮捕された女性の状況は獄中からの手紙で知られるのだが、強姦されて獄中で子どもを生まされたとか、妊娠六か月の人を天井からつるして棒で叩いて肉が裂けたと

か、石鹼水を飲まされて少女が発狂したなど目を覆うような拷問の実態があった。

そういう状況にある女性の例としてご紹介したいのがゴ・バン夫人という四十歳を少し越えたサイゴン大学の国際法の先生で四児の母である。彼女はチュエー政権に対して反政府運動をずっと続けており、七一年には四回目の投獄をされた。パリ和平協定には政治犯を釈放するという項目があるのに、チュエー政権はいつまでも彼女をつないだままにいる。怒った彼女はチュエー大統領あてに、これが最後だとの一死を覚悟しているから一激烈な抗議文を送り七三年の四月からハンストに入った。何十日もハンストを続けて死ぬ寸前にまでいったが、やがて国際的なタン夫人救援運動が広がり秋には一応釈放された。

私は七四年の三月に彼女の家を訪問したのだが完全な軟禁状態で、家の回りを二十人位の制服、私服の警官がとりまいていて恐ろしかった。彼女だけでなく彼女の家族がでかけるときもいつも尾行されているという話だ。当時の南ベトナムの状況をちょっと説明すると、サイゴン政権と臨時革命政府があり、サイゴン政府に批判的な平和・中立の第三勢力がある。その第三勢力のリーダーの一人がゴ・バン夫人だったわけだ。タン夫人の家を訪ねると、彼女は第三勢力の人たちの書いた手紙、遺書、論文などを厚いガリ版刷りの資料集にしてあり、私に日本のみなさんに持って行ってほしいという。彼女がそれを持ち出したとたんに全部没収されてしまうからだ。私

がそれを持ち出したときにも尾行された。タン夫人をはじめ死を恐れずに運動を続けているベトナム女性を見ると、アジアの女の人たちの底力を感じて、繁栄の中で身の回りの小さな事にだけしか関心を示さないで暮らしている私たちの生活について厳しい反省をせまられる。

ベトナムでの強い印象 「未婚の母の家」

もう一つベトナムの女の人の状況で印象的だったのはカトリックの神父のたてた「未婚の母の家」。そこには臨月の女の人が六十人〜七十人、子どもを産んだばかりの人が三十人くらいいる。どうして「未婚の母の家」などというものがあるかというと、ベトナムでは若い男の人がたくさん戦死してしまつて男一人に対して女七〜八人というアンバランスな状態にあり、結婚するつもりでつき合っていたら、男の人が戦死してしまつたなどで結婚できないで子どもが生まれるケースが多い。日本のように中絶は自由にできないし、とてもお金がかかる。ベトナムでは結婚しないで子どもを産むことに對して道德的な批判が強く、未婚で子どもを産む娘を回りが非常に冷たく扱うので、どこか安全に身を隠して子どもを産めるところということで「未婚の母の家」ができた。

ベトナムで「死んだ人はまだいい。生き残っている方がつらいんだ」とよく聞いたが、「未婚の母の家」では生き残っていることがつらい重荷になつて女の人にふり

かかっていることがよくわかる。

このようなベトナムの女の人の状況というのは、日本とは関係ないといってすまされない問題だ。なぜかといえば戦争遂行政策をとって女の人たちをひどい状況に置いているチュウ政権に日本は莫大な経済援助をしたからである。タン夫人からも「日本の人たちに何としても伝えてほしいのは、戦争を続け、戦争に反対すれば投獄して拷問するような独裁政権に日本政府が援助するようなことはやめさせてということです」と強く言われた。だから私たちがベトナム戦争に対して全然責任がない、関係ないなどとは言えない。

日本の企業の進出と 肌で感じる日本人への反感

女の人の状況だけでなく、アジアに行ってみて驚くのは恐ろしくいろいろな日本の企業の進出ぶりである。バンコックに行けばソニー、サンヨー、トヨタと看板だらけ、店に入れば日本の扇風機、走っているのはオンボロのトヨタ、ニッサンの自動車であり、郊外に出れば松下、味の素、テイジン、トヨタなどの大工場がある。

あるタイの人は「自分の月給はみな日本人に払っているようなものだ。朝起きたらトースターも日本のもの、扇風機も日本のもの、バスに乗れば日本のバス、学校へ行けば日本から輸入した建材で建てた学校」と言っていた。日本人への反感は行ってみると肌でビンと感じる。タ

イには一週間くらいいて帰る日の朝、新聞を見ていたら新聞の三分の二くらいの紙面をさいて「日本人は利己的な民族だ」という日本の悪口記事がデカデカ載っていた。とにかくすごい反日感情である。日本の経済進出に対する反感、自分の国を乗取られるんじゃないかという恐怖感から来ているようだ。

日本が嫌われているもう一つの理由は、第二次大戦を忘れていないということ。例えばマレーシアでは、戦争の悪夢が残っている。マレー半島攻略戦の中で、人口の四割を占める中国人が日本人によって大量虐殺されたという歴史がある。とくに中国系の人と話をしていると最初は友好的に話をしているも、「ざっくばらんに話をしましょう」と言うと、ガラリと変わって「私の町の何々橋には、日本人に殺された中国人の首がいっぱいさらしてあった」「シンガポールの海は私たちの同胞が日本人に殺された血で真赤に染った」などと言われた。

マレーシアの教科書には「ジャパニーズ・ウォー」について、何ページにもわたって日本から侵略された状況が詳しく書いてある。その虐殺に対し「中国人殉難の碑」が建てられ、一方ではソニー、トヨタ、三菱の大きな看板がある。非常に象徴的だと思った。今の経済侵略と昔の軍事侵略に対する責任をもっと日本人は考えないといけないのではないか。

以前、田中首相が東南アジアを訪問したおり、タイ、インドネシアでは反日デモに会ったがマレーシアではな

かったからよかったと新聞に出ていたが、マレーシアの大学生たちはもし反日デモをしたら即刻停学処分になるという厳しい布令が出たためやらなかっただけの話で、ひそかに運動の準備はされていたという。

反日運動は、自分たちの政府への反政府運動ができないから、日本がやり玉になったと日本の新聞には書いてあるが、単にそれだけでなく日本の「ただ儲けるためにくるんだ」というやり方に対する反感があったのは事実だと思う。

日本の経済戦略が引き起こす 東南アジア・韓国の女工哀史

こういう日本の経済侵略の結果、タイでは、戦前の日本の女工哀史そのままのことが行なわれている。タイでは繊維産業が重要産業で、そのうち七七八割を日本の資本——東レ、テイジンなどが牛耳っている。石油危機の際、国税庁の発表した超過利得企業一覧表によれば東レは第三位、テイジンは十何位という具合で、その数百億円の利益はタイやインドネシアで少女たちを安く使い、そこであげた利益を日本に持ち帰った結果なのである。タイでは十二〜三歳のローティーンの少女まで使い、一日十二時間も働いて一日十バーツ(百五十円)、コーヒー二杯分にしかならないという低賃金だ。七四年の六月にはさすがにインフレということもあって大ストライキがあり、その結果少しは賃金があがったものの、相変わらず

ず休みが月に一回あるかないかという状況にある。

寮などはまさに女工哀史そのものという感じを受けた。三交替制で働くので三人が交替で寝るだけのスペースしかなく、プライベートな場所は全然ない。トイレは大勢で一つしかないのでもくさく、風呂はきたなくて数が少ない。日本の大企業というのはタイでそういう非人間的なことをやっている。こういう人たちの犠牲の上にたつて、今の日本の賃金水準がある程度保たれていることをもう一度考えてみなくてはいいかなと思う。

アジア人会議が開かれたときに、二十代のチュラロンコン大学の女性講師が、こうした繊維産業で働く女子労働者の実態を面接インタビューをして調査したレポートを出したが、その報告によれば、換気が悪いためにはこりを吸って呼吸器系統の病気や結核でどんどん倒れてやめていくとか、安全の問題ではスペースを節約するために機械をつめてたくさん入れているために火事になったり逃げ場がないという。実際に火事が起こり、たくさん

の女子工員が焼死したこともある。

これと似たようなことが韓国でも行なわれている。韓国での日本の経済侵略は、東南アジアの他のどの国よりもひどい。韓国における外国投資の七七八割が日本で、韓国は日本の経済的な属国とも言えるくらい日本が支配している。なぜ日本の企業は韓国に進出するのか。最大のメリットは低賃金労働であり、その低賃金労働の最たるものが女性である。タイのチュラロンコン大学の女性

講師のレポートにも分析してあったように——女性には低賃金だから食いものになる——これとまったく同じことが韓国においても言える。

韓国に馬山という輸出自由地域がある。ここは日本などの外国がそこに工場をつくると、関税なしに作った製品を日本やその他の国に自由に輸出できるといふ保護地区になっている。その馬山の女子工員の実態をみてきたスウェーデンの記者の話によると、一日十何時間労働で、休みは月に一回あるかなし、それで一か月一万ウォン(七千円と八千円)にしかならないという有様で、本当に目をおおう状況だという。夜眠くなったら能率が落ちるからというので興奮剤を飲ませるといううわさも聞いたという。

さらに驚いたのは馬山には赤ちゃんの捨て子が最近一年間に六千人もいたという話。馬山には百五十数社に及ぶ外国系企業があり、そのうち数社を除いて全部日本企業だという。そこで馬山に來れば何とか仕事が見つかるんじゃないかと、農村地帯から小学校を出ただけのローティーンの女の子がどんどん来て、五、六万人の若い女性が働いている。さらに二万人くらい職にあぶれているからいつでもクビにできる状態だ。

このように経済的な搾取に加えて、性的な迷惑もかけ

性的搾取 キーセン観光 悲惨な話のかずかず

ている。今の朴政権というのは、ベトナムから外国軍隊の撤退が決定されるまでは、韓国の若い人たちをベトナムに送り込んでいた。若者たちの血で外貨を獲得していたわけだ。ところが和平協定でそれができなくなったので次に若い女性の体を外国人観光客に売ることによって外貨を獲得しようという考えを抱いた。

去年一年間に、韓国へ行った外国人観光客は五十万人で、そのうちの七、八割は日本人、さらにその七、八割は男性だった。女性は本当に少ない。何のために彼らは韓国に行くかというときーセンを買うためである。団体旅行で三泊四日、六、七万円で行ける。旅行のスケジュールにキーセンパーティーというのが必ず入っている。男性客一人につき一人のキーセンがなりてに坐って、食事をするときは口に箸で食べ物を運んでくれるという、いたれりつくせりのサービスぶり。食事が終わると自分のそばにいたベアのキーセンをホテルにつれて帰って一夜をとにする。韓国に行った人で心ある人は、日本の男性観光客がキーセンを小脇に抱くようにしてホテルをうろうろしているさまに目をそむけなくなるという話だ(二〇二ページ「事実が示すキーセン観光」を参照)。

先日、知り合いの日本人のキリスト教牧師でソウルの大きなスラム街に住んで奉仕活動をしている人から、彼が撮影した一枚の写真を見せてもらったのだが、それは十六歳くらいの少女が真青な顔をしてうつろな目で寝ている写真だった。その少女は暴行を受けて二、三か月前

思い出される従軍慰安婦

に子どもを産み、子どもを産んだのち皮膚病にかかってあまり病状が進行したので、スラム街のすぐ近くにある大きな病院につれていったのだが、スラム街に住んでいける金のない人は受けつけないから帰れと言われて治療が受けられなかったという。

韓国には健康保険制度というものがないも同然で、適用されるのは人口の〇・何パーセントくらい。ちょうど治療も受けられずに死にそうになっている写真だったわけだが、その一か月後くらいに少女は死んだという。

そんな話はソウルの裏街に行くといくらでもあるという。一日六十円のストマイ代がないばかりに結核でどんな人が死んでいく状況もある。このような韓国の貧しさは、日本が経済的に侵略してむこうで儲けたお金を日本にもってきているからだ。このように韓国の経済が歪んだ工業化にばかり進むので、農村は破壊されるし民衆の生活は非常に苦しい。

そういうわけで若い女の人たちはキーセンにならざるを得なくなるわけだが、正式のキーセンには国家が証明書を出して、ちゃんと講義までしている。「みなさんは韓国経済のために大変貢献しているのだから頑張らなさい」という話を聞いて驚いた。七三年に韓国から文部大臣が来日し、彼は「彼女たちは××××によってわが国の経済に寄与している見上げた愛国者だ」と堂々と云ったという有名な話がある。韓国は昔から「貞節の国」として有名であるというのに。

このキーセン観光は、ちょうど戦争中の従軍慰安婦を思い出させる。日本は朝鮮の女性を六十万人、日本の兵隊の性の処理のために従軍慰安婦として東南アジアや中国に送り込んでいたからだ。十八歳以上の未婚の若い女性が従軍慰安婦として強制的に各地に送り込まれ、軍隊と一緒に行軍してそこで死んでいった。

日本からつれていった売春婦は将校用で、朝鮮人慰安婦は兵隊用とされ、一日に何十人、何百人の相手をした。

ラバウルではじめて慰安所ができたときには一キロの列が続いたという。同じ慰安所の中でも日本人の売春婦は日当りのいいところで、朝鮮人の女性は「朝鮮ビー」などと蔑称で呼ばれ、差別されていた。

そういう過去があった上に、今度はキーセン観光である。日本の女性は日本の男性に対して、もっとそういうことを追及していく責任があると思う。日本にも「キーセン観光に反対する女たちの会」というのができて羽田でデモをしたりあるいはピラをまいたりした。松江で五百人かあるいは千人のキーセン観光団が船で韓国に行くのを、反対運動で阻止したなどの効果もあげている。韓国の女子大生たちは逮捕を覚悟で、金浦空港で「日本は私たちの祖国を赤線地帯にするのか、売春地域にするのか」という抗議のプラカードをかかえてデモをした。もちろんみな逮捕されてしまったと思う。

フィリピン・タイにも セックスアニマルの観光団

こうしてキーセン観光が問題になり始めた矢先に朴大統領狙撃事件が起こり、さすがのキーセン観光も下火になった。そこで日本のセックスアニマルが何を考えたかというところ、韓国はむずかしい、次はフィリピンだということ、今フィリピン観光がものすごい。ある旅行会社の人の話だと「日本人がわざわざフィリピンに行つて、フィリピンの女の私たちの売春組織を作り、旅行会社はどんどん日本の観光客をつれてきて女遊びをさせる」と言っていた。

フィリピンに限らず、タイはかなり前から日本人観光客の遊び場所になっていた。バンコックでは売春婦のことをマッサージ・ガールといい、日本から輸出したトルコプロで売春をさせている。驚いたことに日本商工会議所の出している「バンコック観光地図」なるパンフレットには「マッサージ・ガールの買い方——顔のきれいな人はマッサージが下手だ。マッサージが上手なのは無器量な人だ」などと書いてある。あれほど反日運動が起こった後でも、日本人会の事務所に堂々と置いてあるというのだ。タイには五万人ものマッサージ・ガールがいるという。繊維工場で働けば一日二百円くらいにしかならないが、売春をすればその十―十五倍の収入になるというわけで、やむなく一家を支えるために少女がマッサ

ージ・ガールになるという状況だ。

チェンマイの玉本事件をご記憶かと思うが、私がいった当時はよく玉本事件のことを言われた。あきれたことに「玉本がうらやましい」とばかり日本人が大勢行くようになり、チェンマイが観光コースになってしまった。

日本では「タイは一夫多妻でその習慣に従ったまでだからいいじゃないか」というけれど、タイでも大体若い世代の人たちは一夫一婦制になりつつある。一夫多妻をやれるのは権力を持っていた軍人、政治家たちで、そういう人たちに対する反感と同じものを持つわけだ。タイの一流大学の一つであるチェンマイ大学の学生自治委員長にインタビューしたら、彼はカッカッ怒って、玉本事件のときには学内に「同胞の女性たちを日本人は金にあかせて妻にしてはべらせるのはけしからん。人間の尊厳に反する」という抗議文を掲示したという。

東南アジアに対して もっと大きく目を開こう

日本人が経済的に侵略をしていくと、それと併行して必ず性的にその国の女性たちをはずかしめるということが歴史としてあった。今苦しい目にあっている東南アジアの女の人たちの状況は大きく分けると三つに分けられると思う。

第一に、日本などの経済的侵略の犠牲になっていること。第二に、性的な意味での侵略の対象になっていること。

と。第三は韓国などにおけるように政治的な弾圧をうけて、拷問にあたりたりしている女の人たちがたくさんいること。日本はアジアの中でしか生きられないのだから、そういう同じアジアの女性たちの実態、生きざまにもっと目を向けていかなければいけないんじゃないか。

私は公害問題をやっているにつづくと思うのだが、公害反対で日本に工場をつくれなくなると、どんどん外国で公害工場を作ることになると、ほとんどん外国で。例えばヘドロで富士市民を苦しめた大昭和製紙はマレーシアに進出している。マレーシアの人たちが同じヘドロ公害に苦しめられないように、私たちが情報を提供することも必要だと思う。タイでは旭硝子が水銀をタレ流しているというので、タイの人たちから厳しい批判を受けている。台湾でも松下の工場がタレ流しをやっている。韓国では日本化学が六化クローム（重クロム酸ソーダ）という染料の原料にする物質を作っている工場が、日本国内では有毒な排出物がたくさんで処理できないと、ウルサンに工場の建設を始めている。日本国内で処理できないような有害なものを外国へもって行き、そこをゴミ捨て場にすることが許されるのだろうか。

私たちはアメリカとかヨーロッパの女性たちの方にばかり目が向いていたが、まず第一に日本の中にいるアジアの人たちともつながってほしいと思う。その最大のグループは六千万の朝鮮・韓国人である。韓国人のある婦人から聞いた話だが、お嬢さんが結婚するのでマン

ションの小さいのを探していたら「住民登録が必要だ」と言われた。「外国人登録証しかない」と言ったら、朝鮮人だとわかって、「外国人には貸さない」とはつきり言われた。一緒に行った不動産屋が同情して「この人は普通の韓国人とは違うんだ」と親切心から言ってくれたという。しかしこれでは、「普通の韓国人はひどいがこの人は違う」という意味になる。そんないい方が今でもまかりとおっているのに差別の根深さを感じさせられる。

トヨタに就職しようとした若い韓国女性が結局断わられた。また朴君という人が日立に就職しようとして、日本名で受験して合格した後、戸籍を出す段階で朝鮮人であることがわかって就職を拒否された。就職差別だということと裁判を起こし、日立側は敗れたが、このような就職差別はたくさんある。

日本にはアジア各国から留学生が大勢来ているが、この人たちは下宿を探すときに「白人の留学生はいいがアジア人の留学生は嫌だ」と排斥された経験をみな持っている。東南アジアに行ってみて本当に恥ずかしかったのは、かつて日本に留学して自分の国に帰って仕事をしている人に会ったときだ。彼らは日本語がとても上手で、日本に何年も留学しているから日本のこともよく知っているのだが、日本についていい思い出を持っていない。ほんとうに日本をうらんでいっていい。彼らはそれぞれ別の国で中堅としていい仕事をしている人たちなのに、その人たちが、日本にいたときいろいろな形の冷た

い扱いを受けたことに対するうらみを持っているのは、本当に残念な気がする。

十年くらい前からあるYWCA母親運動は、日本に来ている留学生の日本の母親になろうという運動だが、母親になってさびしさをなくさめるよりも、むしろアジアの留学生からいかに多くを学ぶかというのが、母親になった人たちの共通の意見だった。

日本人全体が広く 国際的なことに関心を

しかしアジアだけでなく、日本人全体が海外のこと、国際的なことに関心を持ってほしいと思う。たった人口八百万人の国、スウェーデンに行つて驚いたのは、南アフリカの人種差別——黒人は鉱山で働かされて結婚さえできない奴隷労働を今もさせられている。その黒人によつて作られた缶詰などが輸出されている——に反対して

南アの製品を買わない運動をスウェーデンの主婦たちがやっていることだった。日本では南アの人種差別について関心を持っている人がどれだけのいるだろうか。

南アだけでなく、ベトナムはスウェーデンにとつて遠い国であるのに、スウェーデンのベトナム反戦運動は大変盛んだった。七二年にストックホルムに行つたとき、主婦、学生やいろんな人たちがベトナム反戦運動をやつていて、アパートなどの窓から反戦の言葉を表すステッカーが出してあるなど、たった八百万の小さな国の国民があれだけ国際的に目を開いている。

私は東南アジアを旅して、ヨーロッパやアメリカに行つたときには得られなかったものを感じた。それは日本について知ること——日本人のあり方を根本から問われている気がした。そういう意味で皆さんも、ぜひアジアに目を向けて、とくに女性たちとつながるために何かやっていただきたいと思う。(小金井市婦人学級の講演より)

私は十二、三歳のときから雑誌も書物も男子の読む物をもっぱら読まねばならぬという考えをもつていて、今日もそれを実行しています。忌憚なくいうと、私は一切の婦人雑誌と特に婦人のために書かれた書物

を軽視しています。私は毎月四十種内外の雑誌の寄贈を受け、その上夫婦で購読している雑誌七種類、回読する会へ加入している雑誌も十種類あり手元へ集まる雑誌は六十種を下りません。

(中略)

毎晩三十分だけ遅く寝ればその中の必要ない記事や論文を読むことができます。

(与謝野晶子・一九二〇年)

― 国際婦人年 婦人のつどい ―

《抄 録》
これからの

男女平等を考える

婦人週間と国際婦人年に際し
現在の男女のあり方を見直し、
問い直して、真の男女平等とは
何か、どうあるべきかを考えよ
う――。

四月十六日、東京都と東京婦
人少年室の主催で行なわれた
「国際婦人年 婦人のつどい」は、
開場前から長蛇の列となり、二
百人近くが入場できなかったほ
ど。この問題に寄せる関心の深
さが、まさまざと感じられた。
当日の抄録をお届けして、職場
で、グループで、いっそう討論
を深めたいと思う。

〔パネラー〕

大羽綾子

ILO協合理事

桑島カタリーナ

短大講師

ハンガリー生まれ

樋口恵子

婦人問題評論家

東京都社会教育委員

室 俊司

立教大学文学部教授

社会教育学者

〔司会〕

久米 愛 弁護士

男女の賃金格差が著しい日本

大羽 婦人労働と所得の問題を手がかり
に将来の男女平等を考えたい。婦人の地
位の簡単で正直な指標として、男女の平
均賃金をみると、男高女低の世界共通の
潮流の中でも、日本は極めて低い。

男女格差が最大のグループ

イギリス 六〇・五

USA 六〇・五

日本 五〇・二

男女格差が小さいグループ

フランス 八七・八

スウェーデン 七九・二

デンマーク 七五・七

西ドイツ 七〇・〇

注) ILO1972年資料
男を100とした場合の女の賃金

日本では一九四七年に男女同一賃金の
原則が法制化された(労働基準法第四条)
が、それを具体的に実現する手段を政府
が採用していないため、就職の機会の不
平等や、男は管理職・専門職・熟練労働、
女は単純労働という職種における性別分
業の固定化を生み、女性の低賃金を生む。
とくに出産後は仕事を続ける上の悪条件
が山積して、職業上の熟練を得る前に職

場を離れることが多く、高賃金の職場につきにくく、職業を持ち続ける人々の賃金を低める作用をする。妊娠と出産は女性の機能だが、両親の責任である育児が母親だけの負担にされ、女性の職業的熟練をさまざまに、低賃金職種に閉じこめる。

社会主義国でも不平等

桑島 ハンガリーでは女性が働くのは当然で専業主婦はいない。共働きでなければ生活はできない。仕事の上では男女平等で、昇進もできる。若い世代の男性は家事・育児を妻と平等に分担するが、古い世代はだめで、職場での責任ある地位の激務と、家事・育児の二重負担にあえぐ女性も多い。最近では保育所だけでなく、三年間の有給出産休暇制度もできたが、単純労働者しか利用できない。高度の技術や理論を要する専門職の場合は、進歩から取り残され、追いつくことができないので、苦勞して働き続けなければならぬ。

ハンガリーでは、女が結婚するとその名が消えて、夫の名にミセスを冠する。

職業上の差別はないはずだが、女性の外交官は一人もいない。日本駐在外交官夫人は、職務を休職にして夫に同伴しているが、妻が外交官で夫は休職にして同伴して来ている例はない。長年の男女平等の習慣を破るのは極めて困難であるが、孫の世代に希望を託し、次の世代を男女平等思想に基づいて教育する必要がある。

条件整備と意識変革を同時に

樋口 男女差別は歴史的産物で自然現象ではないから、行動すればいつかは破れるはずである。次の世代の教育もその一つだ。

男はヒノキ舞台、女は裏方だったが、同等の機会と評価が当然で、そのために法律や社会福祉施設などの条件を整備すべきだ。賃金格差や若年定年制の禁止、就職の機会均等の保障など、通常の労働組合活動の枠からはずれたものを法制化するとか労働基準法第三条の差別禁止の中に性差別を入れるなどの運動を始める必要がある。同時に人間の意識も変革しないと、真の男女差別破壊は不可能だ。

PTAと男女平等

室 PTAは男女ともにかかわりのある社会活動で、女性のPTA会長も珍しくないが、男女平等が真に実現したとは思えない。一方で男性の無関心が女性会長を生み、他方では男性のボス会長が牛耳っている現実もある。

PTA体験と社会との関係は三種に大別できる。①末子の中学卒業で会員資格を失うと、趣味活動でプライドをこまかくPTAくずれ型。②PTA体験をもとに市民運動などの社会活動へ進むPTA育ち型。③PTAと完全に断絶しパートで稼ぐなどのPTAサヨナラ型だ。

女のタダ働きが低賃金の根源

主婦業はりっぱな職業

大羽 農家・商家など家業の主婦は多くは無報酬。主婦の育児もタダ働きで、内職やパートタイマーも低賃金。これらの産業予備軍がフルタイマーの賃金の足を引っばっていると思う。

桑島 主婦業はちゃんとやれば労働時間も長く、家族が在宅の休日にかえって忙

パネラー（向かって右より）
室俊司氏 樋口恵子氏 桑島力タリーナ氏
大羽靖子氏と司会の久米愛氏



しい。共働きでも、子の病気の時は母親が欠勤する例が多く、父親が休むことはまだまだ抵抗がある。主婦の労働を職業として認め、専業主婦を選ぶか、社会的労働につくかを選び、社会に出た以上は甘えを捨てるべきだ。

全権支配下の家庭

樋口 意識の変革には二つの方向がある。第一に出産や育児、老人・病人の看護、地域社会との関係や消費生活など女が背負ってきた部分に市民権を確立すべきだ。妻がPTA役員になり家庭生活に影響すること、夫が管理職に昇進して生活が変わることは、共同生活上同等のはずだが、金を稼ぐ夫の立場が強いのが普通で、全権支配は崩れていない。

第二に、男女を問わず次の世代を、差別を許さず戦える人間に育てる必要がある。親が子を叱る場合、積極的行動をばねますときは「男のくせに」、それにブレイキをかけるときは「女のくせに」と、性別を理由にすることが多いが、こうした身近な所から、意識を変えるべきだ。

夫婦そろって活動

室 家庭生活にさし障りのない範囲で職業、PTA活動、社会活動をしたいのが女性の多数派だが、なかなかそうならない。女性の帰宅時間は五時（夕食の仕度）と七時（ぎりぎりの食事時間）に集中し、夫と子ども中心の生活だ。PTA活動は昼に限らず、働く母や父も参加し、夫婦そろって、あるいは母が役員なら父は子守りなど日常化してもよいはずだが、実態はまだだ。総理府の婦人に関する諸問題の総合調査報告書でその原因を探ると、母親としての役割意識が過剰に強く、一人の女性としての意識が拡散していること、母親は直接利害関係がある場合には反応に鈍いという二点が見つかる。司会 会場の皆さんの質問を受けた。

男女同一賃金では

男がヒガムのでは

参加者A セールスマンは男女の別なく能率給にできるが、事務関係では腰かけの女性と同一賃金では、男性社員が意気

阻喪する、という話を聞いたが。

大羽 日本では男女が同一労働をする機会が非常に少ない。職務の性別分業が行なわれて、男の賃金が高くなっている例が多い。男のひがみが、腰かけの女性の仕事を男がやらされて低賃金のためか、男の賃金につれて女も上ったためか、が、問題だ。

樋口 有能な女性の管理職者がいるので有名になった企業にとめる男性が、"ああいう女性の下で働く男は気の毒だ"と言ったが、日本男性の平均的通念と思う。小手先の策ではなく、一度徹底的にひがませなければ同一賃金への道は不可能。もともと、女性の昇進や能力発揮、同一賃金にひがむのは能力のない男が多い(満場の拍手)。

男はツライ、女はソン

の甘えはダメ

室 今のことは男の本音だろうが、教育学者として人間の成長の可能性を追求したい。三十歳、四十歳の男でも、女房が本気で働きかければ、さめざめと泣いて変わりうる可能性が残っているはず。

男の場合にも、現在の体制下の仕事の意義について、夜も眠れずに考えることもある。東工大出の大企業の技術系管理職者が二年かけて教職資格をとり、小学校教員になった例もある。自分の人生についての真剣な問いは男女の別なくあるのに、夫婦間でそれをはかり合わせることにが少なすぎる。男は稼ぎを、女は子どもを切り札にして甘えあい、互いに狭い中に追いこんでいる。夫婦が共に生きてゆく上ではトコトン話し合い、問いかけあう機会が必要で、夫はダメだから子に期待するのではなく、夫にも期待を残して勝負してほしい。

まず自分が

権利を主張しなければ

参加者B パートタイマーは保障もない無権利労働だから、フルタイマーよりも高賃金でもよいのに安いのが不満。男女だけでなく女性間の不平等もあるが。

大羽 賃金は法律や理論だけできまるのではない。労働力不足時代でも、パートタイマー予備軍は家庭にいくらでもいるから賃金は安くなる。雇う側は夫の収入

もあり、低賃金や解雇の摩擦のない主婦パートタイマーを歓迎する。働く側も小遣い稼ぎやマイホーム資金、家計補助などで、独立した賃金を求めない。これらの要因で低賃金となる。企業は同じ仕事なら低賃金の女を好むが、妊娠・出産・育児による非能率を避けて一度退職させ、出産・育児がすんでからパートタイマーとして雇いたがっている。

だから低賃金でも仕方がないのか、賃金アップを要求するのか、よく考える必要がある。

参加者B 労働組合にも入れない。

大羽 労組にたいして入れろと要求する必要がある。黙っていてはだめだ。

参加者B 要求しても入れてくれない。

大羽 入れてくれるまで交渉を続けなければだめ、それが意識の変革である。政府がやってくれない、法律がないなどと言っているだけでなく、行動しなければだめ。先日、秋田相互銀行の男女差別賃金の裁判で、男女同一賃金を支持する判決が出た。勇気ある女性たちは、法廷に持ち出すようになってきた。パートタイマーの労働条件についても、具体的に研

究した上で裁判に訴えることも考えられると思う。

裁判勝利は制度変革の一里塚

参加者C 裁判で勝ってもその事件限りになってしまおうという話だが。

大羽 憲法十四条は性別による差別を禁止し、労働基準法第四条に男女同一賃金の原則があるが、同第三条の均等待遇に性差別が脱落していると樋口さんは指摘された。この改正には市民運動、国会請願など法制上の問題がある。同時に若年定年制禁止の判決もかなり固定してきた。これら自主的な動きのほか、政府当局への働きかけも必要。

久米(司会) 差別を体験した女性が具体的事実を裁判所に持ち出さねば、問題解決の第一歩が踏み出せぬことを意識してほしい。抽象的に言うだけでは企業は変わらない。たしかに裁判による解決はその事件の当事者を拘束するだけだが、女性差別の敗訴が定着してくれば、企業も差別をやめる。この積み重ねが法律や規則の改正、制度の変革を生む。裁判などを最初に持ち出すのを恐れたりたじろい

だりしてはならないと思う。

近時の裁判所の傾向は、人権を守ることは前向きな姿勢であるから、勝訴に自信を持って戦ってほしい。

地方議会への進出も

参加者D PTA活動十二年の経歴を持ち、夫や子どもの家事分担など家庭の意識革命が進みつつある。世間の目にハッとすることもあるが。

室 個々の家庭ではそのあたりまではいっているが、その先の男も女も人間を解放する路線へふみ出して、地方自治体の行政や政治に進出してもよいのではないか。住民参加の段階に止まらず、決定の段階に挑戦するくらいの取り組みで活動してもよいと思う。

男にたよらず自分の手で

久米 国際婦人年にあたって女性差別の撤廃が言われているが、社会主義国も含めて男女平等は実現していない。その原因をみると条件の不備と同時に意識の問題が重要と思う。社会にとって次の世代は不可欠だから、出産に社会的意義を認

めて、女のタダ働きの上だけに押しつけている現状を再考すべきである。男の仕事、女の仕事の分類にも意識変革が必要だ。料理・裁縫は女の領分とされてきたがコックは圧倒的に男、高級裁縫師も男が多い。タダ働きの家事が有給の職業になった瞬間に男の職業として奪われる現状はおかしい。男女平等の実現には、女ががんばっていくほかはない。男女平等の実現なしに発展も平和もあり得ないという意味で、国際婦人年のテーマの男女平等・発展・平和が同格併列なことをよく含んで頂きたい。

意識革命を、まず家庭の中で起こしてほしい。女だけの仕事は出産だけという自信をもって頂きたい。(拍手)

トピックス

国連NGO国内婦人委員会(市川房枝会長)は国連総会決議の要請に応え、国際婦人年のため三十二万円を寄付した。



International Women's Year
Année internationale de la femme
Año Internacional de la Mujer

国際婦人年ニュース

メキシコの国際婦人年世界会議は、この号の発行日あたりがクライマックスに達していることと思う。日本からだけで二百人、世界各国からでは五千人の参加ともいわれる。藤田たきさんはじめ女子七名、男子六名の正式代表は、国連の会議にのぞみ、今後十年間の行動計画案を練る。会議の性質上、成果については疑問を持つ向きも多いが、成功を祈りたい。

国連の会議と並行して行なわれる民間のトリビュン（討論会）には、「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」や、「あごら」、「新宿リブセクター」など民間グループが参加する。民間といっても、どの程度自由な発言ができるかわからないが、「あごら」では十八名（会員は十名）を送り、可能ならリポートも発表する予定である。また、この機会に、世界の、ごく当たり前の女たち、とくに第三世界の人々と連帯をはかりたいと願っており、そのためのチラシも用意している。国連の会議や、トリビュンの内容が形式的なものであった場合は、野外討論会を呼びかける意志である。

「あごら」の旅として参加する十八名は、弁護士・文筆業・編集者・記者・主婦・生花教師・育児コンサルタントなどさまざまな職業、年齢も二十代から六十代に及んでいる。この旅を企画しながら、主婦という制約の中で、最終的には参加できなかった人々の痛みとともにできるだけ有効な参加をしたい

と願っている。

活発な活動——国内各種団体

国際婦人年を期して、国内各団体の動きも活発になっている。国際婦人年だからというよりは、年々女性解放が進み、女性が力をたくわえてきた成果とみることができよう。各団体の主な活動計画は次の通り。（アイウエオ順）

● あごら

・「はでなスローガンよりも、身近な活動を」がモットー。身辺の差別の現状を洗い出すとともに、教科書チェックを続ける。

・国際婦人年記念「女の記録」を募集中。締切は九月三十日（火）。「あごら13号」で発表の予定。

・雑誌「あごら」は、国際婦人年記念増大号として10号「女と法」、11号「女と教育」に引続き、12号「私たちが見た国際婦人年世界会議とキューバ」、13号「女の記録」を年内に発行の予定。
・貝原益軒の「女大学」、福沢諭吉の

国際婦人年ニュース

「新女大学」を、エリザベス・マウアさんを中心に研究、雑誌「あごら」で発表の予定。

・メキシコの国際婦人年世界会議に参加する十八名は、そのままキューバに向かい、キューバの新民法の現実、女子労働者の状況、田園中学・保育所・芸術学校・裁判所等を見学、キューバ婦人連盟の人びとと解放について語り合う。

●国際婦人青少年問題研究会

・パンフレット「変化する社会の中の婦人労働者」「男女同権確立のために——行動への呼びかけ」を発行する。

●国際連合東京広報センター

・パンフレット「婦人の地位委員会」のほん訳、出版。

●国連NGO

国内婦人委員会

・国際婦人年NGOシンポジウムは六月七日、東京YWCAにおいて「現代における日本の婦人問題を考える」をテーマにして開催。

・婦人集会の開催（七五年十一月）

●全国地域団体連絡協議会

・全国およびブロック研究大会を開催する。

・婦人に関する各種研究を行ない、視聴覚資料・出版物を作成、提供する。

●全国友の会

・全国家計調査、全国生活時間調査を実施。

・衣食住・家庭教育について研究する。

●全日本労働総同盟

・リーフレット「一九七五年は国際婦人年——平等・発展・平和をめざして」を発行。

・国際自由労連婦人会議——同一賃金の前進のために——へ代表を派遣。

・国内集会を開催する。

●大学婦人協会

・国際婦人年記念シンポジウム十七回

総会は「日本婦人のセルフ・イメージ」というテーマで四月、岡山において開催。

・国際婦人年スローガンの募集。

・国際婦人年に対する決議文、ステートメントの発表。

・テキストの男女差別イメージ分析調査。

・国際婦人問題情報センターの開設を計画中。

●日本キリスト教女子青年会

・七月にカナダで行なわれるYWCA世界総会へ代表を派遣する。

●日本基督教婦人矯風会

・一月に全国活動者研修会、五月に全国大会を実施。

・総理府の「婦人に関する諸問題の総合調査」を検討・研究。

●日本国際連合協会

・中学生の作文コンテスト、小・中・高・大学・一般に分けてのポスター募集、高校生主張コンクールなどを実施

する。

・海洋博に国際婦人年コーナー

本年七月二十日から七六年一月十八日までの半年間、沖縄県本部半島を会場に、海―その望ましい未来―をテーマに、沖縄国際海洋博覧会が開催される。この展示館の一つに国連館があり「国際婦人年コーナー」が設けられる。

・国際婦人年記念切手の発行

ニューヨークの国連本部では、五月九日に国際婦人年記念切手(10セント、18セント、60サンチーム、90サンチームの四種類)を発行した。その他メタール(国連)、記念バッジ(国内)等も発行。

・婦人セミナー「国際理解のために」
その他の講演会(各地六十か所)開催。

●日本母親大会連絡会

・国際婦人年記念母親教室を開催(六月十二日)。

・第二十二回日本母親大会(八月十七日(十八日)のテーマは、「国際婦人年記念、平等・発展・平和をめざして」。

●日本婦人団体連合会

・国際婦人年を考える「婦人講座」を実施(二月(六月、十六回)。

・機関誌「婦人通信」で「国際婦人年特集号」を発行。

・国際婦人年世界大会に代表団を派遣

●日本有職婦人クラブ全国連合会

・有職婦人クラブ世界会議へ、代表を派遣する。世界婦人会議には参加しない。

・年間テーマとして「保護と平等」を研究する。

●日本ユネスコ協会連盟

・ユネスコ・ギフト・クーポン
一種の国際小切手。モノ不足に悩む

発展途上国の学校、教師、職業、訓練所、図書館、市町村センターなどが必要なものを購入するためユネスコでは「ギフト・クーポン」を提唱、主として先進国の人々の寄付を募集。

国際婦人年のためのギフト・クーポンとして八つのプロジェクトを開始。

ニ ュ ー ス

●労働省主催の中央記念行事は 十一月五(六)日

各省庁協力のもとに、東京プリンスホテルで行なわれ、日本の高官・外国の貴賓も列席、専門家・学識経験者を中心に、地位向上を中心に討議する。参加資格は特にないが、労働省の国内婦人団体連絡会議を通じて呼びかける。収容能力は千二百名なので、整理券等を発行することになるかもしれない。なお外国の学識者は、中央記念行事後、地方で巡回講演を行なう。

●国内連絡会議で、政府を追及

六月五日、世界会議に先立って行なわれた国内連絡会議では、代表にもっと民間人を加えるべきであったこと、世界会議の資料が入手しにくいのはなぜか等、質問が続出、活動計画案の内容についても具体的な鋭い質問が続いた。

国際婦人年ニュース

● 国際婦人年記念意見募集

労働省では「男女平等・婦人の社会参加」を課題に意見を募集中。満十八歳以上の男女が対象。四百字詰四枚以内。締切七月三十一日。

● 東独の大会は十月二十日から

WIDF（国際民主婦人連盟）評議會を中心とした国際婦人年世界大会は十月二十日から二十四日まで、ドイツ民主共和国の首都ベルリンで開催される。テーマは、婦人の平等の権利、婦人の発展、社会の中の婦人、婦人と平和、連帯と民族独立、協力と共同行動等。

各国の行事から

〔タ イ〕

国際婦人年実行委員会および平和、開発、平等の各問題に関するプログラム委員が任命された。

〔シンガポール〕

国立博物館が婦人演奏家によるリサイタルと婦人による伝統舞踊の公演、「シンガポールの婦人一八一九〜一九七五年」展、映画、ファッションショーを計画。

国立図書館は社会と婦人に関する文献集の発行、弁論大会、講演会を計画している。

〔インドネシア〕

一九七四年十二月二十二日「母の日」から、正式に婦人年がスタート、国際婦人年国内委員会を設立。

〔ネパール〕

ビレンドラ国王は王妃の名のもと、国際婦人年のための七人委員会を任命。構成は法務、通産、農林、文部、衛生、外務の各省代表。

〔スリランカ〕

国際婦人年国内委員会バナドラ支部は一九七四年十二月に資金集めのダン

スパーティー開催、バナドラ刑務所を開放された婦人に面接、今後の生計の道を教える。

〔ヨルダン〕

婦人団体によって国際婦人年のための準備委員会を設置、国際婦人年に男女両性を参加させることなどを目的としている。ヨルダン国内婦人会議は、国際婦人年への婦人の参加を呼びかけた。

〔シリア〕

マスコミを通じ、国際婦人年の広報を行なうための委員会を設立。

〔レバノン〕

労働社会問題大臣を議長に、同省と情報局の局長で構成する特別委員会の設置を決定。

〔イスラエル〕

一九七五年一月七日、大統領と首相が国際婦人年宣言に署名。

〔エジプト〕

①一九七五年一月一日、サダト大統領が国際婦人年を宣言。

②関係各省庁と民間団体の代表を集め中央委員会が発足。議長には厚生大臣が指名された。

③アラブ社会主義連合（政党）の婦人問題総局は中央事務局内に国際婦人年中央委員会とその支部を設立。

④一九七五年一月三日、宗教省の通達により、全国の回教寺院で、国際婦人年に関連し、回教およびコーランの教えに沿った婦人の権利に関する説教が行なわれた。

〔エチオピア〕

①国軍臨時調整委員会議長、各地方行政長官、婦人指導者などによって、婦人年宣言が行なわれる予定。

②婦人の平等促進の現状を把握し、将来の方策を探るための小委員会の設置が努力されている。

③婦人年の意義の広報のため——パンフレット、ポスターの作成、記念切

手、カレンダーの発行、記念出版物の刊行、ラジオ、テレビの特別番組、映画祭、婦人の向上に貢献のあった人の表彰が計画されている。

④国立大学に女性史センター設立奨励

⑤婦人の法的権利とその強化のための教育、広報活動を計画中。

⑥婦人の権利に関する国際条約の批准のための努力を行なう。

〔ケニア〕

一九七五年五月二十一〜二十四日までケニヤッタ会議センターで国際婦人年セミナー開催。

〔マダガスカル〕

地方婦人団体と協力、国際婦人年行事を行なうための各省連絡作業委員会を設立。婦人の地位と役割を明らかにするため、各市町村長にアンケートを送付。

〔ルワンダ〕

一九七四年十二月に十二名からなる

国内委員会設立、地域活動のため、二十名の婦人委員任命。七五年中の関連記事をつぎのように決めている。

一月——婦人年開始、二月——婦人の役割に関する会議、三月——国際婦人デー祝賀、四月——婦人の社会的、家庭の問題を扱う婦人雑誌の刊行、五月——職業婦人のための休日、八月——婦人の地位に関する全国会議、九月——「識字教育とルワンダの婦人」と題し、世界識字の日（九日）祝賀行事、十月——婦人の差別撤廃宣言とルワンダ婦人の現状調査に関する会議、十二月——一九七五年の活動しめくくりのための国内婦人委員会開催。

〔ガーナ〕

関連省庁と民間団体からなる国内特別委員会は以下の活動計画を作成した。

①一九七四年十二月八日、アチャンボン国家元首による婦人年宣言。

②ポスター、バッジ、イヤリング、婦人年マークをあしらった布地を作成、販売。売上金で労働婦人のための託児

国際婦人年ニュース

所をつくる。

③婦人の経済活動、法律的権利などに関するセミナー、講演会などの開催。とくに農村婦人に対する教育訓練、職業訓練を行なう。

④教科書にあらわれた古い女性像を改める。婦人の差別につながる慣習、伝統などを調査、公表して意識の改革をはかる。

〔シエラレオネ〕

国際婦人年諮問委員会が設立、下部機構に計画、教育、広報、財務の小委員会が設けられた。

〔フランス〕

一九七五年の十月にパリ市をはじめ全国各地で「婦人の日」がもたれる。

〔ベルギー〕

四十あまりの組織によって国際婦人年国内委員会が構成された。一九七五年の計画には、調査研究活動、地域セミナーの開

催、「二十一世紀前夜におけるヨーロッパ婦人の経済的独立」を討議するヨーロッパセミナー開催がある。さらに婦人年終結にあたり「婦人年中に進められたすべての討議と提案を再検討する総会」をベルギーで開催する予定。

〔オランダ〕

国際婦人年国内委員会を設立、活動資金として二百万ギルダー(約二億円)の予算をつけた。

〔ハンガリー〕

国民議会議長の下、準備委員会が発足。ハンガリー婦人評議会、労働組合国内評議会、青少年共産党連盟などの団体が組織に入り、広報活動や婦人の権利の保証につとめている。

①一九七五年三月八日の国際婦人デーには、ハンガリー国連協会、同婦人評議会共催で学会が開かれた。

②ハンガリー科学アカデミーは「一九四五～七五年間のハンガリーにおける婦人の地位の変化」についての調査研究を行なう。

③ハンガリー社会団体は一九七五年十月にベルリンで開かれる世界民主婦人連合主催の世界婦人会議の準備に積極的に取り組んでいる。

④国際婦人年で得た経験を振り返り、これを有効なものとするため、一九七五年十二月に第二回全国婦人会議を開く。

〔ユーゴスラビア〕

一九七五年一月十七日、国際婦人年国内委員会発足。

〔イタリヤ〕

法務省は法の改正を要する問題を検討するため、婦人団体との協議を開始。保健省は「婦人の健康保持研究委員会」を設置する。

〔カナダ〕

国際婦人年事務局が国際婦人年のプログラムの策定や関係者の活動を調整する。一九七五年の計画はつぎのとおり。

①教育、啓発機関のキャンペーンに

よる気運の醸成。

② 婦人に対する考え方の変化を認識させるための全国あるいは地方会議の開催。

③ 法律、規則中の平等への障害除去。

④ 国際婦人年のための企画について、財政援助を行なう。

⑤ 行政機関による平等促進のプログラム実施。

「コスタリカ」

一九七四年十一月二十六日、アラバエラ市で国際婦人年のための地域委員会設立会議が開かれた。

「ドミニカ」

一九七四年十二月三十一日、ホアキン・バラゲール大統領は、一九七五年を国際婦人年とすることを宣言。

「パナマ」

一九七四年四月二十日に設立された「国際婦人年のための婦人団体特別委員会」はつぎの活動を行なう。

① 婦人雑誌の特集号発行。② 文盲ばく滅のための課程を強化、参加を義務づける。③ 現行法の手直し。④ 各省庁その他の代表、専門家を集め委員

会を作り、常設として、将来ひき続き婦人の権利の擁護、家庭の問題を扱わせる。

「ジャマイカ」

一九七五年一月四日、マンレイ首相がステートメントを発表。婦人差別をなくすための法律、制度の整備を約束。

「チリ」

一九七四年十月十七日、国家元首アウグスト・ピーチェット將軍は内務省婦人局主催の式典で一九七五年を国際婦人年の記念年とすることを宣言。

「あごら」は

あなたの

ご意見や研究を

掲載します

女に関する情報は、とかく封鎖され、管理されがちです。とくに利潤を優先する商業誌では、女のご意見や研究は抹殺されるのが通例です。

人間解放の一環として女性解放がすすめられなければならないと考える私たち「あごら」は、皆様の自由な意見や研究を、できるだけ積極的に掲載したいと考えています。

ハガキに数行の感想から、本格的な論文まで、女の前進に役立つ情報には、喜んで誌面を提供します。また、婦人問題関係の書籍雑誌のほか、女性の手になる書籍や研究発表も、できる限りご紹介したいと願っています。どしどしお送りください。

「送り先」 〒100 東京都新宿区新宿1の9の6 「あごら編集部」

あこら読書室

婦人問題関係書籍ほか

「ひとり暮らしの戦後史」

塩沢美代子 共著
島田とみ子

岩波書店

『「結婚の自由」は、もともと基本的な人種のひとつであらう。いろいろな形でそれをはばむ状況とのたたかいが、古今東西を問わず、つねに人間の生きるところに存在し、文学や芸術のテーマにもなってきた。ところが、いまの四十年代後半から五十代前半の婦人たちの何割かは、いつの日か出会うはずだった相手を出会う前に戦場で殺されてしまつて、結婚の自由を事実上奪われたのである。あるいはまた、出征前夜に結婚し、そのまま夫が帰ってこなかったり、戦死の公報をうけたあとに、短い結婚生活の愛の結晶、夫の忘れがたみを産んだ、というように

人々もある。こうした婦人たちも、形の上ではともかく、実質的に、結婚の自由を奪われたことになるだろう』

以上はこの本の前がきで述べられている最も印象に残る部分である。たしかにこの世代の女性には、戦争の後遺症を深く心にひそめて戦後の三十年を生きて、いま、中年から初老の域にさしかかりつつある。

昭和四十七年、東京都は、独身中高年婦人の実態について調査を行なったが、その企画にかかわった塩沢・島田の両氏が、それをきっかけに、この問題をさらに具体的に展開したものであり、ひとり暮らしの個人の具体的な生活の態様や意識にじかに触れる作業を根気よく積み重ねて、事実の持つ意味と、その重さを訴えている。

調理師・美容師・洋裁師・家政婦・中

小企業の課長ら百人近い人たちと面接して、できるだけくわしく問題を洗い出しそのひとつひとつを一章ずつにまとめ、ひとり暮らしの戦後史としてつなげているが、それぞれの持ち味はちがっていても、自立して生きぬく女の輝きと魅力が十分に伝わってくる。

それを単なる実話の面白さに終わらせないのは、彼女たちの歩みのあとをつぶさにたどることによって、労働と社会保障の両面から現代の婦人問題に切結んでゆこうとする著者たちの問題意識が、確かだからだろう。

後半の章では、現実の問題点を整理し、女性差別や生きがいの問題、ひとり暮らしの哀歓、老後をどう考えるか、というふうに絞って、それをさらに客観化するため、統計・表を加えて解説している。

隠れた戦争の傷あとを、ひとつの証言

として戦後史の一側面に照明を与えた意図が、やがて施策の上に生かされることを祈りたい。(新書版、二一九ページ、二百三十円)(ふ)

「子どもからの自立」

—おとなの主婦が

学ぶということ—

伊藤雅子著

未来社

この本を読んでまず感じたのは、著者の伊藤雅子さんという方は、たいへん心のやさしい方なのだなという印象と、女の解放ということが、一部の才能、体力、バックアップ等に恵まれた有能な女性のものから、ごくあたりまえの結婚退職、専業主婦のコースを歩いている若い母親たちにまで、確実にひろがりつつあるのだという希望のようなものだった。

「あごろ」9号でも、働く女と主婦の接点をテーマにとりあげながら、今一步突っこみが足りなかったのは、育児をめぐり、地域との結びつきをめぐり、双方に抽象的な提言はあったにせよ、具体的な解決の方途を見出せないことにあったと

思う。

この間隙を埋めるための一步を踏み出したのが、国立市公民館保育室である。

この保育室は、主として二十代後半の、子どもに一番手のかかる時期の専業主婦が学ぶために設けられたもので、若い母親が学習する間、たとえ一週一回二時間であっても、子どもにとって次に来るのが待たれるような成長の一過程でなければならないという著者の信念が貫かれている。私の住むK市でもようやく保育室が認められたが、空き部屋の一時利用に留まり、保母もいないのに比べると、行政が一般市民のために真剣に血を通わせるか否かで、かくも違ってくるのかと思わせるものがあり、その生き生きとした保育室の姿は、著者とそれをとりまく人々の、共に成長しようというあたたかい心があふれている。こうして集団保育の楽しさ、すばらしさを体験した母親たちは、働く母親の問題も、より身近にとらえられるようになり、母と子の密着した状況の中から、子どもからの自立をはかっていく。

後半は公民館職員としての著者の実践

の成果をふまえた上での主張であるが、なおざりにしがちな、母として、親として、女として、どう生きるかをきつめた視点で深く掘り下げている。

とくに母と子の幸せなイメージが虚構であり、実際は閉ざされ老後と変わらぬ生き方を余儀なくされている若い母親の問題、育児中断再就職という一般に定着した考えの中に落とし穴があることを示唆するなど、表面的な現象を批判し、抽象的な提案や国家への責任転嫁に終わりがちな従来の女性論に比べ、女性自身が小さなことから一つずつ取組んでいかなければならぬことを教えられる。

全国各地にこういう保育室がどんどんできるために私たちはもっと協力しあわなければならないと感じさせられた。

最後に書評が六点ほど載っているが、いずれもすばらしく、「あごろ」にこの書評を書くのがためらわれたほどのショックを受けた。

現在母親である人はもちろん、これから結婚する若い女の人たちにも一読をすすめたい。(四六版、二三〇ページ、千円)(W)

「市川房枝自伝」 戦前編

市川房枝著

新宿書房

この本のとびらをひらくと、著者市川房枝女史の近影が掲げられている。温顔に刻まれた年輪は、まさに婦選運動そのままをあらわしているかのよう。読む者をして、その足跡をしるばるにふさわしい。

明治二十六年（一八九三年）生まれの女史は、今年八十二歳の高齢で、いままお現役の政治家。理想選挙をもって、政界に清涼剤としての役割を保ちつづけているのは、稀有なことと言わざるをえない。

明治の末年に愛知県的女子師範学校を卒えた女史が小学校教員となり、職業婦人として出発したのは大正二年である。

デモクラシーに心をよせて、やがて上京。ここで、平塚らいてうほか、青鞥の新しい女たちとの出会いによって大きく目をひられ、らいてう女史とともに新婦人協会を結成、青鞥の運動の限界を打ち破ったところから、婦人の政治的、社会的

な団体運動を目指して出発することとなる。

大正五年治安警察法五条改正案請願の運動を展開することによって、初めて婦人だけの力による政治運動の道がひらかれたことは、大きな歴史的意義を示すものであるが、このことが女史の生涯に、いわば決定的ともいえる重要な意味あいをもつことになったと思われる。生涯的ともいえる覚醒が、その後の歩みをみちびくものとなったのであろう。

やがて、らいてう女史とたもとを分つて渡米し、二年半の滞米生活ののちに帰国する。当時の滞米記も面白い。帰国のうち、大正十三年の秋ごろから婦人参政権運動に誘われて、その年の暮結成された婦人参政権獲得期成同盟に参加したと述べているが、それ以前の婦人参政同盟は、二、三の婦人団体の会員による寄合世帯的なものであったのであろう。

婦人参政権獲得期成同盟が結成され、ここに要請されて女史が参加したことは、新婦人協会当時から継続としての責任感が心に動いていたことと、同時に過去の苦い経験から、ひとつの組織を、

組織として動かしてゆくための役員間の相互協力と、組織体としての事務的な運営とに大きな反省があったのであろう。

女史の参加は、その意味で婦選運動に核を打ちこむことになったと言っても言い過ぎではないであらう。

本書を読んで、この運動が、単に婦人参政権獲得だけの運動ではなく、実に幅広く、かつ多様性をもったものであったことに、あらためて驚くのであるが、ガス料金値下げ運動、母性保護運動などまでもとりこむ政治運動として、それらの解決の道すじに婦人の政治参加への強い欲求が湧き上るのは当然であった。この当然すぎる婦人参政への願望に対して、当時の状況が、いかに厚い壁であったかも、この伝記はあますところなく伝えていく。

昭和四年の婦人公民権案ひとつ取上げてみても、これが衆議院に上程されてから結着をみるまで数年を費やし、しかも衆議院で可決されながら、貴族院では昭和六年になって否決されるという結果であった。

これらの請願行動、個別的に政治家に

働きかける陳情など、女史の壮烈とも表現しうる活躍の記録が、随所で心を打つ。しかも、この確かな記録性は、何に支えられ保たれたものであろうか。恐らく女史の資質の中には、高い事務能力が備わり、それがあれだけの大胆な政治力と矛盾なく共存して稀有なる婦人政治家としての個性を築き上げたものであろう。

政治と道づれの八十年の生涯に毀誉はうへんが無いはずはない。とくに戦争への道をたどる当時の状況にあつて、婦選運動の戦術転換と挫折は、やむなく妥協と協調の路線に引きずられてゆく。本書は戦前編として昭和二十年八月までで終わっている。続刊が待たれるが、婦人参政権運動上に果した市川房枝女史の本領は、この巻にあますところなく発揮されているといえるだろう。その生涯のすべてが書き上げられる日は、まだまだ先のことであろう。

理論よりは行動の人であり、その行動を支える並々ならぬ信念の人であらう。

いまなお政治の現役にあつて、さきの東京都知事選挙には、困難な状況の中で美濃部知事の翻意をうながし、三選を实

現した蔭の力となった。その政治的役割を思うとき、市川房枝女史の中に一貫して貫いているものは、憂国の志士に近い心情が一面にあるようにさえ思われてくる。六〇〇ページをこえるこの自伝は、ある個人の歴史の枠をはるかに超えた日本の婦人参政権獲得運動史である。またそれに倣いする、驚くべき緻密な記録性によって、今後の日本の政治史研究の上に、必ず資料的役割を果たすであらう。

(A5版、六二三ページ、二千円)(み)

「婦人解放と女子教育」

一番ヶ瀬康子・奥山えみ子編

勁草書房

教育制度検討委員会が委嘱した「女子教育に関する委員会」の検討内容を軸に実践活動者のレポートを加えた十二篇から成る研究書である。

現代における男女平等と婦人の解放(星野安三郎)、現代女子教育問題への展望(一番ヶ瀬康子)、家庭科教育の問題性(村田泰彦)、女子高等教育の現状と問題点(藤井治枝)、女子教育と女教師(奥山

えみ子)など、紙幅の半ばを占める論文は、いずれも、さすがに手なれたものであるが、後半の実践の記録、男女共修の家庭科教育(和田典子)、中学校における男女共学のなかで(駒野陽子)、女子高校生に希望を語るために(仁木ふみ子)、短期大学教育の創造をめざして(門脇美代子)、社会教育と婦人解放(小川利夫、松下祐、伊藤雅子)は、いっそう切実な重みを持つ。理論家と実践家の討論が加えられていたら、さらに価値ある一書となっていたのではあるまいか。(四六版、三八二ページ、千百円)(り)

「おんな・部落・沖縄」

もうさわ ようこそ著

未来社

解放と自立を求める女たちをとりまく状況に展望をきりひらこうとするとき、その課題は、まことに重い。戦後三十年の反体制・反権力の運動さえも、時に体制補完の役割でしかなかったのではないかという挫折に近い反省が、革新を叫ぶ側にも重い空気を作り出している。この

自戒の上に立って、しかもなお、この社会を内側から変えてゆくよりほか、いまのところ手だてはないのではないか、そして、そのことに女の立場からどのようなにかかわったらいのかを、自分に問いかけて書きつづける著者の姿勢と、その発言には、まことのものがたたえられているように思う。

著者はそのあとがきで述べている。

「かつて、戦後を出発するとき、私は、解放というのは前の方に、未来の方にあるような気がしておりました。けれど三十年近い歳月がたったいま、解放だと思っていたことが、実は人間の頹廢へつづいていたことを知り、がくぜんとするとともに、私のこれから、私の未来に、たしかな形であるのは、老いと死だけであり、そのことを考えると、あんたんとします。けれど一方で、こんな風にも考えています。解放というのは前にはないのだ、と。解放を求めて生きてゆくとき、解放的なものは、その足あとの中にかたちづくられてくるのではないかと私はいます。生きている意味を求めて、まがりなりにも生きたいまの足あとが、

これからの闇を生きたる光源にもなっているようです。」

また、別の箇所では、

「私の女性史研究は、研究のための研究ではなく、女としての解放を求める道すじにおいて、そこを通らなければならなかった関門でした」とも述べている。

おんな子どもとか、とかくおんなは、とか、利口のようでも、おんなはおんなとか、「おんな」という言葉で総称される表面の意味の裏側に常にひそむ侮蔑を鋭くかきとって、これまで、もろさわようこさんは何冊かの女性の歴史を書き綴っているが、この一冊もそれに洩れず、女性の性による差別が、歴史的にどのような形づくられてきたか、強者の存立が弱者への差別を生む同じ根を共有するものとして、被差別部落民に重ねあわせて、それをみようとしている。

あらゆる差別一般の中に、部落差別を包含することへの危険を当然含みながらも、その危険の歯止めとなっているものは著者のかかわり方の真摯さであろう。

その意味で、この本の中心となるのは、「部落の解放と女性の解放」の一章であ

る。言葉の重味を裏づける原体験からの率直な怒りがほとばしるとき、単なる論理の枠ぐみを越えた納得が、読者の共感をそこに引き据える力が生まれる。

それは、また切り捨てにされた沖縄の人々にも連なるものであり、ここに、おんな・部落・沖縄という、ひとつながりのものとして、現代を歴史的に照射する大胆な随筆ともいえよう。(A5版、二六四ページ、九百八十円) (く)

「婦人に関する諸問題

総合調査報告書」

―婦人に関する諸問題調査会議―

戦後社会のきわ立った特徴のひとつとして女の地位の向上や、社会的進出がとりあげられてきたが、実際にその現状をつかもうとしても、一冊の本からそれを全般的に知ることはむずかしかった。その意味では、はじめての「婦人白書」というべき総合調査の報告書である。

戦前にくらべて、女の地位は、かなりの変化を示しているが、そのことは、生活意識・生活様式・家族形態にまで波及

する問題であるがゆえに、今日この状況に対応するための施策が重い意味をもつこととなり、そのために衆参婦人議員懇談会からの要請で、この調査が行なわれた。総理府に「婦人に関する諸問題調査会」を設け、民間有識者から選ばれた委員・専門委員によって、昭和四十七年五月から二年にわたり調査を行ない研究討議を重ねて、四十九年三月に、その成果がまとめられたものである。

全体は、婚姻・家族・家庭・職業、市民活動、レジャーの五部から成立っている。

「婚姻」では、戦後の新憲法が、「婚姻は男女両性の合意のみに基づいて成立する」ことをうたって、家本位の結婚から個人本位の結婚への転換を示唆したが、戦後三十年の今日、結婚をめぐる多様化した過渡期の諸問題が現実には個人のワタを超えた社会問題となつており、現代の日本女性がもつ結婚へのイメージはどのようなか意識調査している。結果は、「愛と性との結びつき」が支配的であり、表現を変えれば、まさしく本人同士の意志に基づく恋愛結婚主義である。しかし、本来結婚というものは、

複合概念であり、それは重層構造をもつ。社会的承認・法的承認・永続の可能性・子供と親との関係・結婚後の役割分担を含めた家庭運営など。これら結婚の背景をなす諸条件に対応する力が、古い矛盾をかかえた日本の社会との関係にあって、どのような問題を含んでいるかを構造的にとらえようとしている。

「家族・家庭をめぐる諸問題」では、まず、歴史的にみて、長い間、家父長制のもとに忍従を美德としてきた女性は、男性に従属し、社会的活動を男性にゆだねて生きてきたが、戦後二十年の産業構造の変化に伴って、その地位は著しく変わり、生活のパターンは多様化しつつある。その変化のかたちとしては、核家族化して小規模化した家庭にあって、女性の生きがいや意識行動の状況、家庭教育における女性の立場をどうみるか、また、家庭への依存度と老後の不安などをあげ、その問題点をあげている。

「女性と職業」では、日本の産業構造が、戦後、重化学工業へ傾斜してゆく中で、女子労働者がどのような職業的条件のもとにどのような意識をもって働いて

いるか、そして長く働きつづけるための家庭生活との緊張関係、男女平等の原則と女子労働保護の原則が確立されていると言われるが実態はどうなのかを示している。また、農家主婦の就業状況、自営業主婦の就業状況と、それら主婦の意識の問題をあげている。

「市民活動とレジャー」は、戦前には一度として取上げられたことのない分野であり、市民としての権利意識や義務感に基づいて展開される集団的な自発的行動として、戦後の新しい現象とみて考察を加え、同時に、余暇とその利用の状況をもつてしめくくっているが、それぞれの部に、この調査会議としての提言をつけ加え、いわば白書であると同時に答申として、今後の展望をきりひらく参考となる意味を含んでいる。しかし、問題の設定そのものに問題があるうへ、各調査の基礎となった個別調査は十分に生かされなかったうらみがあるのは残念である。

中川善之助教授が全体の責任者として序文に、その主旨を述べているが、今後の施策への反映を見守りたい。(B5版、四六二ページ、非売品)(み)

「乳幼児をもつ」

保育労働者の労働と生活

婦人雇用研究室編

職業研究所

日本女子大教授広田寿子氏が、川崎市の保育園で働く百人の「乳幼児をもつ保育労働者」を対象として行なった調査報告書である。

川崎市の公立保育園で働く保育労働者（園長・保母・看護婦・栄養士・賄人・用務員）は約八百五十名、うち四八％が既婚者で、その三分の一が乳幼児を持ち、しかも七割が「主任保母」である。保育労働者の過重労働は周知の事実だが、みずからも子を持ち、しかも責任ある職責を果たすこの人々が、十二月という最悪の時期に協力を惜しまなかったのは、調査を通じて訴えたいことが山積していたためであらう。

調査のハイライトともいふべき「保育労働と家庭生活の両立」は、被調査者たちの八五％が協力的な家族を持ち、過重労働の支えとなっていることを語っているが、協力の内容は「ふとんのあげおろ

し」が最高（八割）で、「子どもの世話、掃除、ゴミ出し」が各五割、「洗たく、買物、風呂わかし」が四割、しかも複合家族となると、妻の家事労働は全く同じであるにかかわらず、夫のそれはかなり圧縮されているなど、多くの問題を示している。

保育労働者、保育委託者、保育行政関係者だけでなく、婦人労働関係者に、ぜひ一読をすすめたい。（A5版、二二二ページ）（千）

「ホビの国」

青木やよひ著

潮出版社

ホビとは、インディアンのことばで「平和」。「ホビ族」も存在するほど、インディアンの生活は、本来、おだやかで平和で人間的だ。

ニューメキシコのインディアン部落を訪ねて、そこに残る人間らしさに、「文明とはたして何か」と問い直す著者。「あごら」のティーチンに登場する著者は、いつも誠実でまじめな一面を見せ

ているが、ここには著者の半面のやさしさがあふれている。そのやさしさが、ホビの人々のやさしさと美しいコンチェルトをかなで、極彩色の夢をみているような豪華なたのしさにひたってしまふ。

しかし読みすすむにつれて、りつ然としてくる。今日、文明といわれるものはいったい何だったのか、深刻に痛烈に考えさせられるすぐれた文明論である。（新書、二三五ページ、四百二十円）（ち）

「涙をたらした神」

吉野せい著

弥生書房

いきなり頭をぶち割られた。大風が、ぐああ、ぐああと、心の中を吹き抜けた。私は、ただただがく然とし、呆然とし、「あごら」をつくるのがいやになった。

七十五歳の、みずみずしい女の、みずみずしい詩である。七十五年、くわっと目を見開き、耳は柔毛の飛ぶ音も聞きのがさず、したたかに生き抜いた女の、さまざまな記録詩である。

七十にもなって、百姓女が……と、人は

あきれる。遅咲きの花がようやく春を迎えたのだとは、しかし私は思わない。この天性のたくい稀れな詩人・作家は、女であり、妻であり、百姓であるがゆえに物を書くいとまを持ち得なかっただけのこと。自然にふれ、人間にあうごとに、ことばは心に刻み続けられていたにちがいないのだ。

雲を見、空を仰ぎ、人を語る妻の発見と表現の鮮烈さは、夫である詩人吉野混沌を驚喜させ、同時に畏怖させたにちがいないと私は思う。苛烈な自然と貧困とたたかう開拓地の暮らしの中で、夫婦は身を寄せ合い、魂を与え合い、同時に魂を奪い合って、ついに夫は魂を抜かれ去って旅立ったとみるのは、想像が過ぎるであろうか。

「春ときくだけで、すぐ明るいうす桃色を連想するのは、閉ざされた長い冬の間にくすぶった灰色に飽き飽きしてはっと目をひらく、すぐにとび込んで欲しい反射の色です」——こんな柔らかなことばで始まる新婚当時の思い出「春」から、「飛び散った紙幣」「かなしいやつ」と時代が下るにつれ、美しい大自然の中に

夫婦と子どもたちと隣人たちが、しだいにクレッシェンドで浮かび上がり、夢多い若妻は、風雪に耐えるつよさを帯びてくる。夫婦とは何かを考える上でも、得がたい記録文学である。(四六版二二二ページ、千五百円。普及版二〇二ページ、八百五十円。ただし普及版には、貴重な作品の一つ、「飛び散った紙幣」が抜けている。箱を廃しただけの普及版と思わされている商法は、一種の不当表示) (涼)

「あすへの随想」

加藤富子著
第一法規出版

自治大学教授として第一線で活躍中の著者が、折々に発表した論説、随想などを一書にまとめたもの。

自治体の機能や職員の倫理などにふれたものには、著者の知性とまじめさが光るが、婦人問題に関したものは、追究がいつそう鋭く、著者の長年の心の痛みまで紙背から伝わってくる。決してあからさまな告白ではないのだが……。 (B6版、一三四ページ、五百円) (S)

「アラビアの王様と王妃たち」

下村満子著
朝日新聞社

週刊朝日記者として、国際問題、とくに中近東問題に活躍する著者が、五十度の炎熱下、現地に飛んで取材したルポである。

石油ショック以来クローズアップされたアラビアだが、「アラビアン・ナイト」以上の情報を持つ日本人は、比較的少ない。著者は精鋭のジャーナリストらしく、王と王妃を語りながら、それぞれの国情や婦人の地位にも目を光らせている。マホメット以来の一夫多妻が崩れつつある現状なども、おもしろい。(四六版、二五五ページ、六百八十円) (よ)

「おんな三代」

小林初枝著
朝日新聞社

「週刊朝日」が、昭和四十七年九月二十二日号で発表した「わが家の三代」に

入選、第一席に選ばれた作品に、その後さらに筆を加えて単行本としたもの。貧困と、いわれなき差別の中で、三代の女たちが、明治・大正・昭和を生きつづけた記録は、迫真の事実として展開される。

著者の祖母にあたる小林きちは、明治十七年に埼玉県の被差別部落で生まれた。七歳で早くも地主の家へ通いの子守に出される。髪の毛が赤ん坊の顔にかからぬよう、手ぬぐいを後から前へ鉢巻のようにくくって、家族や作男までが食事終わってから、やっと背中の子どもを下ろしてもらい、ひとり冷えたうどんを食べながら、他人のめしの苦さを知る。夕食は九時前後になり、ひもじさにおかわりを出すと、地主の嫁は聞こえがしに、「貧乏人のガキは、なんとガツガツしてるんだがな。だから生まれが悪いといわれるんだ」と叫ぶ。暗い道を泣き泣き家に帰って訴えると、父親も母親も、「そんなことぐれえで泣くようじゃ、しようがねえな。もっと、きかねえ気になんねえとこの世はわたっていけねえぞ」「それでも新宅だから、おめえを子守りに使ってくれるんだぞ。本家の方は、子ど

ものガラが悪くなる」って山中廓^{くわく}（被差別部落）の子は使わねんだぞ」というだけで、とりあわない。幼くして差別の痛みに泣きながら育ったきちは、それだけに、踏まれても蹴られても崩れぬ強烈な個性をそなえた女に成長し、結婚する。

夫、小林清鬼は、同じく被差別部落に生まれ、高等小学を卒え、文字の読み書きも達者、神仏の信仰も篤い律気な性格であった。（そのため小林家にはいろいろな記録が残され、本書の資料となった）。

しかし目を患った清鬼が、辛うじて失明をまぬがれたその入院中に同じ部落民が連帯保証人を無断でかたり、家屋敷が抵当に入り、借金の返済に一生苦しめられる。犠牲になったのは子どもである。長男も次男も三男も幼くして死に、六年間にひとりの子も育たない。やっと三歳まで育った子は、火事で丸焼け、物置小屋で暮らす生活の中でまたも世を去る。

この不幸のあとに生まれた女の子、三木は、ようやく成人して結婚するが、入籍しないまま夫に去られ、ハタ織りの内職で一女を育てる。

本書の著者であるその一女、初枝は、戦

争の中で幼い日々を送るが、祖母や母たちのように忍従ひとすじの道は歩もうとしない。高校入学、生徒会長に選ばれる中でも差別の白い眼が注がれる。就職。学校の事務職員から司書へ。その間、部落解放運動を知り、それにもかかわる。やがて通信教育で大学卒業の免状を得、スクーリングで知合った友人と結婚、小林家三代をおして初めての男の子を出産する。このころから家庭に波風が立ち始めるが、部落あげての差別反対運動に夫も加わることで平和がよみがえる。

「昔っからなあ、男は二十五前、女は二十前に人だまを見ると出世しねえと言われている。おらあこの年まで、無学でも力のあったけを吐き出して生きてきたが何ひとついいこたなかった。人だまを見ただせいでもあんめえが、人には生まれつき備わった運命ちゅうもんがあるような気がしてなあ」祖母きちの死をもつてこの書は終わるが、著者はおそらくこの祖母から、たっぷりの昔がたりを聞かされて、おのれの生きざまとしたのであろう。一読をすすめたい好編である。（A 5版、二〇二ページ、七百八十円）（光）

おんなの情報誌

から ★ ★ ★ ★

「北海道女性史研究」7号

「北海道の自然と風土にたちむかい、急激な近代への傾斜のなかで、女性たちは黙々として生き無言のうちにうもれてゆきました。私たちはその無言の女性たちの労苦の軌跡をたどり、掘りおこすことを願って北海道女性史研究会をつくりました。私たちの力はあまりにも微力ですが、力の限り続けてゆきたいと思ひます」——このような願いのもとに聞き書きを続けているグループの所産である研究誌は、タイプ刷り四十八ページ、装丁も内容も地味だが、ずっしりと重い何かがある。アイヌの母の歴史、屯田兵の妻の記録など、貴重な記録の持つ重みが迫る。

(旭川市東光十五条三丁目北海道女性史研究会発行 年会費二千円、年二回発行)

「れ・ふあむ」9号

フランス語で「女たち」を意味するこの雑誌は、一九六三年、神戸外大女性問題研究会機関誌として誕生、卒業後も年一回の発行を続けていただけあって、さりげない文章のすみずみにまで、かかわりあってきた人々の年輪が感じられる。自立をめざす母として考える「母と子」の四篇、学問・結婚などで、「女であること」に直面している「私のこと」の四篇、民話・詩・随想など「ひとりの時間」の四篇、いずれもハッタリのない姿勢が好ましい。B5版、四八ページ、二百円。(神戸市垂水区神陵台八の一〇の六正路方「女性問題研究会」)

※「女の叛逆」11号

特集「しのび寄る職業病」、「全国リブグループ一覧」など、次々にヒットを出している「女の叛逆」は、号を重ねるこ

とに議論の輪もひろがっていることが感じられる。11号は、「許せぬ胎児チェック」特集。羊水チェックのシンポジウムの内容とともに、障害者からの発言、反対運動の経過など、実践論も掲載して鋭く問題に迫っている。毎号、反論、またその反論を展開している「編集者への手紙」もおもしろい。編集者の久野さんは、「あごら」の会員でもある人。表題から想像されるような女闘士型とはおおよそ反対の、もの静かでやさしい人だが。A5版、六二ページ、百八十円、送料五十五円。(〒467名古屋市瑞穂区熱田東町、堀田団地4の704 久野綾子)

※「女創生」10号

名古屋で「女寺小屋」と銘うつ共同生活が続けるリブ・グループを中心に発行されている「かわら版」。「寺小屋のみんなに、オヤジ、オフクロ、あたし自身のことを話して泣いたのを最後に、もうこのことでは涙を流さない」の文に象徴されるような、ある明るさが貫いている。B5版ガリ刷りを続けていたが、10号か

らタブロイド版四ページの、りっぱなタイプ版になった。百円。(名古屋市中区宮前町4の20第一ビル3F「女寺小屋」052-262-7934)

★新しい地平」

女の自立をめぐって一年間続けた討論のまとめをメインに、連載は「女と男の対話」(青木やよひ)「女的美術史」富山妙子。B5版十二ページだが、切り取って壁にでも貼りたいような美しい表紙に始まり、カット一枚にも、一行の文章にも神経が行き届いている。鋭い問題提起など、内容も抜群に充実している。百円。(〒152東京都目黒区東が丘2の13の30の106、TEL421-5419)

「女から女たちへ」14号

少し読みにくかったガリ刷りから、りっぱなタイプ・オフセット版になり、紙質もバリッとした。内容も、「民法七百五十条(姓)改正運動に向けて」(木村久子)など、堂々たる論文が展開される

ようになった。心の中の思いをたたきつけるような印象であった初期のころに比べると、このグループの運動そのものも変わってきたのではないかという感じがする。書評がユニークでいい。B5版、六ページ、五十円。(購読申込「東京都目黒区大橋2-22-9の1013鈴木方」)

★「高群逸枝雑誌」

河野信子「女性史覚書」、石川純子「高群逸枝論」、石牟礼道子「高群逸枝伝」など、どれをとってもユニークで、ゆたかな内容。抜群の小誌である。A5版三〇ページ、年四回分六百円。一千部の限定版。(〒867熊本県水俣市幸町6-15)

「女性文化クラブ」

職場連絡ニュース」

丸の内のOLを対象とするニュース誌で、勤務時間、仕事の内容、被服費やパーム券の支給状況など、ダイレクトな情報を相互交換している。隔週刊、B5ガリ版4ページで、ともかくよくも続いて

いる。(東京都中央区八丁堀二の六の一日本カーボン株式会社 須藤美代子発行)

「女エロス」4号

相変わらずずっしりと部厚な4号だが、表紙が変わり、内容も変わった。「職場へのリブの果たし状」と銘うつとおり、従来の体験的告白論が多様化し、より説得力を持つものとなっている。エロスを契機とする体制解体を呼びかけた初志は、かなり変わってきているが、京大女子学生の差別を訴えた「私はR子と呼ばれた」、リブを通してすぐれた文明論を展開している「おんな解放・洋の東西まず問えば」、オキナワの女を語る「現代島痛みの女」など、出色の記事が少なくない。(A5版一九二ページ、七百元、一般書店で発売)

●女の情報誌製作者、読者のご連絡をお待ちします。

「読書室あごら」で委託販売も行なっています。*印は、取次販売中のものです。購読ご希望の方は定価プラス送料分をお送りください。

主婦の記録を発行し続ける「わいふ」

わいふたちの
声を集めて

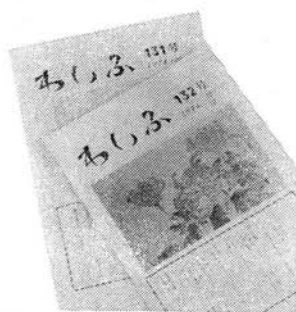
なんでもないただの主婦が、なんでもないただの主婦たちの文集をつくらう――。

こんな趣旨で雑誌「わいふ」がつくられたのは十一年前のこと。十年間、ひと月も休まず、遅れず、定時発行を続けた。

子育ての中で、女の出口を模索していた高木さんが、中学時代の友人と話し合って始めたのが発端だが、暮らしの手帖や朝日新聞で紹介されるなどで、全国のわいふたちに輪がひろがり、わいふたちのなまの声が、紙面をうずめた。子育ての記録、年を重ねて知る、「女」の喜びや悲しみ。気取らない、飾らない文章が、どれも切々として美しい。

十一年目の
廃刊宣言

阪急線、宝塚に近い仁川の駅か



ら弁天池伝いに十五分、発行元の高木さん方を訪れると、「わいふ」印刷のために始めたという「百合印刷」は、製版室を一部屋ふやす繁昌ぶり。二年前よりも、高木さんは忙しく、疲れて見えた。

「やめることにしたのです」と言う。「十月でやめます。もう「わいふ」の使命は終わりました」

切り口上でいきなり言われて、驚くというより、なぜか、「やっぱり」という思いであった。二年前、取材に訪れたときにも、高木さんは、「やめたい」と洩らしていた。疲れたのだらうと思った。

十年間、一日も休まず遅れずは容易なことではない。「隔月刊にしようかと思ったこともあるのです。でも、隔月刊にするのはやめると同じことだと思って月刊を続けました」と、二年前、高木さんのことばの気魄に打たれたが、ことしからはついに隔月刊になり、年頭の廃刊の辞が、会員たちを驚かせた。「読むだけの読者なら会

員ではない。」高木さんの痛烈なこ
とばが、二百四十名の眠れる会員
たちを突き刺した。

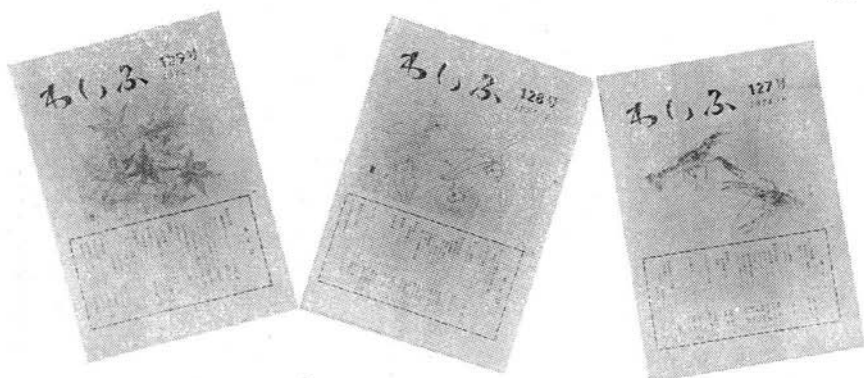
「臨終の枕もと」と
自嘲する人もいるが

読むだけに墮していたのは怠慢
だった……全国からこだまのよう
な反響が返ってきた。「西宮が投げ
出すのなら、東京で編集を引き受
けよう」——東京グループの集ま
りも持たれた。関西出身の人々は
席上言った。「わいふ」は宝塚で
生まれ育った雑誌。できることな
らいつまでも宝塚で発行してもら
いたいけど」

にゅーわいふは
生まれるか

「わいふ」を印刷するために始
めた印刷屋なのに、「わいふ」を
刷らなくなったらどうなるのでし
ょう」

高木さんは、最後に、ふと暗い
目をして言った。そしてその暗さ



をみずから封じ込めるように言い
添えた。「わいふ」の会員たちが、
いま各地で、地域活動、市民運動
など、それぞれりっぱな活動をし
ています。その中から、もしかし
たら「にゅーわいふ」が生まれる
かもしれないし、生まれなくて
も「わいふ」は使命を果たしたと
思います」

東からの朗報

と、ここまで書いたとき、思わ
ぬ朗報がはいった。一人で重い荷
を負いすぎてきた高木さんに代わ
って、みんなで「わいふ」を続刊
するという。当面、中心になるの
は、東京の会員たち。「にゅーわ
いふ」でなく、「わいふ」の名を
そのままの新生「わいふ」に夢を
託して見守りたいと思う。(千)

国際婦人年をきっかけとして 行動を起こす女たちの会

淡々とした
呼びかけ

憲法によって男女平等がうたわれて、ほぼ三十年になります。けれども伝統的な男尊女卑の意識は根強く、職場に家庭に教育に、社会のあらゆる分野にいぜんとして女に対する大きな差別がつづいています。最近では差別をますます大きくするような動きさえあり、私たちは強い怒りを感じます。

社会は男と女によって構成されているにもかかわらず、社会の仕組みは男中心に組み立てられ、女の生き方は、はなはだしく制約されています。私たちは新しい生命を生む性が社会的に尊重され、保障されるとともに、社会のあらゆる営みに女が積極的に参加する道が開かれることを望みます……。

「私たちは行動を起こします」と声明した文章は、淡々と、しかし強い意志をひそめて訴えている。「太古、女性は大太陽であった」と

呼びかけたらいでうの輝やく太陽のような美文に比べれば、これは「われわれはア……」と叫ぶ、例の調子もなく、むしろ平凡にすぎるくらいかもしれない。しかし、戦後三十年、今こそ大地に立って太陽を見すえながら堂々と呼びかけるつよさがある。長い歲月ののちには、この文章も、ひとつの歴史となることであろう。

十の分科会に 分かれて

呼びかけは、さざなみのようにひろがり、ひとつひとつと、女たちの輪がひろがった。いま次の十の分科会が活動をはじめ、一分科から二人ずつ二十人の世話人が選出されている。

△教育▽ 家庭の中での男女のしつけの相違、進学に際しての男女に対する親の考え方の相違、家事分担量の相違。学校教育では、男女別学の状況、教科書の中の女子に関する記述の検討。現在これら

の資料を集め検討している。

△マスコミ▽ 出版物、テレビ、ラジオ等における差別的表現のチェック。マスコミ産業で働く女性の待遇調査。これらの調査結果を公表し責任の所在別に差別撤廃を要求する。

△家庭生活主婦▽ 主婦の出口づくり運動

・主婦の再就職の門戸拡大。主婦のため職業訓練所

・保育所づくり、保育所の質的向上。

△児童文化▽ 少女雑誌、マンガを定期購読し分析を行なっており良書・悪書リストを公表する。

△売春問題▽ 現代の公娼制度ともいうべきトルコ風呂をなくす法の制定運動、海外買春反対運動。

△独身婦人の問題▽ 独身婦人の生活実態調査、特に老後生活に対する社会的保障を訴える。

△保護と平等▽

・労基法第三条に「性差別」の語句を加える運動。

・産前産後休暇の延長と経済的保障を推進する運動

東京都新宿区新宿 1-9-4

連絡先 御苑グリーンハイツ 806

中島法律事務所内 TEL (03-352-7010)

・雇用平等促進委員会設置運動。
・中年、既婚、パートタイマーの女性が首切りの対象となっている現状に対する要求。
・雇用調整の適用に際する不平等撤廃運動。
△裁判・調停・離婚▽母子のため
の一時保護所の増設、母子寮の質的改善のための働きかけを都民生局に行なっている。
△職業・組合▽取り組み方を検討中
△公開質問状▽現在よせられた回答を分析中。

毎月十三日に

例会を

婦人運動の大先輩、市川房枝さんを呼びかけ人とするこの会は、いま、こうした分科会の活動を中心に、いままです婦人問題にかかわらなかつた新しい人々も積極的に組みこもうとしている。毎月十三日には、定例の例会が開かれ、全会員が集まって情報を交換し、運動計画を練るが、全体会が方向を

きめるといふよりは、個々の分科会が自主的に運動の方向を定めて行く仕組みである。

「離婚の家」 設立計画も

たとえば△裁判・調停・離婚▽分科会では、「離婚の家」の設立準備がすすめられている。夫の暴虐にあい、屈辱の思いの中に離婚の意志を固めている女でも、いざ離婚に踏みきろうとすると、まず住むべき家がない。幼児の手をひいて、深夜、吉武輝子さんの家を訪れた若い母の話は、新聞にも伝えられたところ。もしも、まず、住む家があれば、自立の第一歩を心おきなく踏み出せるのではないだろうか。

分断され孤立していた女たちはこうして少しずつ自立の方法を学ぼうとしている。

きつかけを 離れるときこそ

「国際婦人年をきつかけとして」という、「きつかけの杖」を必要としなければならなかったのかという批判もある。女性抑圧賞を贈るよりも、足もとのきびしい現実に挑戦すべきだという声もある。非難や中傷は、行動するものにはつきものだ。何ことも最初から完全なものなどあるはずもない。批判があるならまずからかわり、かわかることから変えていくべきではなからうか。

母親の手を必要とした幼児もいつかは母の手を離れる。「国際婦人年」という杖を投げ捨てたときにこそ、この会が呼びかけた意味の真価は問われるだろう。それはまた、日本の女の真価が問われるときでもあるかもしれない。(千)

〈おんなの雑誌から 1〉

パ ン ツ 屋 所 感

—「わいふ」133号より抄録—

日 比 野 都

去年の三月十九日の午後六時から、帰国中のノーベル物理学賞受賞者、江崎玲於奈博士の講演会が、大阪市北区中之島の関電ホールで行なわれた。たいへんな人気で超満員、私は一時間前に会場についたのに、五列に並ばされた人垣が、エンエンと続いていて、どこがその終りか分らず、入れるかなあと心配でたまらなかったが、辛うじて入れて、通路に坐りこんで、一言も聞きもらすまいと、ノートをひろげペンを握った。

江崎さんはだいたい講演はおやりになりたくないものにとらんだ。いわく、「京都に住んでいた十歳のときに朝日新聞大阪本社を見学させてもらったのと、朝日賞をもらったのとで、朝日新聞社の深なさけで断れなくてエヘヘヘ」と笑って、講演ひき受けの辞をのべられた。

体格が少々劣ったという、ただそれだけの理由で、折から軍国主義教育一点ばりの時代とあって、志望の一流校、京都府立一中に入らず泣く泣く私立に入った。自分より成績の悪い者が何人も入れた事実から、江崎少年は文字どおり口惜し涙を流したということを新聞で読んだが、

一番感じやすい思春期の日の屈辱は一生忘れられない筈。その江崎さんが、天皇のために死ななければならぬという軍国主義教育の張本人の天皇に拝謁のために宮中へ参内されたということが、どうしても納得できなかった。もともと拒否したりしたらロクなことはないだろうし、いらんところにエネルギーを使っちゃ研究に差し支えるエヘヘで、ホンをかくして、タテマエで、保身上会いにゆかれたんやろなあとは私にはらんでいましたがね。講演の中で、活字でいえば行間を読むというやつ、エヘヘと笑いでカバーしながら何かそれに関したことをおっしゃるんじゃなからうかと、それが楽しみで講演会にでかけたんですわ。

おっしゃいました、おっしゃいました、やっぱりねえ。受賞式でのレセプションの席上、主催者のキングが、エスコートする相手の女性をまちがえたんですって。最初のひとりが組合わせをまちがえると坐る順序も順々にまちがっちゃって困ったんですって。でも、キングのするまちがいは、まちがいにはならないのでありましてエヘヘヘヘヘ。江崎さんの

笑いはとても明かるくて文字どおりエヘヘへで楽しく好感がもてました。そう、キングのまぢがいまぢがつてもまぢがいにならないんですって、天皇の戦争責任は責任にはならないっておっしゃりたかったんじゃないでしょうか。私はそうにらみましたね。にらむのは私の自由でしょう、江崎さん、万が一私の誤解でしたらごめんください。にらんだけでは承知できないので、すかさず朝日新聞の「声」に投稿しましたが載りませんでした。載らんやろなあど危惧しながらもやっぱり書くことで発散できますから無駄ではなかったです。

先日週刊誌でみつけた寺山修司さんのことですが、日本人であるための条件がいくつか書いてあって、その中に「ヒロヒトのことにふれないこと」というのがありますわ。

私は小学生のとき、何の式だったか忘れたが、講堂での教育勅語奉読の際、みなが頭を下げているのにひとりだけ頭を上げて、キョロキョロ目玉を動かしたため、ひきずり出されて、通知簿の操作のろに丙をつけられて、ずうっとしよう

のない奴とマークされて、今頃になって、あんなむつかしいもの小学生にきかせようというのがドダイまじごうとるわ、朕がおもったかて、私しゃおもわんで。わけのわからんものを、ジッと姿勢を正しくして鼻みずするのんも、咳するのんもこらえよちゅうのがドダイ無茶な話よ、それが何よりショーコに、奉読がすんだトタンに講堂中は鼻みずをする音で満ち満ちたというのは全国津々浦々の学校での共通の事実、ザマアミロ。退屈してキョロキョロした私という人間は、まあなんという自主的な自由な表現をする創造的な子どもやったんろ、ウッシッシッシシーと、気が付くまでに三十年もかかりましたわアホラジ。気がついたら口惜しいて口惜しいて、何も知らされず、軍国乙女だった私の青春をとり戻さなければ、あと残り少ないただ一度きりの私の人生、生きる甲斐がないじゃんかと、天皇批判の本を専ら漁って読むようになったのは、水が低きに流れるのとまさに同じリクツですわ。(中略)

この世の中は「優等生」たちが動かしている社会です。優等生は既成秩序の基準のワクにはまることにおいて「優等生」たり得るのだからどうしても巨大組織や権力の側に立つて生きることになり勝ちだ。彼ら優等生があやつっている権力を的確に批判する力は、しばしば「ずੱけた」部分から生まれてくる。「あの戦争を誰がおこしたと思う？ 皆頭のいい勉強のできる人たちがおこしたんだ。勉強さえできればいいってもんじゃないんだぞ、ママはあなたに勉強して欲しいと思う、それは人よりエラクなるためじゃなくて、何がいいことか悪いことかわかるようになるためなんだ」(わいふ122号、和光学園の四季、矢崎好子ママ)

ずੱこける勇氣をもつことと、生活してゆくことのかねあいはとてもむつかしいですね。私は自家営業のパンツ屋である限り、ずੱこけても生活は大丈夫何とかなる。ああわれよくぞパンツ屋になりけり、いつまでもずੱこけたパンツ屋でいなくちゃと、一九七五年の始めに当ってしみじみと決意をあらたにした次第。意志薄弱ゆえ行動のほどはあやしいので、有言実行とばかり、わいふに書かせてもらって自己煽動というわけです。

〈おんなの雑誌から 2〉

母キナラブックのこと

——「北海道女性史研究」7号から抄録——

杉 村 京 子

父 杉村コキサンクルと母

母は私たちの父杉村コキサンクルと、昭和十年八月十三日に死別しています。母はその時四八歳、父は五二歳でした。

石狩川沿いの国道建設の工事現場で父は事故死したのです。私の十歳の年の夏でした。

父は仕事仲間三人と丸木舟に乗って作業をしていたのですが、大雨のあとの物凄く増水した中で均衡を失った丸木舟が転覆したとき、他の三人と一緒に河の中に投げだされ、一度上に浮き上って来たというのですがそのまま姿が見えなくなり、必死の搜索も空しく、ようやく腐乱死体となった父が岸に上げられたのは、事故のあった八月五日から数えて一週間をこす八月十三日でした。

私たちはこの日の父の無惨な姿が忘れられず、ほんとうは事故のあった八月五日が命日なのかも知れませんが、遺体の上がった八月十三日を命日として長い間まつて来ました。

丁度学校が夏休みで家にいた私と、四歳下の妹と日中は母について毎日石狩川

の川岸に行き父の帰りを待ちました。夜は母のいない家で妹と二人で仏壇の前に座って一心不乱に法華経をと念えたものです。

「南無妙法蓮華経」「父ちゃん早く帰って来い」「南無妙法蓮華経」「父ちゃん早く帰って来い」とだれに言われたわけでもありませんし、だれに教えられたわけでもないのに子供心にもそうせずにはいられなかったのでしょうか。

まさかあの優しい父ちゃんが河に落ちて死んでしまったなどとはとても思えず、必ず帰ってくるものと信じていたのです。

雨竜村で生まれ、十八歳で旭川の近文アイヌ部落の父のところに嫁になって来た母は、ちょうど三十年間父と共に暮したのです。

この三十年間、母にとっては、決してしあわせな歳月でなかったと子供心にも思ったのですが、母は「お前らの父ちゃんほどいい人はいなかった」とまんざら子供たちに取りつくろっているとも思われない口調でよく言っておりました。父の死後何度かあった再婚の話にも耳

をかさず、手を替え品を替えての男たちの誘惑にも絶対負けない母でした。

母の意志の強さもあつてのことでしょうが、父の最後があまりにも悲惨だったので、そのことがながく母の心を占めていて、再婚などする気にならなかったのかも知れません。

一方父杉村コキサンクルは、母と結婚する前に一度結婚していて離婚しています。

ほんの短かい僅かな間だったというところで、父のこの最初の結婚相手というものは、いわば純粋なアイヌではなく、何代か前にシャモの血が混じった、色の白い優しい人でした。なぜこの父の最初の結婚の相手を私たちがよく知っているかというと、のちにこの人が父の生涯の愛人になった人だからです。

二二歳、六尺ゆたかな美丈夫だった父が、なぜこの人との初婚に失敗し、そしてまた再びめぐり逢ったのか、その頃の母の年齢にようやくさしかかった私にもいまだにわからない節が多いのです。

食事の時など、どうかするとくると白眼をむくおかしな世があつて、それ

が嫌で父は離婚したのだといいますが、そんな妙なくせのある人とはとても思えないおとなしい人でした。

この最初の結婚に失敗したあと父は、同じ部落の人妻と恋仲になり、因襲と封建色の濃いそのころの部落の人たちのひんしゅくを買ったのは想像に難くありません。

きつと今に血を見るような事態を引きおこすと誰もが不安がったといえます。

体格の並はずれて良い父がその若さにものをいわせて暴れると、それを取り押えるだけの人がおらず、まわりの人たちを一層不安がらせたのでしょう。

その頃、夫と死別して父のところに体を寄せていた父の姉が、だれよりも弟の身を案じ、一日も早く身を固めさせなければと、当時美貌をうたわれていた母に白羽の矢がたち、そして父と母が結婚したのです。

周囲の人たちはそれなりに事情を知っていたのですが、当の本人の母は全く何ともきかされず、結婚したあとでいろいろな事情のあったことを知ったといえます。

母と結婚した父は間もなくその人妻の恋人と手が切れたといいますが、その代りにというわけではないでしょうけど、はじめに結婚した人とのつき合いはじまっていたのです。

当時のアイヌの風俗としては、男は甲斐性で何人もの妻を持つことがゆるさる、むしろ自慢でさえあつて、その妻たちを働かせて、自分は焼酎ばかりのんで文字通りのんだくれていた人が多かったといえます。

その父の最初の結婚の相手だった人は、父との破婚後一度再婚したのですがまた不縁になり、そのまま父が死ぬまで父の生涯の愛人だったのです。

父が事故死した時も、その人とその人の養女とが父と同じ現場で働いていたので一緒でした。

何も知らなかった私や妹に、この人はとても優しくしてくれ、着物をこしらえてくれたり、美味しいお菓子をくれたりしました。その都度母にそのことをいいますと、母は「ああ、あのばばは父ちゃん二号だからにくれてもいいんだ」とあつさりき流していました。

私たち子供の目には、こともなげにあつさりと聞き流しているように見えた母の心の中に、その実、母にとっては生涯心の痛む存在ではなかったかと思うのです。

父はよく旅に出稼ぎに行きました。その時は必ずこの人を連れて行ったのです。一度出稼ぎに行くとないて二年も三年も消息が無いのが普通で、母はそんな時も「あの人が一緒だから仕方がないんだ」とあきらめていたといひます。

二年も三年も全く音沙汰もないのに、子供たちを抱えて、どうやって何を食べて生きていたのか、当時のことを思うと不思議に思うと母は晩年よく述懐してました。

人いちはい勝気な母でしたが、やはりアイヌ民族特有のあきらめ心がそうさせていたのでしょう。そうした中でその時も父の出稼ぎ中に妹が生まれたのです。

産後の不摂生がたつたのか母は間もなく腹膜炎になり、身動きのとれない状態になったのだといひます。

父の出戻りの姉が裏の別棟に住んでいたので、一切面倒をみてくれず、母

の友達が心配して食べ物運んで来てくれたので、何とか生きのびることが出来たといひます。

産後一か月以上もたつて、やっと少しずつ身体が動かせるようになり、ボロ布につつんだまま産湯にも入れずに放つてあった赤ん坊を見ると、しっかりと握りしめた両手の皮がびったりくっついて五本の指がひとかたまりになって、ちょうど石ころのようになっていたといひます。てっきりこの子を片輪にしてしまったと母は思い、一心に火の神にいのちたといひます。

「どうぞこの子の手をなおして下さい」と祈りながら自分の手を火にかざしては温め、そしてその温まった手で赤ん坊の手を少しずつのばしてゆくと、すっかりくっついていた皮が少しずつ離れてゆき、妹の手は母のこのいので片輪にもならずすみしました。

これも火の神さまのご加護があったからだと神に感謝をすることを忘れない母でした。

こうしたこともあつてか母は、昨年九月九日に八五歳で天寿を全うするまでア

イタの神々の存在を固く信じ一度も神をも人をも疑つたことはありませんでした。(中略)

父はふだんはほんとうに優しいいい人なのですが、アルコールが入ると人が変わったようになり、母になぐるけるの乱暴を働くのです。もうそれは例外がなく酒をのむと決まっていました。

酒の勢いをかちた父は小柄な母を部屋の隅の柱のところに引きずって行つて、母の頭をゴツン、ゴツンと思ひ切りぶつけるのです。その都度私と妹は「父ちゃんやめて、かんにんして」と父に取りすがつて泣いたものです。

そんなときの母は全くの無抵抗そのもので、両手をだらりと下げたまま、たたかれるまま、蹴られるままになっていました。その頃のアイヌはこうした状態は当り前のことで、どこの家庭でも大なり小なり似たところがありました。

今になって考えてみると、アイヌとしての民族的な屈辱感が、その吐け口の見つけようもないまま、酒や女房への暴力へとつたのではないかと思うのです。

(後略)

女が学問をすることについて 男はどう思うか

—婦人新報 1975年6月号より—

大 島 孝 一

こういう題をかかげて書きはじめようとするとき、女と男とをとりかえてだれか女の人が何かエッセイを書くことがあるだろうかと考えてみた。おそらく、問題にならないだろうとおもいながら、何となく不条理な世の中で、しかもその不条理の一端を支えている男の一人として、渋いペンを走らせるのである。国際婦人年の主題に平等ということがあるのは、どうやら日本だけが悪いのではなさそうだし、日本の男が差別をつくってそれに安住してきたことだけが問題になるのではないようだ。もちろん、男だって被害者であるといって、国際婦人年の運動に水をかける積りではない。どんな形であるにせよ、女の方から声があがってはじめて問題になるものである。その問題は、もはや女だけのものではなく、男もかわりをもち、男もその解決に責任を分担することになるのである。

※

私の母は女学校しか出ていなかった。その母親、つまり私の祖父母は、それぞれ当時の最高学府（と考えられていた）

東京師範学校と東京女子師範学校を出ているので、ちょっと不思議な気がする。母の思い出話によると、女学校を出たばかりのとき婚約して、あこがれの「お茶の水」に行くことを断念したというのである。母は進学の希望があることを話したが、夫になるはずの人が「女が学問をして偉くなられてはかなわない」といったそうだ。数え年十八歳の母は、その言葉を生涯心に秘めていた。晩年に父と母とがそのことを語りあったとき、父は全然記憶になかったという。母は、だれにも訴えようもなく、女に生まれたことを一種の運命として、一身に引き受けて生きてきたのである。父は社会的に一応の安定した余裕をもって、教会に奉仕をしてきたのに引きかえ、母はいつも求道者として飽くことなく何事かを追求していた。当時の矯風会の活動に熱心だった母の姿は、世の常の母親と違って子どもなりに私の誇りであり尊敬の的であった。その母がふと洩らす言葉は「お茶の水に行っていたら……」という、今さらどうしようもない泣き言だった。母よりも若い活動家の中に、学問のある有能な人た

ちがいて、母の主張が受け入れられないことを残念がっていたことと関係があったかも知れない。

※

もしそうだとすると、父が何気なくいったセリフは、実は母の本心であったかも知れない。つまり、「お茶の水」は女の地位を高めるところであって、それは相対的には男の地位に接近することと、「お茶の水」に行けない他の女の人たちと隔絶することになるのである。これは、何も明治の女の問題ばかりでなく、今日の日本国憲法の原則のもとにあっても引き続いて残されている日本の社会の問題なのである。それにしても、一九三〇年代の当時、天草のからゆきさんの問題、沖縄の婦人問題などが、矯風会の課題であるとか秘かに主張していた母は、「お茶の水」の学問なしに直感していたのだった。三一独立運動（という言葉は当時は知らなかった）の余波を受けて、何人かの留学生が母のところによく遊びにきたこともあった。いずれも、父の職業と関係があり、父も多くの理解を示していた。

しかし、これを課題にするには、やはり学問が必要であったということを今になって思い起こすのである。

※

私の妻の母は、娘時代津軽の寒村から単身長崎の学校に行った。晩年になってよくいうことに、「今どきの娘がアメリカに渡るのを騒ぎ立てるが、私の長崎ゆきはそれこそ大変なことだった」と自慢にしていた。その後学校でキリスト教に接し、その後学校の教師をしているうちに夫になる人にめぐりあうのである。この母も矯風会の活動家で、それこそ弁の立つ方だったらしい。もちろん夫や子どもたちの多大の犠牲の上に、心ゆくまで働いた。

私たちが結婚した一九四〇年は、戦時体制の重苦しい時代だった。妻の母が、その娘のために大学に行くことを考えてほしいと私に語ったとき、私の母の若いときの願いと思ひあわせた。間もなく私は兵役に服することになり、子どもができて、敗戦の混乱の中で生活に追いまわされて、妻の進学のことはずっかり忘れ

ていた。ところが、一九五〇年に旧制大学の最後の募集があることを聞いて、妻の方から受験したいといひだした。幼稚園と小学校に通う子どもたちは、共働きの親たちの生活には慣れている。大学は目と鼻の距離で問題はない。しかも、この機会を逸して新制大学になると、三十過ぎたオバチャンが勉強する場所ではない。十年前の母の話がここで現実になったのである。家事の分担に不得手な私は、受験のときすでにトラブルを起こしている。それでも合格した。やがて私の転任で別居することになり、それもとてつて耐えて予定どおり三年間で卒業することができた。

これだけならば一つの美談かも知れない。しかし、妻は何の資格もとらなかつたし、論文らしい論文を書いたわけでもない。「ママは大学一年生」という映画のような雰囲気を楽しんだわけでもない。近所のおかみさんが、「議員にでもなるのでなければ、何も無理して大学なんか行くことはないわね」と噂していたという。まさにその通りだと思う。

※

会員 金住典子さん 弁護士事務所を開設

どんなさ細な法律相談でも
お気軽にご利用ください

あこら10号の特集記事のご協力をいただいた会員で弁護士の金住典子さんが、このほど婦人のための弁護士事務所を開設しました。金住さんは弁護士になって以来ずっと婦人の問題、主に離婚事件を手がけてこられ、たてまへの男女平等とはうらはらな女性の地位の低さを痛感して、今度の弁護士事務所の開設になったもの。

田中峯子先生と一緒に民事、刑事、行政事件あるいは労働事件と幅広く取組

んでいかれる覚悟だそうです。お二人ともママさん弁護士という悪条件の中でも元氣一杯。事務所の中は法律事務所といった堅苦しい雰囲気はなく、女性らしい明るいソフトなムードが漂います。

どんなさ細な法律相談でもお気軽にご利用下さいとのこと。

東京都豊島区西池袋三―三三
アポロビル二階 婦人協同法律事務所
TEL 〇三―九八五―三三〇八

私の周辺にもう一人の女がいる。私の娘は純粹に戦後の新学制の教育を受けてきた。女が大学に行くかどうかなどということは、もはや問題ではないらしい。当然のこととして、自分の好む道を自分なりに選んでいった。親たちや祖父母たちの世代とは、まったく違う新しい時代に生きているのである。

※

それにしても、気になることがある。

大学というところが、資格を与える職業教育機関に徹しきれず、厳格な学問的訓練をすることもせず、かといって市民的教養を与える場としては、あまりにも門戸が狭すぎるのはどうしてであろうか。高等学校までの教育が、教育体系として完結しないままに、就学年限の延長という無意味な位置づけの中に大学がおかれている。従って、生涯教育の場としては不適当なものになってしまっている。そ

のことは、職業教育も、学問的訓練も、市民的教養も、いずれも失っているのである。

女が学問をするということは、結婚―育児という過程で中断されることがあっても、それを保障する教育体系をつくらなければならないという課題を提供しているのである。それは男にとっても現実的な課題なのである。

(女子学院院长)

資料

教育基本法

(昭三三・三・三一)

われらは、さきに、日本国憲法を制定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまっべきものである。

われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

ここに、日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。

第一条(教育の目的) 教育は、人格の

完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行なわれなければならない。

第二条(教育の方針) 教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、実生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。

第三条(教育の機会均等) すべての国民は、ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであって、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない。

国及び地方公共団体は、能力があるにもかかわらず、経済的理由によって修学困難な者に対して、奨学の方法を講じなければならない。

第四条(義務教育) 国民は、その保護

する子女に、九年の普通教育を受けさせる義務を負う。

国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料は、これを徴収しない。

第五条(男女共学) 男女は、互に敬重し、協力し合わなければならないものであって、教育上男女の共学は、認められなければならない。

第六条(学校教育) 法律に定める学校は、公の性質をもつものであって、国又は地方公共団体の外、法律に定める法人のみが、これを設置することができる。

法律に定める学校の教員は、全体の奉仕者であって、自己の使命を自覚し、その職責の遂行に努めなければならない。このためには、教員の身分は、尊重され、その待遇の適正が、期せられなければならない。

第七条(社会教育) 家庭教育及び勤労の場所その他社会において行われる教育は、国及び地方公共団体によって奨励されなければならない。

国及び地方公共団体は、図書館、博

物館、公民館等の施設の設置、学校の施設の利用その他適当な方法によつて教育の目的の実現に努めなければならない。

第八条（政治教育）

良識ある公民たるに必要な政治的教養は、教育上これを尊重しなければならない。

法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない。

第九条（宗教教育）

宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない。

国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

第十条（教育行政）

教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負つて行われるべきものである。

教育行政は、この自覚のもとに、教育の目的を遂行するに必要な諸条件の整備確立を目標として行われなければならない。

ならない。

第十一条（補則） この法律に掲げる諸条項を実施するために必要がある場合には、適当な法令が制定されなければならない。

小学校学習指導要領（抄）

（昭和四三年改訂・四六年度施行）

第一章 総 則

第2 道徳教育

学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行なうことを基本とする。したがつて、道徳の時間はもちろん、各教科および特別活動においても、それぞれの特質に応ずる適切な指導を行わなければならない。

道徳教育の目標は、教育基本法および学校教育法に定められた教育の根本精神に基づく。すなわち、道徳教育は、人間尊重の精神を家庭、学校、その他社会における具体的な生活のなかに生かし、個性豊かな文化の創造と民主的な社会および国家の発展に努め、進んで平和的な国

際社会に貢献できる日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

第三章 道 徳

第1 目 標

道徳教育は、人間尊重の精神を家庭、学校、その他社会における具体的な生活のなかに生かし、個性豊かな文化の創造と民主的な社会および国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献できる日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

道徳の時間においては、以上の目標に基づき、各教科および特別活動における道徳教育と密接な関連を保ちながら、計画的発展的な指導を通して、これを補充し、深化し、統合して、児童の道徳的判断力を高め、道徳的心情を豊かにし、道徳的態度と実践意欲の向上を図るものとする。

第2 内 容

(1) 生命を尊び、健康を増進し、安全の保持に努める。

（低学年においては、健康に留意し、

危険から身を守ることを、中学年においては、進んで自他の健康・安全に努めることを、高学年においては、さらに自他の生命を尊重することなどを加えて、おもな内容とすることが望ましい。

(2) 時と場に応じて、服装・言語・動作などを適切にし、礼儀作法を正しくする。

(低学年においては、日常生活におけるあいさつ、服装などを正しくすることを、中学年においては、時と場に応じて礼儀作法を正しくすることを、高学年においては、さらに、心のかよった礼儀作法のたいせつさを理解することなどを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

(3) 身のまわりを整理・整とんし、環境を美しく清潔にする。

(低学年においては、自分のものや身のまわりのものの整理・整とんができることを、中学年・高学年においては、能率的な整理・整とんや環境の美化・清潔に努めることを、おもな内容とすることが望ましい。)

(4) ものや金銭をだいにし、じょうずに使う。

(低学年においては、自他のものの区別をすること、ものをだいに使うことなどを、中学年・高学年においては、ものや金銭の価値を正しく知り、計画的に活用することを、おもな内容とすることが望ましい。)

(5) 時間をたいせつにし、きまりのある生活をする。

(低学年においては、決められた時刻を守れることを、中学年においては、さらに、時間をじょうずに使うことを加え、高学年においては、時間の意義を知って、きまりのある生活をすることを、おもな内容とすることが望ましい。)

(6) 自分の正しいと信ずるところに従って行動し、みだりに他人に動かされない。

(低学年においては、自分のことは自分ですることや自分の考えをはっきり述べることを、中学年においては、よく考えて正しいと信ずるところに従って行動することを、高学年において

は、さらに、みだりに他人の意見や行動に動かされないことを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

(7) 自他の自由を尊重し、自分の行動に責任をもつ。

(低学年においては、のびのびと行動することを、中学年においては、責任のある行動をすることを加え、高学年においては、さらに、自由と責任との関連をも考えることを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

(8) 常に真心をもって正直に行動する。

(低学年においては、うそをいわないこと、ごまかしをしないことなどを、中学年・高学年においては、常に誠実に行動することを、おもな内容とすることが望ましい。)

(9) 正を愛し不正を憎み、勇気をもって正しい行動をする。

(低学年においては、正を愛する気持ちをもつことを、中学年においては、正と不正を見きわめることや誘惑に負けないことなどを加え、高学年においては、さらに、勇気をもって正しい行動を積極的に行なうことなどを加え

て、おもな内容とすることが望ましい。)

(10) 正しい目標の実現のためには、困難に耐えて最後までやり通す。

(低学年においては、つらいことも耐えて努力することを、中学年においては、しんぼう強く最後まで仕事をやりぬくことを、高学年においては、障害や失敗にもくじけないで、ねばり強くものごとをやりとげることがを、おもな内容とすることが望ましい。)

(11) 自分を反省するとともに、人の意見をもよく聞き、深く考えて行動する。

(低学年においては、あやまちや欠点をすなおに認めることを、中学年においては、さらに、人の意見をよく聞き、深く考えることを加え、高学年においては、常に言行をふり返り、思慮深く行動することなどを、おもな内容とすることが望ましい。)

(12) わがままな行動をしないで、節度のある生活をする。

(低学年においては、わがままをしないこと、中学年においては、さらに、度を過ぎないことを加え、高学年に

おいては、節度のある生活をすることを、おもな内容とすることが望ましい。)

(13) いつも明るく、なごやかな気持ちで、はきはきと行動する。

(低学年においては、いつも明るくはきはきとすることを、中学年・高学年においては、さらに、なごやかな気持ちで互いに明るい生活することなどを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

(14) やさしい心をもって、動物や植物を愛護する。

(低学年・中学年においては、やさしい心で動物や植物の生命を尊び愛護することを、おもな内容とすることが望ましい。)

(15) 美しいものや崇高なものを尊び清らかな心をもつ。

(低学年・中学年においては、美しいものや清らかなものをたいせつにすることを、高学年においてはさらに、崇高なものを尊び、清らかな心をもつことを加えておもな内容とすることが望ましい。)

(16) 自分の特徴を知り、長所をのぼす。

(低学年・中学年においては、自分の特徴に気づくことを、高学年においては、さらに、自分の長所を知り、それをのぼすことを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

(17) 常に希望をもち、より高い目標を立てて、その実現に努める。

(低学年においては、ものごとを熱心にやること、ものごとを成し遂げた喜びを感じることを、中学年においては、さらに、自分で目標を立てて努力することを加え、高学年においては、より高い目標に向かって励み、希望をもって進むことを、おもな内容とすることが望ましい。)

(18) ものごとを合理的に考え、常に研究的態度をもつ。

(低学年においては、ものごとのわけをよく考えることを、中学年においては、常に研究的態度をもとうと努めることを加え、高学年においては、さらに、真理を尊び、広い視野に立って、正しく批判し判断して行動することを加えて、おもな内容とすることが望ま

しい。)

(四) 創意くふうをこらし、進んで新しい分野を開いていく。

(低学年においては、くふうして仕事をすること、よいと思つたことは進んで実行しようとするなどを、中学年においては、新しい考え方や方法を生み出すことを加え、高学年においては、さらに、積極的に新しい分野を開いていくことを加えて、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) だれにも親切にし、弱い人や不幸な人をいたわる。

(低学年においては、友だちや自分より弱い人に対して親切にすること、中学年においては、さらに、弱い人や不幸な人々を進んで慰め、励ますことを加え、高学年においては、他人の身になって考え、だれに対してもあたたかく接することを、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 自分たちや世の中のために尽くしてくれる人々に對し、尊敬し感謝する。

(低学年においては、自分たちの世話をしてくれる人々に對し、感謝する

ことを、中学年においては、公共のために尽くす人々に對し尊敬し感謝することを加え、高学年においては、さらに、先人の遺業を敬うことを加えて、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 互いに信頼し合い、仲よく助け合う。

(低学年においては、友だちと仲よく助け合い励まし合うことを、中学年においては、さらに、互いに忠告し合うことを加え、高学年においては、人を信頼し、人の信頼を裏切らないことを、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 偏見をもたず、だれに対しても公正公平にふるまう。

(低学年においては、自分の好ききらいにとらわれないことを、中学年・高学年においては人を差別せず、だれに対しても公正公平にふるまうことを、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 人の気持ちや立場を理解して、広い心で人のあやまちをも許す。

(低学年においては、人のあやまちを許すことを、中学年においては、相

手の立場を理解して人のあやまちを許すことを、高学年においては、さらに、広い心で自分と異なる意見や立場をも重んずることを加えて、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 規則や自分たちで作るきまりの意義を理解し、進んでこれを守る。

(低学年においては、きまりや規則をよく守ることを、中学年・高学年においては、きまりや規則の意義を知って進んでこれを守るとともに、よいきまりを作り、さらに必要に応じてそれを改善することなどを、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 権利を正しく主張するとともに、自分の果たすべき義務は確実に果たす。

(低学年・中学年においては、自分の果たすべきことは確実に果たすことを、高学年においては、さらに、権利を正しく主張することや、権利と義務との関連を考えることを加えて、おもしろい内容とすることが望ましい。)

(四) 勤労の尊さを知るとともに、進んで人のためになる仕事をする。

(低学年においては、自分の仕事に

励むことを、中学年においては、さらに、力を合わせて人のためになる仕事をするを加え、高学年においては、勤労の意義や尊さを知り、進んで人のためになる仕事をするを加え、おもな内容とすることが望ましい。

- (2) 公共物をたいせつにし、公德を守り、人に迷惑をかけない。

(低学年・中学年においては、公共物をたいせつにし、人に迷惑をかけることを、高学年においては、さらに、公德の意義を理解し、進んで公共のために尽くすを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

- (3) 家族の人々を敬愛しよい家庭を作ろうとする。

(低学年においては、父母などに対して感謝の念や親愛の情をもつことを、中学年においては、さらに家族の一員としての役割を果たすを加え、高学年においては、さらに、家族の立場を理解し、楽しい家庭にしようとするを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

- (4) 学校の人々を敬愛し、りっぱな校風

を作ろうとする。

(低学年においては、学校の人々に対して感謝の念や親愛の情をもつことを、中学年においては、学校に対して愛情をもち、楽しい学校にしようとするを加え、高学年においては、さらに、学校の一員としての役割を自覚して、りっぱな校風を作ろうとすることを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

- (5) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に尽くす。

(低学年においては、国民としての心情の芽ばえを育てることを、中学年においては、さらに、日本の国土やすぐれた文化、伝統をたいせつにすることを加え、高学年においては、国民としての責任を自覚して、国家の発展に尽くそうとすることを、おもな内容とすることが望ましい。)

- (6) 広く世界の人々に対して正しい理解と愛情をもち、人類の幸福に役だつ人間になろうとする。

(低学年・中学年においては、外国の人々に対して親愛の情をもち、あ

たたかい心で助け合おうとすること
を、高学年においては、さらに、外国の人々の生活や文化などを尊重し、互いに協力して世界の平和と人類の幸福に役だつ人間になろうとすることを加えて、おもな内容とすることが望ましい。)

- 第3 指導計画の作成と内容の取り扱い

1 第2の内容に掲げる事項は、すべて、いずれの学年においても指導しなければならぬものであるが、指導の計画の作成に当たっては、各学年の各教科および特別活動における道徳教育との関連において、特に必要とされる内容についてこれを重点的に取り上げ、また、いくつかの内容を関連づけて指導するように配慮することが必要である。

2 第2の内容の各事項におけるかっこ書きは、学年段階に應ずる望ましいおもな内容を示したものであり、指導計画の作成に当たっては、これらをじゅうぶん考慮しなければならない。

- 3 指導計画は、特に地域や児童の実態

に応じて具体的に作成するとともに、
固定的なものと考えず、弾力性をもた
せることが必要である。

4 児童の道徳性について評価すること
は、指導上たいせつなことであるが、
道徳の時間だけについての児童の理解
や態度などを、各教科における評定と
同様に評定してはならない。

中学校学習指導要領（抄）

（昭和四四年改訂・四七年度施行）

第一章 総 則

第2 道徳教育

学校における道徳教育は、学校の教育
活動全体を通じて行なうことを基本とす
る。したがって、道徳の時間はもちろん、
各教科および特別活動においても、それ
その特質に応ずる適切な指導を行なわ
なければならぬ。

道徳教育の目標は、教育基本法および
学校教育法に定められた教育の根本精神
に基づく。すなわち、道徳教育は、人間
尊重の精神を家庭、学校、その他社会に

における具体的な生活の中に生かし、個性
豊かな文化の創造と民主的な社会および
国家の発展に努め、進んで平和的な国際
社会に貢献できる日本人を育成するた
め、その基盤としての道徳性を養うこと
を目標とする。

第三章 道 徳

第1 目 標

道徳教育は、人間尊重の精神を家庭、
学校、その他社会における具体的な生活
の中に生かし、個性豊かな文化の創造と
民主的な社会および国家の発展に努め、
進んで平和的な国際社会に貢献できる日
本人を育成するため、その基盤としての
道徳性を養うことを目標とする。

道徳の時間においては、以上の目標に
基づき、各教科および特別活動における
道徳教育と密接な関連を保ちながら、計
画的、発展的な指導を通して、これを補
充し、深化し、統合して、人間性につい
ての理解を深めるとともに、道徳的判断
力を高め、道徳的心情を豊かにし、道徳
的態度における自律性の確立と実践意欲
の向上を図るものとする。

第2 内 容

1 生命を尊び、心身の健康の増進を図
り、節度と調和のある生活をするこ
とに努める。

(1) 自他の生命を尊重し、身体の健康
とともに、精神の健康を図ること。

(2) 一時の衝動や卑俗な欲望に負け
ず、つとめて自制して堅実な生活を
築いていくこととする。

2 日常生活の基本的行動様式をわきま
え、つとめてそれが身につくように努
める。

(1) 身のまわりの整理整頓に意を用
い、ものごとをきまきまよく合理的に
処理していくこと。

(2) 礼儀の意義を理解し、時と所に応
じた適切なことばづかいやふるまい
ができるようになること。

3 ものごとに積極的に取り組み、全力
をあげてやり抜く強い意志を養う。

(1) いたずらにしゅん巡することな
く、正しいと考えることを勇敢に実
行しようとする。

(2) 困難に屈しないで、果たすべきこ
とをねばり強く自信をもってやりと

おすこと。

- 4 ことに当たって常に自主的に考え、自分で決断し、それを実行した結果に責任をもつ。

- (1) かけがえのない独立の人間としての誇りをもち、他人にたよらない自主自律の態度を伸長すること。

- (2) みずから選んだことはこれを誠実に行ない、その結果については率直に責任を引き受けようとする。

- 5 相手に対する理解と信頼のうえに立つて、異なる考えや立場も尊重し、これらに学ぶ広い気持ちを養う。

- (1) ひとそれぞれ個性や立場を重んじ、自分と異なる意見や行動にも寛容であらうと努めること。

- (2) 独善を慎しみ、他人の助言や忠告に謙虚に耳を傾けて、これを自己の反省と向上に生かそうとすること。

- 6 勤労の尊さを知るとともに、真の幸福を目ざす充実した生き方を追求しようとする。

- (1) 自分のなすべき仕事をやりとげて、働くことの喜びを知るとともに、職業についての正しい理解の基礎を

固めること。

- (2) 目先の欲求やその場かぎりの快楽だけにとらわれず、心から満足できる生きがいを求める生活態度を確立すること。

- 7 常に真理を愛し理想の実現を目ざして創造的に自己の人生を切り開いていく態度を養う。

- (1) つとめてものごとを理性的に判断し、積極的に真理と真実を求めてよいい結論に到達しようとする。

- (2) 安易な妥協や無益な空想を排し、理想を掲げてたゆみなくその実現に努めること。

- 8 人間の人間らしさをいとおしみ、美しいものや崇高なものにすなおにこたえる豊かな心を養う。

- (1) 人間が、その一面にもつ弱さや醜さとともに、他面に示す強さやけだかさへの共感と自覚を通して、人間を愛する精神を深めていくこと。

- (2) 自然を愛し、美しいものにあこがれ、人間の力を越えたものを感じることのできる心情を養うこと。

9 同性であると異性であることを問わず、友だちとして互いに理解し敬愛し合い、励まし合って、よりよい人間関係を作り上げようとする。

- (1) 友だちは互いに相手を敬愛し、相手の向上を願って助け合い、変わらない友情を育てていこうとする。

- (2) 男女は、清純な交際を通じて互いに相手の特性や立場を理解し、健全な異性観を身につけようとする。

- 10 自己の属するそれぞれの集団の意義や目標を理解し、協力し合って共同生活の充実に努める。

- (1) 家族の一員としての自己の立場を自覚し、愛情と思いやりの気持ちのうえに明るい家庭を築いていくこと。

- (2) 集団の和を重んじ、進んで自己の役割を果たして、集団生活の向上に貢献しようとする。

- 11 法の精神と秩序の意義を理解し、自己の行動を規律正しいものにしようとする。

(1) 集団のきまりを重んじ、互いに協力し批判し合つて、集団の秩序と規律を高めていくこと。

(2) 遵法の精神を重んじ、権利を正当に主張するとともに、義務をきびしく遂行する態度を養うこと。

12 公共の福祉を重んじ、社会連帯の自覚をもって理想の社会の実現を目指す。

(1) 公私の別をわきまえ、社会の一員たるにふさわしい公徳心の伸長に努めること。

(2) 正義を愛し、利己心や狭い仲間意識を克服して、差別のないよりよい社会の実現のために力を合わせること。

13 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に尽くすとともに人類の福祉に寄与する人間になることを目指す。

(1) わが国の国土と文化に対する理解と愛情を深め、すぐれた伝統の継承と創造に役だとうとすること。

(2) 常に国際的な視野に立つて、世界の平和と人類の幸福に貢献すること

のできる人間になろうとすること。

第3 指導計画の作成と内容の取り扱い

1 道德の時間の指導は、学級担任の教師が行なうことを原則とする。

2 各教科および特別活動における道德教育と密接な関連を図って、特に、それらにおける道德的実践の指導の徹底が期せられるようにすることが必要である。

3 第2の内容の配列は、指導の順序を示すものではない。したがって、指導計画の作成に当たっては、次の事項について配慮することが必要である。

(1) 地域の特色や生徒の生活の実態を考慮して具体的に作成するとともに、それを固定したものと考えず、弾力性をもたせることができるようにすること。

(2) 必要とされる内容を重点的に取り上げることや、いくつかの内容を関連づけて指導することなどのくふうをすること。

(3) 主題を設定するに当たっては、生徒の経験や関心を考慮し、その具体

的な生活との関連で、読み物資料、視聴覚教材などを適宜用いること。

4 道德の時間の評価の一環としての生徒の道德性の評価は、各教科における評定と同様に評定するものではないが、指導上たいせつなことであり、指導計画や指導方法の改善の基礎をなすものであるから、それが適正に行なわれるように努めることが必要である。

「女の記録」を懸賞募集中!

「あごら」では、国際婦人年行事の一つとして、「女の記録」を募集中です。あなたご自身の生活や行動の記録でも、あなたが調査した記録でも、聞き書きでも、結構ですが、「事実」に限ります。

- ・ 締切 一九七五年九月三〇日
- ・ 長さ 四百字詰原稿用紙二十枚程度

・ 詳細は、本誌十一ページをごらんください。

歴史にあらわれた女性教育（年表）

年・月
（ ）内は元号

横浜に英語塾設立（七六年へボン塾と併せ
フェリス女学院となる）
一八七〇・一〇
（明治2）

横浜でヘボン夫妻、女塾を開き語学・編物
教授
一八七一・五
（明治3）

文部省、女学校設立
一八七二・二
（明治4）

学制発布、男女平等の義務教育実施
" " 九

・この年、東京に水交女塾、上田女学校、
横浜に英語教授所、董女学校、長崎に梅
崎女学校、金沢に女学校などが設立さ
れる

東京女子師範学校設立
一八七四・三
（明治7）

女子小学校設立（九六年青山女学院と改称）
石川県女子師範学校設立（最初の地方女子
師範）
一八七四・一一
一八七五・五
（明治8）

栃木女学校設立（最初の地方公立女学校。
七九年栃木県第一女子中学校と改称）
" " 一〇
（明治8）

・この年、東京女子師範学校に女教師就任（月給15円）
・この年、中学校一六校中三八校に女子
一八三名、外国語学校三九校に女子三七
三名在学。
" " 一一
（明治8）

岡山県及び石川県女子師範学校富山支校設立
一八七六・八
（明治9）

桜井女学校設立（八九年新栄女学校と併せ
女子学院）
" " 一〇
（明治9）

・この年、中学校八五校（内女子校二）に
女子一〇三〇名、外国語学校二九校（内
女子校四）に女子四六七名

東京女子師範に英学科設置して生徒收容

一八七七・二
(明治10)

京都同志社分校女紅場設立(八八年同志社学院女学校と改称)

・四

東京府で小学校女教員募集

・七

立教女学校設立

・九

千葉県・愛媛県・石川県第三(福井)各女子師範学校設立

・九

甲府に山梨女学校設立(公立)

・この年、中学校一四八(内女子校九)に

女子一一一二名、外国語学校六(内女子

校三)に女子一二〇名、専門学校一三校

に女子一二三名

岐阜県女子師範学校及附属普通女学校設立

函館第一公立女学校設立

教育令公布、小学校に裁縫科設置、各校に

女教員配置

・この年、楠瀬喜多、四国各地を民権を唱

えて遊説、民権はあさんの異名。中学校

二七二(内女子校一五)に女子二七四名、

専門学校二二に女子二一〇名

集会条例、教員生徒の政治的集会出席・政治団体加入禁止

一八八〇・四
(明治13)

徳島女師を廃止して徳島中学校附属女学校設置、翌年独立して徳島女学校に

一八八〇・六

横浜英和女学校設立(英人ブリテン)

・一〇

文部省音楽取調掛(後音楽学校)に女子入学許可

・〇

秋田女子師範学校設立

・一二

函館遺愛女学校設立(米国人ハムプトン)

一八八二・二
(明治15)

山川捨松(七二年渡米)米国の大学を優秀な成績で卒業

・六

東京女師附属高等女学校(最初の高等女学校)設立

・七

函館女学校・前橋に群馬県女学校設立

・一二

・一八八三年(明治16)、中学校在学の女子は五校に七名のみ。以後男女共学の中学校がなくなる。専門学校一二校に女子

一八七九・七
(明治12)

・九

・一八八三年(明治16)、中学校在学の女子は五校に七名のみ。以後男女共学の中学校がなくなる。専門学校一二校に女子

一八八三
(明治16)

函館正教女学校(ロシア・ハリストス系)設立

一八八四・三
(明治17)

女子に医術開業試験の受験資格を認む

・六

荻野吟子、医術開業前期試験にはじめて合格、翌八五年三月後期試験に合格、最初の

・九

女医として開業

山口県女子師範学校設立

一八八四・九

東洋英和女学校設立（カートメル）

〃 〃 〃 一・一

高橋瑞子、済生学舎（医学学校）にはじめて

〃 〃 〃 一・二

入学許可（八十七年医術開業試験に合格、日本橋で開業）

木村秀子、大学医科入学を願出、八十七年選

一八八五・一

科入学

（明治18）

広島英学校女子部設置（翌年広島英和女学

〃 〃 〃 三

校となる）

福岡英和女学校設立（ギール）

〃 〃 〃 五

福沢諭吉、時事新報社説に「日本婦人論」

〃 〃 〃 六

を書き、その後編と共に画期的な結婚制度

〃 〃 〃 七

の提唱等で啓蒙的役割を果たす

『女学雑誌』創刊、明治女学校と密接な関

〃 〃 〃 七

係を持ち、のち「文学界」を生み出す

明治女学校（大村熊二）設立。野上弥生子

〃 〃 〃 九

ら幾多の西欧的知識婦人が育ち女子教育史

上画期的な役割を果たした

東京師範学校、女子中等教員養成を開始、

一八八六・三

生徒募集

（明治19）

仙台に宮城女子英学校設立（ブルボウ）

〃 〃 〃 九

高等女学校生徒教導方要項制定、初期の近

〃 〃 〃 一・二

代的人格の養成から、良妻賢母主義に転ず

木村秀子東京女子専門学校設立

一八八七・一

香蘭女学校設立（カステス）

（明治20）

新潟英和女学校設立

〃 〃 〃 三

公立小学校教科用図書検定規則制定

〃 〃 〃 五

普通土女学校・横浜女学校・愛知女学校設

〃 〃 〃 一〇

立

東京帝大医科大学附属病院看護婦養成開始

〃 〃 〃 一一

（鈴木雅子、大関チカラ六名）

東京女学館・名古屋英和女学校設立

一八八八・九

東京府高等女学校設立

（明治21）

大日本帝国憲法勅定公布

〃 〃 〃 一二

函館女学校（公立）設立

一八八九・二

独立女学校（後精華高女と改称）・山口県

（明治22）

米川女学校・赤間関（下関）洗心女学校設

〃 〃 〃 七

立

〃 〃 〃 一二

東京女子高等師範学校設立（お茶水女子大

一八九〇・三

の前身）、良妻賢母主義の国家的女子教育

（明治23）

の中心としての女教員養成がすすめられる

〃 〃 〃 一〇

教育勅語発布

〃 〃 〃 一一

大日本帝国憲法施行

〃 〃 〃 一一

女子教育に関する訓令、小学校の女子就学率二八％のため、子女就学は父母・後見人の義務であることを明記した

一八九三・七
(明治26)

『女学雑誌』(三八一号) 社説「女子教育大勢一転の期」載るも、国家主義教育の時流は止められず

一八九四・五
(明治27)

女子高等師範学校規則制定

〃 一〇

高等女学校規程制定、中学校とならぶ中等教育機関と規定されたが、教育内容は中学より低く、女子の一般普通教育の最終段階とされた

一八九五・一
(明治28)

女子高等師範学校規程制定、男子高師と同じく分科制となり、教員志望者の短期修学の道を開く

一八九七・一〇
(明治30)

男女別学に関して訓令

〃 一二

民法親族編・相続編公布、その後半世紀にわたり女性の隷属的身分を決定づける

一八九八・六
(明治31)

女子医学生(済生学会)、女権拡張演説会を開き、「女子学生は学校を腐敗させる特異性、バクテリア也云々」に反論・抵抗

〃 八

高等女学校令公布、良妻賢母主義強化

一八九九・二
(明治32)

福沢諭吉、時事新報に「女大学評論」「新女大学」掲載

一八九九・四

下田歌子、実践女学校及び女子工芸学校設立

〃 四

治安警察法により女子の集会結社を禁止

一九〇〇・三
(明治33)

京都府高等女学校、女大学評論・新女大学の購読を禁止

〃 六

津田梅子、女子英学塾創立(津田塾大前身)

〃 九

吉岡弥生、東京女医学校創立(東京女子医大前身)

〃 一二

日本女子大学校設立(日本女子大前身)

一九〇一・四
(明治34)

女高師国語体操専修科設置(井口あぐり初めて端典式体操教授)

一九〇三・一
(明治36)

小学校国定教科書令公布

〃 四

第二回社会主義婦人講演会

一九〇四・二
(明治37)

日本キリスト教女子青年会（日本YWCA）創立
（明治38）

羽仁もと子『婦人之友』発行

一九〇八・一
（明治41）

長野県女教員妊娠規定を定む

〃 〃 一

奈良女子高等師範学校設立（奈良女子大前身）

〃 〃 四

明治女学校廃校

〃 〃 二

竹内茂代、開業試験にパス、女医学校第一

〃 〃 二

回卒業生となる

帝国女子専門学校設立

一九〇九・二
（明治42）

神戸女学院専門部設置

〃 〃 二

広島・秋田各女子師範学校設立

〃 〃 二

高等女学校令改正、実科高女を高等小学校に併設することを認める

一九一〇・一〇
（明治43）

『青鞥』創刊

一九一一・九
（明治44）

東京女子神学専門学校設立

〃 〃 二

東京女医学校、東京女子医学専門学校に昇格

一九一二・四
（明治45）

同志社女学校専門学部設置

東北帝大に女子三名入学

一九一三・八
（大正2）

高田早苗、文相就任、高女卒を大学入学資格に加えたが、委員会で削除

一九一四・八
（大正4）

『婦人公論』創刊

一九一六・一
（大正5）

『主婦之友』創刊

一九一七・三
（大正6）

全国小学校女教員大会

〃 〃 一〇

東京女子大学設立、安井てつ学監（校長新渡戸稲造）

一九一八・三
（大正7）

京大医学部女子聴講生入学許可

一九一九・一二
（大正8）

東大聴講生規程制定、女子の入学許可

一九二〇・二
（大正9）

女子医専創立二〇周年に無試験開業資格認可の指定校となり祝賀会

〃 〃 三

大阪医大、女子の入学許可	一九二〇・四
万国婦人参政権同盟大会にガントレット恒子出席	〃 ・六
全国小学校女教員大会、産前産後休暇要求建議	一九二一・三 (大正10)
羽仁もと子、自由学園設立	〃 ・四
文化学院設立、文部省規程によらず男女共学制をとる	〃 ・〃
赤瀬会結成(最初の社会主義婦人団体)	〃 ・〃
大阪梅花女子専門学校設立	一九二二・三 (大正11)
同志社女子専門学校設立	〃 ・四
第三回全国小学校女教員大会、女教員会結成を決議	〃 ・七
東京女子歯科医学専門学校設立	〃 ・〃
文部省、女教員産前産後休養に関する訓令、六週間以上の休養と給与の五〇〜七〇%支給が実施されはじめた	〃 ・九
九大、同志社大女子入学許可	〃 ・一二
奈良県女教員大会、男女同一待遇要求建議案可決	一九二三・一一 (大正12)

全国小学校連合女教員会結成、加盟女教員会九〇余、会員一万余名	一九二三・五 (大正13)
婦人参政権獲得期成同盟会結成	一九二三・一二
帝国女子薬学専門学校設立	一九二五・一 (大正14)
帝国女子医学薬学専門学校設立	〃 ・三
共立女子専門学校認可	〃 ・〃
九州帝大法文学部女子入学許可、二名入学	〃 ・四
明大女子聴講生入学許可	〃 ・一二
実践女学校専門学部、共立女子職業学校専門学部、跡見高女専門部設置	〃 ・一二
全国連合女子教育大会開催、女子高等教育要求の示威的集会で六千名を集めた	一九二六・二 (大正15)
日本女子体育専門学校(二階堂とくよ)設立	〃 ・四
鳥取・高知・宮崎各女子師範学校設立	〃 ・一二
宮城県女子専門学校設立	〃 ・一二
民法相続編中改正ノ要綱、妻の法的地位を向上させる条項規定さる	一九二七・一二 (昭和2)
婦選獲得共同委員会結成	一九二八・三 (昭和3)

東京女子大学社会科・日本女子大学校社会
事業部廃止

一九二八・

女子経済専門学校（新渡戸稲造）設立

〃 四

明治大学女子部設立（法学科）、四四年明
治大学女子専門学校と改称

一九二九・四
（昭和4）

織本（帯刀）貞代、労働女塾開設

〃 八

日本大学女子学生演説会、一九年に女子の
入学が認可されたが、男子学生と同資格を
与えることを要求するアピール集会

〃 一〇

和歌山女子師範学校設立、全国都府県に女
子師範四六校となる

〃 一二

大谷女子専門学校、安城（愛知）女子専門
学校創立

一九三〇・四
（昭和5）

第一回全国中等学校女教員大会、全国中等
女教員会創立

〃 八

辻村みちよ（45歳）日本最初の婦人農学博
士（東大・緑茶）

一九三二・六
（昭和7）

大橋リユウ、医学博士（東北大・エンテロ
コッケン）

一九三三・一
（昭和8）

高群逸枝『母系制の研究』

一九三八・六

久米愛子・武藤嘉子・田中正子高等司法科
筆記試験パス、最初の婦人弁護士誕生

（昭和13）
一九三八・九

早稲田大学本科女子入学認可、この年文学
部三名英法一名合格

一九三九・二
（昭和14）

全国小学校女教員会委員会、昇進・賃金男
女差撤廃促進決議

〃 七

戦争未亡人再教育として小中学校教員・保
姆養成所開設

〃 九

教育審議会、女子大学設置・大学の男女共
学に意見一致するも、戦時体制強化の下、
水準は低下し、共学実現は戦後

一九四〇・一
（昭和15）

初等教員待遇向上期成全国女性大会（愛国
児童協会）

一九四一・二
（昭和16）

女学校外国語随意科となる

一九四二・七

早大、文・法両学部とも女子首席で卒業

〃 九

都立夜間女子専門学校開校

一九四三・四

文化学院・向島高女、文部省命令により閉

〃 七

鎮

女子専門学校、一三学科に統制

一九四四・一
(昭和19)

最初の女子都立工業学校開校

" 四

―戦 後―

女子教育刷新要綱、共学認める

一九四五・一二
(昭和20)

戦後第一回総選挙、最初の婦人参政権行使

一九四六・四
(昭和21)

男女共学制実施

" "

東大に最初の女子学生入学

" "

東京都教員組合婦人部結成大会

" "

大学婦人協会結成(会員藤田たき、国際大

" 一〇

学婦人連合会に加盟)

" 一一

日本国憲法公布

" 一二

東京女子医専学生大会(校長吉岡弥生不信

" 一二

任、学園民主化)

" 一二

「教育基本法」「学校教育法」公布(平和

一九四七
(昭和22)

と民主主義的教育方針決まる)

" (昭和22)

六・三・三制実施

" 四

日本女教員協会設立

" 五

日本国憲法施行

" 五

文部省「家庭科」の小・中・高一貫をめざす

" 五

日教組婦人部結成

一九四七・六

労働省発足、婦人少年局設置(初代局長山

" 九

川菊栄)

日教組第二回全国婦人部委員大会で、男女

" 九

の差別待遇撤廃・結婚資金要求等

東京都教組婦人部、同一賃金獲得

一九四八・一
(昭和23)

教育過程審議会設立(以後、教育過程の検

一九四九・七
(昭和24)

はここで行なわれる)

" 一二

中学校家庭科の職業科との合科検討

" 一二

文部省、国旗掲揚、君が代育唱通達

一九五〇
(昭和25)

天野文相、修身科復活をとき教育の逆コー

一九五一
(昭和26)

ス問題となる

一九五一
(昭和26)

第一回全国婦人教員研究協議会開催(大阪)

一九五二・三
(昭和27)

平和教育の必要確認さる

一九五二・三
(昭和27)

全日本女子学生大会、五六校二〇〇名参加、

一九五三・一二
(昭和28)

家庭の封建性、就職難等を話し合い、教育

一九五三・一二
(昭和28)

の機会均等 決議

一九五三・一二
(昭和28)

教員の政治活動禁止、教育の政治的中立、
の二法案、決定

一九五三・六
中学校学習指導要領告示により、技術・家庭科が誕生

第三回全国婦人教員研究協議会、母と女教師の会結成推進決議
教員の政治活動を禁止する教育二法、乱闘国会で通過

一九五四・一
(昭和29)
文部省改訂「高校学習指導要領」告示、「倫理」科設置
一九六〇
(昭和35)
全国一斉学力テスト強行
一九六一
(昭和36)

文部省社会科学学習指導要領改訂で天皇の地位強調
産休補助教員設置法成立

一九五五
(昭和30)
高校全員入学運動が日教組、母親連絡会などから高まってきた
一九六二
(昭和37)

愛媛県教委、勤務評定実施を言明
「学習指導要領家庭科編」に高校家庭科女子四単位必修が望ましいと記述

一九五六
(昭和31)
池田首相、「文教の刷新」「国防意識の向上」を施政方針演説で
「女子大生亡国論」など、女子の大学進学が論争される
一九六三
(昭和38)

四〇歳以上の女教員四〇〇名、誠首反対総決起大会（広島）
文相、道徳教育特設答申

一九五七・一
(昭和32)
「義務教育諸学校の教科書図書は無償措置に関する法律」
文部省道徳教育指導書を配布、道徳教育の国定化をはかる
一九六四
(昭和39)

日教組動評反対闘争に入る

一九五八・二
(昭和33)
小学校教科書広域採択になる
一九六五
(昭和40)

社会教育法改正と婦人団体についての懇談会、反対声明書発表

中教審「期待される人間像」草案発表
一九六五
(昭和40)

家永三郎、教科書検定違憲訴訟
中教審「期待される人間像」答申

〃 ・六
一九六六・一〇
(昭和41)

教科書裁判第一審杉本判決(違憲認む)

中教審「初等・中等教育の改革に関する基本構想試案」「高校教育改革に関する基本構想」発表

一九七〇・五
(昭和45)

理科教育および産業教育審議会、秘書・貿易・洋裁・和裁など、高校職業教育多様化答申

一九六七

(昭和42)

初の建国記念日

〃 ・二

小学校教科書に、建国神話、日本海海戦の絵など登場。リコール制削除

一九六八

(昭和43)

・六八年から六九年にかけて学園民主化闘争

家庭生活問題審議会「期待される家庭像」

〃 ・三

小学校で女教師の比率五〇・三%となる

一九六九

(昭和44)

教課審、「高校教育課程の改善について」

〃 ・九

(女子の特性、家庭責任の強調「家庭一般」履修強化)

〃 ・〃

日経連「教育の基本問題に対する産業界の見解」(多様化、就学年齢引き下げ、教育養成、家庭教育)

高校学習指導要領告示(48年より実施)、女子「家庭一般」4単位完全必修となる。内容は、母親教育、消費者の教育、生活設計、余暇活用、マナーなど。

〃 ・七
〃 ・一〇

日教組「日本の教育はどうあるべきか」

一九七一・六
(昭和46)

京都府「家庭一般」男女共修打ち出す

一九七二・一
(昭和47)

高校「家庭一般」女子必修化、京都府立高校では男女共修実施

一九七三・四
(昭和48)

高校家庭科の女子必修に対する批判マスコミで高まる

〃 ・一一

教員の人材確保法案通る

〃 ・一二

* *

事実が示すキーセン観光

＜法務省入国管理局調 売春問題ととりくむ会まとめ＞

年 別・男 女 別 出 国 数

年別・性別 国名	昭和48年	昭和49年	男 性	女 性	前 年 比
総 数	2,288,996	2,335,530	1,762,268	573,262	102%
ア メ リ カ	650,610	763,417	458,697	304,730	118%
韓 国	411,189	302,848	284,074	18,774	73%
香 港	361,530	322,670	238,524	84,146	89%
台 湾	341,096	355,910	333,427	22,483	173%
イ ギ リ ス	83,954	83,023	54,881	28,142	98%
フ ラ ン ス	73,112	81,971	49,186	32,785	198%
タ イ	68,195	62,199	51,419	10,780	170%
シンガポール	32,742	31,818	25,591	6,227	180%
西 ド イ ツ	30,168	30,013	23,909	6,104	112%
フィリッピン	30,072	85,659	73,587	12,072	284%
インドネシア	22,390	23,305	19,832	3,273	103%
ベトナム 南	2,164	2,527	2,221	306	111%
〃 北	115	90	84	6	78%
そ の 他	181,619	190,280	146,836	43,444	104%

韓国旅行者のうち
観光目的者

男性・女性の割合

韓国行男性年令別

258,067	85.5%
---------	-------

国 別	男 性	女 性
全海外旅行者	75.5%	24.5%
ア メ リ カ	60.9%	39.1%
韓 国	93.8%	6.2%
香 港	70.3%	29.7%
台 湾	93.7%	6.3%
タ イ	82.6%	17.4%
南ベトナム	87.9%	12.1%
フィリッピン	84.7%	15.3%

20 ~ 24	13,842
25 ~ 29	35,464
30 ~ 34	46,307
35 ~ 39	53,344
40 ~ 44	50,081
45 ~ 49	35,560
50 ~ 54	19,746
55 ~ 59	11,636
60 以上	15,977

韓国行き出発地

羽 田	145,522
伊 丹	104,253
板 付	36,128
名古屋	3,514
下 関	7,060

提案 1

生活保護受給者の言い分

〈あこら 東京〉 高橋 朋子

母娘一か月、五一、七四〇円

私は、昨年五月、網膜ハク離症という、ちょっと恐ろしい病名のため、職場を放棄せざるを得なくなつた。それまでは、夫を失つて三年、四十代後半という不利な条件の下で、とにかくにも私の細腕(9)一つで我が家の生計を支えて来た。娘も現在中学二年、そろそろお年ごろでもある。諸雑費も結構な額となる。だが、身に故障が起きては万やむを得ないので、初めて区の福祉事務所のとびらをたいた。つまり「生活保護」を願ひ出たのである。幸か不幸か、すぐ私は保護を受けられることになった。

まず国民年金の免除、健康保険の資格喪失、その代わり、生活、住居、医療、教

育の各分野への保護費が支給されることに決つた。左に図表を示してみる。

生活 二七、四四〇円

(内訳)

12~14歳(子ども) 二五、二六〇

41~59歳(私) 一二、一八〇

教育扶助 一、五二〇円

児童扶養手当 六、五〇〇円

住居費扶助 一六、五〇〇円

(最高限度額)

二人家族扶助 一〇、七八〇円

計 五一、七四〇円

つまり、一か月五一、七四〇円支給を受けられるのである。

教育は別に区の児童課から学校へ、年三回以上に分けて、修学旅行、積立金、給食、教材の各費用が現金で支給され、

直接担任から児童へ渡される。

文句を言いたい医療の問題

次いで医療だが、これは現物支給、つまりあらかじめ福祉事務所へ出向き、日時と病医院を指定された医療券の交付を受け、これを持参しなくては診療の受けられない建て前となっている。その代わり初診料、治療費、薬代、すべて無料である。こう書くとも文句の言いがたないみたいだけれども、これが大変問題なのである。

病氣は、ある日突然やってくる

例えば、風邪で高熱が出た、歯痛がひどい、足をねんざした、などという場合、だれがあらかじめ、そういうこともある

うなどと、医療券を交付してもらっておく人があるものか。病気はある日突然、何の前ぶれもなく、傍若無人にやって来るのだから、歯が痛む、足をねんざしたという子どもの訴えにも、ハリ薬をはったり、手持ちの炎症止めの売薬などを飲ませたりして、つらい一夜を母娘で過ごさねばならない。そして、朝九時キツカリに福祉事務所へ出かけ、歯科なら歯科の医療券をもらい指定された歯科医に学校を休ませて娘を連れて行く。ところが歯科医では受付で、来週の何曜日、何時に、と、予約だけ受け付けてくれて、歯そのものは診てもくれない。

こんな時、たとえ国民健康保険でもいい、自分の健康保険があったならば、知り合いの歯科医へ駆け込んで、せめて応急の処置ぐらいは取ってもらえるものを———と思わないわけにはゆかない。やむなく娘は歯痛に耐えて、休むはずの学校に登校する。

医師は、一般患者と差別していないか

やがて指定された日時になるころには涙がこぼれるほどつらかった歯痛も、ど

ういうものか何とはなしに治って、もうわざわざ学校を休んでまで歯科医に行かなくともよいほどになっているらしいが親は、せっかくの指定を放棄して、その後、また歯痛が起ころぬ何の保証もないのだからと、なだめすかして娘を歯科医に送り込む。帰って娘のいわく、「別にどこも悪くないんですって、口の中調べて「なんにもする必要ないからいいですよ」って帰されちゃった」である。あんなに腹へらしの娘が、三日もロクに食事もとらずに歯痛を訴えていたのが、まるっきりのウソだとも思えない。これが社会保険の人の場合なら、もう少し別の調べ方をしてくれたのではと、勘ぐりたくもないのである。

とにかく、どこの病院も診療所も、一般患者と差をつけない建て前ではあるらしいが、順番はいつもラストに延ばされ一番安価な薬だけ下さる気がするのは私のひが目だけではないと思う。

医療券への私の提案

東京に住んで四十年、無医村に住んでいるわけでもないのに、医療券を持って

行かねば診療を受けられない法規には、病弱な私ども母娘は毎度泣かされてしまふ。そこで提案だが、生活保護受給者カードを交付し、生活保護扱いの病院名を区別に記載した別表に従い、いつ、どこにいても、そのカードを提示さえすれば指定病院で無料の診療が受けられるようにすべきである。東京都では、生活保護受給者中、家族一名に対し、都電、都バス、都営地下鉄の無料定期一か年分を交付してくれるのだから、同時に診療カードも発行してくれたらお互いの手間が省け、病气やけがに対しても心安らかでいられるのではないか。

この場合、診療カードの乱用などという心配は、無用のものと思う。病院側でも、どこも悪くない人間に手当の要を認めないであろう。病氣になってからいちいち福祉事務所へ行ってということが、どれほど具合の悪い本人にとって大変なものか、考えてみたらだれにもわかるはずである。

ここにもある、男女格差

また、生活保護費の中で、娘(十四歳)

の生活費一万五千二百六十円、私、一万二千百八十円というのはどうであらう。さらに驚くべきことは、こういうところにまで男女格差がある、ということである。十四歳は男女差はないが、私の年齢（四十一・五十九歳）では、男子は一万四千二百八十円と、二千円も多いのである。生活保護費にまで、しかも成長期というわけでもなく、保護を受けているのは、病気か何か働けない状態だから受けているのであらうに、なぜ五十歳の女子と男子とで二千円の差が出て来るのであるのか不思議でならない。

六、五〇〇円返納せよ、

それから、児童扶養手当という費目は、児童手当二千円とあわせて（支給期日は別）、生活保護を受けていなくとも父または母が死亡、または理由があつて子を遺棄した場合に申請すれば、民生委員が手続をとつてくれて支給されるものである。それで私は二年前からこの二つの支給だけは受けていたのだが、その中で、「児童扶養手当は生活保護の費目の一つになっているため、ダブって支給したか

ら六千五百円返納せよ」という通知を受けたときは驚いた。

最初の生活保護の支給月が、児童扶養手当（年三回に分けて支給される）を受けた後になることがある。その場合、生活保護の方でも、月六千五百円は児童扶養手当として加算して支給する。支給後、児童扶養手当を受けていたことが判明、いま支給した六千五百円はダブリ支給だから返納せよ、というわけである。つまりこの扶養手当は、生活保護を受けていない場合は年三回に分けて受けるものであるが、生活保護が支給開始されるや、そちらへ移行し、そちらからのみ支給される仕組みなのだそう。

このことがわかるまで、私は何度電話で福祉事務所とやり合ったかわからない。私に言わせれば、ダブって支給したのは福祉事務所の手落ちじゃないか、と言いたいのだ。全額そっくりもらつて五万一千なにがし、この中から六千五百円引かれ、四万五千円足らずでどうしてこの物価高に一月月過ごされよう。

五万円前後の金で、どう生きる？

生活保護を受ける時点では、貯金はもちろん、他から援助が受けられる可能性がある。労働ができず、他からの援助もなく、換金できる財産も持たないという保証がなければ、許可がおりない。

生活保護の費用は、その八〇％を国費として、あとの二〇％を地方自治体で出しているということであり、現在六万三千の都内受給者がいるということだ。私はいま、自分がその六万三千の中の一となつてみて、切実にこの福祉制度を考え直さなくてはならないと思つてゐる。

働けない状態だから、救済の手が差しのべられる。そこまではいい。それからあとは、五万前後のお金でどう生きてゆくか、生きてゆけない場合はどうしたらよいのか、ということである。

たとえば、ないしよで勤めても……

私も、一か月はそれと手持ちの金で過ごしたが、先のことが心配で、いても立ってもいられなくなり、目の方も、いまのところ悪化する風はないとわかるととにかく一刻も早くこの生活保護という

呪縛^{呪縛}じみた枠から逃れ出なくては——と焦り始めた。新聞の求人広告を見ても、四十歳以上はパートの皿洗いか、よくてもお運びさんであったが、ようやく事務の職場を探して臨時勤務をすることになった。だがそれは、就職以前に考えていたほど簡単なことではなかった。

毎月末支給される生活保護の費用は、銀行に取りに行かなくてはならない。勤めのことは、もちろんないしよだから、いつ福祉の人が来訪するか、電話があるか、わからない。そのとき子どもが応待に出て、正直に「母は勤めています」と答えられてはアウトなので、悪いと知りつつ、一時逃れの口実を教えてしまふ。銀行へ取りに行く時間がないので、職場を三十分遅刻して、銀行が開くのを待つて金を受け取り、駅へ走る。常に福祉事務所と職場の両方へ、キヨロキヨロと気を配らずにはいられない。

生かさず、殺さず、半殺し

しかも生活保護費では生きてゆけないのである。生活保護で十分食えるようでは、何のかのと理由をつけて、政府、国

家の恩恵の中で、働かずにヌクヌクと遊んで暮らす人間が増えるのは当然だからもちろん否定しなくてはならない。だが、生活保護の基準は、はなはだしく低いのである。しかも「働けないから」という大前提の下なので、不足分だけ自分の労働で補うことは禁止され、たとえ働いても、働いた分は「認定」と称して、翌月分の支給からごっそり差引かれる仕組みになっている。

このことは、生かさず殺さず、つまり常に半殺しの状態に、われわれをクギづけさせておくことにはかならない。一方、あるベテランセールスマン氏の報告では公営住宅街をセールスして、一番家の中が整然として、しかも豊かな感じがするのは、不思議と母子世帯または生活保護世帯であるという。あとは共働き世帯、一番悪いのが専業主婦の家庭だということなのだが、これは一体どういうことなのであろう。

結局、生活保護をもらいながら、不足分だけパートタイマーなり何なり、あまり無理をしない程度で働き、生計費を補っているという証左では、と私は考える

のだが……。でなければ、ダイコン一本百円前後する現在、普通の食事をし、衛生的な生活をしてゆくにはとてもとても足りるわけがないのである。それも、福祉事務所に知れないように、いつもビクビクしながら、職場と家庭を何とか両立させるべく、その時々精一杯努力しているのだらうと思う。

生きてゆく、最低限の金額を

ここで私は提案する。国家は母子世帯、または働けない人々に対し、最低限の金額を支給し、その不足分は自らの労働から得よ、と言うべきである。不足分を働いたら、それが認定されて支給額を減らすことはやめてもらいたい。やがて本人の収入だけで生活が成り立ち得るならば、この上ないことではないか。老人や身体障害の度合で、寝たきりの人には、生きてゆけるだけの支給をしてこそ、福祉社会、福祉国家と言えるのではないだろうか。予算がないとは言わせない。国民あつての国家であるものを。

膨大な予算を計上して、足りるとか足りないとか、国会は年中沸き返っている

けれども、福祉に回る率の少なさは、今さら私がゴタゴタ述べるまでもないことで、健康な勤労者の場合でも、老後に對する不安は、国家が福祉に本腰を入れてくれないことに起因しているぐらい、茶飲み話にすら通常交わされる。「あごろ」の読者も、生活保護受給者も人間であり、社会の最底辺であがきながらも、精一杯生きようと努力していることを、改めて知って側面から応援してほしい。

提案 2

台所で、私は幾度泣いたことか。「山の遭難はどみじめなものはない。わが子は山で死なせたくない」繰り返し心に誓った。

ことしの春山は、遭難の悲報が相次いだ。その中で私は、七人の若い命を呑み込んだ長野県中央アルプス宝剣岳の雪崩遭難を肌で知った。

最後に、六法全書で調べた「生活保護法」の中から、前述の文に関わりのあると思われる部分を書いておく。

この法律は、日本国憲法第二十五条に規定する理念に基き、国が生活に困窮するすべての国民に對し、その困窮の程度に應じ、必要な保護を行い、その最低の限度の生活を保障するとともに、その自立を助長すること

わが子は山で死なせない（宝剣岳遭難の教訓）

〈あこら東海〉

北村 美恵子

夫はある新聞社の地方記者。長野県木曾谷に赴任して、まもなく二年になる。

地方通信局は家庭と職場が一緒で、たいがいのニュースには慣れっこになつてしまった私だが、大量遭難と聞いたときのショックは大きかった。

夫は日ごろ「遭難は北アルプスだよ」とのん気に構えていた。私もそれを信じ

とを目的とする。

六十条

能力に應じて勤勞に励み、支出の節約を図り、その他生活の維持向上につとめなければならない。

（追記） これを書いて三か月経過している間に、前述の金額に、ほんのわずかのプラス・アルファの通知があったが、最低限度の生活を保障するには、以前通り不足過ぎるし、自立を助長するなどは、とんでもないことである。

て「木曾谷を転動するまで、遭難事故がないように」と折っていたのだが。

一度に七人の大量遭難は、木曾谷の山岳史上初めての惨事。わが家には応援の記者、カメラマンなどが続々と繰り込み、狭い事務所はたちまち戦場のようになつた。

無線で刻々入ってくる捜索状況が、台

所まで手に取るように聞えてくる。私は遭難者の安否と、家族がいかに心配しているかを思い続けていた。

七人はいずれも二十代の前途有為な若者たち。うち一人は女性で、年閏六十日近くも山登りをしているベテランだった。この女性は中学卒業と同時に山登りを始め、所属山岳会の中では実力ナンバーワン。母子家庭の明るい娘さんだったという。

私にも中学一年の長男と、小学生の女の子二人がいる。やがて山にあこがれ、危険な岩場や冬山にいとむと言いだしたらどうしよう。登山そのものは、健全なスポーツであり「遭難が心配だから」では、子どもが納得しまい——私はこう仮定しただけで、胸が締めつけられた。

だれも遭難を予期して、山登りはしない。ちょっとした不注意、技術の過信が死を招く。山はこのことを繰り返して教えているのに、なぜ悲劇は絶えないのだろうか。

宝剣岳の遭難も、山のおきてを無視して七人が集団で沢登りをし、自ら表層雪崩を引き起こした。新聞は「無謀登山」

といましめていたが、山のベテランを負する若者たちの行動としては、軽率だった。今思い返しても残念でならない。

山に慣れてくると、さらに高度な技術をみがくため、危険個所にいとむのだという。それがいけないとは言わないが、もつと命を大切にしてもらいたい。「山で死ぬのは本望」という思想は、いつの時代にも通用しないのだ。

四日間にわたる捜索の結果、五人は遺体で収容された。残る二人も四月下旬、遺体で発見されたが、「みんな無惨な姿だったよ」と夫から聞かされ、私はくちびるをかんだ。

最愛の娘を山で失い、遺体に取りすがって泣き崩れる年老いた母親の写真を、カメラマンが見せてくれた。この母親は愛知県知多郡南知多町から、普段着姿で駆けつけ「お母さんだよ」と必死に呼び掛けていたという。

他の遺体は現地で火葬にしたが、母親は「娘に一度でいいから晴れ着を着せてやりたい」と遺体を自宅に連れ帰った。好きな山で死んだ娘はともかく、私はこの母親がふびんでならない。

宝剣岳の遭難は、もう一つの悲劇を生んだ。五月の連休に七人の遺品捜索に来た山仲間一人が、また転落死した。山は本当に恐ろしい。この連休に長野県内の山で九人が若い命を散らした。

海外では、エベレストを目指していた日本女子登山隊員七人と、シェルバ合わせて十三人が、キャンプ中雪崩に襲われ、重軽傷を負った。山を愛し、山にいとむ人たちは年ごとに増えている。それに比例して、遭難が増えていくとしたら、これはほど不幸なことではない。

遭難者を一人出せば、たちまち数十万円が消えるという。ヘリコプターを飛ばせば、一時間二十万円から三十万円。命を落したうえ家族に借金を残したケースは少なくない。

私たち母親の多くは、わが子を一流高校、一流大学へ入れるのが教育だと信じている。宝剣岳遭難を肌で感じたことにより、真の教育とは「命を大切にすることだ」と気づいたのは大きな収穫だった。私はこの教訓を生かして、三人の子どもには機会ある度に「山では死なないでね」と言い聞かせていくつもりだ。

新聞 切抜帖

一九七五年

二月一日

一九七五年

五月二十日

法・裁判

女性の定年差別は不合理

伊東市の伊豆シャボテン公園の女子従業員たちが、「男子より十歳早い四十七歳定年制は不合理」と差別定年制によ

る解雇の無効を訴えていた控訴審で東京高裁でも従業員側の申請を認めた一審判決を支持。この裁判の陪席裁判官の一人は野田愛子さん、また「女性の方が男性より早く老化するとはいえない」と一審を担当したのも女性の永石泰子判事。（2・26朝日・毎日）

* *

この種の裁判が、新聞、テレビなどで大きく報道されることは、働く女性の能力を過小評価する風潮、性によって差別するという後進性が、依然として社会に根強いことを物語る。こうした背景から見て、この判決の意義は大きい。

政府に、差別のない定年制はもとより、定年延長問題についても、新たな発想に立つた実効ある政策を望みたい。

（2・28毎日社説）

定年差別無効は当然

この判決は当然。ましてや会社側が控訴した女性の職種は店員や調理師である。店を一軒まかされていながら、女では正当な商取引も出来ないと思っている男性もいる。この判決を男性の頭から差別感を除く契機にしたい。

（投書、3・11毎日）

男女の定年差別は無効

四十八年の「日産自動車事件」で五十歳女子定年制を有効とした判決は時代に逆行する判決だと話題になったが伊豆シャボテン公園の判決で男女定年制を無効とする傾向はどうやら定着した。結婚退職制や出産退職制の無効に関する判例もほぼ固まっており今回の判決は国際婦人年にふさわしい重要な意義をもつ。

（鍛冶良堅、千鶴子）

（3・7朝日）

女子アルバイトの解雇

大阪の朝日放送でアルバイト契約四回更新の際、同社の臨時雇用者就業規則に基づいて解約された二人の女性が、「女性だけを不当に差別する雇用制度で憲法に違反する」と訴えた結果、大阪地裁で「著しく過酷で権利の乱用だ」と二人の主張をほぼ全面的に認めた。（3・28毎日）

デモ規制で判決

東京地裁は「デモの際、機動隊員の規制で顔を強打、二か月の重傷を負った」との女子学生の訴えを認め、「機動隊員として適法な排除活動の範囲を越えた過失責任がある」として、東京都に慰謝料など請求額は半額の四十五万円の支払いを命じた。

（4・8毎日）

もらい子実子は

もらい子を実子として届けた場合、その子の相続権の有無が争われていた民事訴訟の上告審で、最高裁は「もらい子を実子と偽った届け出の場合、実の親子関係も、法律上の養子縁組も認められず、相続権などの法的保護は及ばない」と子側の上告棄却の判決。この判決で「実子特例法」の将来になお問題が残る。

* *

血縁だけを重視している日本の社会を反映した迷信的な判決。出生率の低下した現在は、未婚の母を持つハンディを負った子しかもらい子になる余地はない。こうした子の幸福を考えたとき、生物学的な親子関係を重視することの無意味さは明らかだ(菊田昇医師)。(4・8朝日)

男女差別賃金は違法

男と同じ仕事なのに女を理由の差別賃金は憲法と労基法に違反する、差額分を支払え、と秋田相互銀行を相手にした女子行員七人の「女子賃金差額請求訴訟」の判決は、女子行員の訴えを支持。差額百万円余りの支払いを命じた。男女間の賃金差別が正面から争われたのは初めてのケース。定年差別無効に続き、ウーマンパワー再度の勝利。

(4・10読売・毎日・朝日)

生活不安に離婚を迷う

四十八年に福岡県の家裁が調停した夫婦関係は七〇%が離婚問題、理由のトップは夫の浮気。

財産分与、慰謝料となると①五十万円以下、②百万円以下、③三十万円以下では、どんなにひどい仕打ちを受けて

も素手同然で世間に投げ出される妻は離婚に迷わねばならない。(4・5朝日)

論議を呼ぶ「妻の座」

夫婦の財産共有化について内助の功を認め、夫の収入も妻と共有すべきとの賛成論と女性の自立をすすめるのが本筋という反対論に別れている。妻の遺産相続、離婚時の財産分与などについても、法制審議会は結論が出せない現状。(4・16朝日)

活動

物価高にいとむ主婦たち

北海道旭川市の灯油共同購入グループ。誕生は昨年十月。この活動のものは一昨年の灯油値上がりにより消費者たちが立ち上がったことにある。悪いの

は大企業と政府だとわかったと主婦たちは意気さかん。(2・5赤旗)

力強いミニコミ紙

「消費者レポート」

創刊以来、二〇〇号を超え、とりあげられた問題は、まさに「新しい生活者運動」の歴史そのもの。「ジュースの表示戦争」「ニセ牛乳の告発」「合成洗剤追放運動」「AF2追放」「石油カルテルの集団訴訟」等々、目のつけどころは鋭い。東京・目黒区中目黒3-13-29 日本消費者連盟発行。(2・12毎日)

牛乳安売りモータレツ戦争

百六十九円(自治会)対百五十九円(スーパー)。埼玉県春日部市の公団武里団地で団地自治会が県や市の助成を受けて、自治会牛乳の販売を始めたところ、団地内のスー

パー三店が挑戦、百九十円台の牛乳を百五十九円に大幅ダウンピング。団地で芽生えた消費者運動に、団地族の反応は？

(2・14毎日)

主婦も「内職春闘」

「反インフレ・生活向上・働く権利を守る内職大会(総評主婦の会主催)」が十七、十八日、東京・全通会館であり、全国の内職主婦二百人が参加、内職やパートの賃金引上げ等の要求を決め、労働省や経企庁に陳情を行なった。

(2・18毎日)

仏の女性学者が記録映画

「鹿島パダイス」——仏の女流社会学者ベニー・デスワルトさん(30)が一年間かけて作った日本の高度成長とそれがもたらしたヒズミ、崩壊する農村社会をえぐるドキュメンタリー映画。

フランス語、英語版は完成したが、日本語版を目下製作中。問い合わせ先「東京都新宿区三光町一、岩本ビル、小川プロダクション事務局、電話 03—352—3581

(2・19朝日)

「ストップ・ザ・原発」

「ひとりひとりが原子力の恐ろしさを考える会」は二十人足らずの小さなグループ。毎月一回の学習会を経て、原発建設分の電気料金不払い運動の検討、原発反対の地域闘争との連帯を深める活動を始め、多くの消費者の参加を呼びかけている。(2・19毎日)

緑のおばさん新たな闘い

東京二十三区の緑のおばさんが学童擁護十五周年記念総決起大会を開き、職業病について訴えた。車の交通量がふえたため、排ガスによる、目、

ノド、鼻の痛みを訴える人が目立つ。「学童の生命を守るためがんばってきた私たちは、自分たちの体を守る闘いもしましょう」と、「職業病を認めさせよう、定年制に反対しよう」などのスローガンを決めた。(3・16朝日)

男子にも家庭科を

「家庭科必修をすすめる会」では、永井文部大臣を訪れた。「家庭科の女子必修で男は仕事、女は家庭と役割意識ができ、それが女性の社会意識を決めている。男女を問わず人間らしい生活を営める教育を。戦後男女共に学ぶ民主教育のホープとしてできたのに、女性だけに限定されるのは逆行」と市川房枝さんら。永井大臣は「教育課程審議会では、性にとらわれず選択の機会をふやすことを検討します」と前向きな返事。

(3・17朝日)

本当の消費者運動

岩手県 of 盛岡消費者友の会は活発な活動をしているが目下開店休業中。四月上旬まで家庭内は異動が多く主婦は一番忙しい時。会長も「主婦の集まりだから家庭の運営が第一。余暇を利用しての努力が本当の活動ではないか」と。

(3・18毎日)

交通遺児母の会東京で結成

全国で五万世帯、遺児十二万人だが東京の母の会は酒田市に次ぎ二番目。初の行事は酒田市の母の会の協力で夏休みの遺児交流会。連絡先は杉並区高井戸西三十一—十九坂本みゆきさん。電話 333—七五六〇 (3・20朝日)

「グループ若芽」に補助金
身障児のための共同作業所

建設をめざしワカメの行商をしている母親グループに江戸川区は五百万円補助の方針を決め二十六日の本会議で正式に決定。工費は千五百万円かかる。
(3・23毎日)

主婦運営の消費者センター
東京西多摩郡羽村町に行政が口を出さぬ珍しい消費者センターが誕生。昭和三十二年に開設された婦人学級が母体。鉄筋二階建ての一階は食品テストを扱い二階は展示室になっている。買物相談にも応じる。
(3・25朝日)

多摩川を愛する会、発足
多摩川をきれいにしようという趣旨で発足。会員は流域の人々。とりあえず四月から東名高速多摩川橋から下流四キロを活動区域として具体的に動き出す。アンケート調査やハンゴウ炊飯なども計画。

(4・7毎日)

子持ち女同士

いったん妊娠すると、今の社会では子どもが学校に入るぐらいまで母親は閉鎖的な生活余儀なくされる。「そんな女が集まって手をつなぎ、情報を交換しあう場をつくらう」と呼びかけるグループは「あんふあんて」レディース・ボイス社が呼びかけ人。時間単位(有料)の保育所も設ける。
(4・4毎日)

「女たちの会」発足

正式名称は「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」、一月に発足。世話人は市川房枝、田中寿美子さんら十人。井上ひさし、草柳大蔵、上坂冬子の三氏に「男本位の女づくりに貢献」の表彰状を郵送。
(4・10朝日)

婦人参政権30周年

第十八回婦選会議が民間婦人七団体の共催で東京代々木の婦選会館で開かれ、社・共・公の婦人国會議員も出席。男女平等の実質的権利の獲得、婦人の政治意識向上、婦人議員の選出、婦人票で政治を動かすなど五項目の決議を採択。
(4・11毎日)

小売店より高い公設市場

名古屋市経済局物価対策課の調査によれば、市の公設市場が市内の一般小売店より物価が高いことがわかり、「やっぱり思った通りだ」と消費者から強い不満の声があがっている。市経済局はこれを重視し、改善の方向へ厳しく行政指導する。
(4・27中日)

女性手話通訳者活躍

第二十四回全国ろうあ者大

会は、二日名古屋市民会館で開かれ、全国のろうあ者二千四百人が参加、福祉向上をめざし団結を誓った。会場には県内各地から手話通訳の勉強を続けている女性五十人が奉仕員として集まり、ろうあ者に代わって各種の渉外活動の手助けをしている姿が目立った。
(5・2中日)

独禁法改悪へ女性の怒り

広く民意を反映するため、首相のお声がかかりで各界代表十八人の委員で発足した懇談会の最後の会議が16日開催。その席で消費者代表中村紀伊、田中里子両氏は、委員の意見を全く反映せぬ「骨ぬき法案」に怒りを爆発、政府に絶縁状をつきつけた。
(5・17朝日)

寿地区の保健婦と助産婦

九十軒の簡易旅館がならぶ

横浜・寿地区で働く保健婦さんら二人「担当年数が長くなった」と配置転換されそうになったが、この地区の住民や労働者は「寿の地域医療にこんなに尽くす二人は地域の財産だ」と異動反対の署名を集め市に陳情。この労働者バワイのおかげで二人は引き続き寿地区を担当。

(5・13朝日)

エベレスト日本女子隊

世界初の女性エベレスト隊として注目されている日本隊はカトマンズに来て一週間、食糧、装備の準備も順調。作業の合間に野立てをするゆとりもある。(2・6読売)

壮筆、初登頂

その時頂上は快晴、微風。女性初登頂、田部井淳子登はん隊長とシュルペのアンソエリン氏。キズだらけ、ギリギ

リの登頂、女性の持つねばりと忍耐が勝利を。雪崩で一時は全面撤収も。酸素が二人分しかなかったため、田部井さんが登る。ベースキャンプで待機の隊員は肩を抱き合って喜んだ。(5・18読売)

女ひとり太平洋横断計画

東京足立の小林則子さんは9月21日サンフランシスコ発60日の予定で沖縄までヨットで太平洋横断を計画している。この出発は沖縄海洋博協会主催のレースの出發と同時に。規定の艇より小さいため正式参加とならないが、世界の強豪と肩をならべるわけだ。乞成功!!(3・15朝日)

一日駆け込み寺

婦人年国際会議がメキシコで開かれる六月二十一日、千葉有職婦人クラブが、千葉市中央コミュニティセンターで

「一日駆け込み寺」を開く。専門職、管理職の女性が月例会で学んできた知識を生かした日の相談相手になる。(5・21朝日)

労働

保母さん請願デモ

低賃金と人員不足、職業病などで苦しめられている福祉施設、保育所の職員が、厚生省、労働省などへ請願、デモを行なった。

人員不足のため職業病がふえ、そのしわよせで残りの職員がたおれるという悪循環、低賃金がそれに輪をかけている、と行政の冷酷さを訴えていた。(2・4赤旗)

イタリアの母性保護法

労組の要求で一九七一年に改正。次の通り、

▽妊娠の初めから出産休暇が終るまでの期間、解雇禁止。
▽重量物の運搬、危険な労働、労働度の高い労働の禁止。
▽出産休暇―産前二か月産後三か月。

▽育児休暇―産後の休暇が終った後一年以内は六か月間欠勤の権利あり。

▽有給の休息時間―生後一年以内の子どもの母は一日二回。(2・26赤旗)

厳しい再就職者の賃金

都内の職安を通した再就職者の平均賃金は男子九万四千五百円、女子七万円。最高は男子の十万七千円、女子は八万三千円。女子では看護婦(八万円)経理事務員(七万五千元)が高く清掃婦・雑役(六万円)が低い。男女間の平均格差は、平均で女子が男子比七四・一%、三十五―四十五歳の女子が最も不利で六

五%の水準。中、高年齢の勤勞婦人の生活の苦しさを物語っている。(3・13毎日)

母性保護は当然の権利

ILO婦人問題會議は母性保護を人間の尊厳を守る母性の權利と位置づけた。ヨーロッパの産休は十六週、とくにイタリアの母親保護法は産前二か月、産後三か月。

日本は賃金の差で健保支給分べん費も違い、産休中の賃金保障も公務員一〇〇%、民間六〇%、家内労働ゼロとバラバラ。保護が平等かの二者択一でなく当然の權利としての母性保障は国際婦人年の贈り物にふさわしいはず。

(ゼンセン同盟 多田とよ子)
(3・17読売)

男女の賃金格差

M百貨店のモデル賃金、勤続三年の高卒男子と女子の差

は六百円だが、勤続六年になると六千六百円の差になる。このように、勤続年数がふえるにつれ、男女間の賃金格差は大きくなる。(3・18読売)

激務で赤ちゃん産めません

参院予算委の福祉問題に関する集中審議に看護婦さんが出席。

「いまの医療を守ろうとすれば、私たちの健康は破壊され子どもは産めなくなる、労基法の産前産後の六週間の休暇では休養はとれず、それ以上休めば賃金はカット。死産や知恵おくれの子を産む看護婦もしばしば」と現場からの声を訴えた。(3・28毎日)

パートの退職金

不況でパートタイマーの主婦の解雇が相次いでいる。法的に身分保障がはつきりしないため、不利な立場におかれ

即日解雇で、泣寝入りというケースも。退職金を支給する所も少ない。これは一般従業員との勤務時間、勤続年数に差があるので法的に義務づけられないため。パートに出る主婦は就業規則を十分読んで退職金はどうなっているか知っておく必要がある。(4・8読売)

年金にも響く低賃金

Iさん(60)が十六年間働き続けた結果の厚生年金の老齢年金は月二万八千円。受給額は賃金と加入期間で決まるので低賃金の女性はむくわれない。専業主婦はさらに不利、夫の死後の遺族年金は夫の年金の半額。国民年金は厚生年金より分が悪い。「女性の地位の低さが年金にも反映している、これを何とかしなければ社会保障とはいえない」と日下部禮代子さん。

(4・9朝日)
母性保障基本法を要求

ゼンセン同盟の過半数を占める女子組合員は、分べん費の無料化、産休中の賃金保障の公平化、妊産婦労働者の労働条件改善、妊産婦家庭にホームヘルパー派遣、などを盛りこんだ基本法をつくるように労働省に申し入れた。(4・11朝日)

保母さんは労働過重

自治労は、保母さんの労働実態を調査してきたが、労基法違反が公然と行われているとして、行政闘争を進めることにした。労働条件、とくに休憩時間はほとんどとれない、年次有給休暇も名目だけ、生理休暇もとれず、昨年一年間で十九人の出産予定者のうち九人が切迫流産や妊娠障害で倒れた。五人の職業病患者

も出、二人が公務災害の認定を申請中。(4・24毎日)

二倍働いて給料は半分

ILOの報告書では、全世界の労働人口の三分の一が女性であり、家事を含めると男性の二倍は働いているのに評価は低く、給料は半分。男性を一〇〇とした女性の賃金はスウェーデン八三・二、デンマーク七七・九、オーストラリア七六・一、日本四七・五。北朝鮮は男女同一賃金で、三人子どものいる女性には六時間労働で八時間分の賃金を支給。(5・16朝日)

調査・報告

CMにはつられませんわよ
テレビのCMと主婦とのかわり合いを調査したところCMと購買との関連は余り密

接でないのが実情だ。CMに対する一般的感想は量が年々ふえて困る、ばからしさ、大げさ等に反感。これからのCMは生活に役立つ情報にすべきだ。(2・1毎日)

女性はオフィスの方が寒さがこたえる

皮下脂肪の多い女性は男性より寒さに強いはずだが西独での調査によると職場での最適温度は男性十八度で女子より四度低い。ただし家庭では共に二十一度。西独でも女性は家に帰ってからよく働くからか。(2・4日経)

栄養面から見た食費

一年で三二・五%アップ
栄養的にバランスのとれた食生活には一人一日いくら食費がかかるかを栄養普及会が調べたところ昨年の平均は五百七十九円、四十五年からは

五九%増、昨年より三二・五%増、これまで安かった品物の上昇率が目につく。(2・28日経)

二十代男性は結婚難

戦後生まれが都民の過半数に達したが、二十歳代は女一〇〇対男一一八・二。他県女性との結婚という手もあるが東京に限れば男性の結婚難が続きそう。(4・5毎日)

父親の出番は

宮城教委が行なった父親の家庭における幼児教育の調査で、父親は母親の日常の育児を「手をかけすぎる、何となく不満」と訴え、父親自身は「自分では手を汚さず、子どもにとけ込む積極さなし。母親の批判だけはする」と認めた。しつけ役は、八二・一%が母。六・八%が父。父親の出番は「外出や母親の手に

あまるとき、すもうやレスリング」と頼まれ仕事ばかり。(4・22毎日)

慶弔金「西高東低」型

東海銀行がまとめた「最近一年間の慶弔金の出費調査」によれば、ほとんどの家庭がなんらかの形で出しており、大阪の一人当たり五万一千円がトップ。東京は低額、名古屋はその中間である。全般にこの慣習は必要だとする肯定派が多い。(4・26中日)

「強く」「自由に」妻の座

余暇開発センターの主婦の意識と行動調査によると家事は夫という声が三五%。家庭内の覇権はまだ夫にあるが外出、小遣い、買物等、妻の自主権もかなり進んで来た。社会意識も高まったが行動はまだ消極的だ。(5・11朝日)

人

賞

青木やよひさん 「マルサスの影と現代文明」

小池保子さん・小坂富美子さん 「老人福祉の運動論」で毎日・日本研究賞。

(2・7 毎日)

島尾ミホさん 「海辺の生と死」で田村俊子賞。

吉野せいさん 「涙をたらした神」で田村俊子賞・大宅壮一賞。(3・20 毎日)

片岡球子さん・中里恒子さん 日本芸術院恩賜賞。

安川加寿子さん 芸術院賞。

(4・8 毎日)

沢田ふじ子さん 「石女」で第24回小説現代新人賞。

(4・8 朝日)

与那覇しづさん 吉川英治文化賞。(4・22 毎日)

桜井利枝さん 「もずの庭」

で第18回農民文学賞。

谷 桃子さん 第一回橋樑子賞特別賞。(4・24 毎日)

溝口歌子さん 日本科学技術情報センターの丹羽賞功労賞。(4・24 朝日)

不二今日子さん 「花捨て」で第十一回太宰賞。

(5・7 朝日)

下田澄子さん 野鳥保護で環境庁長官賞。(5・9 朝日)

外交で理想を燃やす

渡辺華子さん。本職は労働評論だが二年間国連の政府代表代理として活躍。これからの外交は女が入らなくては、という。理想に忠実であろうとする純粹さ精神の若々しさもこめてニックネームは「万年童女」。(2・7 日経)

毎日・日本研究賞

青木やよひさん 「マルサスの影と現代文明」で。終戦直

後、薬専卒業、ロマン・ローンに魅せられ、みず書房の編集員として二十年過す。六〇年安保をきっかけに市民運動に。四年前のアメリカ旅行で文明に懷疑を抱き、それがこの論文を生んだ。

(2・9 毎日)

小池保子さん・小坂富美子さん。セツルメント菊坂第二診療所の所長の小池さん。長年地域に密着した医療の第一線を歩いて来た。小坂さんは薬大卒業、杉並組合病院時代に医事評論家川上武氏を通して小池さんと知り合い、薬局を手伝うかたわら、戦後医療史年表づくりに取組んでいる。受賞は「老人福祉の運動論」。(2・9 毎日)

高校問題に取り組む人

古賀禎子さん(44)。三多摩高校問題連絡会議事務局長。一人娘裕子ちゃんの入学と同

時にPTA活動に参加。中学浪人を出したくない願いから七一年にいまの連絡会議の前身をつくる。(2・21 赤旗)

母親連絡会生みの親

山家和子さん。若い時から柔軟な生き方を自ら選ぶ強さがあつた。戦後夫君と別居、五人の子どもをもつてPTA運動に入る。昭和三十年初の母親大会に出席したのをきっかけに会のまとめ役となる。何回かの危機も忍耐と貫禄で切り抜ける。(2・26 日経)

英国で日本女性が学位

西田宏子さん(36)はオックスフォード大学のきびしい学位審査をパスして文学博士の学位を得た。英文二百三十ページの大論文で題は「十七・八世紀の日本輸出陶磁器の研究」。(3・2 毎日・朝日)

定年

詩人の石垣りんさん(55)

はこのほど銀行を定年退職した。好きなことをするための時間とお金が欲しくて十五で就職。今もその時と同じ気持ち。立身出世に失望を感じ、そのせり合いの外で築き上げる豊かさの方が望ましいと。定年は人生の夕暮れ、夜になって好きなことができるかどうかの問題とのこと。

(3・4朝日)

選挙のお目付け役

日本婦人有権者同盟政治啓発運動委員長 松浦三知子さん(62)。違反の監視、摘発という言葉とは縁遠いソフトな印象。十人兄妹の男は皆大学へ、だが女は必要なしという父。戦後多摩村でPTA委員、推されて村議に。啓発運動にひかれて転身。(3・6毎日)

「猛勉」女医さん

岡本弘子さん(36)は東京外語大スペイン語科を卒業後南米に渡りオランダのカメラマンと結婚、三人の娘を育てながらブエノスアイレス大学で医学を学び医師の資格をとった。今、東京の癌研究所に研究に來ているかたわら、十三年間の経験を手記にまとめている。(3・12毎日)

韓国の痛みを肌に

随筆家の岡部伊都子さんは今、「重苦しい韓国の民主化闘争に学んでいる」。

岡部さんの随筆は人間としての解放をねがう深い思いに裏打ちされているが、それは戦争で失った兄や婚約者への哀惜から、沖縄・朝鮮の痛みを共感したいという願いに幅を広げたいという。

(3・14毎日)

田村俊子賞

島尾ミホさん(55)受賞作「海辺の生と死」は生まれ故郷奄美での幼年期の思い出を民話風につづった。今はもう大きい二人の子どもに、一日のできごとや幼児期の思い出を子守歌代わりに夜ごと聞かせたから、初めて書いた文章だが、ペンはすーい、すい。作家島尾雄敏氏夫人。

(3・14朝日)

田村俊子賞と大宅壮一賞

吉野せいさん(75)は福島県いわき市の農家のバツバ。作品集「涙をたらした神」が受賞。高等小学校を卒業後、資格をとり二年ほど教員もした。その間、山村暮鳥らの影響を受け、社会運動にもふみこんだ。大正十年義也氏と無

一物の結婚生活を始めた。ものを書き始めたのは義也氏の

死後、七十歳を過ぎてから。

(3・20毎日)

歌でベトナム復興支援

反戦フォーク歌手横井久美子さん(30)。「ベトナムに心を寄せる会」を結成。これまでも相模原のM48戦車阻止闘争の「戦車は動けない」を反戦街頭パネル展の会場で歌うなど。一昨年、日本の女性文化代表団の一人として北ベトナムを訪問し、収録テープでレコードを自主製作した。四歳児の母。

(3・21朝日)

婦人警官エースの退職

高松春子さん(57)。終戦直後の二十一年婦人警官一期生として警視庁入り、以後全国のトップを走り続け、最近「ヤングテレホンのお姉さん」と頼りにされていた。独身で三十年近く少年輔導や家事相談とソフトな面を担当して来

た。(3・25朝日)

八十二歳の手習い

星野キンさん(82)。成人学級でも珍しい「世田谷婦人大学」の二年間の全課程を修了卒業証書を受けた。卒論は「家族制度の崩壊と老人のゆくえ」。さらに大学院に挑戦します、とハッスル。

(3・29読売)

芸術院賞

安川加寿子さん。ピアノスト、教育者、妻、母と一人四役を立派に果たしている。パリで育ちバリ音楽院を一番で卒業。今月二十四日にはバリでチェロのフラシヨー女史と演奏会を開く。(4・8毎日)

第24回小説現代新人賞

沢田ふじ子さん(28)。十歳年上の夫君と二人暮らし。四十四年に大学を卒業して教師生

活。四十八年夏、綴織工に。

小説は二年前から書き始め、未完を含めて四作目の「石女」が賞に。「織物を織って、書きたいテーマで小説を書きひっそり生きたい」。(4・8朝日)

北海道公立高校に

二人の女性校長

室蘭、登別両市内の二公立高校に、初めての女性校長が赴任。登別高校の川原イト校長(50)と室蘭啓明高校の吉山峯子校長(57)で、全道公立高校の現職女性校長はこの二人だけ。管内の教育界に新風を吹き込むものと期待されている。(4・9北海読売)

主婦画伯

墨田区の露峯三重子さん(35)。家業の印刷を手伝い、育児のかたわら、はり絵にとり組む。このほど個展を開き、隅田川、浅草の街など、身近な

下町情景など四十点を出品。

(4・9毎日)

「防衛を考える会」の

婦人代表委員

角田房子さん(60)。防衛問題に国民の同意を得るための会だが、角田さんは女性ジャーナリストとしての正姿勢で防衛庁に事実の公開を求める構えだ。戦前、戦後のヨーロッパ生活で真の平和の重みを知って、日本の「平和」を皮肉る。(4・10読売)

「女たちの会」の事務担当

武田京子さん(41)。「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」の事務。リーダーではなく、縁の下の力もちという。会員は三百人。雑誌編集をして婦人問題と取り組んで来たが夫君の転勤で「専業主婦」となる。二児の母。「生活を足げにした運動

はいや」と。(4・10朝日)

「寺内貫太郎一家」の作者

平均視聴率三〇%の秘密を作者の向田邦子さんに聞く。「貫太郎のモデルは私の父。懐かしさと家庭というものの反省から書きました」。女性が主人公のホームドラマの定型を破った。十五年前父とケンカして家を出たきり。

(4・14毎日)

女性局長、都庁を去る

縫田暉子さん(53)は三年十カ月前、「弱者のために」と懇願されてNHKの解説委員を辞め、初の民生局長に就任したが、このほど辞表を提出した。福祉の基盤づくりに全力をあげた。これからは婦人問題に取り組みたいと彼女は語るが、突然の辞任は三期目の美濃部都政に波紋を呼びそうだ。(4・15毎日)

市議をやめる

幸田維久子さん(58)は大阪府藤井寺市議。八年間務め今期でやめる。主婦の読書会から立候補したが、議員としてまじめに活動すれば読書会と両立せず、三期目の立候補を断念。これからは市民として議會を外からゆさぶる。母と子の問題は女性議員の手でと。(4・22朝日)

吉川英治文化賞受賞

与那覇しづさん(52)。十九年前から与那国島で保健婦として奮闘。三十三歳で保健婦の資格をとった。島の衛生状態改善のため「骨と皮になるくらい」がんばった。今、島民二千三百人の健康状態の生きカルテでもある。僻地でも最高の手当が受けられるのが願い。(4・22毎日)

丹羽賞功労賞

溝口歌子さん(67)。女子学習院中等科の時、父とロンドンへ。二年半英語をたたき込まれた。小学生の頃から興味をもった写真のために乗車へ進む。戦後日本の化学論文の英訳と学術雑誌の編集をずっと。著書「英語の化学論文」「民家巡礼」。(4・24朝日)

第一回橘秋子賞(特別賞)

谷 桃子さん。いつまでも美しくみずみずしい。当り役はジゼル、「白鳥の湖」のオデット。デビューは昭和二十一年。三年後に自分のバレエ団をもつ。昨年三月引退公演。だが客演の要請も多い。「長期公演のできる場がほしい」。(4・24毎日)

生きがいを求めて

長沢信子さん(41)。「ライ

フワークがほしい」と人の手がけぬ外国語をと中国語を勉強。通訳の国家試験もパスし昨秋は友好使節団の通訳。さらに挑戦して准看護婦の免許をとる。(4・25読売)

第十八回農民文学賞

桜井利重さん(38)。四年前小説を書き始め二作目の「もずの庭」で賞。激変する近郊農村の実態を旧地主の側から描いたもの。物静かな応対の中に気丈さがのぞく。「農業が減びて代わりに何が栄えるのでしょうか」消えて行く身辺の記録のためカメラの勉強も。(4・26毎日・朝日)

春の叙勲

木村輝さん(71)、勲五等宝冠章を受ける。奈良女子刑務所教誨師として長年受刑者の更生に尽くす。「私は明治の女。この仕事は一生続けた

い」と柔和さの中に強い意志を示す。(4・30毎日)

全日本女子剣道選手権で優勝

田中由美子さん(20)。大阪代表。一五三センチの小柄。きつい性格と自分でも。中学一年の時、親の反対を押して剣道部へ。優勝は監督さん、先輩のおかげというが、練習以外にはない。大阪体育大生。郷里鳥取で体育教師になるのが希望。(5・4毎日)

「女工哀史」に叙勲の春

藤本ミサヨさん(62)。職工として五十年働き続けた。勲七等宝冠章。女工哀史そのままに生きて来た。今、月給四万円、若い後輩より安い。「年寄り女工に勲章なんて」と皮肉でなくいう。(5・7朝日)

野鳥保護で環境庁長官表彰

下田澄子さん(51)。東京

西多摩・戸倉小学校の校長さん。同校は愛鳥モデル校になつていたがこれを名実ともに充実したものに、と努力。「理科が好き。好きなことと環境が一致して幸せ」という。三児の母。夫君も青梅市の中学校長。

(3・9朝日)

海女代表

上村さんさん(81)。十一日

御木本真珠島を訪問されるエリザベス女王ご夫妻にごあいさつする海女四代のキャプテン。今は楽隠居だが娘のころは真冬でもイソ着一枚でもぐるきびしい生活。赤銅色、深いしわ、つややかな黒髪、カゼ一つひかぬ健康体だ。

(5・10朝日)

日本児童文芸家協会の理事長に

山主敏子さん(67)。もの書き一家。亡くなった夫は新聞社、息子はSF作家、ヨメは生活問題のライター。自分の能力を試したくて記者に。戦後、労働組合の婦人部長として、マスコミに働く女性の地位向上に努めた。勤めながら児童文学を書く。唯一の楽しみは一人旅。

(5・11朝日)

ベトナム反戦を訴える

和田あき子さん(36)。日本がベトナム戦争に無関係でないことを膚で感じ、反戦運動「大衆市民の集い」を。朝霞の基地野戦病院に向つて百回余の反戦放送をする。ベトナム戦争の根底には差別があるのが女として実感としてわかるといふ。

(5・15読売)

芸術院恩賜賞

片岡球子さん(70)。「面構」

連作のうち、江戸時代の浮世絵師・鳥文斎栄之で受賞。小学校教員、女子美大教授を経て現愛知芸大客員教授。絵をやるのに家庭をもつて両立させる芸当はムリとさとして独身。描けないときでも、ともかく筆を。休むと停滞するからと。記憶力も抜群。

(4・16朝日)

イタリアで「カサド・国際チェロ・コンクール」主催

原智恵子さん(61)。チェロ演奏者カサド氏と結婚。夫君亡き後その遺志を継いでチエロ・コンクールを。今でも毎日三時間のピアノ練習を欠かさない。

(5・15朝日)

手作りのはりえ絵本

川上よりさん(61)。手がけ

て十年。祖母から聞いた昔話や民話をいまの子どもたちに残し夢を育ててほしい、と東京深川図書館に贈りつつける。グリムから魯迅まで手を伸ばしているが、幻想的で素朴な味わいのにじみ出るこの絵本に子どもたちは目を輝やかす。

(5・15朝日)

米大陸横断航空レースに挑戦

及位(のぞき)ヤエさんは婦人の世界最大航空レース、五千キロに初参加。飛行時間千時間、現役では最古参。肩書は日本婦人航空協会の理事長。女性パイロット普及に努力。飛行機の操縦はち密で女性に向いている。レースでは日本女子の意気を世界に見せたい。

(5・16朝日)

日タイ交流

小谷かつ代さん(29)。タイ

人の大学助教教授夫人。大学在学時から東南アジアに興味をもち、現在バンコックの大学で日本語を教授。タイの女性は建設、道路工事まで女性進出がめざましい。自立し心豊かなタイの人を日本人はなぜひっ視するの、とタイ研究に熱情をもやす。

(5・20朝日)

風潮

世界のトップ女性政治家

女性政治家も千差万別だが大体次の四つに分類できる。自力でのし上がる実力派型はサッチャー女史がその典型。父や夫の後を継ぎ政界入りの七光り型はイザベル大統領、パンダラナイケ首相、ガンジー首相など。人気とり人事的な目玉商品型は米国のカラ・ヒルズ夫人、池田内閣の

近藤科学技術庁長官、中山厚相。愛人型は昨年アミン大統領のごきげんをそねて解任されたウガンダのパガヤ首相。とかく女性業績がないと「やっぱり女は」となる。

(2・23読売)

地方選挙の婦人議員

まだまだ少ない。学校、保育所、ゴミ処理と身近な問題が多いはずなのに。「有能な人がふえているのに、意欲が足りないのか、現状では、女のくせにナマイキだと、男性側の抵抗が強い」と市川房枝さん。

「住民運動や消費者運動で活躍するのに、政治は男の仕事と思う人が多い。女性が進出すれば、地方政治の構造をゆるがす大きな力になるはず」と横山桂次中央大教授。

(3・3朝日)

大量の女性候補

神奈川は十八人進出で全国一。身近な地域の問題とともに婦人の地位向上を強く打ち出し、婦人票の掘り起こしをはかる。

(4・10朝日)

女だけって気楽ヨ

独身女性ばかりの会社がない。況の荒波を泳ぎ回る。おしゃべりのできる美女、ナレターモデルのあっせんが主な仕事。珍しい商売とショーやパーティーに人気。同社四十六人の女性たち、笑いがとまらな

(3・6読売)

中ビ連「告発」

医学会総会の開かれる京都へ、中ビ連が乗り込み、「離婚宣告をされ、生活費ももらえない」と奥さんから告発された某医師に詰めより、ついに警官隊が出動。榎代表らは

女性抑圧を続ける医学界に反省をうながすため「医学会総会にも乗り込む」と。

(4・6朝日)

エンゼルー一〇番

育児に関する電話相談を受けている東京渋谷の赤ちゃん110番が「エンゼルー110番」を新設、妊娠中の相談も受ける。子どもが生まれてあわてる人が多いため、助産婦、保健婦受胎調節指導員などをスタッフに、育児の心がまえから、合理的出産準備などアドバイス。

(5・1朝日)

「現代衣服の源流展」にみる

この展覧会は、女性解放の記録でもある。コルセットでからだをしめつけていた衣服から女性を解放、ゆるやかなドレスにし、すそを上げたボワレ。セーター・カーデガン・

スーツなど社会に進出しはじめた女性の活動性をたくみに表現したシャネル、など、各種の抑圧から女性を解放し、現代女性の服装の原典となったものばかり。(4・1毎日)

女性のギャンブルファン 増加が目立つ

(財)余暇開発センターのギャンブル実態調査で、女性のギャンブル参加が目立ってきたことがわかった。四十六年の同じ調査からみると、女性のギャンブルファンは四倍になっている。(4・27中日)

ヤング夫妻の意識調査

東京のコミュニケーション・メントリス社が、二十年以上に生まれた夫婦を対象に。家計は、常に相談、合意の上で、と妻が四〇%ずつ、夫の小遣いは喫茶、昼食等職業費なのに妻は、趣味、交際費と

自由に使う。夫婦の関係は、

友人、恋人、父や兄のようだと楽しい関係を望む。妻の半分が自分でかせぐ。日常家事では夫の六人に一人がきまつて手伝う。交際は友達とつき合い、近所づきあいはなく他人に無関心。この意識について湯沢雅彦(お茶水女子大)は「こんな夫婦に子どもがでると、母子がひつつき、父がやや離れる日本的夫婦に変化していく、これらの夫婦が十年、二十年先にも友達意識を持ち続けたら、日本の夫婦関係も変った、と言える」と分析。(5・15朝日)

現代社会の共通のなやみ

『赤いカーネーションよ、さようなら』のビラをまき、「良妻賢母の母の日」に反対する運動が行なわれた。続発する子殺しの母親たちはごく当り前の母親と同じ状況の人

たち。すべてをわが身一つに背負い込んだ結果の子殺しなのだ。「子殺しで母性が論じられることがあっても、父性が論じられないのはなぜか」と神戸大教授橋本峰雄さんは問う。(5・16読売)

主婦

社会参加への厚い壁

「何のために食わせてるのか」という夫の言葉に気がね

しながら高速道路反対に出かける主婦。行動派でありながら、銀行員の夫の立場が気になり、政治色のある会合では表面に出ないようにする主婦。習い事に出かけるにもしゅうとのけん制。「女は、妻は、母はこうあるべき」という作られた社会通念をはみ出ると周囲の暗黙の制裁が待っている。(4・3朝日)

ただいま12人 こども天国

松本市の蟻川喜美雄(51)

旭子(45)さん一家は、二十五歳から三歳まで十男二女に恵まれ、底ぬけに明るい。上の五人はほぼ独立、別居。休みの日には皆が集まる。「百人いてもいい」という蟻川さんの夢は、好きなクラシック音楽を家族のオーケストラでやってみたいこと。(5・5信濃毎日)

妻の価値は無限

妻の家事労働を金銭的に評価するか否か論議されてから久しい。お手伝いをたのめば年間百万はかかる家事労働も妻の場合評価されないといふ不満という主婦。しかし本来妻の仕事は評価出来ないところに価値がある。その無限の存在を金銭に換算することは自ら妻の価値を否定すること。

妻の仕事を評価しないのではないが、そのことがかえって「女は家庭に戻れ、家を守る」ことだけが女本来の姿である」という論理に利用されることを恐れる。

(金岡 都 4・7 読売)

主婦に収入訓練の場を

武田京子さんの呼びかけで開かれた「主婦の出口づくり」の会に主婦二十人が集まる。

二十年、三十年、夫、しゅうとめにつかえても家事は評価されず、いつまでも女は一人で食べる力がない。生活力をためすためにやった内職は一月四千円。市民運動をやろうとしても手カセ、足カセになるのは夫と家庭、などの体験談。武田さんはこれを「グチに終わらせず、主婦が技術や資格を得られるよう具体的な行動を目標にしてゆきたい」と考える。(4・10 読売)

名古屋市長への婦人の声

名古屋市長が募集した「市長名古屋市が募集した「市長への提案(テーマ)婦人の立場から憲法と市政を考える」に五十九件が応募。婦人の関心が「働くこと」と「医療と保育」に向けられているという結果が出た。「婦人も働くのが当然」との考え方が浸透している。(4・29 中日)

離婚にみる家族生活

世界一離婚率の高いアメリカでそのもっとも大きい理由は、男女それぞれが夫婦生活の中で独立した個人として自己を大切に行っている点。愛し合っている結婚生活が自分の成長にマイナスと考えれば離婚することもあり得る。子供はほとんど問題にならない。戦後三十年日本の家族生活も大きく変わってきているが、アメリカに比べれば新しい

い家族の出現は遠い先の事である。(増田先吉、甲南大学教授 5・21 朝日)

保育

保育所は社会全体の問題

保育所は女子どもの問題ではない。育児の責任と権利は、男女平等に分担すべきだ。厚生省の保育に欠ける児童の概念も改めるべきだ。止むを得ず保育所で授かるという姿勢から、子どもをどう守り育てるかという積極的な姿勢に飛躍せねば保育行政の新しい価値は生れない。女は生涯を通じて働く権利と活動する権利があるはず。共働き女性から、孫の世話をお願いする年配の女性にまで保育所問題は切実。(田中寿美子 2・3 毎日)

障害児全入の保育園

豊中市では昨年四月から、

幼稚園、保育園で障害児保育を公的に認め希望するすべての子どもを受け入れる原則。

障害児の母親八十人がその一つ、岡町保育所を訪問。「隔離施設では得られない」保育に感動。(2・5 毎日)

ガンバレ若いお母さん

幼い子との生活は「つき合いい切れない」というところが多い。元気な子は一日中あとを追わねばならず、おとなしい子は一時もそばを離れてくれない。時には子供を突放し自分の時間と生活をもつことが必要。子どもをもった不自由は、自分を大切にしようとする母親の愛情によってのみ克服できる。(毛利子米 小児科医 2・6 毎日)

自主保育十年の努力

愛知県一宮市のかもめ共同保育園は共働きの母親たちが

ゼロ歳から二歳までの乳幼児のために十年前作った無認可保育所。月三万数千円の保育費では経営も困難。補助金の多い正式保育所の認可を、と懸命の努力をつづけた。その実績がみとめられ、県・市の補助金、県社会福祉協議会からの借金で、園舎建設のメドがたったが、二百万円の不足額にお母さんたちは歯をくいしばっている。(2・8毎日)

保育料の九二%アップ

「零歳児の保育料、月十二万七千円」——日本女子大学経営の保育所で、現行の六万六千円を九二%値上げのモーション案に、父母たちはぼう然。理事会は「人件費など経費からの逆算額」と答え、攻防が続きそう。(2・14毎日)

少し安くなったけれど……

同理事会は二十日、原案よ

り一六・五%下げ、最高十万六千円の改正案を同大教職員組合に提示。(2・21毎日)

ベビーホテル一泊一万円

①母親の労働権を守る②子どもの教育権を守る③母親が文化を享受する権利を守る——昭和二十二年、厚生省が保育所の目的とした三つの柱。しかし今の保育所は、せいぜい母親の労働権を守るだけ。そこで昨年十一月、東京杉並区に「メルヘン」が開設された。

母親の文化権を守ることを目標とし、ゼロ歳児も障害の子も預り、二十四時間保育も引き受ける。費用は二時間まで千六百円、三十分増すごとに五百円、一泊一万円。(2・21毎日)

子どもの病気にくじけず

保育園に送り迎えの途中のあわただしい診療。医師にも

母親にも、子どもに対するすまなさがある。しかしここでくじけないでほしい。一生の仕事をもとうとする母親は、真底に自分の主張をしっかりと持って多少の「ずぶとさ」が必要。背水の陣をしいてかかっている人は夫との家事分担も成功しているようだ。職場できたえられた目で保育所の内容を見きわめ、仕事に対する責任感から育児の自信も湧いてくる。

(毛利子来 小児科医 3・6毎日)

ゆらぐ無認可保育所

保育所に入れない児童は全国で九十七万人、不況下入所希望者は激増。全国で三千か所の無認可保育所に国の助成はゼロ。

十二年前に開所の牟礼共同保育所もその一つ。国の無策、周囲の無理解に傷つきつつ維

持してきた草分け的存在。「子どものどん欲に生きる力」にひきつけられてここにとび込んだ山田菜穂子さんは助手として父母と共に市への交渉、施設の不備とのたたかいに明けくれる実践の中で、「母親と集団保育とは車の両輪」と確信。(4・3毎日)

保育時間延長、労組拒否

大都市圏では全国的にはとんどの自治体が長時間保育を実施しているが、東京では八王子など三市はまだ。八時間勤務の母親たちの十年越しの訴えが実り、市当局は今年度からようやく開始することにした。

しかし労組では保育の労働過重と子どもへの悪影響を理由に反対。集団保育と自治体労働者のあり方をめぐって全国的波紋となりそう。(4・11毎日)

障害児保育に措置

大阪、八尾市では障害児を持つ三人の母親の努力を支援する人々の運動でやっと障害児措置がみとめられた。この成否は、すでに「共同保育」を実施している各自自治体と共に行政・保育担当者・親の三者が、今後いかにその中身を充実させていくにかかっている。

(4・17毎日)

足りない乳児保育

山口県下松市には公私立六つの保育所があるが乳児保育はゼロ。

共働きの安田さん(28)は三歳の坊やを郊外の団地から市内保育所に七時半までに送り込んだつらい過去を語る。この団地から市内保育所に通う子が百人もいる、と団地保育所づくりに取り組む。

(4・25朝日)

健康

豆腐でAF2中毒

発ガン性が立証され生産販売禁止のAF2による豆腐製造業者の皮膚炎や神経障害が問題となっているが、豆腐好きの主婦が、コメ代りに毎日食べ続けた結果、全身のしびれ、耳鳴りをおこし、高橋皖正東大講師はAF2中毒症と診断。この主婦はメーカーと国を相手に損害賠償の民事訴訟を提訴。

(2・19毎日)

合成洗剤の不安なくせ

参院公害対策特別委員会では、主婦の三五%が洗剤で皮膚障害を受けているのに安全とはおかしい、催奇形性や発ガン性、PCBとの複合汚染について早急に研究を、学校給食の野菜、果物洗いから合成洗剤を追放せよ、と関係各

省を追求した。しかし各省とも積極的な意気込みはみられず逃げ腰。

(3・27毎日)

ふたたび石油たんばく

安倍農相が「安全性が確認され、国民的合意が得られなければ一切認めない」と約束したおひざもとの同省研究機関が、これを打ち消し、早期実用化をうながす論文を発表し問題になっている。この論文は、飼料資源開発研究の責任者のポストにある吉田実研究室長が「醗酵協会誌」(一九七五年一号)に「SCP(微生物たんばく)の飼料化をめぐる諸問題」として発表したもの。

吉田氏は「あくまで個人的な見解で、農林省の隠された意図ととられるのは心外」としているが、消費者団体は農林省の真意ではないかと反発している。

(3・26毎日)

農林省を追及「拒否する会」

「土を生かし、石油タンバクを拒否する会」は、渋谷消費者センターで会合を開き、出席した農林省に対し同省が五十年程度から家畜飼料用に開発研究を進めるSCPの中に石油タンバクも含まれているのではないかと追及した。

(4・9毎日)

母乳運動その周辺

母乳育児を妨げているのは粉ミルク過信や母親の認識不足ばかりではない。PCBや農薬による母乳汚染を心配する母親も多い。母乳中の残留農薬の濃度はさがっていない。妊娠中の食物の不安にも、厚生省は答えていない。働く母が母乳育児を望むときに職場を失わずにすむ状況をつくることも同時に提言すべき

だ。(3・13毎日)

男性用ピル発見

メルボルン市の医師夫婦が安全で効果的な男性用経口避妊薬を発見。女性ホルモンと男性ホルモンを適切に組み合わせたもので、副作用は少ない。八か月の試用では、九週目から十八週目に無精子になったとの報告。(3・3朝日)

ピル解禁をめぐって

世界のピル使用人口は五千万人。日本でも四十五万人が使用。問題の血栓症は日本を含むアジア・アフリカでは出現率が極端に少ない。避妊効果は現在の避妊法の中では抜群。ただ、子を産み終り、長年避妊の必要がある人には、IUDや卵管結さつの方が副作用は少ない。(村上 旭 京都府立医大講師 4・17毎日)

母乳、言語障害を予防?

ニュージーランドで行なわれた研究の報告によると、出生後数週間母乳を与えることが、五、六歳の男児の言語障害を予防するのに役立つようす。母乳で育てられた男児は朗読能力、発音の明確さで、飲まなかった子に比べ明らかにすぐれているとのこと。女の子にはその差はみられず、理由は不明。(5・18朝日)

本

「わたしの飛驒」

早船ちよ著。ここ十年来、よそものの、旅びとの目で絶えず紹介され続けてきた飛驒を、ここで生まれ十六歳まで育った著者が「飛驒びとの目」を合わせ持つ複眼で見つめた書。けやき書房、八百円。(2・24毎日)

「かけがいのない出逢い」

宮部タキ編。市川房枝、桐島洋子ら五十二人の女性語る「私のおとこ友達」。おのろけあり、反省あり、主張もある。主婦だからこそ男友達をもとう、性を意識せずに語りあえる相手は夫を持つ主婦にこそ一番必要……。(4・6読売)

「ひとり暮らしの戦後史」

塩沢美代子・島田とみ子著。男たちが戦死し、また結婚できぬままに戦後三十年を生きた、戦中世代のひとり暮らしの女性たちの聞き書き。職業に役立つ教育をうけないまま、職業にかけて生きる結果に追いこまれた彼女たちの、社会的偏見、賃金、定年制など不当な差別をうけてきた苦難の歩みと今日の現実とを正

面にひきずり出して、問題をつきつけている。岩波書店、二百三十円。(4・28朝日)

「鹽草抄」

宇都宮貞子著。独特な味わいを持つ、正確な植物民俗採訪記録をつづっている。身辺の各種植物との日常の交流をくわしく聞き出し、方言を生かしたムダのない文章で、人間と植物が親密にとけ合う世界を生き生きと描出している。創文社、二千元。(4・7毎日)

「ママさん先生奮闘記」

安藤登美子著。たまたま夫について渡ったアメリカで教員の資格をとり、公立小学校で四年生を担任。二年間の教師生活を通じて見たアメリカの子どもの姿、公教育のあり方が生き生きと紹介されている。ジャパンタイムス社、八

百円。(3・8毎日)

「九津見房子の暦」

牧瀬菊枝著。明治の社会運動を生きて、大正の赤潮会をつくり、昭和の反戦活動を戦い抜いた九津見房子の半生、明治の社会主義からゾルゲ事件までを聞き書きしたもの。山辺健太郎、安田徳太郎、近藤真柄の三氏がまとめた聞き書きも含む。思想の科学社、千二百円。(4・21毎日)

「教育、青いノート」

早船ちよ著。「キューボラのある街」の作者の教育についての文章を集めたもの。自分の思い出に残る牧歌調の教育とは余りにも異質ないまの選別教育。その中で取り残されてゆく子、疎外される就職組、見すてられる心身障害者。母親の、作家の、目が教育不在の現実を鋭くとらえている。

草土文化、八五〇円。

(3・31毎日)

「ホビの国」

青木やよひ著。砂漠のインディアンホビ族をたずね、野生の思考に生きるホビ族の生活を描いたあとにアメリカ資本主義の姿を指摘し、それがいかに先住民族抑圧のうえにたった虚構の民主主義であるかを浮彫りにしたもの。潮出版社、四二〇円。(4・21毎日)

「愛の年代記」

塩野七生著。ルネッサンス期イタリアで起った愛の悲劇を描いたもの。愛情こもごもに情熱の限りを尽したこの期の人間の姿は、今日の人間観では推し測れないすさまじさだ。情念の世界を、女性らしい観察をおろこみながら、手際よく物語に仕立てている。

新潮社、七八〇円。

(4・14毎日)

「手仕事のおんな」

大谷晃一著。北海道から沖縄まで、手仕事ひと筋に生きてきた女たちを訪ね、その心と生き方をしるす。地方の風土と歴史に結びついた品物四十八種の作り方も聞き書き。それぞれが郷土の名産。その下地をつくった彼女らの無言の業績は貴い。朝日新聞社、八八〇円。(2・10読売)

「目で見える女性

ファッション史」

青木英夫、メイ・S青木著。ファッションは女性にとって感情や意図を表現する手段となる。コルセットやベチコートを重ねたスタイルは、性的魅力を誇張するためのものだった。またズボンをはくことで男女同権への願望を表わし

た。多くの写真を使い視覚的な衣服史であることが特徴。衣生活研究会、二千八百円。

(3・31毎日)

「身体障害と衣服のデザイン」

おしやれをしたい、機能的な服が着たいという身体障害者のための衣服を考ええたもの。障害の状況に応じたデザインの工夫。着る本人、介助者にも便利で楽しく心がけない分野だけに、ユニークな実用書。デザイナー樫木八重子さんを中心にとめられたもの。医業出版発行リハビリテーション・クリニックスNo.6、三千五百円。(4・25赤旗)

意見

安心して母となれる社会を女がはじめて子どもを生ん

だときの思いがけないほどの感動は、その後まもなく苦しみとなり、女、とくに働く女を圧迫することになりやすい。家庭、職場、育児、社会活動、すべてに意欲をもち生涯をフルに生きたいとのぞむ女性ほどジレンマは大きい。

母性という女の特質がよろこびとなり、女の生涯を貫く原動力とすることができる社会をつくり出せたら、人間はもっとしあわせだろう。

(田中寿美子 2・17毎日)

損と得

物を安く買った高く買ったということはそのまま損得につながらない。それを思いなやむことで身辺のものに対する感受性が閉ざされる方がずっと損なのだ。精神が富むことだけが得なのだと考えれば貧乏のどん底にいた時でも金のことは少しも考えず一切の

美に目を向けてきた私は長年大変得をしたと思っている。

(高橋たか子 2・24朝日)

大臣からの悪文

国際婦人年、婦人週間に三木総理、長谷川労働大臣から印刷されたおよそ魅力のないメッセージが届いた。それは訪中の折、私を主賓にし男性が拍手で迎えてくれた婦人デーの日のパーティーを想起させた。婦人週間のメッセージともなれば、女心をつかみとるほどの一言は入れてほしいもの。

(瀬戸内寂聴 3・29朝日)

PTAも奉仕の心で

PTAの幹事や役員になることを、多くの母親たちは逃げ回るが、わが子を含めた子どもたちのために、多少の間とエネルギーの奉仕をするのがPTAと考え、引き受け

る心になれたらと思う。小さな力でも、日本の教育をよい方向へ向けるために努力する姿勢こそが、わが子のために役立つことを、母親は自覚して欲しい。

(平岩弓枝 4・6中日)

女の手

電車中の若い二人連れ、女が手を動かして男のネクタイを結ぶ。あれが女の手、というものだと思う。この手が男をからめる手になるといふ事情があるから女自身が苦しい。今日の賃金体系の中で、

この女の手を労働力の再生産として賃金に組み入れるべき、という考えは、おもしろい。単に主婦労働を賃金にというのではなく女の手の社会化ということか。

女の手が愛情の重石をつけて女を引きずるからこれは女から提出される問題である。

(佐多稲子 4・21毎日)
男女の不公平は？

「国際婦人年」ということで「男女の不平等を直そう」と世界のあちこちで語り合われるらしいが、いま最もさんざんな目にあっているのは中年男性ではないか。「ろくでなし男性年(仮称)」の設置を呼びかけたいぐらいいだ。たとえば「国際母子家庭の年」とでも言ったら、中年男性も賛成するにちがいない。(無定見党/秒針 4・26中日)

駆け込み施設を

夜半すぎに赤ちゃんを背負った女性の来訪。夫が競馬に狂い、サラリーをつぎ込む、またはヤケ酒を飲み暴力のかぎりをつくす。こんなことから母子三人で暮らそうと家をとび出したが行先はないと。彼女のような母子はかなりの

数にのぼるはず、そんな母子が新しい道を開くまで、身を寄せ、再就職の訓練を受けられる施設があれば……と思う。

(吉武輝子 4・28朝日)

母乳運動への疑問

母乳運動ブームだが、母親側の状況をぬきにしてはいる。環境汚染による胎児や母乳への影響も不問。母乳の出すぎる人の分を保管し、足りない人、出ない人に配分するシステム、外出する母が自分のをしぼって保管し、他人が飲ませる方法など、スウェーデンの人乳運動に学ぶべきだ。日本の場合には母乳ではなく、家庭に帰れに聞える。

(青木やよひ 5・5毎日)

投書

「起きて夫を待て」は横暴

結婚して十二年、今まで夫

の帰りの遅いときは、先に寝ていたが、よそのご主人から「妻たるものは起きて待つべきだ」と聞かされ、がっかりしている。外で働いて報酬を得るのは大変なことだが、家庭の仕事もまじめな主婦にとってやさしいことではないのを認めて欲しい。

(1・28朝日)

家事、育児をやる私の夫

一歳と二歳の子を育てるだけのなまけ母ちゃんだが、夫はとても協力的。これは夫の母の育て方の成果である。小学生の頃からの習慣が今の彼を育てたもの。夫族への働きかけと同時に、息子たちを今から家事になれさせ、家事をいとわぬ大人に育てよう。

(2・14赤旗)

男にも家庭科教育を

つわりで苦しみ寝込む、夫

は帰宅後、あり合わせて食事をする。夫も料理ができればとつくづく思う。女は子どもを抱えても収入のメドがつけば生活できるのに、男は家事ができぬため、女手を失うと途方にくれる。これは家庭科教育の差別から生まれた悲劇だ。男にも家庭科教育をとかうびたい。

(4・11読売)

息子に料理と掃除を任せて

これからの男性は、社会に出て働く女性と結婚した時あわてぬように、小さい時から家事に慣れるべきと、春休み中、掃除、料理を小、中学生の息子に任せた。その結果は「腕が上ったから、独身主義だ」「料理上手のきれいな奥様がいいや」という意見。

(4・11朝日)

「女」の壁

小学校三年、炭鉱の町で自

分の将来を医者にと決心したが、私は女だった。父の猛反対にあい、自力でと思った時は戦争。結婚、職業をもち自分の足で生きたい!!と再就職を願う大学へ。しかし女!!女!!女は道具ではない。人間だ。私は女の解放こそ生涯の仕事と悟った。(3・16朝日)

「税金にもの申す」から

三年前、自分名義でマンションを買った。手付金二百万円は、夫の事業を手伝い、その給料をためた預金かららった。扶養控除はうけていないのに、二百万円は夫からもらったものと贈与税をとられた。女性とは自分で働いても、すべては亭主に隷属すると税務署はみるが……。

(3・17朝日)

国際婦人年は現実から

国際婦人年のキャンペーン

は華やかだが、高いところで高い人たちだけの運動で終わらぬよう望みたい。保育所一つをとっても未解決の婦人問題が山積している。毎日の生活でたった一つでも「ここが変った」と思えるような運動であつてほしい。(4・3朝日)

全身麻酔で死亡した母体

無痛分娩のために笑気ガスの全身麻酔を妊婦に無断でかけたので妊婦が死亡。医師は心不全による死亡を主張。死因も納得できないが、笑気ガスを無断で使用し、さらに犠牲者を出すことを恐れている。(4・12朝日)

娘に語りつく戦争

平和!! 子供たちに当り前のこの言葉の重みを知るためまたこれを失わぬため、幼い娘たちに戦争の悲惨さを語りつこう。(4・20朝日)

転職：収入は減ったが：

八時間勤務からパートの六時間勤務に変えた。年齢に比例して、子どもが成長したとき、疲れ果て、抜けがらのようになつては困る。差の二時間は貴重で、好きな本を読み、思索し、仲間と話し合い、やりたいことはいっぱいある。(4・23信濃毎日)

専門職に育児休暇を

「出産の権利は女教師にも」はもつともな意見。本来は働く女性すべてに長期の育児休暇が必要だが、とりあえず教師、保母、看護婦、医師その他の専門職にたずさわる人たちに一定期間の育児休暇のとれる制度の確立を要望する。(4・30朝日)

情報としての広告を

昔は老人に意見を聞いて生

活することができたが、新しい商品の開発で、主婦が頼りにするのは広告だけ。メーカーは売るためだけでなく、商品知識を豊富に含んだ、情報としての広告をして欲しい。(4・26中日)

看護婦の夫は立ち上った

共働き十七年目、妻は国立病院医療センターの看護婦。

いまセンターの既婚者は五十人。夜勤、高家賃、保育所でみな悪戦苦闘。先日有志が集まつて「センターに働く看護婦の夫の会」を発足。家庭生活を破壊する夜勤をへらせ、保育所に補助、既婚看護婦に宿舍を、と要求して。(4・29朝日)

女所帯への風当たり

敗戦一年後、夫に死別。子どもと実家に身を寄せて勤めに。二十年過ぎ、やっとの思

いで自分の家と土地を持つ。娘は嫁ぎ、一人暮らし。安心したのもつかの間、頭の痛いことが待ち受けている。女世帯への偏見、風当たりは予想以上。一人の人間として女

が生きていることは生やさしいことではないが、残された人生を自分なりに悔いなく生きてい。(5・1信濃毎日)

不況・しわよせ

母子四人無理心中

大阪府松原市、ミシン内職Mさん方で、長男(十二)次男(十)三男(四)の三人がふとんの中で、母親も近くの野井戸に飛び込んで死んでいった。夫を失い、さびしさから無理心中したらしい。(2・4朝日)

目立つ婦人の失業

不況しわよせで、下請工場が次々に閉鎖または縮小され多くの女性が失業。職安でも失業保険受給の女性が目立つ。好景気期には下請け工場が続出、低賃金の主婦がもてはやされたが、失業で苦しい家計にショックをうけている。

(2・5 赤旗)

「会社の都合で転校なんて」

閉鎖に揺れる企業内高校

鐘紡は、京都工場閉鎖、従業員は、工場内の洛北高等女学院で資格取得を目標に就職した者がほとんど。工場閉鎖し学院廃校の大ショックに、学習権闘争が噴火。

(2・9 毎日)

昨年春、鐘紡淀川でも学習権闘争が発生。闘争の先輩た

ちは「弱い立場の女子従業員は学習権を守り抜いて」と勵ましている。(2・11 毎日)

女子の就業者が激減

総理府発表の労働力調査。

就業者数は産業界の操短拡大で、四千九百七十五万人と、四十七年以来初めて五千万人を割った。とくに女子は前年同月に比べ、五十三万人も激減。不況のはね返りで、主婦のパートや内職がなくなっているため。主婦の失業で非労働力人口は大幅に増加。完全失業者は九十九万人。

(3・14 朝日)

内職の主婦犠牲

東東台東区のクツ製造業の作業場から出火、従業員のうち逃げ遅れたSさんが焼死。Sさんは夫と二人暮らし、家計のため日給二百円でクツの底づけ作業。

(2・20 朝日)

未婚の母、乳児を殺す

A子は二年前から内縁の夫と同居、アパートの自室で出産したが、両親が結婚に反対のため、赤ちゃんをビニールの米袋に入れそのまま放置。

(3・11 朝日)

「切り捨て」臨時雇いから

大企業から零細工場までひしめく川崎工場地帯ではクビ切り旋風。真っ先の対象はパートタイマーでほとんどが共働きの女性。平均月収四万は家計の一部。T製薬ではパート組合が結成されたが団交は平行線。切り捨ては常に弱い部分からで多くは泣き寝入り。

(4・2 朝日)

不公平な公団の家賃

公団住宅の家賃が四万円台になっている。公団に本当に

入居したいのは子も産めぬ木賃アパートから脱出したいと思う若い夫婦が多いはず。初期建設団地の入居者は高所得者が多いのに家賃は四、五千円。最近の入居者は若く、低所得者が多いのに家賃は高く、あまりに不公平。

(4・10 読売)

激化する女性「人べらし」

大企業は不況を口実に、合理化を強めている。他に収入のあるもの、共働き女性、五十歳以上の人が退職者の条件に該当するので、まず女性労働者にしわよせがくる。高度成長期に、大企業は安い賃金の女性で利益をあげながら、不況では首切り攻撃。しかし政府にはなんの施策もない。

(4・16 赤旗)

私の体を花で埋めて

東京の墨田区向島のアパー

トの屋上で四十九歳の女性が
焼身自殺。遺書には「葬式は
いらぬ。からだを花で埋め
て下さい」と。生活不安と独
り暮らしのさびしさからか。

(4・15 毎日)

自閉症の娘殺す

千葉県柏市の主婦が自閉症
の娘(十四歳)を殺し、自分
もそばで自殺。「治療に努力
したが精神的にも肉体的にも
限界に」との遺書。自閉症の
原因は未解明で、治療のキメ
手はなく社会復帰も困難な難
病。「自閉症児親の会」を中
心に国や自治体に救済を求め
る運動が起きている。

(4・17 朝日)

母は夜遊び、坊やは焼死

岩手県花巻市の木造アパート
の一室から出火、二歳の長
男が死亡。母親は長男と二人
暮らしでバーとめ。この夜

は子どもが寝たあと部屋にか
ぎをかけて外出中。

(4・22 朝日)

帰れぬ「からゆきさん」

部落解放同盟広島県連合会
は五月二日調査団をマレーシ
アに送り、明治大正時代、貧
困などで東南アジアなどに身
売りされ、帰国できなかった
「からゆきさん」の問題を調
べる。今八十歳前後の長崎・
熊本出身の八人の生存者も確
認された。

(4・23 朝日)

自殺の陰にうば捨て

日本に多い老女の自殺。動
けなくなつて貧しい家のやつ
かい者になるよりは、と死を選
ぶ。自己犠牲、夫に死なれ
たさびしさ、主婦権を譲つた
あとのむなしさ、動けなくな
つたつらさなどから。新潟、
岩手、高知、島根など過疎地
に多い老人の自殺に共通して

いる。現代に生きる「うば捨
て」の伝統。(4・26 朝日)

夫の暴力にたまりかね

頭と両足を切断した死体が
横須賀市大津漁港で発見され
た事件で、内縁の妻が逮捕さ
れた。日ごろの夫の乱暴がひ
どく、たまりかねて発作的な
犯行。

(4・28 朝日)

赤ちゃんを殺し捨てる

生後二か月半のわが子を殺
し、ゴミ集積場に捨てた母親
が緊急逮捕された。母親は、
「育児費用が足りず、子ども
を育てる自信がなくなつた」
と自供。

(4・28 朝日)

スト休日の園児、水死

東京葛飾の中川で、三歳の
坊やが水死。共かせぎの両親
は、ストの中を懸命に出勤。
保育園がスト休日で親類にあ
ずけられていた間の悲しいで

きこと。(5・10 朝日)

夫ヘツラあての子殺し

四年間に産んだばかりの子
ども四人を次々に殺した疑い
で大阪高槻署に逮捕された主
婦は、「産んだ子どもは全部
男。生活が苦しく、夫が子ども
に関心を持たず冷淡、妊娠を
知っても声もかけないほどの
断絶状態。ツラあてに殺した」
と動機を自供。(5・10 朝日)

夜の共かせぎと子ども

東京練馬の路上で夜十時頃
針金で両手をしばられたはだ
しの四、五歳の幼女を発見。
両親は夜の共かせぎで、二人
の子の世話ができず、長女の
手をしばり外出しないよう言
いふくめていた。

(5・10 朝日)

きびしい内職戦線

今年一月―三月の求人前

年度比で一〇%減、求職は三倍。主婦の内職希望はふえる一方だが、せいぜい、月一万九千円足らず。低賃金の理由は技能の低さ、認識の甘さに。「技能なし、認識なし」の無い職から脱皮する意欲がほしい。

(5・17日経)

差別

男女別だて募集

早大の就職内定者は昨年末現在で男子70%女子45%。求人企業は六千社にのぼるが女性に門を開いたのは8%足らず。それも男女別だて募集。自宅通勤などの制約がつき、男子は学力試験、女子は一般教養程度。男女同じ条件で採用する会社は珍しい。

(3・20朝日)

真っ先に首切りの的

秋田県能代市のA工業では昨年九月女性パート全員を解雇。十一月、三十九歳以上の女性社員二十六名クビ。不況下では日雇労働の夫の仕事も少ない。労組は「女は一家の大黒柱でないから」と、取上げない。ストもならず、二月末「なんで女が犠牲にならないければならないか」とピラをまく。この一年、男性の失職者二万人、女性は一十三万。

(3・23朝日)

共働き教師は校長に不適任 教員の妻を持つ夫は管理職に不適格として、校長のポストと妻の退職を交換条件に迫られ、定年一年前に退職をすすめられた山口県の江中先生は「妻をイケニユとしてポストにつくのは差別」と今もヒラ教員で頑張り、県人事委に訴えた。山口県の小中学校では妻が教員をやめねば夫は教

頭にはなれずこれに見習う府県はふえるばかり。

(3・25朝日)

学問の世界にも男女差

A子さん(31)は京大工学部の教務技官。男性にとって、助手のポスト待ちの身分であるが女性にとっては待つべきポストはない。後輩の男子が助手に昇格するのをむなししい思いで見送る。研究室の雑務に追われ、ゼミや共同研究の成果もあげられない。それでも研究をつづけたいばかりに給料も低く時間にしばられる身分に割り切れぬ思いを抱きながら職場を離れられない。

(3・27朝日)

まだ残る結婚退職制

名古屋放送の「三十歳定年制廃止」の勝訴以来、結婚退職制や若年定年制はさすがに姿を消しつつある。しかし会

社の慣行として暗に既婚者をやめさせようとはたらきかける実質的定年制は今も根強く続いている。その一人Y子さんは結婚一か月後会社から退職を言いわたされたが、労基署に文書で訴え撤回させた。仲間の二人は結婚後「慣行」通り辞めていった。

(3・30朝日)

勤続二十六年でヒラ社員

独身で仕事一途のA子さんは四十七歳の商社員。輸出関係の書類づくり、タイピストのまとめ役や上役からの人事の相談まで実際は管理職として活躍しているが同社には女性管理職のポストなし。男女の別なく仕事を評価してほしいという声に、男性は「なぜそんなに出世したがるのか」管理職中の女性比率は、日本では五・九%、アメリカ一五%。

(4・2朝日)

初任給は同じでも

大手繊維メーカー、どちら
も中卒で三十五歳。M夫さん
月収十三万円、F子さん八万
五千元。三十五歳になれば男
性は責任者となり世帯手当、
家賃に応じた住宅手当がつく。
女性には三十年間も切れた糸
をつなぐ仕事だけで十万円
そこそこ。ある銀行では事務
主任の試験もあるが女性は一
事考課で落される。生活を支
える男性を落とす組合が黙っ
ていないとか。

女性はいくまで家計補助者
としか考えられていない。

(4・4朝日)

母性保護理由に配転

横浜の東洋鋼鉄で産休あけ
に購買係から独身寮職員に配
転になった女性。地裁に地位
保全の仮処分を申請し一審で
は「配転で働く意欲を失わせ

退職させようとの推認」とい
う裁判所の判定で勝訴した
が、二審では、「産後の低能率
者に一人前の仕事を与えるの
はかえって人権問題」と母性
保護を逆手にとった会社側の
主張が通り、敗訴。現在本訴
を起し公判中。(4・8朝日)

差別、賃金格差なくせ

同盟の塩田婦人委員会主査
らは、ILO百十一号条約―
雇用および職業についての差
別待遇に関する条約―をすみ
やかに批准し男女間の差別を
廃止し、同一賃金法を制定す
ることを長谷川労相に申し入
れた。

(4・18毎日)

女ゆえに先生自殺

東京港区で六か月の乳児を
かかえる小学校教師が自殺。
産休を十六週間とったところ
「規定いっぱい産休をとるよ
うな女教師にうちの子を任せ

られない」と一部の母親たち
に突き上げられ、自信を失っ
たものとみられる。

* *

基本的には、男と女の先生
に力量の差はない。出産、育
児などが女教師に教職に専念
するのを妨げることは起こり
得るが、それなら母性を支え
る制度の保障を要求するのが
母親本来の主張であるべき
だ。(樋口恵子4・13毎日)

出産の権利女教師にも

社会は、子を産む女を守る

義務があり、女たちは子と自
分の身体を守る権利があるは
ず。かつて自分たちも乳児を
かかえた若い母親ではなかつ
たか。教師とても女であり母
である。母親たちは、女教師
一人に大きな犠牲を強いるべ
きではなく、女という同じ職
線に立ち母性と子どもの権利
を主張し、守ってゆくべきで

はないか。(投書、4・20朝日)

女性保護法は足かせの時も

米労働省婦人局長、カル
マン・マイミール来日。

アメリカでは、女性差別に
利用されそうな、女子の夜勤
や過勤に関する法律は廃止し
逆に重量制限規定などの法を
男性にも適用することが、女
性の職場を拡げ賃金を引き上
げる道と考えている。米国憲
法の男女平等修正案もあと三
州の批准を得れば成立させら
れる。

(4・18読売)

父子家庭にも年金を

働きながら男手一つで子ど
もを育てる苦勞は母子家庭以
上だが、国も自治体も、父子
家庭には社会保障ゼロ。収入
がよいとか再婚率が高いこと
を理由にされているが差別で
ある。兵庫県尼崎市は昨年四
月から年金制度(月三千二百

円、一人ふえることに千円増)を実施、新潟県中里村でも父子手当(月額千円)を支給している。尼崎市を見習うよう運動をすすめた。

(「父子家庭の会」会長・相山政治 4・23サンケイ)

国際婦人年

国際婦人年事務局長に聞く

女性史研究家、伊地知優子さんはニューヨークの国連本部にヘルビ・シピラ夫人を訪問。「発展と平和という目標について、社会の各分野の発展に寄与するのは男性と考えられてきたが、女性も企画から決定までの重要な場に参加するチャンスを与えられないと能力は発揮できない。戦争はいつも男が起こした。平和により貢献するには女性が政治

力を持つべきだ」と語った。

(2・21読売)

婦人年をめぐって

婦人年最大の行事は六月十九日から七月二日までメキシコで開催の国連主催、国際婦人年世界会議。また十月十日から二十四日まで東ベルリンで国際民主婦人連盟の呼びかけで世界婦人大会、六月にはILO総会で婦人労働者の問題をとり上げる。日本では第二十七回婦人週間のテーマ、「男女の平等と社会参加をすすめる」。十一月労働省主催国際婦人年中央記念行事、国連NGO国内婦人委員会の国際婦人年日本大会を予定。

(4・3読売)

行動を起す会

五日婦選会館「行動を起す会」で、十一歳から六十九歳までの女性百人が差別体験の

実体を語り合った。

実力も経験もあるのに十年間も臨時雇用のままの女性編集者。女性教師も多いのに女は家の仕事をするものと教える教育。出口のない主婦の座から、地域、反戦運動を通じて自由をたたかいた奥さん。税制上の保護を訴える独身女性。「生意気だ。女のくせに」といわれるという小学生など。あらゆる面で「私たちは行動を起します」という宣言文で閉幕。

(4・10毎日)

婦人年のバッジはいかが

日本国際連合協会がシンボルマークをデザインしたバッジ、タイタック、プローチを売る。収益は婦人年行事の費用に寄付。

申し込み先、

(〇三—270—四七三二)

(4・10朝日)

ベトナム代表を招待

国連経済社会理事会は国際婦人年会議に南ベトナム臨時革命政府招待の決議を採択。時期尚早と反対の米代表と、招請動議提出の中国代表は激しい論戦を展開。

(5・7朝日)

海外

〔中国〕

北京の店にドレス「復活」

毛沢東主席夫人で党政治局員江青女史が二年近く前、公式行事に出席のときのファッションがうわさをまいたが、最近北京市内の有名店に堂々とドレス展示、一般市民がドレスをみるのは文化大革命以来とか。スカートはブリーツとタイトで色はピンク、花模様もある。

(4・3朝日)

「タイ」

大月月刊誌で女性特集号

タイ国立チュラロンコン大
文学部月刊誌初の女性特集。

女性側「女でも国家に奉仕
できる。アジアでは女を低く
見がちで差別的。権利獲得に
がんばる。議会にもっと女性
を」。男性側は「男女平等は経
済発展にも不可欠。不平等な
法律は早急に改正を」。

(3・6朝日)

「ベトナム」

女性將軍

南ベトナム臨時革命政府の
要人グエン・チ・ジン女史は
人民解放武装勢力副司令官と
同時に、解放勢力婦人組織の
頂点に立つ人。農村に生れ少
女の頃から独立運動に参加、
投獄され、革命家、指導者で
あった夫を獄中で失ったジン

夫人は、女が男に与える激励
と女の持つ忍耐強さ、民族解
放闘争の中で果す女性の役割
を熱っぽく語る。

(5・15朝日)

北の兵士に南娘

南ベトナム臨時革命政府は
規律正しい北部ベトナム人と
物事にこだわらず享楽的な南
部の人たちのきずなを固める
方法として、両者の定住と結
婚を奨励しているもよう。北
軍兵士たちは「北部に帰らな
い、南部で結婚して落ち着く、
まだ未開の土地がたくさんあ
るから」と語っている。

(5・17朝日)

「インド」

女性銀行

二年前、農家の主婦数人か
ら「牛を数頭買って小さな乳
業会社を作りたいが」との相

談に、若い社会事業家が組織
した「女性による女性のため
の銀行」が立派に成長し、三
十を越す支店と一万人以上の
株主をもち、インディラ共同
銀行の名で経済活動、社会的
地位向上に大いに役立ってい
る。

(3・5朝日)

消費者運動首相呼びかけ

インディラ・ガンジー首相
はYWCA百周年祝賀会で
「悪徳業者に対抗する強力な
運動組織を」と呼びかけ、ま
た教育ある婦人は社会に役立
つウーマン・パワー実現に奉
仕の精神をもつこと、力の点
で少数派の女性を支援するこ
とで、多数派の男性も自らを
助けると語った。(3・27朝日)

女性首相のためいき

ガンジー首相はニューデリ
ー国際婦人年全国大会で早
婚・持参金・世襲身分階級制

度、文盲などの追放、衛生運
動、家族計画、婦人の教育普
及を説き「男たちは婦人年
にうんざりと語り、同権を求
める女性を笑う」と非難。

(4・24朝日)

「バングラデシュ」

結婚禁止年の提案

人口増加の悩みに、家族計
画の専門家ノル・イスラム・
カーン氏は「結婚を一年おき
に全面禁止する法案を」とい
う大胆な提案を行なった。と
りあえず七六年、七八年を結
婚禁止年にしようとする主張し
ている。

(2・22毎日)

「トルコ」

はるかな女性の地位向上

トルコの女性参政権は、バ
ルカン戦争や第一次大戦の女
性の活躍を評価して日本より

過程。
(3・5朝日)

女で——よかった

女に生まれてよかった。生理学者としていえば、女性の体は潜在的には男性性よりはるかに強い、とアントニナ・フリブコワ女史が発言。

(ソ連教育学アカデミー副総裁・生物学博士 4・12毎日)

〔西ドイツ〕

妊娠中絶は違法

西独憲法裁は二十五日、受精卵後十二週間までの中絶を自由化する刑法改正案を違憲と判決した。人間の尊厳は侵せぬというもの。従来の母体危険、出生児障害の予想・乱暴などによる妊娠の場合のほか、社会的必要(貧困など)に基づく危険から守る場合も認められた点が異なった。

(2・26読売)

〔チェコスロバキア〕

母子保護に国家予算の9%

広範できめこまかな社会保障制度は社会主義国の通例だが、チェコの水準は最高。すべての子に支給される児童手当を勤労者平均月収に対応させると、第二子にはその二一・四%、第三子四三%、第四子六三・七%、産休二十六週で全国家予算の9%。

(2・26朝日)

三度映画化「女ロビンソン」

男の子にだけ「ロビンソン・クルーソー」の話があるのは不公平だと、チェコの女流作家が社会主義的立場から書いた少女小説としてまれにみる成功を収めた作品「女ロビンソン」が一九五六年来三度映画化。急死した母にかわり十四歳の少女が生活を学びゆく

てきたガーナは、どの分野でも女性の権限が強い。

マミー(女性) マーケット

は数万人が入る広さ、女の迫力がムンムン。恋愛や結婚でも女性優位、金持の女は若い恋人をきれいに着飾らせて自分のそばに置く。

(2・10—13毎日)

〔ニュージーランド〕

現役ママ大臣来日

ニュージーランドの観光・環境大臣ティカテキ・サリバンさん(43)が観光展出席のため来日。

マオリ族出身で専攻は政治社会学。林業大臣の父の死後政界入り、活躍を認められて大臣就任以来、国営ホテル理事會理事に。世界人口會議の政府代表団全員には「実力ある」女性を登用したという。

(2・15朝日)

早く得られ、今年で四十一年目を迎えるが、せっかくの権利も生きていない。十八人もいた下院女性議員の数は選挙の度に減り、殊に地方では女性の地位は低く、教育の機会も少ない。(2・12朝日)

〔エジプト〕

カルスーム・その歌その死

「アラブの歌姫」ウム・カルスームの死去の報はアラブ世界を悲しみの底に沈めた。微妙な節まわしと情感のこもった歌は人々をとらえた。「アラブの心を最も巧みに歌った人民の芸術家」と首相も悼辞をおくり、国民葬。

(2・5読売)

〔ガーナ〕

女性の迫力、ムンムン

母系社会を伝統的に維持し

「フランス」

女性の地位向上の動き

まだまだ男女平等とはほど遠いフランス社会で、女性の地位向上の動きが始まっている。新設された「女性の地位」担当相（閣外相）に起用されたフランソワーズ・ジルー女史が、その先兵。「女性問題は根本問題」というフェミニスト、ジスカールデスタン大統領のツルの一声で始まった動き。

(2・22毎日)

大統領はフェミニスト？

パリの「婦人国際デー大会」で、ジスカールデスタン大統領は「人類の歴史は奴隷制とともに始まり、最初の奴隷は女性だった」と演説、現存の格差を指摘して、三項目を提案した。

「イギリス」

英で初の女性党首

十一日行なわれた野党、保守党の党首選挙第二回投票でサッチャー女史（前教育相）は男性候補四人を破り、保守党党首の座を獲得した。

一九二五年生まれ、オックスフォード大卒、五九年以来下院議員、七〇—七四年教育相をつとめる。双子の一男一女の母。

(2・12毎日)

* この当選によせて——。

市川房枝さん——具体的な事実で婦人の地位向上の示された意味を考えてほしい。

榎美沙子さん——料亭政治まかり通る日本の政界では無理。女性党を作るべきです。

山高しげりさん——日本でも女性には政治に不向きとの声は減り、底流は育つてるのは——。いい刺激です。

(2・12読売)

サッチャー女史

女人禁制クラブ入り

英保守党社交クラブ「カールトン・クラブ」は、百五十年来の「女人禁制」の伝統を破り、サッチャー新保守党党首を正式メンバーとして入会させることを決定した。

(3・5朝日)

英政府が男女同権法案

英政府は十二日「世界でもっとも包括的な性差別禁止立法」を下院に提出した。雇用、教育、社会慣習の全分野をとらえ特にこれまでもれていた「悪意ない差別」も対象化、「無意識で」と逃げる道を封じた。職種、教育科目、営利目的の社交クラブ、組織結成など平等に解放されないと立法後は違法となる。

(3・13朝日)

女性輕視と議員憤慨

「英議會はヨーロッパ隨一の差別社会」と「ザ・タイムス」にぶちまけたのは労働黨議員十年選手のルネ・シヨート女史。婦人議員が生まれて五十七年、最高記録は一九六四年の二十九人だが、政界入りが出おくれたり、男には問われない家庭問題に立ち入られたり。

(3・23朝日)

紳士の国にも暴力亭主

夫の暴力から逃れて、英国人母子一行十九人が欧州へ二週間の「遊説」に旅立った。

暗い体験を訴え、英国の女性援助グループの基金募金を兼ねて「駆け込み施設」を全国につくる呼びかけ。英国では三年前こうした施設をつくり四十八時間以上の滞在者だけで母親五百八十四人、子ども千二百人。(4・21朝日)

「スウェーデン」

家庭にも保育手当

外で働く女性が増えるにつれ、保育所不足は慢性化、そこでイエテボリ市が音頭をとり、個人的に子どもを預けあっている家庭にも一時間三百五十円の保育手当を出す。また自分の住居を使わずにすむよう、市が空いているアパートを一時託児所として提供するとのこと。(5・2朝日)

「ブラジル」

妻の売買に法度

ブラジルでは一九四〇年来の現行刑法改正中で、環境汚染当事者の刑事責任も明確化した。女性関係の特異条項を拾うと——妻を売買、貸す、かけ事の対象とするなど三年以下の懲役。(3・25朝日)

「キューバ・ペルー」

女性は強く、また強く

キューバでは新家族法により夫の家事分担が法律上の義務となる。「能力と可能性に応じ」との微妙な一項に基づいて分担をしない亭主族はそれを理由に離婚の危険にさらされるかも。

一方、革命軍事政権下のペルーでは、女性の兵役が義務制となり、今年十八歳になる全女性の兵隊検査が始まった。十九から四十五までの女性には平和時は予備軍、戦時は現役。いずれもリブ史上初の快挙。(3・8読売)

「カナダ」

法律知識をホームドラマで

法律を知らないために損をする婦人が多いので、パンク

ーバーのラジオ放送局は法律を組みこんだホームドラマ(毎日五分)を作り、個人の権利意識を高めようと企画している。(2・12朝日)

リブ「体现」の元市長永眠

オタワで元名物女性市長シヤロット・ウィトン博士(79)の永眠が伝えられた。五期市長をつとめた後市議員。「女性は男性の二倍の力量を発揮せねばならないが幸い大して難しいことではない」と女性の社会進出を常に勧め、リブの生れるはるかにリブ体现。(2・26朝日)

「アメリカ」

女大臣登用に強い風当たり

フォード米大統領は十三日空席となっていた住宅都市開発長官にカーラ・アンダーソン・ヒルズ女史の指名を正式

発表。しかし二十年ぶりの女性長官指名に議会、業界の反応はきびしく「女史が住宅、都市問題にズブの素人」を理由に、さっそう横やり。

(2・15毎日・読売)

男を差別するな!

ボストンでは州と市の男女差別撤廃委員会に「女性更衣室の係員といえども、男性をも雇用すべきだ」と申し入れられ市当局は「平等とはいっても」と、州委員会に原則修正を働きかけている。市営プールの女性更衣室係員募集に優秀な男性応募者が出現したため。

(2・24朝日)

子どもを作らぬ全国組織

「親にならない自由」を主張する組織が三年前ボルチモアに創立、全米で会員二千人を超すという。三分の一が独身。「親になることの神話」

「子を持つだけで尊敬される時代の終り」など討議。

(4・4朝日)

反対したのは——おんな

最近「ニューヨーク・タイムス紙」女性記者が取材のため、アイスホッケー選手たちのロッカールームに押しかけたが「夫の裸を他の女性に見せるなんて」と奥さんたち。夫に投票させて「女性入室お断り」になった。

(4・9朝日)

仕送り怠る父親にこわい法

離婚急増の米国では政府の補助を受ける母子家庭約三百万。子どもの扶養義務を逃れるため他州に移住するなどの父親急増で「全国的な拘束力をもつ連邦法」が望まれているが、このたび制定された連邦法の条項には——父親追跡の資料に協力。親捜し機関設立。裁判訴訟、未納金回収

担当。公務員、軍属の場合給料差し引き。

(4・9朝日)

男女差なく仕事選ぶ訓練校

ブルックリンのエリ・ホイットニ高校は毎年約五百人の新入生を迎える職業訓練校。ウーマンリブ大賛成派の校長は伝統と無関係に自由選択のユニークで大胆な課程実施。

ある男子学生は「初めラジオ・テレビの修繕のつもりが美容師に決めた。人間の手では出来ず独創性が生かせる」と語った。

(4・9朝日)

刑務所も男女共同

過去一年間に、六つの刑務所が、ウーマン・リブからの要求と経済的理由で、男女共に。刑務所が「家庭」のようになり、前科者の再犯率が激減。

(4・11朝日)

許された夫婦別姓

結婚後も旧姓を守り通した婦人解放運動家の名を記念した「ルーシー・ストーン同盟」は一九二一年発足以来会員は着実に増加。先ごろテネシー最高裁が「妻は必ずしも夫姓を名のらなくてもよい」と判決した。州最高裁が夫婦別姓を認めたのはメリーランド、ウィスコンシンに次ぎ三番目。

(4・30朝日)

売られた赤ちゃん五千人

赤ちゃんを生む未婚の母と養子のほしい夫婦の間で赤ちゃんを売買するヤミ市場が、上院で問題に。売買された赤ちゃんは七一年一年間で五千人。その後も急激に増加。未婚の母には、生活費、出産費用などを払う。養子の赤ちゃんは不足気味で、正規の手続きでもらおうとすると、三年から七年も待たなければならぬ。

(5・19朝日)

国際婦人年、メキシコ・キューバ「あじらの旅」第一信

ともかくメキシコに到着

「あじら」の発行と出発の日が重なったことは、このたびの旅行にかなり、致命的な要素でした。斉藤さんと川上編集者は当日まで徹夜作業、それでも残務と旅行の余波は全部あじらの人びとに押し寄せたことと思います。

六月に入ってから飛行機の都合で、キューバ入国の可能性が二転三転し、出発前日にはかんじんの観光会社が旅行の中止を言い出す始末。最初から波乱に富んだふんいきでした。ただでさえ迷いに迷っていた私は、一時は旅立ちを断念しましたが、出発三日前キューバへの飛行機がとれ、叱咤激励されてやっと腰を上げた次第です。

こんな状況の中で本命の国際婦人会議、トリビューンのような、雲をつかむような情報しがなく、私たちがどのような形で、どの程度そこに参加できるのか皆目見当が付きません。ともかく行ってみなければわからないとい

う気持は、ほかの方々も同様ではないでしょうか。

出発前、三、四回の会合で話し合いはしたものの、参加者は北海道から沖縄に及んでいるため、なかには羽田空港で初対面の方もあり、挨拶もそこそこ私たち十八名は、六月十七日午後五時、機上の客となりました。

サンフランシスコで生れて初めて外国の地を踏んだわけですが、そのとたん団長のスーツケースが行方不明になる事件。時差ぼけのままマイクロバスにのせられて市内観光、シスコの街はふしぎとコカコーラの看板の見当らない落ちついたふんいきでしたが、途中バスからおろされ自由行動、ふらふらになってホテルに着いた第一夜は、前々からの睡眠不足もたたって、私はもう一週間も旅をしている気持でした。翌十八日メキシコ・シティ着。いよいよスペイン語圏という言葉の通じない世界に入るため、あらかじめ斉藤さんが紹介を受けている通訳、阿波氏と

の出会いが、私たちの最大の問題でした。どの空港にも知人を迎えるために大勢の人が集まっているのが、なぜかその人たちはみんな、私たち一行を出迎えてくれているような気がします。その大勢の混雑の中から、たがいに一面識もない人間を探し出すのは容易なことではありません。そのとき、「アワさんいますか？」とむらがる人波の上を吹きわたるような一声。「やったー！」と思いました。川上さんの美声が人助けをしたのはこれが二度目。最初にはサンフランシスコの繁華街。この声が、名物ケーブルに一人で乗ってしまった福田さんを無事下車させました。私はいつも川上さんの照れ臭さを一身に負ってニヤニヤしているのですが、ご当人はさほどもないようです。貴重な声の持主です。おかげで阿波氏と無事対面。デル・ブラドの第一夜は、翌日のトリビューンにそなえてのミートینگで夜がふけました。

私たち旅行団は、女子大学の学長、

弁護士、ジャーナリスト、著述家など、多士済々。はては、日本を離れることが一つの行動などと、あまりばつとしない私のような主婦までまぎれ込んだ混成チーム、出発前のあまりの多忙さと、さまざまなハプニングの連続で、自己紹介の余裕もないまま旅の道連れになった次第です。職業という背景を背負って、各自がトリビーンに何を期待するか、何を自己主張するかというところまで深く話し合いが出来ぬまま、十九日の開会式を迎えようとしています。

(平岡ふき子)

ガッカリ・ガククリ・ガクゼン：

立つ鳥アトをにごしての出発、スミマセン。11号、たいへんと思います。私たちが、飛行機に乗ったら眠れると、それだけを楽しみにしていたのですけど、上陸第一歩で私のスーツケースが紛失。マウアさんにせっかく吹込んでいただいたカセット・テープと、会議のための資料が消失したのは、ほんとにガッカリしました。あのテープを聞いて発音を練習しようと思ひ、いや

いやそれよりも、テープをそのまま流せばいい！ ナント名案！と思ひつき、ニンマリはほえんでいたのですが、どこまでも今度の旅はツイテナイようです。

もつともメキシコ・シティに着いて、想像以上の現実にガク然としました。ダンボールのようなものを身にまとっている老女、町角から不意によごれた手をさしのべて物乞いをする子連れ女たち。午前一時のマリアッチ広場では五歳になるかならぬかの女の子が、小さなチョコレートを売っています。

「ブエノス・タルデス」(こんばんは)と覚えてたのスペイン語で話しかけても、大きな目をパチッと開いたまま、ニコリともしません。その横を、奇怪な模様の男のボンチョに包まれて、細い娘の足が闇に消えていきます。十一か二か、女にもなっていない年ごろのようですのに！

手の中の赤ん坊が飢えていこうとしている国での、女性解放会議。何をどう訴えればよいのか、リポートは全面的に書き換えなくてははいけないのでは

ないか、と早くも痛烈に心を突き崩されました。しかしミーティングでは、既定方針どおりに……と決定。重い心です。

でも恐らく、私たちが何かを発表することは、まず無理でしょう。三千人の人ごみの中で、情報交換を求める例の英文のチラシがまけたら大成功だと思ひます。目を見開き、心をすまして、世界の人々から学ぶことに専心したいと考えています。もつとも日ごろの不勉強がたたって語学オンチ、ツンボに近い情なさですが……。

一方、現地に来ても、キューバからの帰路の飛行機便が確定せず、日航にお願いにうかがうなど、相変らずの秒読み続き。事務局の人たちが過労で倒れなければいいけど、と心配しています。頭も目もフラフラするのは、極彩色にいろどられた建物や、二千二百メートルの稀薄な酸素のせいだけではなさそうですが、あごらダマシイ(?)で頭張りましよう。旅の準備をすめながら参加できなかった方々の痛みと共に行動したいと思ひます。(斎藤千代)

報道された「あごら」

できるだけ目立たず地味に——が「あごら」のモットー。マスコミへの発表は極力ひかえていましたが、一部の新聞・雑誌に少しずつ報道されるようになりました。報道されるごとに輪がひろがっていくのを感じます。ご紹介下さった方々にお礼を申し上げ、その一部をご紹介します。



あいらのあいら

読者の広場です。反論、感想、情報——なんでもどしどしお寄せください

あいら10号

ヤングジュリストに見る

男性のホンネ

記念号のためもあったかもしれませんが、特に興味深く読ませていただきました。法律の知識にうとい私には大変勉強にもなりましたし、また全体の記事を通して女性差別の問題の本質が、いくらかつかめたような気がします。

中で、ヤング・ジュリストのゼミの記事には説明し難い、いらだたしさのようなものを覚えしました。一筆したためずにはいられなくなったのも、この記事のおかげです。まだ実社会に出ない若者たちの、多分に観念論的なものともいえましようが、それにしてもここには日本の男性一般のホンネが見事に表われていると思います。一方、男性依存に疑義を持たないどころか、むしろそれを最高の幸福と考

えている女性(若い世代にも)が多く存在することも現実なのですから、伝統的に受け継がれてきた男性の女性観なるものが、容易に変わるものではないことも当然なのかもしれません。いろいろな記事で、希望的な前進が期待されるように見えても、人間の意識、考え方が変化しにくいことを思えば、いまだ遠しの感がい

たします。それでもなお、三十歳定年闘争の、頭の下るような記録は、地道な努力が決して無駄ではないことを教えてくれます。ともかく女性の自覚がすべての原動力となるのではないでしうか。 高宮 弘子

名古屋放送の記録に感銘

マンネリ化した主婦業に安住しつつある現在の私を、これほどまでに心ときめかしてくれた雑誌は、かつてないと

言っても決して過言ではないと思います。

第十号「名古屋放送女子若年定年制」のバイタリティあふれるお二人の記録を吸い込まれるごとくに読み終えました。闘志を燃やして戦い抜く気魄ある姿と、子どもをかかえて生きていくぎりぎり境界の姿が、実に巧妙に記載されていると思いました。大なる目標を眼前に置くことは立派に生きていく姿勢を具体的に教えてくれています。この記録は生きていく道を真剣に考え、明日への鋭気を養う糧となるものだと思います。

私も狭い視野に閉じこまることなく「あいら」を生活の潤滑油や活力剤として、私の行動において、どんな困難も克服できる意欲を少しでも培いたいと願っています。私もあいらの大ファンになりそうです。

T・Y

う。なぜ主婦には休暇がないのだろう。(なぜ生理休暇を有給にせよと要求することが管理職の残業は無給でいい、主婦には休暇はなくていいといっているかの如く思うのだろう。それぞれに要求したらいいのではないだろうか。誰も人にかわってやれないのです)

・生理休暇はおろか産前産後の休暇さえもろくにとれない主婦たち、その主婦が支えるエネルギーで夫は無給の残業をし、働く人たちのしあわせを守ろうと働き続けているというのに……。(無給の残業をすることがなぜ働くものの幸せを守ることになるのだろうか)

・経済的自立とひきかえに失われる精神的自立と時間の自由は、特に女の場合あまりにも大きすぎて、前途に光などさしこんでくる余地はないよ

うに思われる。(経済的自立なくして精神的自由が与えられるだろうか。せいぜい時間の自由という自由にすぎないのではないだろうか)

・女が働くということはやはりどこかで大量生産、大量消費に一役買っている。(過渡的にはそういえるかもしれない。しかしそれなら女が家にいて手作りに精を出し儉約につとめたからといって、それ

だけで公害にブレーキをかけられるだろうか。すべての男女が働き生産の場に直接介入してこそ公害を未然に防ぐことができる」とも考えられる)

・古代に奴隷ないし、それに近いものがあつたころには彼らにまかせていたような生活の底辺的な仕事を全部女に押しつけて、その上にあぐらをかいて男性が優雅高尚に文化の華を咲かせているような感じがします。(その通りなのだ

が、筆者はだからこの男性社会をかえることは徒勞だという。私は男も底辺的な仕事を分け合わない限り、いかに市民運動をしても公害はなくならないと思う。今日の生産が生産のための生産になって公害を生み出しているのは男性社会で男たちが生活者、家庭人としての側面を失い生産要具になってしまっているからでもある)

・家事、育児を切りすて、地域社会から浮上した形で女の生きがい論に私は賛成できない。(なぜ女が働くことが家事育児を切りすてることがなり、地域社会から浮上せざるを得ないのか、その現実こそかえていかねばならないが、それは女が家事、育児に専念し、地域活動にかかわっていればかわってくるだろうか)

・男女ともに家事時間をある婦人学級で「女は働く

か、家にいるか二者択一しかできない、働けば家事、育児をおろそかにすることになり家にいれば働くことから、まして経済的自立からは切り離されてしまう。これは不当ではないか」と話し合ったことがあるが、斎藤千代氏の「男に主夫はいない」といい(同じ号に中国が主婦のいない国として紹介されている「家庭もよし」「職業もよし」と多様な選択を許されていることがむしろ女性の解放権を遅らせているのではないかとの提起は興味深い。二者択一しかできないが、二者択一はできるということがウラをかえせば、就職しても数年後には結婚に女を逃避させ、あてにならない労働力として限られた職種、低賃金に釘づけする。またそのことが女をして結婚に逃避させるという悪循環を生む。そして専業主婦がいる

ることができれば幸いです。

10号の「法律の中の女性」は、興味を抱いているだけに大変おもしろかったし、意味のある記事だと思えます。その他、どの記事も表題（女と法）にかない、観点もよいし読みがいもあり、すばらしいと思いました。堀 奈保子

男性から

充実した10号に感激

トップのインタビュから始まり、資料、記録、ティーンに加えて、ルポあり、アンケートありと見事に充実しており、いつものことながら感激を新たに拝見いたしました。何気ない新聞切抜帖も黙々とした編集協力者の努力が沈潜しているのを感じます。それにしても、これだけ目覚めた女性が多いのに、ま

たどろいてわが国は進歩しないのかという嘆きと驚きも湧いてしまします。堀口 建二

シンドイ思い

「あごら」10号は、なかなか読みごたえがあつてシンドイ思いをいたしました。何がシンドかったのか、自問してみると、ひとまとめに言えませんが、女性差別の実例を広く深く並べたてられた、そんなものから感じる重み、のようなものでしょうか。

長野 貞之

男女差は生来のもの？

生まれたばかりの赤ん坊でも、男の子と女の子はかなり違っています。それゆえ社会生活でも、男向きの仕事と女向きの仕事（収入を得るためという意味でなく）はどうしても分かれてくるし、女が男と同じ仕事ができるよう、逆

に男が女のようにやれるようにいくら教育しても、そうゆかない気がします。男女の決定的違いは性反応でしょう。ゆえにこれを度重ねると、ますます男女差が大きくなるようです。斎藤 信彦

グループから

すすむ家庭科共修運動

◇永井文相と会見

三月十五日、発起人九名は文部省大臣室で永井文相と会見、短い時間ながら直接話し合い、次のようなお考えを確認することができた。

「家庭を考える時は、常に社会を含めて考えなければならぬ。現状の家庭を肯定し、それを男女いっしょに、というのではなく、『家庭とは何か』『家庭をどうするか』から問い直す必要がある」

そして高校の家庭科に関しては、共修についても検討するよう、すでに教育課程審議会に指示されたとのこと。けれども、中学についてはまだ改革の動きはなく、高校についても「男女とも選択」ということが考えられているようなので、共修の完全な実現のためにはまだ運動を強める必要があると思われる。

◇マスコミの動き

会の結成後一年過ぎた頃から、マスコミでもやや大きくとり上げられるようになって来た。NHK「奥さんごいっしょに」、TBS「ニュースデスク」、NET「奈良和モーニ

おそるおそるドアを開けてみたが、まだちらほらの人で、ホッとする。聞けば会員の方たちは地方に散らばっていて名古屋まで来るのに一時間以上かかる方が多いとのこと。三十分もあれば会場に着くことができるのが、申しわけない気持ちだった。

きょうは、ウィークデイに出にくい方々の参加を期待して、二度目の日曜日の例会。まだまだ初めてお目にかかるお顔が多い中で、自己紹介から始まり、ひとわたり感想が述べられる。

10号は特に充実していて読みごたえがあったこと、その中で、ヤング・ジュリストの討論があまりにも対照的に貧しく、大学生の、しかも卒論合宿で行なわれたとは信じられないというものが、いちばん多い共通意見だったようであった。

議論が白熱しそうになったときには、すでに時間切れ、名古屋放送若年定年制擁護闘争を見まもっていらしたTさん、これをテーマに小説を書かれたYさん、事件の弁護をなさったSさん、「あごろ東京」からいらして下さったSさん、Hさんなど、もつといろいろお話が聞きたかったのに、何も彼も時間切れの感じ

で、いかにも心残りだった。自分が遅刻しておきながら、主婦の集まりは、なぜ定刻に始められないのだろうと憤慨したくなったのも、もつと

っと、いろんなお話を聞きたかったあせりだろう。各地域に分散していることや、月に一度だけしか会う機会がないことなど、いろいろむずかしい問題があると思うが、「あごろ東海」がもう一歩あゆみを進めるために、このあたりの検討が必要なのでは

ないかと思いつながら会場を出た。
斎藤 菊代

あごろ東京

旅立ちを前に

キーセン観光業者を排して自主路線を歩もうとした「メキシコ国際婦人年の旅」は、想像以上に難航。出発を二日後にひかえた今日になってようやくキューバ行きの飛行機が決定しました。

一時は絶望視された旅が、逆転また逆転で、ハラハラ時計の連続というところでした。が、ともかく希望をもってスタートできるのは、たくさんの方々のご厚志のおかげと感謝しています。

十三日間、家を離れることの環境整備から始まって、旅程の研究、各種の折衝など、思わぬ苦勞の連続でしたが、

すべて、貴重な「教育」であったように思います。業者探しの過程で、キーセン観光に汚染されていない業者はほとんどいないことを知ったことも……。

かわい子には旅をさせよとか、現地では、また数々の「教育」の機会がありました。う。何とか旅にこぎつけられた十八名は、旅で受けた「教育」を、この次の号でお伝えしたいと思っています。(千)

マウアさんの

「女大学」研究を聞いて

女性蔑視に徹した、貝原益軒の「女大学」が、江戸時代から明治、大正を経て私たちまで影響を与えているのに対し、人間性にあふれる、福沢諭吉の「女大学評論」や「新女大学」はうずもれていたことに、私たちは疑問をいだいていた。しかしマウアさんは

その原因が明治以降の家父長的家族主義、国家主義にもとづくものと解明し、一同納得した。

それにしても女大学的な、浜尾実の「女の子の躰け方」がベストセラーになった現状を私たちは、実に嘆かわしいことと思っている。(H)

女性差別雑感

国際婦人年世界会議開幕前にメキシコ大統領夫人が日本人記者団と会見した記事を見た。第三世界の悲惨と先進国の有責については感動・共感した。しかしウーマン・リブを無意味ときめつけるのはおかしい。義務教育の教科書に第三世界の人民解放の英雄が登場することは感激的だがすべて男性。女性解放と人種階級、南北などの諸問題との

かわりについて考えさせられた。(Y)

編集を終えて

「せめて三年勤めると約束したら、教育のしがいもあるんだがなあ、一年ともたないんだから……」今をときめくコンピュータもキーパンチャがアキレス腱。女の子のお守りはどういうやだという男性管理者の嘆きをつい数日前きいて、この特集にももっと男性の意見を入れたほうがよかったのでは、と反省しています。(T)

*

中三の男の子の言い分——「差別されているのは、オレたちの方だ」

どんなことでと聞いたら、技術家庭科では、女子も電気のことなどもやるが、男子は、

裁縫、料理を習っていないからという。つけくわえて、技術家庭科は、男女一緒にやるのが本当だと。私としては、大賛成。(Y)

*

国際婦人年・メキシコへ行こうとしたら、「結婚もしないで、そんなところへ行きたがる」とは、何ごとぞ!と反対された。もし、結婚していれば、「結婚しているくせに、そんなところへ行くとは何だ!」といわれるのだろう。ア! おんな三界に家ナシ!

(A)

*

両性平等の実現を孫子の代に期待するのもいいが、とかくじれたい。これから結婚する若い方々ひとりひとりが生活のパートナーとして、どんな男性を選ぶかに、女性の

明日が大きくかけられているような気がする。モテる男性像が変らなきヤダメ! (S)

*

あじらの入稿とメキシコの旅の裏方で忙しい日に、わが家では義父の葬式を出した。折しも、主を失ったさつきが真っ盛り。

自分の葬儀に列席する人々に見てもらうためのように、死の二日前まで水やり、手入れに、病いをおして丹精していた。頑固で古い明治の人だった。(K)

*

編集を終えたいま、育児休職法案が成立するかしないかというところです。子育ては女の仕事と固定されるのが恐ろしい。もっと母親と女の先生が連帯できたらいいのにと思います。(女)

〔あごらの施設利用ご案内〕

事務局 東京都新宿区新宿1丁目9番6号 平倉ビル2階 〒160 TEL354=3941

※読書室「あごら」

●場所 事務局に同じ 約25平方メートルの読書兼集会室です。いす40席あり。

TEL354=9014

●利用時間と使用料 月～金 午前9時半～午後6時間室（読書、原稿書き、待ち合せ、小集会にご利用ください）1人2時間まで100円（お茶つき）なお集会の場合は月～金、午後6時～10時 および土、日 午前10時～午後10時も利用できます。ただし予約制。土、日は特別料金（1人2時間まで200円）となります。

●複写機、映写機等も利用できます。

●貸ロッカーあり。月額1,000円

※創造銀行（BOC=バンク・オブ・クリエイティビティ）創造力、労力、特技等を預託、利用希望者に貸しつけるシステムで、企画、調査、編集、校正、印刷等の実務のほか、「赤ちゃんをあやす」「やりくり上手」など、いろいろな能力が預託されています。

〔編集後記〕教科書チェックを終えた一人が言いました。「ほんとうに女の立場を考えた教育に変えるためには、私たちが教科書をつくる以外ない」と。

ある人はまた言いました。「女の寺小屋をつくらう」と。

末期の病人と極言する人もいる日本の教育の現状ですが、その中で女の教育は、日々反動の方向に迫いやられがちです。私たちにとって、いま必要なことは何か、みんなで考えたいと思います。

あごら11号の編集と編集協力者（イラスト・新聞切抜等をふくむ）

浅野美和子 飯島恵子 植松節子 大橋倫子 小川俣子 川上正子 北村美恵子 黒沢照代
後藤多見 斎藤菊代 斎藤 涼 坂井桂子 佐藤典子 真田房枝 千田靖子 高橋照子
高橋ますみ 立木啓代 塚本和子 仲佐雅子 永松三恵子 西尾恵子 根井はる 野村文枝
萩原洋子 蓮地悦子 永上喜久子 日置久子 平岡ふき子 深尾勝子 福田光子 藤本素子
村上啓子 榎山幸子 安江とも子 山岸汐子 山崎美沙子 吉野晶子 吉野由喜子
米永千枝子 若林高子 若山玲子 渡辺和子 エリザベス・マウア

〈あごら〉11号 1975年6月30日発行 本文 ㊟ 上質 A44.5kg 表紙 アートポスト菊判125kg

- 発行所 BOC出版部〈あごら〉 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 振替 東京05264（あごら編集部）
- 発行人 斎藤千代 ●印刷者 永井芳江

AGORAは、古代ギリシアの市民の「ひろば」。市民は、このAGORAでだれでも自由に語り合い、買物をし、そこから、民主主義が生れたといひます。

私たちの「あごら」は、小さな「せまば」にすぎず、まだ力弱い存在ですが、女の問題を中心に、考えあうよすがにしたいといひます。ご参加を、心からお待ちしています。

〔あごらの生いたち〕

働く女が、職種、賃金その他で受ける差別を解決したい… 家庭と職業の両立は困難だが、助けあう方法を考えよう… 家庭に潜在する女性の能力の社会参加の方法を考えよう……

「あごら」を生み出した母体BOCは、1964年、このような目的のために、ボランティア活動をするをこころざして生まれました。

以来10年、問題を解決する方法をさぐろうとするたびに、婦人問題の根の深さに直面、苦闘を重ねました。遅々とした歩みでしたが1972年、雑誌「あごら」を発刊、1973年、読書室「あごら」を開設、女の問題——ひいては人間の問題を考え続けていこうとしています。

息の長い活動が必要ですので、活動は任意、時間と体力のゆるす範囲で結構です。義務としては、会費納入の義務があるだけです。会の運営は、会員から選出された運営委員が行ないます。

現在、会員、誌友、計511名、名誉会員は、婦人問題の大先輩山川菊栄先生お一人のみです。

〔現在の主な活動〕 ●雑誌「あごら」の発行 ●月次例会(研究会)の開催 ●創造銀行(BOC)の運営 ●読書室「あごら」の運営 ●女性の前進に役立つ出版物、視聴覚材などの製作 ●ベビー・シッターのあっせん(準備中) ●再就職のあっせん(準備中)

〔参加者の組織〕

会員、誌友、賛助会員のかたちで参加できます。会員、誌友には、共に、雑誌「あごら」と連絡葉書「BOC通信」(月1回)をお送りします。

会員は、つぎの特典があります。

- 雑誌「あごら」を毎号講読できる ●例会、総会に参加できる
- 雑誌「あごら」の編集に参加できる ●読書室「あごら」を優先利用できる ●リゾート施設「中山文庫」を利用できる ●創造銀行の預託能力を会員価格で利用できる ●希望者は、創造銀行に、自分の能力を預託することができる。

(誌友は、雑誌「あごら」を毎号購読する方、賛助会員は、「あごら」を精神的、経済的に支援して下さる方です。)

会費＝年額 2,400円 誌友費＝年額 2,000円

賛助会費＝随時、金額の多少は問いません。